

病みつきKAN—SEN

勦b

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

落ちこぼれと評された青年は、偶然にも指揮官として席を得る。

自身に劣等感を覚える彼は、艦船達に苦勞をかけまいと人一倍努力をし、一人一人を大切にした。

だからこそ、一部の艦船達は彼を愛してしまう。

独り占めしたいという欲に刈られるモノ

ただ傍に居たいと願うモノ

一番になりたいと期待するモノ

様々な思いをい抱かれ、青年は今日も指揮をとる。

大切な艦船達の為に

目次

「秘書官の変更をお願いに参りました」	1
「エンタープライズ、ただいま帰還した」	13
「演習に参加……ですか？」	24
「指揮官様く貴方の太鳳が来ましたわく」	37
「指揮官様、その目障りな小娘は何かしら？」	49
「大変な事になりましたね、指揮官様」	61
「寝坊は感心しないわ、指揮官」	71
「ねえ指揮官、私を抱きしめて」	87
「たるんでいるんじゃないかしら、指揮官」	95
「指揮官、サラトガちゃん怒ってるんだよ!!」	108
「おはようございます、ご主人様」	113
「指揮官もぎゅくってしてあげますよ」	123
「残念でしたね、指揮官。本当に残念な結果に終わっちゃいました」	131
「急にごめんね」	146
「お主は何を戯れておるのだ？」	154
「シリアスの身体はいかがでしょうか？」	168
「……こんな時間に雌の匂いをさせながら、なんの御用でしょうか？」	180
「話がある時は、事前に連絡してとお願いしたはずだったけど」	194
「やっぱりご主人様はダイドーを捨てるんですね」	211
「あの下僕は何がしたいのよ」	223

番外編

「あなたに対する愛情をぎゅ〜って詰めたチョコレートを持ってきましたよ〜」（バレンタイン前篇）—— 242

「皆さんはご主人様を甘やかしすぎです。このままでは、ご主人様がダメ人間になるに違いありません」バレンタイン中編 —— 253

「メイドの分際で、偉く盛ってるんですね」バレンタイン後編

265

2章

「自分が守る海を見つめ指揮官は物思いにふけていた、と」—— 287

「どうかしたのか？ 指揮官」—— 295

「ヒーローのサポートはサポーターのリノがするの!!」

303

「しゅきかん！ サンタさんはいつくるの？」—— 318

「秘書官の変更をお願いに参りました」

「秘書官の変更をお願いに参りました」

指揮官室に入ってくると彼女、ベルファストは優雅な一礼の後に不穏な事を言い始めた。

それに対して真っ先に反応したのはソファアで座りこんでいた恐らく話題の中心人物になるであろう秘書官のシリアスだ。ゆっくりと立ち上がりベルファストを真っ直ぐに見る。

「急にどうしたの？」

面倒事になるな。絶対になる。だからこそ、そうなる前に少しでも状況を把握したい。

作業机からシリアスの対になる様にソファアに座り、彼女に座る様に手を向ける。不満気な顔をしながらも言うとおりにする姿を見て、ベルファストは嘆息まじりに続けた。

「シリアス、貴方はロイヤルネイビーのメイドとして能力に欠けています。」

戦場では多大な戦果を上げれたとしても、その力は秘書官としては評価されない点です」

ロイヤル所属の艦船達は一部メイドとしての役割を兼ねている。そんな彼女等を秘書官にした方が仕事の効率が良くなるのは、他の先輩指揮官達からもよく聞く。

現に苦言を言いに来たベルファストなんかは、メイド長として周りを管理する責務につくほどでもあり。その能力も自他共に認められる程の高さを備えている。それは、周りからの評価や自分の目で見ているため疑いはしない。

一方で言われた言葉にぐぬぬと口にしながら歯ぎしりしているシリアスは……うん。メイド服こそ着ているが、能力に関しては申し訳ないが赤点だ。こと戦闘に置いてはとも頼もしいし、元々メイドとしての仕事をしてなかったから仕方がない。四六時中ずっとメイドとしているベルファストはもちろん、他のメイド達と比べられたら能力は高いとは言えない。いや、むしろ低いだろう。

現に今は最低限のお願いを聞いてもらってるだけで秘書官としての時間の大半をソファアールで座って過ごして貰っている。昔は色々やってもらっていたが、そう何度も大事な書類を破られたり紅茶をかけられたりされるのは勘弁願いたいから。

俺が少し考えただけでもシリアスの仕事上のミスは幾つか上がる。責任感の強い彼女の事だ、きっと俺以上に身に覚えがあるだろう。

「ですので、秘書官の変更を提案に参りました」

ベルファストは俺の横後ろに立つ。長い銀髪と整った顔立ちからはとてもじゃないがメイドとは思えない。まるで何処かの貴族様だ。しかし、そんな彼女にメイド服が似合うのはきつと、立ち振舞なんだろうな。

「わ、私も一生懸命にやっています」

おどおどと狼狽えながら片手をそつと上げて自己申請をする彼女。彼女もまた美人と評される身なりだが、メイド服が似合っているとは余り思えない。日頃の立ち振舞の重要さがはつきりとわかった。

「シリアスさん、貴方が努力されているとは言いますが、普段から秘書官としての執務は全くされていないとよく耳に挟みます」

「それは、誇らしきご主人様が傍にいらっしゃるだけで安心すると私に言っただけです」

安心する。少なくとも書類は無事なのだから。

「秘書官である以上書類の整理や連絡、スケジュールの確認。ご主人様の体調管理等事務的な業務は多岐に渡ります。貴方はその内どれをこなされているのでしょうか？」

「わ、私は……」

指を折りつつ数えながら呟いていく。

片手の指が折りきった所でもう片方の指が一瞬動くが、曲がり切る事なく中途半端に立ったまま止まってしまう。

「はあ……」

大きなため息が後ろから聞こえる。このままじゃ分が悪いな。

「いいんだよ、ベルファスト」

呆れ顔の彼女に目を向ける。俺がシリアスを擁護するのが気に入

らないのか、一瞬だけ視線がキツくなった。苛立ちを肌で感じる。

真面目すぎるのが彼女の欠点だ。きつと、それだけ俺の事を心配してくれているのだろう。

「シリアスが秘書官でいる理由は知っているだろう？」

「ええ、この艦隊を2人で始め、ここまで大きくしていった功績は知っています」

今でも思い出す。

理由ありな俺とシリアスはただ土地と施設だけ与えられて、ここでの責務に就いた。

疎まれていたのは知っていた。辛いときなんて山のようにあった。でも、同じぐらい楽しい事もあった。

新しい艦船が着任した時、セイレーン達の争いに勝った時、悩み事を皆で力を合わせて解決した時……。思い出せばきりがない。

そんな沢山の出来事を一つ一つ糧としながら前に進んでいき今がある。他の指揮官達にも勝るとも劣らない様な規模になったんだ。

それは、目の前で悔しそうに睨んでいる秘書官やそれに対抗するように冷たく見下すメイド長といった艦船達の頑張りとも言える。

「私もまた、ご主人様がここでの仕事に従事されたばかりの頃から仕える身。多大な苦労も余りある幸福も常に分かち合ってきたと思っています」

確かにベルファストもここに来てから長い。色々と様々な経験をしてきたのだろう。目を伏せて微笑む所を見るに、少なくともここに来て嫌だったとは思っていないようで安心した。

その顔を見てシリアスもまた、同様に口元だけは暖かい笑みを浮かべていた。

彼女もまた、ここに思い入れがある身だ。そんな所を大切に思っている姿を見れて喜んでいるだろう。

「だからこそ、余計な苦労は切り離すべきです」

安心とは直ぐに手放されるモノなんだな。

話題を反らすことも出来なかった。それどころか、かなりハツキリとした物言いでの場の空気を切り捨てられた。

ついでにシリアスの心も切られたのだろう。反抗的な目つきは終わり、おどおどとし始める。

「ご主人様。当初から秘書官として仕えていたシリアスに愛着があるのは承知しております。ですが、今は事務仕事一つとっても膨大な量であり、多忙なモノになってきているはず。秘書官を優秀な者に変える事を提案致します」

「まあ、仕事は忙しくなってるけど……」

チラリと作業机を見る。目を逸らしたくなるような書類の山がそこにはあった。艦船が増えると共に管理すべき領域も広くなっている。事務仕事自体は皆のことを思えば苦ではないが、その気持ちだけでは仕事は終わらない。どうしても時間が必要になる。

ただ、あれも今日受け取ったものを軽く目を通して乱雑に置いた物のため整理さえしてくれる人がいれば、効率が良くなるのもまた事実。一々書類を探す手間が省ける。それに少なくとも、俺は夜な夜な書類整理の地獄巡りをしなくても済むのだろう。

そう考えると魅力的だけど……。

「秘書官に相応しいとは、誰のことを指すのでしょうか？」

言われっぱなしのシリアスは何故かそんな事を聞き返す。

優秀なメイド長がわざわざ自分の隊員を咎めにきたのだ。解答なんてわかりきってるだろうに。

思った通りベルファストはそのたわわに実った胸を張ると

「僭越ながら、私、ベルファストが相応しいのではないかと」

「なっ!?」

ただ一人驚くシリアス。普段は感情の起伏が少ない彼女もメイド長相手にはタジタジな様だ。

「それは、自分が秘書官になりたいというだけではないでしょうか!」
「いえ、現状のロイヤル、ユニオン、鉄血、重桜。果てはアイリスやヴェシアの艦船達と見比べても私が相応しいと自負しています」

……まあ、一理ある。

ベルファストは完璧なメイド長と言っても過言ではない。出来る事も多いし、仕事も早い。

しかし、全てが優れているわけでもない。他者より劣っている分野もある。だが、その時はその場にいた優れた者に指示を出していく判断力もある。まさに理想の上司であり、彼女がメイド達を束ねる根拠だ。そして、優秀な秘書官になるだろう。

シリアスもわかっているのだろう。

言っではみたがベルファスト以外に秘書官に望む能力を持つ者はいれど、その力を高く持っている者が思いつかないようだ。

そんな困り顔の彼女に追い打ちをかけるように、テーブルの下へと指を入れそつと横にずらして目元に上げる。

真つ白な手袋はほんの少しだが黒く汚れてしまった。

ああ、まずいな。

「それに、清掃も不十分な所で長時間ご主人様を過ごさせたら何らかの病に冒される可能性もあります。私は掃除も得意な分野としますが……」

掃除は俺がしたんだ、気をつけるよ。そんな事を言ったらどうなるのやら。誤魔化すように愛想笑いをして話を聞く。

「ご主人様。常日頃から貴方様を慕う身としてベルファストは心配なのです。」

この心配を解決するには常に貴方様の傍にいなければ。

起床のご挨拶から就寝の用意迄、全て私にお任せください。

このベルファスト。愛しい貴方様のために全身全霊をかけると誓い、その証として、この身を差し出しましょう。

愛しい貴方様の為に、このベルファストを役立てて下さい」

そつと後ろから首周りに手が回る。

「お願いします。ダーリン」

優しさや愛しさを強く感じるような。他の者に聞こえないような小さな声で耳元に囁かれる。

急な呼び名に思わず顔を赤くしてしまう。

「ダ、ダ……」

ダーリンって何だよ!? 急に変なことを言わないでくれ……!?

「メイド長、余りご主人様を困らせないで下さい」

目の前の光景が面白くなかったのだろう。勢いよく立ち上がった彼女は首元に纏わりついた魅惑的な手を取って力づくで俺から離す。どうやら、急につけられたダーリンという呼び名については詳しく知れそうにない。

「誇らしきご主人様」

その目線はベルファストを一瞬キツく捉えようと、手と共に離される。

そのまま俺に何か縋るような顔と一礼と共に

「私は確かに至らぬメイドです。」

そのメイドを厳しく躰けて下さるご主人様を必要としています。

どうか、どうか……。

メイドの身でありながらご主人様を求める卑しいメイドに厳しい躰けと罰を下さい

シリアスだけの、誇らしきご主人様」

つと伝え、何かを求めるような潤いに満ちる瞳と目があった。

「いけません、シリアス。」

貴方はご主人様に給仕する前にメイドとしてのスキルを磨いて下さい」

「誇らしきご主人様はそのような些細な事を秘書官に求めています。」

シリアスは傍に居るだけで力になると。寛大な心で私の事を求めて下さいました。

メイド長が思っている程、私の誇らしきご主人様は軟弱ではありません。

そして、不足している所は都度ご主人様から指摘と学びを受ける所存です。

どんな事でも、シリアスは誇らしきご主人様からのモノでしたら受け入れてみせます」

顔を近づかせながら視線と視線が重なり合い火花を散らしていく。

挟まれる様に座っていた俺は情けないことに何も言えずに縮こまる様に座ることしか出来なかった。

ああ、本当に情けない。

何か気の利く一言でも言えればこの場も落ち着くのだろうか。

少ないボキヤブラリーから懸命に言葉を探していく。

そんな時間はない。つと無言の宣告をするかのように2人の鼻頭がぶつかりそうになる。

宣告が正式に下されたのは「そうですか」つとベルファストは一步下がって距離を置いたからだ。

勝ったと言わんばかりに口元に笑みを浮かべるシリアス。だが、その余裕を見せた表情は直ぐに暗くなる。作業机に置いてあったティーカップを彼女が手にしたから。

「シリアス、貴方が紅茶をいれる姿は度々見ていました」

そう言いつつカップを口元に運んでいく。

「だめ!!」思わず叫んでしまう。あの紅茶を飲ませるわけにはいけない。特に、こんな状況で。

彼女は止まらない。伸ばした手は無情にも空を掴む。戸惑いない彼女を視界から握り潰すように。

シリアスもまた、冷や汗かきをかき生唾を飲んでいた。

「……………」

一口含んで直ぐ、余程口に合わなかったのだろう。何時も余裕を感じさせる彼女の表情が一瞬苦渋に満ちた顔をする。直にカップを戻して口元をハンカチで拭いていく。ソーサーに置かれたカップは、やけに強い反響音を響かせた。

終わった。そう思うと伸ばした手は無力にも垂れ下がる。

「シリアス、これはなんですか？」

「もちろん紅茶です」

「いえ、紅茶というのはこんなにも甘い物ではございません」

シリアスは決まった時間に紅茶をいれるのが主な仕事としている。試行回数こそ多いが、その紅茶の味は一向に改善されない。非常に甘いか非常に苦いか。

パターンは決まっている。甘いかなと伝えれば翌日は苦くなり、苦いと伝えれば甘くなる。

まん中に寄せられないというのは、彼女の何事にも懸命な所が出て良い所だ。そう思っただけで自分を誤魔化すようにし始めたのは何時だったか思い出せない。

自分を誤魔化すのは簡単だが、ティーカップを見て溜息をつく彼女を誤魔化すのは至難の技だ。というか、無理だ。少なくとも俺には。

「今日は甘いのが飲みたくてお願いしたんだ」

それでも、悪あがきはしてみる。

「ご主人様。給湯室で紅茶を用意する姿は何度も見かけていました。

多量の砂糖をよく使用するところを見たのも何度かあります。

作法も分からず、他者の見様見真似で作り失敗している姿もよく見かけます。

ティーカップやソーサーを割り、掃除に励む姿もまた、よく見かけます。

都度、ご主人様のためにと助言を行うも改善が見られていません

ティータイムは気分転換も兼ねて必要だと思いますが、その一杯に過度な糖分は身体の毒です」

「その日の気分ってあるだろ？ シリアスにはこうして欲しいって俺からお願ひしてるんだ」

「ロイヤル主催のお茶会にご参加される時は砂糖を入れずに飲まれているではないですか

それに、味に関しては何時でも感動しているように見受けられます」
「……よく知ってるね」

「私よりもご主人様の事を知る人物などいませんから」

クスリと笑いながら真面目な口調で冗談を言われる。面白い話だ。彼女がムスツとするような良いブラックジョーク。

「ご主人様はそれでも飲んでくれています」

「それが問題と云っています。

優しいご主人様だから何も言わずに飲んでくれているのです。メイドとしては元より、ご主人様の傍で仕える秘書官がそのような事ではいけません」

流石のシリアスも堪えてきたのだろうか、何も言い返せずに俯いて

いた。そんな彼女にどんな言葉をかけていいのか見当たらず、もう黙ることしか出来ないでいた。

今度はベルファストが何処か勝ち誇った顔をして周りを見渡す。机の上にある山を除いてそうそう怒られるようなへマはしていない……と思いたい。

それでも、いくつか気になる所があったのか、部屋にある本棚等の傍に行つてはジツと見つめる。

触ることこそないが、彼女が秘書官になれば本もきちんと名前順みにたいにしてわかりやすくしてくれるのかな。

そう思いはするが、見上げるとすぐ前にある悔しそうな顔をする秘書官にこれ以上追い打ちをかけるような事を言いたくない。

数分程して忙しなく動いていた足音が止まると机にあったティーカップを再度手にとる。

「これは新しいのにいれかえてきます。ご主人様、少々お待ちを」

俺の了承はもちろん、シリアスにも何も言わずにソーサーと共に回収される。

せめて、せめて何か言わないと。

扉前で一礼するベルファストを見てようやく俺の口は動いた。

「甘いのがいいな。とびつきり甘いやつ」

ベルファストは呆れた顔で俺を見ると溜息と共に「いけません」と言う。

「普段飲まれている紅茶はこのとびつきり甘いやつと、とびつきり苦いやつなので。今日は私がいれる普通の紅茶を楽しんで下さい」

苦い時があるのも知られていたみたいだ。気まずい雰囲気のまま扉は閉められていった。

ベルファストは真面目な艦船だ。

それでいて仲間思いでもある。

俺の事だつて心配してくれているというのは事実だ。

……ダーリンというのは置いておこう。話が拗れてしまう。それにまた今度聞けばいい。

それよりも、今は。

俺が顔を見上げたのは、頬に水滴があたったから。

シリアスもまた、真面目な艦船だ。

少しずれた所こそあれ、何時も俺の事を気にかけてくれている。

それに、やっぱり彼女には特別な思い入れもある。

だから、俺も気にかけてしまう。

手を伸ばしてそっと彼女の頭を撫でる。

これでも堪えていたのだろう。メイド長である彼女に泣いてる姿なんて見せたら何か言われてしまうと思つて。

俺の前で泣いてる姿を見せたくないと思つて。

そんな彼女の頑張りを無下にするように、俺は伝える。

「ごめんね、言われっぱなしで」

「いえ……無能なメイドである私がいけません」

「そんなことないよ」

「慰めはよして下さい。ご主人様」

そう言いつつも頭上の手を離そうとしない。

「大丈夫だよ。2人で頑張れば上手くいく。いかなかったこともあつたけど、上手くいった事のほうが多いでしょ？」

「……まだ、まだこの粗々を犯す卑しいメイドを傍に置いて下さりますか？」

「ずっと傍にいてくれるんでしょ？」

俺の言葉を最後に彼女の瞳から大粒の涙がまた崩れ落ちる。

ベルファストにされた様にそっと彼女の首元に手を巻いて、それから自分の肩に押し当てた。

子供のように泣き崩れた彼女の頭を何度も撫でていく。

「このシリアス、何があろうとも……」

誇らしきご主人様の傍に居続けます」

力強い言葉がか細い声で耳元で囁かれる。

懐かしさを感じる。

ここに来てから大分経つたな。

すぐ横で泣きじやくる彼女は、始めて会った時にも同じように泣い

ていた。

落ちこぼれとして捨てられた彼女。

そんな彼女が仕えるのは人手不足のため、運良くなれただけの落ちこぼれの指揮官。

2人でわけもわからない中頑張つて、喜んで、悲しんで……。

色々あったけど、こうしてまだ、指揮官と秘書官としての形のまま2人である。

……本当にこれでいいのだろうか。頭の中に疑惑が過る。

でも、今は考えないようにする。

未来の事なんて今日の前にいるメイドを落ち着かせた後、ゆっくりと考えればいいのだから。

今日は疲れた。気疲れた。

自室のベッドで服を着替えるのも忘れて飛び込んだ。

ベルファストもあんなこと、シリアスがいない時に言えばいいのに。

溜息と共に振り返る。結局彼女は、新しい紅茶を置いてすぐに帰っていた。言いたいことは言ったのだろう。

シリアスもベルファストが来る前に落ち着いて良かった。ただ、今日の一件は引きずっていた様で、ソファアに座っている時も何時ものように背筋を伸ばして前を向く姿は余り見れず俯きがちだった。

秘書官……か。

ポケットに忍ばせていた便箋を取り出す。

可愛らしい封筒に書かれたのは、これまた可愛らしい丸文字に指揮官へ、と書かれていた。

仕事が終わわり、簡単に書類の整理と徹底的に行つた部屋の掃除中に饅頭から受け取つた便箋だ。

こうした手紙はよく受け取る。艦船達も俺に伝えたいことが一杯あるのだろう。

時には今日のように直接訪ねてくる時もあるけど。

嫌なことが書かれてないよう祈りながら、便箋を丁寧に開けて中にあつた手紙に目を通す。

手紙中に書かれた可愛らしい文は、奇しくも今日の相談と同じような内容の事が書かれていた。

……これは、シリアスには見せられないな。

重たい身体を何とか起こして机の引き出しに仕舞う。その時、同様に並べられた4通の便箋が目に入った。どれも内容は似たモノ。秘書官の変更依頼。中には1日だけでも秘書官をしたいと言った声もある。

……秘書官、か。

溜息と共に5つ目の便箋を仕舞った。

「エンタープライズ、ただいま帰還した」

「エンタープライズ、ただいま帰還した」

勢いよく扉を開けた主は凜とした顔立ちを誇らしげにする。

「おかえり、エンタープライズ」

ペンを止めて彼女の帰還を祝う。座っていたシリアスも一礼をしていた。

「報告したい事もある。少しいいか？」

「ああ、シリアス。紅茶をお願い」

その言葉に一礼を返して退室したシリアス。こういった来客対応も彼女の仕事になる。

といつても、先ずは紅茶を淹れてくれる他のメイド隊を探す所からというのが残念な所だけ。流石に彼女の紅茶を他の子には出せない。出したらクレームがまた増えるから。

嫌な事を思い出すと溜息が出てしまう。不思議そうにする彼女に不信感を与えないようにソファアに席を移す。

とりあえず言及は避けられたのだろう。何も言わずに俺の横に座ってくれた。腕と腕が触れ合うような距離で座られた。

距離が近すぎるのは彼女の悪い所なのかもしれない。だけど、距離感を上手く掴めてないように接するのは今の所俺ぐらいだし、彼女には良く働いてもらっている。そう思うと余り強くは言えない。

結局今日も触れる部分を意識しないように冷静さを装って接することしか出来ないのだ。

「海域の見回りは特に問題なかった」

「それは良かった」

問題ないと言う割にはその顔は何処か暗い。無理に急かさないとくに聞き役に徹する。

「鉄血とユニオンの合同での作戦だったんだがな……」

そこまで言われて察しがつく。最近着任した彼女の事だろう。

「ローンの事？」

すぐに顔を思い浮かべた彼女の名前を言うと頷きが返ってきた。

ローンは他の艦船達とは色々と違う。だからか、周りと比べて少し浮いているようにも感じる。

「ここに来て日が浅いから、皆も慣れてないんだよ」

「わかっている。だが、私がわかっているだけでも他の艦船達……特に小さい子達は怖がってしまってる」

「そっか……」

エンタープライズが軽く頭を抱える。彼女が戦闘以外でそんな困った顔をするのは珍しい。余程思い事態と捉えた方がいいのだろう。

「今度ビスマルクとも相談しておくよ」

「助かるよ」

鉄血のリーダーでもあるビスマルク。艦船達との揉め事や相談事はその所属してるリーダーを通さないと行けない。それが暗黙のルールとしてあった。

重桜なら長門、ロイヤルならエリザベス。ユニオンはリーダーとあった存在がいけないけど、トラブルに関してはエンタープライズが相談に乗ってくれる事が多い。

特に鉄血となると尚更。他の陣営よりも仲間意識が強く、まるで家族のような間柄の彼女達を相手にする以上良くも悪くもビスマルクの存在は大きい。

他陣営とトラブルになる前に早めに対応しとかなないと。

「すまない。暗い話ばかりをしにきたんじゃないんだ。吉報も用意してある」

予定を脳内で確認しているとそんな横やりが入った。その顔は誇らしげな笑みを浮かべている。

彼女が戦域に出た時はよくこうして直接報告に来てくれる。そしてその時の功績をよく誇らしげに語ってくれる。

特に俺が事務仕事を中心にするようになってまともに外に出ることがなくなってからよく訪問してくれるようになった。俺はそんな彼女の話が好きだ。

自分だけじゃない。艦隊皆の頑張りを話してくれる彼女の姿が好

きだ。

何時もよりも今回の功績を強く語りたがる姿に興味を引いた。目先の問題をもう少し先に追いやって視線で催促をする。

俺の身長は平均よりも比較的小さい。(具体的な数字は伏せるけど)横を向いても彼女の肩と目線が合うため、見上げるように次の言葉を期待の眼差しで見つめる。

微笑ましい姿に見えたのか、ふふふつと微笑みながら彼女は口を開く。

「今回はキューブが手に入ったぞ」

「本当につ!」

思ってもない朗報に思わず立ち上がってしまう。急な反応で驚かされてしまった。

無理もない。と言いたい。

キューブは艦船達を建造する大元のような物。これがないと何も始まらない。

しかし、製造方法や原料、成分といった基本的な所まで未知の素材であるソレはそう簡単には手に入らない。1つ手に入れるだけでも一苦労だ。

それを1つでも手に入れてくれた。こんなにも嬉しい話はない。

俺の大袈裟な反応を見て満足したのか嬉しそうに再度笑う彼女。そんな落ち着きある大人な姿を見せられて、少し恥ずかしくなりながら座り直す。なぜかさつきよりも触れ合う部分が多くなった気がする。いや、気の所為ではないか。ソファアの隅の隅へと限界までゆくりされる。バレないように。

「貴重なキューブだ。大切に使ってくれ」

「わかってるよ」

限界まで行ったところで彼女に大きく詰め寄られた。

「さて、そんなにも喜んでもらえるような働きをしたんだ。褒美は何かないのか?」

「……ああ」

触れ合っていた腕と腕はもはや触れ合っているというより重なり

合うという程に詰められた。手に関しては彼女の手が上から強く押し付けられた。

逃さない

そんな意図を少し感じた。

「私は戦場に身を置いている時が一番落ち着く。そこが居場所だから。」

でも、寂しさもある。

そこにいる間はあなたに会えない。

たまには共に前線に立たないのか？

指揮してくれる人がいるだけでも変わるもの。

少なくとも私は変わる。

その方が私はより頑張れる。

私も、その方が嬉しい。

昔のように、私の傍で戦場での活躍を見届けてほしい」

「……頑張るよ」

事務仕事が忙しい。建前ではなく本当に。

昔とは違って艦船が増えた今となっては諸々の管理含めてやる事が膨大に増えてきている。

昔は指揮を取れていたが、今となってはそんな事滅多にない。エンタープライズを始めとした信頼できる艦船達に軍事は任せっきりになってしまうている。

……やっぱり、これも良くないよな。

「指揮官が忙しいのは知ってるつもり。」

でも、だからといって寂しさは変わらない。

演習にも実践にも来れず、ずっとここで書類と戦っている。

ここがあなたの戦場。

わかっているけど、寂しいんだ。

あなたは私の拠り所だから。

少しでも長く、ずっと共にいたいんだ

私からここに来るのもいいが、戦場に立つ事が多い私ではその機会も周りより少ない。

悲しいよ、私は」

腕だけじゃない。身体全体で詰めるように俺の前にその凛とした顔が向けられる。今にも押し倒されそうな程詰められると、彼女の顔が視界一杯に詰まっていく。

「……頑張るよ」

「それはいつも聞いている。

疑っているわけじゃない。あなたの仕事が忙しいのはよく知っている。

それでも、寂しさは変わらない

何時も頑張っているあなたを困らせたいわけじゃない。

ただ、私はこの寂しさから逃れる術を知らないんだ。

戦場で生きていた私に、人肌寂しい時にどうすればいいのかなんて……無知な私には分からない

だから、少しでもいい。

私の傍にいてほしい」

最後の言葉と共に肩を強く押し出される。

片手は彼女に強くソファに押し付けられているし、元からの身体能力の問題もある。ただ、されるがままに与えられた力に沿うように身体が勝手に動いていった。ソファから大きくはみ出た背中中は最後の防衛先である肘掛けを腰に当てて外に倒れ込むように落ちていく。

それを止めたのは、やはり彼女の暖かい手。

抱き寄せるように後ろに回されたその手は片手で俺の両肩を纏め

て包みこんでくれた。このおかげで地面に倒れ込む事はなかった。

「すまない」

「俺こそ、ごめん。寂しい思いをさせて」

本当にそう思う。

エンタープライズがここまで強く願いを口にするこなんて滅多にない。特に私用では。

それだけ寂しい思いをさせてしまっているのだろう。

支えがないため、ぶらりと垂れ落ちる頭を動かして事務机を眺める。そこにある、大量の書類を。

あれがなければとたまに思うことはある。
なければ、もつと皆と接する時間が増える。

でも、あれをしなければ困るのは皆だ。

そう思つて頑張つていた。

でも、結果がこれか。漏れそうなため息を必死に抑える。

エンタープライズも、ベルファストも……他の艦船達からの不満もよく聞く。

自分の仕事を大変だと認めてほしいわけじゃない。少しでも接する時間を作りたいとはよく思う。

ふと彼女の顔が浮かぶ。

ベルファストなら、仕事の手伝いもそつなくこなしてくれるだろうか。

「何をされているのでしょうか？」

彼女の顔を思い浮かべていると、そんな声が聞こえてきた。

平坦な声からは少し戸惑いを感じる。

「お怪我はないですか、誇らしきご主人様」

持ってきた紅茶の乗ったトレイを乱雑にテーブルに放ると小さな支えから俺を奪い、交代するように後ろから抱きついて支えてくれた。

心配そうな瞳と目があった。

「エンタープライズさん、余りご主人様を困らせないで下さい」

「困らせている自覚はある。」

それでも、私は飢えてしまつてるんだ。

彼の温もりに。

あなたと違つて私は常に彼の傍にはいれないから」

「私は誇らしきご主人様を選んでいただいている秘書艦です。

秘書艦であり、メイドとしてご主人様のぬくもりを感じるために傍にいるわけでは……」

「なら、私と変わつてくれないか」

急な願いにシリアスは開きかけた口をそのままに固まる。

「いいじゃないか。」

シリアスも元は戦闘が得意なメイド隊と聞いた。

同じく戦闘が得意な私と変わってもいいだろ

私は彼のぬくもりを感じたいんだ。

ずっと、どこでも、いつでも

傍で感じていたいんだ」

俺の胸を優しく撫でながら嬉しそうに微笑みつつ続ける。

「何も秘書艦はメイドだけに務まるものじゃないだろ？」

シリアスが秘書艦として傍にいるのはメイドだからじゃない。

ならば、何でだ？」

「それは……」

口ごもりながら不安気に俺の顔を見つめるシリアス。

それは……

「あなたが羨ましい」

そう呟いてそっと俺から離れるように立ち上がりがある。

悲しみに満ちた瞳は、どこか苛つきも感じ取れた。

そんな瞳でシリアスを、彼女に抱きしめられるように支えられてい

る俺を見つめる。

「もし私が初めに着任してたら、私は秘書艦としてずっと傍にいたのに」

自問自答のように小声で呟いたのが最後の言葉。

それ以上は何も言わずに部屋を出て行ってしまった。

何も言えなかった。

シリアスが秘書艦として傍にいる理由に、明確な回答がなかった。

言われた通りだ。

ただ、最初に着任したから。

それだけ……かもしれない。

ベルファストからは能力を指摘された。

エンタープライズからは理由を。

シリアスが秘書艦をしている事に不満を持っているのだろうか？

それは違う

自分の問答に自分で答える。

俺がこの部屋に籠もっているのが気に入らないんだ。

もつと、他の艦船達と接する時間を作らなければならないのに……それが出来る程事務能力が高くない。

だから、彼女を傷つける。俺を庇うように彼女が傷ついていく。

本来出す主を無くした紅茶を悲しげに俯きながら見つめる彼女を。

そんな彼女の対面で同じように紅茶を見つめる。

乱雑にされた反動でトレーに溢れてしまった紅茶は、カップの半分程にしか中身がなかった。誰かはわからないが、折角淹れてくれたのに勿体ない事をしてしまった。申し訳ない

「誇らしきご主人様」

目線だけ上げてシリラスを見つめる。

「私が常に傍にいれば、あのような思いをさせることを防げたものを……申し訳ございません」

「別にいいよ、エンタープライズだって疲れてたんだ。だから、ちよつと我儘になっただけ」

「ああ、誇らしきご主人様」

そつと頬が包まれる。逆らう事なく任せていると、顔が彼女に向けられるように上へと上がった。

「この無能な卑しいメイドにそのような優しい言葉を……」

心優しいご主人様のため、このシリラス。先々のような事を言われないようにより一層、メイドとして、秘書艦としての力を身に着けたと思います。

誇らしきご主人様の横に相応しくなるために」

物寂し気な瞳に吸い込まれそうになる。徐々に、徐々に近づくその瞳に。それが視界から消えるとすぐに、急に顔を俺の肩へと押し当ててきた。寂しげに呟きながら。

「来客者の手前、あのような事を言いましたが……私は卑しいメイド。

ご主人様のぬくもりを求めてしかたがありません。

どうか、この卑しいメイドに暫し……貴方様の慈悲を与えて下さいませ

シリアスだけの、誇らしきご主人様」

何も言わずにされるがままに。彼女にその身を委ねながら、俺は考え込む。

シリアスはずっと傍にいてくれた。

ベルファストもエンタープライズも初期の方に着任してくれた艦船達。そんな彼女達からの不満。彼女達だからこそその不満。

……俺は、どうすればいいのだろうか。

目の前の支えを軽く撫でながら、俺は何も言えずに考え込んだ。

今日も疲れた。気疲れた。

倒れ込むように着替えもせずにはベッドに倒れ込む。こういう時、自分よりも2周り程大きいと便利だ。包み込まれて癒やしてくれる……そんな気がする。

さてとつと呟きながら胸ポケットに閉まっていたスケジュール帳を取り出す。

エンタープライズの願いを全て叶えるのは難しい。それでも、少しでも叶えてあげたい。彼女が頑張っていることをよく知ってるいる身として強く思う。

それにしても、ベルファストにエンタープライズもこんな事を言い始めるなんて……。

仕方がないのだろう。初めの方から着任してくれた艦船達からしたら、今の俺が執務室に閉じこもっている姿は面白くない。昔のように皆の前に顔を出してほしいと願ってしまうのだろう。

その願いを無下にしたくない。

皆、頑張っていることを知っているから。

予定がそれなりに埋まっている日程から目当てのモノを探すのに

時間はかからない。演習予定と記載されている日付はそう遠くない。自分でも把握はしていたが、改めて視界に入れて確認して脳内のスケジュールと照らし合わせた。演習の下に書かれた重桜、ユニオンという文字を見る。

この日の俺の予定はわかる。事務仕事だ。情けないけど、きつとそれで手一杯だ。

……事務仕事、か。

いや、だめだ。

あの生真面目なエンタープライズが不満を口にしたんだ。皆不満を溜め込んでいるかもしれない。

少しでも、皆と接する時間を作らなければ。それで皆の不満が少しでも和らぐなら。俺は、頑張れる。

その日程のすぐ横にも目が入る。

ロイヤル、鉄血

その2つに目先に追いやっていた問題が視界から消えていた事を思い出す。まずはビスマルクに会わないと……。

ロイヤル……か。

エンタープライズは言っていた。シリアスも戦闘を好む艦船だと。

その通りだ。

彼女もまた、戦闘で大きな戦果を上げれる力を持つ艦船。それを執務室に閉じ込めているのは……俺のせいだ。

シリアスを傷つけている。俺のせいで。彼女の溢れた涙があたたか頬をそつと撫でる。

悲しげな瞳を思い出しながら。

スケジュール帳を机に向けて放り投げる。放物線を描いたそれが叩きつけられたのを眺めていると、今日の紅茶を思い出した。

人には向き不向きがある。

それは、艦船にだって言える。

戦闘を好むもの、事務仕事を好むもの、勉学を好むもの……。多種多様だ。

彼女なら、どんな風に振り分けるのだろうか。

決まっている。まずは、秘書艦の座を自分に指名するのだろうか。

……傍にいれば守れるのだろうか。

守られっぱなしでいいのだろうか。

今度の演習は色々と変更しよう。

ビスマルクだけじゃない。皆に1度会いに行こう。

大切な艦船を守るために、私情は捨てなければならぬ。

そんな士官学校で学んだ基礎の基礎を思い返しながら俺は明日以

降の予定を脳内で組み込んでいった。

「演習に参加……ですか？」

「演習に参加……ですか？」

何時ものように執務室に訪れたシリアスに挨拶を早々に終わらせて伝えた俺の用件に、戸惑いながら反復して返す。

既に机について仕事を始めている俺は、彼女の戸惑う姿を横目に書類を一枚一枚数秒掛けて仕分けていく。緊急性の高いものか、そうじゃないか。

何時もはそんなの関係ない。ただ一枚一枚目の前に置いて片付けるやり方をしていただけと今日は違う。今度の演習に今日からの行動を考えると、とてもじゃないが全てを処理するには時間が足りなさすぎる。

後々苦しむのは俺だ。だから、後回しでいい。

「かしこまりました。誇らしきご主人様。」

このシリアス、貴方様の秘書艦として相応しい活躍をお見せできるよう努めます」

嬉しそうに微笑む姿を眺めてすぐに反らす。彼女は戦闘を好むというわけではないが、ここでソファに座って時間が経つのを待つよりも遥かに楽しみではあるのだろう。慣れない仕事をするよりも、手慣れた仕事の方を好むのだろう。

最近彼女の悲しい気な顔ばかり見てた気がする。だからか、今の嬉しそうな笑みがやけに心に染みる。

いや、違う。

今から言う俺の言葉でその笑みを消すことになる事を分かっているから染みるんだ。内心では辞めようという甘えが滲み出る。

でも、言わなきゃいけない。

このままでは、皆の不満にも繋がるから。

昨日のように優しく接したい。でも、1人だけを優しく接するわけにはいかない。

頑張っているのは、皆一緒なんだ。初めて着任したからといって特別視する訳にはいかない。そう、言い聞かせる。

「だから、一時的に秘書艦を変えようと思うんだ」

書類を動かす音だけが聞こえる。その間隔は変えないよう意識する。目に入っても頭に入らない文字達を必死に頭に入れこもうとする。それだけに集中する。

数枚の書類を動かした後、残り少ない机のスペースに向って強く手を叩きつけられたのが視界に入る。激しい音に思わずピクリと身体を震わせた。でも、手は止めないように気をつける。

「ご主人様!!」

「少しだけだよ。演習とはいえ久々の実戦なんだ。シリアスも準備はいるだろ?」

「そんなの必要ありません。」

私は何時でも誇らしきご主人様のご期待に添えられるよう用意してあります。

ですから、秘書艦の変更は必要ありません」

「そっか、でも演習に向けて訓練とかするんでしょ?」

「誇らしきご主人様の傍を離れないと昨日申したばかりです。」

ですから、私は何があるかと離れません。」

ご主人様の秘書艦は私です。」

私だけの席です

誇らしきご主人様の身も心も守るのは私の努め。私の生き甲斐。

どうか、どうかシリアスから貴方様を取り上げないで下さいませ。

誇らしき……ご主人様」

「……………」

その必死な言葉にやっぱり俺の心は持っていかれる。何時しか手は止まってしまった。

目の前に置かれた細い手を追うように徐々に顔を上げていく。

ああ、やっぱりキツイ。彼女の涙を見るのは。

しかも今回は俺が泣かせてしまったのだから。

ごめんね。内心で何度も彼女に思いをぶつける。

「演習が終わるまではベルファストに秘書艦をお願いするよ。彼女に

仕事を手伝って貰って演習に参加出来る時間を作りたいんだ」

「それならば、私を秘書艦のままベルファストさんを手伝いとして派遣すればよろしいかと。」

先も申した通り、シリアスは何時でも戦闘に参加出来るよう準備を済ませています」

「ロイヤルの演習メンバーを見てないけど、きつとベルファストも入ってる。彼女を起点として作戦を考えてるかもしれない。だから、一方的にベルファストを借りるのは不満が出るでしょ？」

「私と彼女を交換するという事でしょうか……」

書類を濡らさないようにそつと手の周りからずらしていく。

「そんなの……そんなの……」

「大丈夫だよ。前の指揮官みたいな事はしないから」

シリアスを秘書艦から変えなかった理由。それは、俺が彼女をよく知っているからだ。昨晚寝ずに考えた答え。

結局の所、私情なんだ。彼女をこれ以上傷つけさせたくないという我儘。

そんな我儘な俺は自分で傷つけた彼女の頭を優しく撫でていく。深く抉られていた傷跡をこれ以上開かないように。

「演習が終わったらまたシリアスに秘書艦をお願いするから」

「……本当でしょうか？」

「うん、約束」

「前の指揮官は、約束を守ってくれませんでした」

傷口が少し開いたように感じる

「シリアスの誇らしきご主人様は約束を破らないよ」

「……本当でしょうか？」

「信じてよ」

なるべく優しく微笑みかける。

本当に初めてあった時の同じだ。

捨て犬のように泣きながら縋るような彼女とそれに微笑みかける俺。

違うのは、傷つけたのは俺だという事だけ。

「……………」

「……………」

何時に無く静かな執務室が日の光で照らされている。

シリアスの事ばかり考えていてはいけけない。そう思った。思っていたけど目をそらしていた。それがいけなかった。

ベルファストもエンタープライズも。他の艦船達も。

皆頑張っているって知っている。思っているつもりだ。

それでも、それが伝わらないのは俺が行動に移していないから。ただそれだけ。

それだけのためにシリアスを傷つけるような事を言われてしまう。

だから、俺が悪い。

俺は悪くてもいい。

大切な彼女を傷つけられる所を見ていたくない。

だったら、俺が傷つけて……。それでお終いにしよう。

これで少しでも場が落ち着くことを祈るだけ。

この執務室のように。嵐が過ぎた後のような静けさを望む。

「……誇らしきご主人様」

「うん？」

懸命に、ただただ懸命に考えこんでいたシリアスの言葉は今までに無いぐらい重く感じた。

目の前に楔のように打ち込まれていた手は俺が思っていたよりもあっけなく離れていく。そのままぶらりと力なく垂れ下がっていた。

「このシリアス、ご主人様に見限られたというわけではないのでしょうか？」

「ないよ。それは絶対がない」

「シリアスは、また秘書艦に戻れるのでしょうか？」

「次の紅茶は苦いのがいいな」

「……かしこまりました」

ゆつくりと俺の前から2歩下がる。何時しか消えていた涙の変わりに見せた歪な笑みで軽い一礼を見せてくれた。

「シリアスは初めて貴方様と出遭った時から身も心もご主人様のモノ。

たとえばどれだけ傷つけられようと……傍にさえ居られれば満足する卑しいメイド。」

そのメイドに一時離れ、戦果を見せろと言うのであればお見せしましょう

誇らしきご主人様の横に立つには誰か相応しいかということを

それは、私しかないということをしる

「うん、期待してるよ」

「必ず期待に応えます。」

誇らしきご主人様との仲を引き裂こうとするモノ共をこのシリアスが直接黙らせるというだけの事。

口で分からね艦船達に実力で示すという事。

その任、確かに受け取りました」

少し驚いた。

口に出してはいなかったが、俺の考えを読まれたらしい。表現がかなり過激だけど……そこは急にこんな話をしたんだ、彼女も動揺していたからだろう。

以心伝心、か。長く隣で歩んできてくれた彼女が俺の意図を読み解いてくれた事に思わず嬉しくて微笑んでしまう。

何時に無く張り切った事を言ってくれる。やっぱり戦闘をメインとしたメイド隊だけあって久々の戦闘で血が踊るのだろう。

彼女の戦闘面での実力はメイドとしての姿を見ていたら本人とは思えないほどの実力の高さを兼ね備えている。艦船達が持つ砲撃もそうだが、身の丈程にある大剣を振り回して戦場を舞う姿は初めて見たときは思わず釘付けになった。

正直、彼女の戦う姿をまた見たいと思っていた自分もいる。だからこそ、この提案を受け取ってくれた彼女には感謝しかない。

「ありがとう。シリアスの戦う姿を楽しみにしているよ」

シリアスにはシリアスの得意な事がある。

ベルファストもエンタープライズも戦闘面を高く評価していた。

あの2人が認める程の実力を見せつけたら、きっと周りも納得してくれる。

俺と共に戦って母艦をここまで大きくし、保ってきた優秀な艦船だと評価してくれる。

少しでも好印象を与えればそれでいい。時間を稼げる。

その後はベルファストにお願いしてメイドとしてのスキルアップをしていけば……。戦闘でも秘書艦としても皆を認めさせればきっと、彼女を傷つけるような事を言う艦船達もいなくなる。

シリアスが事務仕事を少しでも出来るようになれば俺も楽になるしね。

そしたら、俺がもつと皆と接する時間を増やせる。

そうすればきつと、シリアスを傷つけるような事をいう艦船達もいなくなる。

「俺も甘えすぎてたよ。シリアスが傍にいればいいと言っていたけど、それだけじゃ駄目なんだ。一緒に頑張つて皆を見返そう」

「はい、誇らしき主人様」

満面の笑みで互いを見つめ返す。

出遭った時とは違う。

捨てられたシリアスと運がよかつただけの俺。

そんな情けないコンビだった俺達は今となっては色んな経験をして成長したんだ。それを、皆に示したい。

その上で、皆に分かつて欲しい。

シリアスは優秀な艦船だという事を。

だから、彼女を罵倒するような事を言わないで欲しいと。

互いに持つ共通の目的を確認し、2人で同時に領き返した。出遭った時にはなかった自身に満ち溢れた瞳を見つめ合いながら。

「この庶民!! 何時まで私を待たせるのよ!!」

ロイヤル陣営の寮。その奥にある一室は俺の自室の数倍は大きい部屋だ。その真ん中には、これまた高級そうな椅子に座りながら開

幕怒声を放つ彼女、クイーン・エリザベスは指を指して出迎えてくれた。

両隣には2人のメイド。現役メイド長のベルファストと前メイド長のニューカッスルが優雅に一礼をしながら出迎えてくれる。

エリザベスは怒った声を出しているが、わりと何時もの事だ。むしろ嬉しく思ってくれているのだろう。組んだ足の片側は地に着かずにぶらぶらと楽しげに揺れていた。

「ごめんね、少し遅れたかな？」

「いえ、約束の時間通りですよ」

ニューカッスルは暖かい笑みを浮かべながら答えてくれる。

「貴方様は時間に律儀な方。」

そんな貴方様が約束通りに来れたと言う事は、今日も母港は平穏だという証でしょうね」

クスクスと笑う彼女を見てみると心が落ち着く。平穏といえば平穏だ。シリアスの悲しみも落ち着いて今は冷静に主の前で佇んでいたから。

「して、ご主人様が急に陛下に用事とは何事でしょうか？」

ベルファストは不思議そうに尋ねつつもシリアスの顔を見つめると検討がいったのか、その顔は先日見た時のようにどこか勝ち誇っていた。

「そうよ、私は庶民と違って忙しいの。朝から急に会いたいなんて……別に、あなたが来たいなら用がなくても来なければ勝手に来ればいいのよ!!」

それは忙しい人の発言だろうか？ 苦笑で返しつつも何も言えない。

エリザベスと最後に会ったのはロイヤル主催のお茶会の時。せめてイベントの時ぐらいいは顔を出さなきゃと思って出ているが、それでも1月程前の話になる。

最近はロイヤル陣営の話し合いの場にも出れず、書面で確認する事のほうが多いからか会う機会は大分少ない。

彼女にもまた、寂しい思いをさせた。我儘な彼女が何時でも会いに

来いと言うのだから余程の事なのだろう。

「エリザベスにお願いがあつてきたんだ」

「何よ……。まあいいわ。今の私は機嫌がいいの。聞いてあげないこともないわ」

「今度の演習なんだけどね」

視線をシリアスに向ける。何も返される事なく俺の横から一步前に出るとその場で傳く。

「陛下。次の演習にシリアスをお使い頂くようお願い申し上げます」

「シリアスが？ あなたは秘書艦の仕事があるじゃない」

「秘書艦の仕事ばかりさせても窮屈だからさ、たまには他の艦船と交代してもらおうかなって」

俺の言葉に一番に反応したのはベルファスト。その笑みを少し強くして俺を見つめる。隣前にいるエリザベスには見えないのだろう。少し考え込むと

「あらそう。なら、庶民の秘書艦は私でいいわね」

「……はっ？」

急な決定に情けない声が漏れる。予想もしてなかった。女王様が庶民の秘書になるなんて言うことに。

「いいじゃない、私も暇してた所なの。」

これを機にあなたの秘書艦になって、女王の横に立つ男に相応しいように調教してあげるわ。

喜ばない庶民。

このクイーン・エリザベス直々にあなたのことを鍛えてあげる!!」嬉しそうに指を指してこの場を置いてきぼりにした暴走女王様は言い放つ。相変わらず忙しかったり暇だったり大変な女王様を持つメイド長は着いて来ていたのだろう。「お言葉ですが」と遮ってくれた。

「陛下はロイヤルの主。」

女王が不在になるといふのは許されません」

「何よ!？」

私が秘書艦になりたいのを邪魔する気なの!!」

「秘書艦になれなくても、ご主人様は何時でも陛下の傍に来て下さいますよ」

チラリと顔を覗かれたのを合図に数回顔を縦に振る。相変わらず味方になると心強い。

「……うー、確かにやること一杯あるけど……」

「いけません、陛下は陛下としての役割と仕事を全うして下さいませ」
「……もうっ、わかったわよ!!」

自分でも無理なことは薄々感づいていたのかもしれない。そう思える程に珍しく諦めがよかった。

でも、我儘なエリザベス女王が秘書艦になってまで俺の傍に居たいなんて……寂しい思いをさせてるな。相変わらず反省する事しか出来ない。

「それで、秘書艦は誰にするのよ」

投げやりなその振りを待っていたと言わんばかりに向けられる視線。その主が微笑みながら俺の腕に抱きついてきた。

「貴方様の秘書艦は私がお受け致しますよう」

いつの間にか隣りにいたニューカッスルは嬉しそうな微笑みで俺の様子を伺っていた。

「それに、秘書というのは本来主のサポートをするもの。」

そこらの浅いカンレキよりも私のような経験あるモノが席を置いた方がよろしいかと。

何より、私は古い艦船。

周りの艦船達とはスペックが違いすぎて戦場では足を引っ張ってしまい情けなく思っていた所。

貴方様の秘書艦として隣に立ち、貴方様だけのサポートをする方が私も気が楽になります。

どうか貴方様のその深い心でこの老婆に心休まる居場所を下さいませ」

老婆と自身を語るが見た目はそこら中を探しても中々見つからない美少女だ。長い髪を2つに分けて前髪は瞳に重ならない程度の長さにしたベルファストやシリアスとは違い控えめな色合いのメイド

服に身を包んだ彼女は、老婆とは程遠い外見。そう、見だけの話なら。艦船達は元となる戦艦がいた。それをメンタルキューブによつて復元して今の姿になる……らしい。余り詳しくは解明されてないから何とも言えない。

少なくとも、彼女が自身を老婆と卑下するのはそれが理由なのだ。自らの元となった戦艦が周りよりも旧型だからスペックが低い。そういう意味合いでは確かに彼女は老婆だ。俺と背丈が変わらない美少女を老婆呼ばわりは抵抗あるけど。

「ニューカッスル、か」

彼女はベルファストの前任のような人。以前のメイド長だ。メイドとしての能力はベルファストと遜色ない。

彼女との違いはその親しみやすさだろう。

ベルファストは的確な指示を下して仕切るのに対してニューカッスルは飴と鞭のような優しさを感じる。その魅力でメイド達は彼女の言葉に従っていた。今でこそメイド長としての席から下りてはいるが……確かに、ニューカッスルの方が秘書艦にした時にロイヤル陣営に影響は少ない。現役のメイド長を急に引っ張ってしまうのも気が引ける。

ただ、俺は彼女が少しだけ苦手だ。

エンタープライズもそうだけど、彼女も距離感が近い。現に俺の腕に絡みつくように腕を巻きつけて自らの身体を押し当ててくるのに、どう言えばいいかわからず凍ったように固まってしまっている。暖かい彼女の体温を感じる度に俺の体温を奪われているような気がしてならない。

「貴方様が求めるならば、私は何でもこなしましょう。」

愛しい愛しい貴方様のために」

囁く言葉に苦笑いを浮かべる。ベルファストもシリアスも強く反応しないのはエリザベスの手前だからか、それとも恩がある先輩にモノを言えないからなのか。少なくとも俺を助けてくれる人は1人しかいない。そつと視線を向けるとやはり彼女はすぐに応えてくれた。「ニューカッスルさん、ご主人様は過度なスキンシップを嫌がってい

ます。お辞めください」

黙って見ていたシリアスはやっぱり俺の期待に答えてくれる。

「あら、シリアス。

スキンシップを嫌がる殿方などいませんよ。

貴方様は緊張しているだけ。

大丈夫です。

私がかんずほぐれつ……徐々に慣れて行くように手解きしまし
う。

1から10まで

この老婆が何でも教えて差し上げましょう」

暖かな笑みは少し怖い。初めて見た時は魅力的に映ったが、今となつては蛇に睨まれているような気分になる。

「ニューカッスル、あなたは秘書艦にできないわ」

ため息混じりに現状を見かねたエリザベスがようやくその重い口を開いた。

「第一、私の庶民を汚されたら溜まったものじゃないもの。ベル、あなたが秘書艦として庶民の動向を監視していなさい」

「かしこまりました。陛下」

ベルと愛称で呼ばれたベルファストは一礼と共に返答する。こうなることをわかっていて見届けていたのだろうか……。

まあ、自分が秘書艦になるというのは想定していた気がする。自分で言っていた程なのだから。もつとも、俺も初めからベルファストにお願いする気だったけど。

ニューカッスルも流石にエリザベスに指摘を受けて反省したのだろう。その一声で俺から離れると

「失礼しました。久々に貴方様に出会えて浮足立ってしまったようです」と謝罪をする。

「気にしてないよ」

しっかりと反省の色を出すその顔を見てみるとこれ以上咎める気にはなれなかった。彼女は優しい人だ。優しいからこそ、我慢をする。久々に会った俺についつい我慢の限界を超えて甘えたのだろうか。

甘えられてばかりの彼女にとって貴重な甘えられる側の人に会えたのだから。

「庶民、あなたは私達ロイヤルのモノなんだからね。

汚されるのはロイヤル艦船でも嫌だけど……。

それでも、他の陣営に取られるのはもつと嫌。

だから、あなたの秘書艦は私の忠実なるメイドであるベルを送るわ
ありがたく思いなさい!!」

「不束か者ですが、よろしくお願いします」

ベルファストの余裕を感じる表情に納得行かなかったのだろう。
シリアスは少し不機嫌そうに此方を見る。少しの間だけでいい。我慢してほしい。そう思っ
て見つめ返す事しかできない。

思いは届いたかはわからないが、確認する事も出来ないまま「さあ」
というエリザベスの一声で皆の視線が彼女に向いた。

「庶民もここに来たという事は暇なんでしょうから、折角だからロイヤル流のお持て成しを
しなさい。ベル、ニューカッスル」

その言葉の意味はすぐにわかる。お茶会を始めるという事。エリザベスの大好きな行事だ。
正直、彼女の元に尋ねると最後は何時もこれだ。

仕事は選別した。今日は何時もの半分程しかなくていい。明日以降は大変だけど……

それでも、今日は楽しもう。メイド達が俺が来たことを皆に伝えると同時に
お茶会の準備に取り掛かる。

部屋の主と2人で細やかな会話を楽しみながら久々に見る皆の顔とお持て成しに期待を寄せた。

今日はそんなに疲れなかった。

帰ってから机に座りエリザベス宛の書類を見直す。ベルファストとシリアスの交換は数日後から。それまでの間はシリアスをベルファストに付けて秘書艦としてのイロハを教えるという風
に書いておいたが、実際は逆。メイドのイロハを教えに行ってもらう。

この数日はやることが一杯だ。

エリザベスのあの顔やニューカッスルのあの態度を見てやっぱり感じた。2人がロイヤル陣営というのもあるが、シリアスを傷つける事はなかった。

やっぱり、俺が積極的に皆と関わらないと。

そうすれば、彼女は傷つかずに済む。

……頑張ろう。

ため息と共に事務机にまだ置いてある大量の書類を思い浮かべた。少しだけ処理したけど全ては無理だ。

……頑張ろう。

皆の顔を思い浮かべながらも一度自分を内心鼓舞した。

「指揮官様、貴方の太鳳が来ましたわ」

「……さま……しゅさま」

酷い夢だ。今一番見たくない夢。今一番見るべきであろう夢。彼女を傷つけた過去。俺の我儘。

あれから随分と月日が経ったが今でも鮮明に思い出せる程、記憶に刻まれている。それは罪悪感からか。

「ほ……しき……しゅじん……」

質素な部屋の隅っこで膝を抱えて泣いていた彼女。

そんな彼女に対して俺は――

「ご主人様!!」

「うわっ!!」

急な大声で慌てて身体を起こす。見慣れた自室内では見慣れない彼女、シリアスはその赤い瞳を心配そうにさせながら俺の様子を伺っていた。

「……シリアス?」

「おはよう御座います。誇らしきご主人様。貴方様の永遠の秘書艦で御座います」

一礼と共に秘書艦の話題を朝から降る。ここ最近その話題ばかりで気が滅入ってくる。

「珍しくシリアスの方が早く指揮官室に来たため、様子を伺いに来たのですが……珍しく寝坊ですね」

「ほんとに?」

壁に掛かった時計を見ると何時も見ると時間よりも数十分後を指していた。指揮官という立場上別に遅刻という概念はないが、遅れて仕事に行くのはいけない。示しがない。そしてそれが知られれば、今度会う彼女にこれでもかと注意をされてしまう。

「うなされていましたが、悪夢でも見たのでしょうか?」

「え? あー、うん」

誤魔化すように苦笑しながら肩をすくめる。シリアスの夢を見てた、なんて気恥ずかしくて言えない。

「そうですか。シリアスの名を何度も呟いていましたので、助けを求めていらしたのですね」

「寝言？　というか、聞いてたの？」

「はい、それだけ長く起きて下さらなかったという事です」

「恥ずかしいな。少し顔が赤くなるのを感じる。そんな姿が面白いのだろう。彼女は楽しそうに微笑んでいた。」

「大丈夫ですよ。」

このシリアス、何時でも貴方様の傍にいます。

たとえどれだけ傷つけようとも、貴方様の傍から離れることはしません。

シリアスからは、絶対に。

たとえ、貴方様が手放そうとも……

シリアスのこの手は決して貴方様と絡んだ手から離れることはありません。

ですから、そう気にしないで下さいませ。

貴方様と出遭った時から、この身朽ち果てるその時まで永遠に傍に居続けます」

「ですから」そう続けながらシリアスはポケットからよく目にする鍵を取り出すと、それを俺に手渡してくれた。

「気にしないで下さい。」

私が傷つく事に、傷つけた事に。

ご主人様の選択がシリアスの選択。

ですので、傷ついたのではなく自らを咎しめているのです」

「……ありがとう」

彼女の気持ち嬉しく感じるのには昔を思い出したからか、それとも昨日の件の直後だからか。何れにせよ、彼女に甘えてばかりはいられない。俺も自分を律しながら歩まなければ。

「私は後数日で秘書艦から降りる身。」

この鍵は一時ベルファストさんにお預けください」

「そうだね、預けてた事も忘れてたよ」

今日のような寝坊した時もそうだが、俺の身に何かあった時のため

にシリアスに自室の鍵を渡していた。秘書艦として持つてもらっていた。それが変わるのだから、当然持つべき主も変わる。一時的に。預かった鍵を机に置くと足元に着替えが置いてある事に気づく。俺を起こしながら用意してくれたのだろうか。こういう気が利く所が彼女の良いところ。苦手な事が多いだけで、良いところだって一杯あると思わせてくれた。

「では、シリアスは先にお待ちしています」

そう言う彼女が部屋から出て一礼をする。

それを終えたその時、上げた顔を珍しくいたずらつ子な笑みを浮かべて

「少し残念になったご主人様」

と冗談めいた口調と共にその珍しい顔がドアによって隠された。残念になった、つか。

なったんじゃない。初めから残念なご主人様だよ。つと言ったところできつとわかってくれないだろう。

それでいい。

俺の事を誇らしきご主人様と言ってくれる彼女のために、今日も指揮官として振る舞う。

隣に立ってってくれる彼女からの期待に背かないように、今日も頑張ろうと思えてくる。

だから、それでいいんだ。

「指揮官様、貴方の大鳳が来ましたわ」

甘さと共にどこか幼さを感じる声の主は、その声とは裏腹に立派に育まれた局部を隠す所かより際立たせる様な赤い着物を着こなす。しかもそれを俺に見せつけるように少し屈みながら何かを誘うような瞳で大鳳は指揮官室を訪ねてきた。

「大鳳？ どうしたの？」

今日も今日とて予定あり。もちろん、今日の予定ぐらいは何も見なくても口に出来る。だからこそ彼女がここに訪ねてきた理由は見当

いったがそれでも確認をする。何故なら、その理由であればおかしな点があるからだ。

「決まっていますわ。指揮官様を迎えに来ましたの」

嬉しそうに自分の両指を絡めながらその腕で立派な胸を圧迫する。余りにも緩やかで開放的だったのが急に狭苦しくなったからか、その部位は今にも着物から飛び出そうな変化をした。辞めてくれよ。見ていたい……いや、注意したい欲求を必死に堪えて机に並ぶ書類に視線を移す。服装なんて個人の自由だ。俺が口を挟む権利はない。俺の趣味かと言われたら言葉を濁すけど。

ともかくとして、今日も今日とて最重要な書類とそうでない書類に分ける所から仕事は始まっていた。

そう、始まったばかりだ。シリアスに起こしてもらってからまだ数十分しか経っていない。だからこそ、おかしい。

「重桜に行くのは午後からのはずだけど？」

今日は重桜の長である長門との話し合いをする予定。演習についてと、重桜でトラブルがないかを確認する定期的に行うミーティングのようなもの。

重桜と鉄血はトップが自らを陣営の長として型にはまった振る舞いをする。だからこそ、我が強くはあるが身内に甘いエリザベスや明確な長がないユニオンと違って朝に会いたいと伝言を伝え、昼には叶うような簡単な方々ではない。それだけ責任を感じ取って長として取り組んでくれている。だからこそ、それに合わせたい。

その2陣営は定期的な日取りを決めてミーティングと称して会うことにしている。俺の事を母艦の長として丁重な扱いをしてくれており、わざわざ歩いて行ける距離なのに迎えまで用意してくれるような手厚い歓迎をしてくれる彼女達に比べ、俺がここの長として改めて自分自身に向き合う切っ掛け。それが今日。長門に会いに行く予定日。なのだが……

早い、早すぎる。迎えが来るにしてもだ。時計の針はまだまだここに来てから長い針が半周もしていないのだから。

「大鳳、大好きな指揮官様に一刻でも早く会いたくて我慢できません

でした」

詫びる様子は全くなく、それどころか部屋に入っで扉を少し強く閉めた。ここから出る気はないという意味表示を感じ取れた。

「いや、でも……」

「それに、指揮官様の秘書艦も今日はお留守と聞きましたから、大鳳が貴方様のお世話をと思ったわけですわ」

「なんで知ってるの!？」

思わず驚いて手を止めてしまった。

今日からシリアスはベルファストに秘書艦の仕事の引き継ぎとして、仕事を教える。という建前だが、実際は逆にメイド業の訓練日。悲しい話だが、シリアスからベルファストに秘書艦として仕事を引き継げる事など無いだろう。……いや、無いに等しいだろう。

とにかく、2人にはついさっきこの場で説明とお願いをした。それこそ、大鳳が訪ねてくる数分前の事。

そう、これを知ってるのは俺を含めた3人だけ。エリザベスだって今日はベルファストが秘書艦の引き継ぎと聞いているから、指揮官室に居ると思っっているだろうに。なのに、何故目の前の彼女は知っているのだろうか。

「ふふふつ……。大鳳はぜんぶゼーンぶ知ってますもの、だって大鳳の目に映るのは指揮官様だけですよ」

何故だが恥ずかしそうに応える彼女。この返答の何処に恥ずべき事があったのだろうか。

「指揮官様のあんな事やこんな事まで大鳳は全て知ってますわあ」

「……そ、そっか」

どこから問い詰めるべきだろう。意味深な発言か、俺の事を監視か盗聴でもしているのか。ツツコミ所が多々あるが何処にも突っ込みたくないのはきつと、どの会話に入ってもその穴の中は深い闇がありそうな気がしたからだ。氣と場を取り直すように軽い咳払いをした。

「何にせよ、今から重桜へは行けないよ? まだ仕事があるんだ」

「知ってますわ」。

だくかくらく

この大鳳、あんな無能な子達ではなく指揮官様の大切な艦船である大鳳がお仕事の手伝いに参りましたあ〜」

待ってましたと言わんばかりに食い気味な反応をして机上に積まれた書類を手に取り目を通していく。

達つとわざわざ複数形にするのだ、その中にはベルファストも入っているのだろう。大鳳のさっきの発言からして、秘書艦を一時的にベルファストにする事もきつと知っているのだろうから。まあ、隠すことではない。むしろ皆知つていてほしい。しかし、ベルファストを無能と言うなんて……凄いい子だ。思わず苦笑する。

重桜とロイヤルでは陣営が違う。だが何も双方の仲が悪いわけではない。陣営間の艦船達の仲は基本良好だ。そして、陣営が違うからと互いに睨み合う事もない。陣営と括つてはいるが、皆同じく同じ母艦の仲間なのだから。和気あいあいとは言わないが、それなりにどの陣営も良好な関係だ。

「……ふふふつ、大鳳でも出来そうなお仕事が一杯ありそうでよかったですの〜」

俺が分けた後でもいい書類から更に選別してソファ前のテーブルに分けていく。試しにチラリと大鳳が持つていった書類を見る。確かにそれは俺がやらなくてもいいような物だ。サインを書く責任者がわからないから俺の所に舞い込んできたような仕事。

「指揮官様の確認が必要な事は大鳳が尋ねますから、指揮官様は大切な書類を頑張つてやって下さいまし〜」

そう選別を続けながら言う大鳳。
……そうか、秘書艦もこんな風に手伝ってくれるのか。思わず感心と感謝で「ああ」と口から漏れた。

おつとりとした口調で語る大鳳だが、意外と面倒見が良く手先も器用だ。頼んだらきつと、期待した仕事が出来るに違いない。そう思う。

それでも、大鳳は秘書艦ではない。だが、手伝ってくれると言うなら助かる……。彼女の進む手を止めるか止めないか悩んでいると彼

女の方から手が止まる。

不思議に思って顔を見上げると、シリアスに比べて少し暗く赤い潤んだ瞳と視線が会う。その口元は何故だがニヤニヤとしていた。

「ああ、愛くるしいですわ〜」

「ちよつ!?!」

余りにも唐突な言葉と共に大鳳は横から飛びついてきた。勢いに歯向かえないまま椅子から飛ばされ、床へとその身を打ち付ける。背部全体がじんわりとした痛みと自室のベッドとは真反対な硬い床が俺を包む事を凄いい勢いで拒むように反発的な感覚をくれる。

「ああ〜何時見ても可愛いいですわ〜」

机に向かって張り切る姿、本当に愛くるしくて素敵ですよお。

大鳳はあく、食べられたいけど、指揮官様なら、大鳳から食べちゃいたいぐらいですわ〜。

本当に、ずっと大鳳の傍にいれば指揮官様に何不自由なくさせてあげますのにい。

何であのロイヤルメイドを秘書艦にするのか、大鳳には理解ができませんの。

他の艦船達よりもお、大鳳の方が指揮官様を愛していますのにい。

大鳳が指揮官様の最高最愛のパートナーですのお〜」

言いたい事を言いながらもやることは確実にやる。それが器用な大鳳らしさを感じた。ただ、それが仰向けに横たわる俺の両足の上に足を乗せ、手は手首下を軽く掴んで動きを封じ、全身で俺の上に横たわりながら耳元で囁くというのだから嫌になる。胸の上にある柔らかな感覚も俺の意識を奪うのに十分な効力を発揮している。

大鳳は意外と背が高い。並んで立つと俺の頭の先が肩よりすこし下ぐらいだ。身長差を考えても男女差を考えると俺の方が力はあるはず。そう思って必死に抵抗するもびくともしない。……非力な自分が嫌になる。

「必死な姿が可愛いいですわあ〜」

横にある顔は微笑ましく笑みを浮かべる。まるで愛玩動物を眺め

る様に。辞めてくれ、泣きたくなるから。

「指揮官様、何でこの大鳳ではなく他の艦船を秘書艦にするんですか？」

シリアスははまだ、指揮官様の最初の艦船だからって言われてたから泣く泣く諦めたのに。」

誰でもいいなら、なんで大鳳を選ばなかったんですの？」

「なんで、大鳳を選ばなかったんですの？」

「やばいこれは凄くやばい。この状況もだが、彼女の童顔な顔つきが少し険しく、甘く幼い声が低いそれに変わる。掴まれた手に入る力がかなり強くなるのも緊急事態を文字通り肌で知らせる、それどころか肉と骨で告げるサインだ。大鳳は初めて会った時から俺に執着してる節がある。」

この火照り、そしてこのときめき……やつと会えましたわ、指揮官様！ 大鳳、不束者ですが、よろしくお願いします

そう嬉しそうに笑いながら抱きつこうとしつつ放れたこの言葉こそが彼女が着任して直ぐの第一声だ。何も言えずに呆然としていたら抱きつかれたてしまい、直ぐにシリアスが離してくれた。でも、今は彼女がいらない。

……いや、いなくてもなんとかする。シリアスにこれ以上心配事を増やしたくない。彼女は彼女で、出来ない事を出来るように努力している。誇らしきご主人様として、何事もなくやり遂げる。

大きく息を吸う。花のような安らぎを感じるいい匂いが彼女の長い黒髪からした。大鳳のおかげで大鳳にされている事態に対して、大鳳が落ち着きをなくし機嫌を悪くしている事に対して、少しだけ落ち着きと事態に直面する勇気をくれた。

「大鳳」

「指揮官様の隣は大鳳で十分。」

大鳳だけの特別な席。

他の誰かが座ることも、触れることすら許さない。

潰したいのに、優しい優しい大鳳の指揮官様が少し許してるからって調子に乗って大鳳の席をうろちよろする害虫……

どうして指揮官様は止めないのですか？

指揮官様がこのまま大鳳に意地悪をするならあゝ

全部せくんぶ大鳳が壊しちやいますよゝ

大鳳と指揮官様の間にあるもの全部

大鳳が壊しちやいますよ」

「大鳳！」

「指揮官様の純潔も、身体も、その血一滴すら大鳳の物なのに……

大鳳から指揮官様を遠ざけるようなもの、邪魔だと思いませんかゝ

？

邪魔ですよね？！

指揮官様、大鳳に邪魔な害虫駆除を早く命じて下さいませ」

「……大鳳!!」

自分の世界に入りこむ彼女を何とかこの世界に引き戻せたのだから。その口が止まって暗い瞳が俺を真っ直ぐ捉えている。

「……大鳳の気持ちは嬉しいよ。でも、シリアスもベルファストも他の皆も頑張ってる。

皆仲間なんだから、壊すとか駆除とか……辞めようよ。そういうのは嫌いかな」

「指揮官様が大鳳の事が嫌い？

嘘ですよね……?？」

「大鳳の事じゃないよ、そういう風に言うのが嫌なだけ。大鳳の事は好きだよ」

「……大鳳の事好きですかあ？」

「好きだよ」

「……ふふ

……ふふふ……

ふふふふふふ」

冷や汗が1つ首筋に垂れるのを感じた。その不快感がなくなると一泊置いて来た笑い声に吊られて俺も笑う。

やっぱり助けてシリアス。そう思いながら口元だけ精一杯の笑みを浮かべる。目の前と未来に来そうな恐怖にも吊られて。

「そうですかあ、指揮官様は大鳳の事がだ〜い好きで、ついつい意地悪をしてるんですねえ〜

そうですか〜……

大丈夫ですよ〜大鳳は指揮官様の事を何でもなく〜んでも知ってるんですから〜

ついつい好きな子をイジメたくなるんですよ〜

ふふふっ年頃の指揮官様の意地悪」

満面の笑みを見て大きく息を吐いた。突っ込んだ言葉はどうやら正解の穴だったようだ。深い闇ではなく何時もの明るい笑顔で少しだけ安心した。

口元を隠すように手を運ぶのを見て、ようやく俺の手が開放された事を知った。鈍くくる痛みがまだあったから離された感覚がなかった。もともと、まだ自由になつた感覚もないのだが。

「だ け ど」

今度はその手を俺の首横に置くと自らの身体を俺に重ねる。着物から開放感を感じる胸部が俺の胸の上に思いつきり重なる。悩ましく形ずれて少し溢れてたそれを見て、感じて何かを思う余裕はない。そんなものよりも再び俺の横に来た顔に意識を全て持っていかれたから。

一瞬前まで嬉しそうに笑っていたとは到底思えない真顔が目前にくる。思わず息を飲み込んで黙り込む。

「あんまりおいたがすぎると、大鳳は誑かしてくる他の子に怒ってお仕置きに行きますからね指揮官様」

その言葉を伝え終わると、満足したのだろう。再び嬉しそうに笑いながらに机の傍に立ち書類の整理を始めた。

……………

彼女の場合は俺やシリアスの努力でどうにか出来る問題なのだろうか。

……………

いや、久々に会えて今まで寂しかった鬱憤が爆発した。そうだ、そうに決まっている。そう思うことにしよう。定期的に会って話して

すればもう少し落ち着きを……

そこまで誤魔化す言葉を並べて先日話題に上がった他の艦船の顔が思い浮かぶ。彼女もまた、大鳳のような存在だ。

……………頑張ろう。

皆頑張ってるんだ。皆ともつと接していけば、きつとこんな風に感情を爆発させないはず……だろう。爆発する前に抑えられる……はず。

自分自身に言い聞かせながら立ち上がり、俺を突き放した時の衝撃でか、倒れ込んでいた椅子を見る。俺もあんな封に何も出来ずに横たわっていたのか。溢れ出る情けなさを溜息で逃しながら椅子を直す。

「さあ指揮官様く大鳳と一緒に仕事を終わらせましょうく」

これ以上何かを言う気力はない。大人しく椅子に腰掛けて書類の選別を再開した。

どうしてこうなったのだろう。

日が落ち始めた頃に大鳳と共に訪ねた木を主とした大きな建物。和を強調した寮に予定より早めに来れたのはよかった。それだけ大鳳が頑張ってくれたんだ。やっぱり秘書艦の存在はでかい。そう感じさせてくれた。感謝の言葉を伝えると満面の笑みで返してくれたのは彼女が持つ本来の優しい面を感じ取れた。普段は過激な発言はあるが、話せばしっかりとわかってくれる良い子。今日もあの後は俺の言う事をしっかりと聞いて手伝ってくれたぐらいなんだ。本当は良い子なんだ。

そこまではよかった。

……どうしてこうなったんだろう。

目の前にいる

黒い長髪をした彼女と白い短髪の彼女。

黒いインナーと白いインナー。

黒い尻尾と白い尻尾。

黒い獣耳と白い獣耳。

その人間ではありえない耳と尻尾をふるふると小刻みに震わせな

がら俺の腕に両手を絡めながら挑発めいた事を言う大鳳。その姿で
そらに怒声が飛び交う事になる。

ああ、本当に

どうしてこうなったんだろう。今日だけで何度目になるかわから
ない溜息をついた。

「指揮官様、その目障りな小娘は何かしら？」

「あれぐらいの仕事、大鳳なら簡単にすませられますわくねえ、指揮官様」

俺の腕に両腕を絡ませ、これでもかと言わんばかりに身体を密着させながらウインクし、内面外面共に激しいアピールをしながら大鳳はそう言った。

正直めちゃくちゃ助かった。

午前中、急に手伝いに来たと言い訪ねてきた大鳳は自発的に来るだけあってその働きぶりは優秀そのものだった。正直、この騒動が終わった後の俺の仕事量は考えたくもない程だったが、彼女のおかげで昨日今日の簡単な雑務は無事に終えれた。それどころか、手暇になると書類の整理や部屋の掃除等も積極的にやってくれ、その様はまさに秘書艦の立ち振舞とも感じ取れた。

「楽しい時間は何でも早く終わってしまうでしょう。指揮官様と大鳳の2人つきりでもっと過ごしたかったですわく」

より絡んだ腕に力を入れながら呟く。午前は自主的に大きな力になってくれた大鳳だったが、午後からの目的の方がメインだったんじゃないの？ 嫌そうな顔をする彼女の機嫌を損ねるのは少し怖かったから口には出せない。

俺達は今日の本題とも言える、重桜の長である長門に会うために彼女達の寮へと向かっていた。もつとも、約束の時間にはまだ余裕がある。大鳳のおかげで早めに仕事を切り上げられたのはいいが、彼女と2人で密室に居るのがすこし怖くて早めに部屋を出ることにしたのだ。彼女もそれに同意してくれた。

「大鳳、指揮官様に飲んで頂きたい美味しいお茶をご用意していますのく是非とも、大鳳の自室に寄ってから向かいましょう」

と言われたから、結局の所密室で2人つきりという自体は変わらないのが頭痛の原因なんだろう。

2人してゆっくりとした足取りで。大鳳は口にしたように俺と少しでも長く2人でいたいからだろう。何時もよりもゆつたりと持た

れたかかれながら歩く。俺の方は、そんな彼女に絡まれた腕を引つ張られていて、早く行こうにも邪魔をされているから自然とゆっくりとした足取りになっていた。何よりも早く行ったところで大鳳と2人つきりなのは変わらないのだから。

別に大鳳と2人でいるのが嫌な……いや、正直少し嫌だ。朝のような思いは余りしたくない。それでも、彼女は俺の事を思っていてくれる。その思いを無下にしないように口にするのも顔に出すのも止めて苦笑いで頬を膨らませる彼女を宥めた。

そんな時だった。

重桜寮の目の前にいる2人の艦船に向けて隠すことなく嫌そうに前を見つめる大鳳から、俺も彼女達に視線を移す。

「指揮官様、その目障りな小娘は何かしら?」

「指揮官、随分と早い到着じゃないか?」

黒い着物を纏う赤城は普段の優しさを感じさせるような声を捨てて、白い着物を纏う加賀は何時ものような冷静さを感じさせながらも何処か怒った音色で疑問を俺に投げかけた。

寮の前でまるで門番とでも言わんばかりに立つ2人の艦船。可愛いらしい獣耳と愛くるしい尻尾はお互いに対になるような色合いをしていおり、それぞれ着物通り黒と白を基調としている。

同型艦ではないが、まるで姉妹と思える程良好な関係を築く彼女達、赤城と加賀は2人揃って俺の横にいる大鳳を睨むように見つめる。それに加えて赤城は返すように明らかな嫌悪感を、加賀は表情こそ変えないが明らかな敵意を見せつける。愛くるしい尻尾やその可愛らしい獣耳達は内心の感情を示す様に小刻み震えていた。

「指揮官様くこわくいおばさん達に見つかっちゃいましたわく」

彼女達に聞こえないよう小声で挑発的な事を言う大鳳。よくこんなあからさまな敵意を向けられて平然と居られる。俺は溜まっていく唾をゆっくりと飲み込みながら仲良く肩を震わす彼女達に近づいていく。

「す、少し早く仕事が終わってね」

赤城の問には応えられない。きつと普通に大鳳ですと言っても意

味が無いだろう。同じ重桜なのだからきつと知っている。そのうえでなんで隣にいるかを聞いているのだろうか。だからこそ、応えやすい加賀の方へと言葉を返す。

「指揮官様が来られると聞いたから、赤城が出迎えをと思ったのに……うふふ……指揮官様、赤城に説明をして下さい」

逃げれなかった。追い打ちをかけるようにそつと隣に立つ大鳳に指を指す。説明と言われ真っ先に言い訳を考えるがまともな言葉が出てこない。俺に向けられていないとはいえ、大鳳もまた大切な仲間。放っておくわけにはいかない。庇うように前へ出るとその鋭い視線がこの身を打つ。庇った彼女に届かせるようにより鋭くなると、打つどころが撃ち抜いた気さえする。明らかな敵意に晒されて俺の膝は自発的に震えてしまった。

「震えてしまって……。可愛そうな指揮官様。大鳳が秘書艦として代わりに応えてさしあげますわ」

自称秘書艦となった大鳳は目の前の彼女等のように、でも違う意味合いで震える俺に優しく耳元で囁いた。その光景は面白くないのだろう。赤城の視線はよりキツく、加賀は一步大きく足を出して距離を詰め寄せる。

「簡単な話ですわ。大鳳が指揮官様をお迎えに行きましたの」

「それはお前じゃなく天城さんの役目だったはずだが」

食い気味に、まるでそのまま噛み砕こうとする意思すら感じる程に加賀は鋭く口を挟む。天城の名を聞いて2人がここまで怒っているのに少しでも納得した。彼女の存在は2人にとつてとても大切な存在なのだから。そんな彼女を蔑ろにするように大鳳が出しゃばったことをしたのに怒っているのか。納得すると少しだけ震えが収まった。てつきり大鳳と（一方的に）腕を組んでいたことに対して怒りだと思っていた。自惚れていた。

「指揮官様の隣に立つのは赤城が決めた人だけ。大鳳。あなたは相応しくないわ」

自惚れではないらしい。純粹に大鳳の素行に対して少なくとも赤城は怒りをあらわにしている。

「天城さんの体調が悪そうでしたので、変わりにと大鳳が引き受けましたの〜」

「天城の体調が?」

2人よりも俺が反応してしまう。実際に体調不良なのだろう。それを言われて2人は俺とは違い黙ってしまう。その視線だけ鋭くしながら。

「そうですね〜でも、指揮官様は気にしなくていいですよ」

「気にするよ。天城には何時も世話になってるし……」

この場にはいないのにこれだけ話題になる天城は、重桜でもそれなり重要な存在だ。長門と話せない時等はよく彼女に相談していたりもする。それに、エンタープライズとは違った意味で軍事面で必要な存在。参謀格として策をこうじており、それどころか自身も前線に立ち多大な功績を出してくれている。

戦闘も知略も人柄も、全てにおいて優秀な天城だが、1つだけ目立った欠点がある。

身体が弱い……ということ。

それを欠点と俺は思っていないが、本人はとても気にしている。病弱な身であるからこそ、残された時間を皆の為に、俺の為に使いたいと言ってくれた事をとても覚えている。その時の彼女の寂しそうな笑顔を思い出した。

「まだ時間はあるよな」

予定よりも1時間以上は早く出た。ゆっくり来たとはいえまだ余裕はあるはず。その眩きが引き金となってしまう事に気づいたのは、隣の没前とした顔と前の瑞祥とした顔と目があったから。

「……駄目ですよ、指揮官様。大人しく大鳳と一緒に行かないと。」

指揮官様の横にいるのは大鳳だけ。

それだけで十分。

それ以外の子なんてみんな放つといていいですから。

ささ、早く行きましょう」

「ああ、お優しい指揮官様。」

是非とも赤城と加賀をお供にして天城お姉様の傍へ行きましょう。

ですが

大鳳、あなた我儘が過ぎると思わない……？

指揮官様を誑かして、それどころか私達の邪魔をして。

指揮官様が優しいからって、甘えて調子に乗っての度が過ぎるのは良くないわ。

いいわ、教えてあげる。

我儘の域を越えたらどんな目に会うのかという事を」

「お前に教えないと。

弱者は何も与えられない。

指揮官の全ての享受を得られるのは強者のみということを

指揮官、すまないが少し待っていてくれ。

すぐ迎えに戻るから」

赤城と加賀は揃って残り少ない距離を詰めてくる。それに対抗するように大鳳も俺から離れて歩み始めた。すぐに3者の距離は無くなり手を伸ばせば触れ合えるような程になる。

「指揮官様だって大鳳のような最新型空母の方が喜ぶに決まっていますわ」

この体だって、若くて綺麗なものですもの。

足の遅い空母や病弱な戦艦なんかより若くて強い最新型空母の方が指揮官様の役に立つと思いませんか？」

はだけた着物から見える胸部を強調しながら甘い声で煽る。

「あなたなんかよりも天城お姉様の方が遥かに優秀。

指揮官様の傍にいいのは、そんな優秀なお姉様や赤城や加賀のような実力者だけ。

大鳳、あなたはお呼びじゃないわ」

白いインナーから見える大きく見せた胸部を張りながら冷たい声で煽る。

「礼儀を教え込ませてやる」

黒いインナーから見える2人に比べたら控えめな胸を羽織った白い着物で少し隠しながら睨みつける。

「ま、まあまあ、落ち着いてよ!!」

大量の冷や汗をかきながら震える膝に必死に鞭を打ちつけて3人の間に入って宥めるてみる。朝のような一方的に俺に向けられている感情ではないからか、少しだけ余裕はある。何よりも、早く無事に終えないと天城の顔を見ることすら叶わなくなる。そう思うと頑張れた。

「赤城」

「指揮官様、この害虫の事は赤城におまかせを。」

直ぐに壊して加賀と共に迎えに来ますから、そしたら天城お姉様のお見舞いに行きましょう」

「……加賀」

「指揮官、お前はゆっくりしててくれ。」

赤城と共に直ぐに戻る」

「……大鳳」

「指揮官様、この用事が終わったら是非とも大鳳とお茶でもしましょう。」

その前に、お掃除をしないといけませんわ」

少しだけあった余裕が聞く耳を持たない3人の間に立つと途端になくなった。

「……あ、あの」

「指揮官様の隣に立つのは赤城が認めた人だけ」

「強者でない奴が我儘を言えると思うな」

「大鳳と指揮官様の間を邪魔する虫は消さない」と

間に立つ俺の事を全く気にしなくなると、また鋭い視線が俺越しに各々向けられるのが肌で感じた。

ふとシリアスの事を思い出す。艦船と俺との間でトラブルがあると直ぐに間に入って俺を守ってくれた彼女。何時もこんな恐怖に晒していたと思うと自分が情けなく感じる。

いない彼女を思うのはここでは無駄な事。何時もしてもらったようにこの場を収めなければ。

次の言葉を考える。何も出ないけど、それでも口を開けようとする。

「何事ですか？」

けほけほと咳き込みながらこの場に投げられた言葉。火中の人物でもあるその声の主である天城は、妹でもある赤城やあからさまに挑発的な服装な大鳳とは違いキチツと着こなした着物姿で入り口から顔を出す。2人同様にある獣耳は少ししおれており元気がなさそうに見えた。これも彼女の内心を表しているのだろう。

「天城お姉様!!」

この場に来ると思ってもいなかった彼女、天城の登場で赤城と加賀それに俺も驚きに、大鳳は敵が増えたと思ったのだろうか、明らかに敵意を強くして迎える。その反応を視線のみ移して見回ると最後に取り囲まれている俺を見て何かを察したのだろう。溜息と共に入り口から出てくるとゆっくりと近づいていく。

「天城お姉様、聞いてください!! 私達と指揮官様との仲を邪魔するモノが……」

「天城さん、私達は指揮官を困らせる者を……」

一步、また一步とゆつたりとした足取りで歩む彼女に向けて口早に語る2人。先程までの負の感情はどこへやら。何時もの彼女達の關係を見せつけられる事にとてつもない安堵感を感じる。

「言い訳しない」

カンと甲高い音は赤城に、もう一度は加賀に向けて振り下ろされた拳が頭に向かって勢いよく落ちていった。

「赤城、加賀。同じ母港の仲間同士仲良くしないといけませんよ。それに、相手は同じ重桜の艦船。同じ重桜の仲間と仲良くなれないのに他の陣営の仲間達と仲良くなかなれませんよ」

「うっ……うう」

「あ、天城さん」

「加賀も。赤城と一緒にあって仲間を傷つけてはいけませんから」
「……わかった」

何か言いたげだった加賀だ、ニコニコと笑う天城を前にしては何も言えずに引き下がる。そんな涙目の2人を終えると次の相手であるう大鳳を見つめた。

「大鳳」

「た、大鳳は悪くありませんわ!! 大鳳は天城さんに言われた様に指揮官様をお迎えに行っただけで……」

先程まで2人を相手に余裕ぶっていた大鳳も大先輩である天城を眼前にしたら動揺を隠しきれない様だ。明らかに慌てふためきながら必死に言葉を重ねていく。

そんな大鳳が急に静かになったのは天城が綺麗にお辞儀をしたからだ。

「ええ、わかっています。私の代わりにわざわざありがとうございます」

「と、当然ですわ!! 天城さんの頼み。しかも指揮官様の助けになる事ならばこの大鳳。どんな事でもやり遂げてみせますわ」

下手に出る天城を見て怒られないと察したのか大鳳は得意気に語りつつ再び俺の腕を絡ませようと伸ばしてくる。

「ですが」

その手は触れる直前に止まった。

「少し聞いていましたが、先輩である赤城や加賀にあの口の聞き方はいけません。そこは反省して下さいね」

「……気をつけますわ」

「それと、指揮官様に馴れ馴れしく近づき過ぎるのも。大鳳にばかりくつつかれては指揮官様も困られるでしょうから」

ね? と言われ投げかけられた問に何も言えずに苦笑いで返す。

大鳳はそれを見て軽く歯ぎしりをしつつ俺から小さく一歩離れた。

「はい、それでは」

涙目の2人の手を掴んで大鳳の前へと運ぶ。戸惑う彼女の両手を2人の手に重ねると強引に握手をさせた。

「これでお終い。仲良くなりましたよ」

俺に向かってニコニコと笑みを浮かべながら報告する天城。涙目の2人に明らかに戸惑いながらも握手を返す大鳳。先程の言い合いに比べたら確かに幾分仲良くなったようにも感じるが……。

「ね、指揮官様?」

「え? あ、ああ、うん」

その笑みに俺も逆らう事なく同意した。

「それにしても、今日はお早い到着でしたね」

「ああ、大鳳が仕事を手伝ってくれてね。それで。早めに来て皆の顔を見てから長門に会いに行こうと思って」

「仕事を？」

天城は大鳳へと視線を移す。何か言われると察したのか露骨に避けられたのを見たあと何か思い出したかのように、周りを1、2回見回した。

「シリアスさんは何方に行かれたのでしょうか？」

不思議そうに尋ねられた。それもそうだろう。シリアスは良くも悪くも殆ど俺と付きつきりで行動する。何時もならこの場にも立ち会っており、あの場を収めるように手伝ってくれていた。赤城と加賀も名前を聞いて思い出したのか同じような顔をする。

「色々あつてね。後で皆にも伝えるけど秘書艦を変えることになったんだ」

「まあ、それはそれは……」

天城は口元を手で隠しつつ驚いた顔で反応した。反応の割には口調は穏やかで、何か含みのようなものを感じる。気になりはしたが、口を挟む暇なく握手を解いた赤城が慌てた血相で俺に顔を近づける。「ついに、ついに指揮官様も赤城と共に歩む決心をされたんですね。」

赤城は嬉しい……。

あの女と違って、赤城は指揮官様と繋いだ手をたとえ縫ってでも決して離しはしませんからね」

恐ろしい例えに反応に困りつつ、一方的に繋がれた手を見る。赤城なら本当に縫いそうで少し怖くなる。

「赤城もいいが、私達の事も忘れるな。」

天城さんも私も指揮官が傍にいるならどんな運命だろうと乗り越えてみせよう

何があるうとお前が傍にいてくれるんだからな」

空いた手も加賀に取られる。

「指揮官様の新しい秘書艦は大鳳ですよ」

勝手に大鳳との仲に入らないで!!」

その手達は叩くように間に入った大鳳によつて引き剥がされると、再び3人の睨み合いが始まった。

「なるほど」

軽く手を叩くと天城がこの場の注目を掻つ攫う。それだけで3人の争いは一瞬で終わりを告げ、気まずそうに顔を反らしあつた。

本当に頼りになる。重桜だけではなく、他の陣営の艦船達も彼女に頭が上がらない人が多いだろう。それだけの実力と知略で皆の窮地を救つてくれた彼女。俺もこの場だけで何回恩を作ることになるのやら……。それでも、心強いスケツトのおかげで完全に心の余裕を勝ち取れた。感謝しかない。

「では、明石が言っていた報酬というのはこのことなんですね」

「明石？」

急な名前を思わず口にする。明石はこの艦隊で商売をやっている艦船だ。その役割上よく関わることの多い彼女。そんな彼女の口から報酬の話なんて……。思い返してるがそんな話は全く出てない。そもそもとして、演習の話自体ない。

「今回の演習でMVPになった方は特別な報酬が出ると言われてました」

「特別な報酬？」

なんだろうか。とても気になるが少なくとも秘書艦の肩書ではない。なりたいたい人には申し訳ないが、この騒動が落ち着いたらまたシリアスにお願いする気は変わらない。こんな噂が何処まで広まっているかは知らないが、タイミング的に誤解を生むのは明白。早めに解いていかないと。

「それは……」

「指揮官の隣に立つのは強者でなければならぬ」。

なら、私とその席を頂くとしよう

嬉しいよ指揮官。

強者でこそがどんな運命をも勝ち取れる。

そんなメツセージを込めたこの取り組み、しかと受け取った」

加賀はこの話を気に入ったのだろうか。俺の言葉を遮って満足気に微笑みながら立候補する。

「ふふふっ……うふふふ……邪魔な害虫を潰して指揮官様の秘書艦にもなれるチャンス。この赤城、見事勝ち取ってみせましょう」

赤城もまた、天城のように口元を隠して笑うが歪んで上がったその口角を隠しきれてはいなかった。

「そんな事しなくても、指揮官様のだ〜い好きな大鳳は秘書艦になりますのに。」

恥ずかしがり屋な指揮官様が口でお願い出来ないからってこんな風にプロポーズするなんて……可愛い指揮官様のために、この大鳳ご期待に応えますわ〜」

大鳳もまた、誤った解釈共に嬉しそうに笑っていた。

三者三様にMVPの座を取れると思っっているのだろう。もっとも、赤城と加賀は一航戦と呼ばれる程の実力者だし大鳳は最新型という語る肩書き通り、その性能は高い。誰がなってもおかしくないし、このまま誰かになられても話がこじれてしまう。

このままでは話がこじれてしまう。目の前でも、知らない所でも。だ。救いを求めるように天城を見ると彼女は優しく微笑んでくれた。その優しさが本当に救いになる。

「指揮官様の横に立つ者として、この天城。今回の演習に全身全霊をかけましょう。」

例えこの身が朽ち果てようども、指揮官様の隣に立てる幸福を一度でも享受出来るなら悔いはありません」

どうやら彼女も乗り気ようだ。やっぱり自分を助けるのは自分しかない。

「あ、あのね」

何とか口を出すタイミングを作ろうとするも今度は天城が横檣を入れてくる。

「では、私は指揮官様と少し話があるので自室に居ます。赤城、加賀。お茶と茶菓子の用意をしてもらえるかしら？大鳳は次の演習に向けて訓練を怠らないように頑張つて下さい」

その一言に声を揃えて返事をして各々俺を置いて歩み始めた。そんな彼女達を引き留めて誤解を解こうと手を伸ばすも伸び切ることなく天城に腕を掴まれた。

シーつとでも言いたいのだろ。人差し指を口に当てて可愛らしい仕草をする彼女。

「天城、誤解が……っ!!」

「わかっております。この天城にお任せを」

自信に満ち溢れた笑みと共に軽い会釈をされた。何をわかってい
るのかは知らないが、わかってい
るのならば誤解を解く時間が欲
しい。その思いを口にするも嬉し
そうに手を引っ張って俺を運ぶ
彼女は止まらない。

行きとは違う早足で俺は彼女の自室へと運ばれていった。

「大変な事になりましたね、指揮官様」

「大変な事になりましたね、指揮官様」

穏やかな口調で同情の言葉こそくれるが、その上品な笑みと先程とは違って立たせた尻尾と獣耳は楽しそうにゆらりゆらりと左右に揺らしている。全く内面を隠すことなく天城は言った。

「……………」

俺はそんな彼女を恨めしそうに見つめるだけで何も言えない。ただ、頭の回る彼女の事だ。きっと俺には見えていないだけであの場を効率的にかわせる回答があれだと判断したのだろう。もつとも今の所は絶望を先延ばしにしたいだけのようにも感じるが。

「ふふふつ、そう怒らないで下さい」

俺の反応を見てると子供をあやすように軽く頭を撫でられた。身長差の問題もあるのだろう。母親とまではいかないが、姉弟のように傍目では映る光景。もつとも、彼女は俺の事を出来の悪い弟と思っっている節があるのだが。

「この天城、指揮官様の事は何でもお見通しです。秘書官を変えるのもきつと皆の不満が溜まっているから一時的に変えてきちんと皆に向き合つてると言う姿勢をとるため、でしょうか？」

彼女にもシリアスに対する不満が溜まっていることを相談た事は幾度もある。それでも今まで変えようとしなかった事もよく知っているはずだ。だからこそ、今回の事変に対して手を差し伸べてくれるかもしれない。優秀な仲間になんか期待を込める。

「…………そんな感じかな」

「して、次の秘書官は決まっていますのででしょうか？」

「ベルファストにお願いしてるよ。演習が終わったらまたシリアスにお願いしよう」と

「それは…………」

口ごもりながら細長い綺麗な指を顎に当てて考える素振りをする。数秒考えた後にそつと顔を横に振られた。

「いけません、それでは皆の不満は解決しないでしょう」

考えの浅い俺の浅はかな策は、戦術家によって早速否定をされてしまう。別にそこに不満の感情は沸かない。むしろ嬉しい。少なくとも、天城は俺に協力してくれそうだ。彼女の知恵を借りれば、きつとより効率的に効果的に皆の不満を解消できる話してくれるかもしれない。少しだけ前のめりにながら、次の言葉を急かしていく。

「いいですか、指揮官様。」

シリアスもベルファストもロイヤルの陣営。陣営に拘る人も少なくありません。

一時的とはいえ、変えるのならば他の陣営の人にしたほうがいいでしょう」

「ロイヤルは駄目かな？」

「拘りがあるのでしょうか？」

「……うーん」

俺自身はないが、エリザベスがロイヤルの艦船を秘書官にしたがつている。自身のメイド隊の、しかもメイド長を秘書官にあてがう程なのだから。そこまでしてくれた彼女に今更やっぱりやめたと言うのは少し申し訳なく感じる。

「指揮官様、秘書官を変えるのも一時的なものというならば、ここは他の陣営の。更に、指揮官様の事情をしっかりと把握してくれている人に任せるべきかと。」

指揮官様の耳には届いてないかもしれませんが、ロイヤルを鼻屑さされているという声もよく天城は耳にします」

「鼻屑目してるつもりはないんだけどなあ」

「そう思っているも、態度と行動の問題。」

ずっとロイヤルのシリアスを秘書官として置いていると他陣営からは嫌でも鼻屑していると映ってしまいますよ？」

「うーん……」

「指揮官様、何も永続的にシリアスから離れるわけではなく、あくまでも一時的とおっしゃるのならば、他の陣営でも指揮官様の隣に立てる権利がある事を示すまたとない機会。これを活かさない手はありません」

「そうか……」

もし私が初めに着任してたら、私は秘書艦としてずっと傍にいたのに

先日会ったエンタープライズがシリアスに向けて言った言葉。彼女の顔を思い出す。それだけじゃない。今日あつた艦船達も秘書艦になりたいと強い希望を口にしていた。

「どうか……」考を

様子を伺うように見てくる天城。そんな彼女の顔を見た次に思い出した言葉はベルファストだ。

秘書官の変更をお願いに参りました

思えばその一言でこの騒動が始まったのだ。彼女らしい俺を思つた一言で。最も、遅かれ早かれこの事態は来ていたのだろうと今は身を持って痛感しているが。

天城の言う事は最もなのだろう。きつと、他の陣営の顔を艦船に一任したほうがいい。ロイヤル、というかエリザベスは怒るかもしれないが他の陣営の艦船をお願いしたほうが皆も納得してくれる。少なくともロイヤルだけ鼻負してるなんて言葉は消えると思う。

「そうだね、そうしようかな」

同意の言葉に天城は笑を強くして尻尾の揺れが大きくなった。参謀格として真剣な眼差しで目の前の事象を見る姿とは違った、本来の彼女らしい愛くるしい仕草に少しだけ見惚れてしまう。

エリザベスには後で謝りに行こう。ベルファストにもだ。楽しみにしていた彼女には申し訳なく思う。怒るだろうか、それとも悲しむだろうか……。何れにせよ、何らかの苦言は受けるだろうけど行く行く来るトラブルを避けるため。そう思うことにしよう。

「では、秘書官は誰を」

「でも、それは今度にするよ」

地雷を踏み抜いたのかもしれない。そう感じたのは尻尾と耳の動きがピタリと音を立って止まったからだ。崩さないその笑みが徐々に怖く感じてくる。それでも、言える余裕がある内に言わないと。

「もうベルファストをお願いしちやつたからさ、断るのは申し訳ない

し」

「指揮官様は母港での立場は最上位。細かな約束等、今後の大事のためなら反故するのもしかたないかと」

「でも、約束は約束。立場があるからこそ守らないと」

食い下がる俺の言葉に天城は口を閉じて静観する。俺のために考えてくれた提案。だからこそ、天城にも申し訳なさを感じる。それでも、これだけは譲れない。

「仲間なんだ。俺の手で傷つけるような事はしたくない」

この思いだけでも、つと真摯に伝える。

天城は表情を変えずに数秒程ジツと眺めると、根負けしたのだろうか、重い溜め息と共にその顔は落胆の色を見せた。

「天城はその言葉に傷ついてしまいます。」

指揮官様を思つての言葉なのに、その思いは届かず一向に耳に入る様子がございません。

そのようなお気持ちがあるのなら、安易な約束を受け入れるのは如何なものかと。

是非とも、次は軽率な判断で約束を結ぶ前に天城に1言相談して下さい

さい」

「ごめんね、気をつけるよ」

溜め息と共に萎れていく耳と尻尾。それらを見ていると本当に落ち込ませるような事をしたと痛感させられた。

何か言わないと。その気持ちだけで頭が働く。

「あ、天城の話を聞いてないわけじゃないんだ。ただ、えっと、今回は急だったから……その……」

「……指揮官様」

たどたどしい俺の言葉を遮りつつ、天城はそつと近づいてくる。目の前迄来て初めて、彼女が笑顔になっているのに気がついた。先程のような笑みと振り上げた拳に。

「えいっ」

「いたっ!!」

思わず言葉を反射的に出したが、正直全く痛くはない。軽く乗せら

れた、という感じだろう。少なくとも、先程聞いたような轟音は響くことはなかった。

ただ、驚きはそれ以上に続く。そつと腰に手を回されると天城は切なそうな顔をしながら俺の胸に顔を埋めるように抱きついてきたのだ。

何とも言えず、ただ、彼女の頭を軽く撫でる。これがいいかどうかもわからないまま。すると、彼女は上目遣いで俺を眺めて口を開いた。

「指揮官様、その優しさはとても大事な事だと天城も感じています。ですが、そのように艦船1人1人に優しさを振りまいてしまっていたら、今後指揮官様の身が持たない時が必ず来るでしょう。」

ですから、どうか。

細やかな決め事でも、簡単な疑問にでもかまいません。

この天城の知恵、指揮官様の為に使わせて下さい。

指揮官様の身と心を守るために。

この天城の全てをお使い下さい。

さすれば、心優しい指揮官様を守る鬼として、この母港を守り大きくする事を約束しましょう」

「……ありがとう」

本当に感謝しかない。

自身の病弱な身体に悩みながらも、母港の事、艦船達の事、何よりも俺の事を気遣う彼女の優しさに。

「なら、天城。俺を助けてくれないかな」

その優しさに甘える俺はいけないのかもしれない。それでも、困り果てた現状ではある。

秘書艦の事も、演習の報酬とやらも、シリアスの事も。

俺1人では手一杯だと感じていた。

だから、甘やかしてくれる彼女の言葉に溺れたのかもしれない。

それでも、それでよかったと感じてしまったのは嬉しそうに笑う彼女の顔が見れたからだろうか。

「ええ。」

指揮官様にこうして頼られ、この老いぼれに生きる価値を見出し、
れるこの瞬間こそが今の天城の生きる希望。

その言葉、優しさが天城の特効薬です。
ですから、何なりと。

どんな細やかな問題でもかまいません。

天城の前では強がらず、弱い指揮官様を見せてくださいませ」

頬に置かれた手とその潤んだ瞳で下から覗き込む姿はまるで何方
が縫っているかはわからない。そんな彼女の頼りになる言葉に俺は
ここ最近の近状と悩みをぶつけていった。

「指揮官、はるばるご苦勞だった」

綺麗に背を伸ばして正座をしつつ、丁寧に頭を下げるその威厳ある
姿と、戦艦と言われたら少し悩んで納得するような子供のような容姿
のギャップの何とも言えない奇妙な感覚に未だに慣れない。少なく
とも、それに戸惑いつつ礼を返す俺を軽く微笑みながら長門はそう
言った。

重桜のトップ。見た目からは想像出来ないがその威厳ある態度と、
彼女にあてがわれている大きな和室がそれを嫌でも納得させられる。
「さて、今回の報告だが」

淡々と続けていく長門の話に相槌をうっていく。といっても、どの
話も他愛のない話ばかり。ここ最近は大きな争いもなく、平和な時間
が続いているというのを改めて実感した。それでもわざわざ定期的
な報告会を開く辺りが彼女の真面目さを感じる。

「近況はこんな所だ」

「うん、わかったよ。ありがとう」

一通り話終えた彼女に礼の言葉を伝える。少し頬を赤く染めてる
と「この程度どうという事はない」と感情的な声を荒げた。褒められ
て照れる辺りは年相応に見えてとても可愛らしい。

「さて、余からは以上だが指揮官からは何かあるか？」

「うん、1つね」

いつもは特にないと端的に返していたが、今回の珍しい反応に彼女は目を大きくして「ほう」と興味深そうに視線を向けた。

「秘書官を変えることになったんだ」

「何っ!」

想像などしてもいかなかったのだろ。急な言葉に彼女の耳がビクツと大きく反応した。

「……指揮官」

詳しく話そうとした所に長門は口を開く。

「それは重桜の艦船か?」

「いや、ロイヤルだよ」

「……そうか」

残念そうに呟く長門は嘆息混じりに続けた。

「指揮官、重桜の艦船達から秘書艦に対する不満の声が溢れておる。

余もその一人。

指揮官の身を守り、共に歩むモノとしてあのモノにその器があるのか疑問だ。

そのような大役はそうそう務めれるモノはいないだろう。

指揮官、ロイヤルの主はお世辞にも人の上に立つ器とは思えん。

重桜の長である……その、よ、余を秘書艦とすれば、この不満も幾らか解消されると思うが……」

徐々に尻すぼみになると長門はよそよそしくチラチラと俺の顔を見してきた。

重桜四代目連合艦隊旗艦

そんな肩書も持つ彼女が秘書艦として隣にいれば、余程のモノでなければそりや不満は出ないだろう。少なくとも重桜の艦船からの不満は大鳳ぐらいになりそうだ。あとは、同じ長として比べても少し劣るエリザベスが大きな不満をぶつけてくるのは彼女の言葉を聞いてすぐ目に見えた。

魅力的な提案を受けるといついつい目移りしそうになるが、しっかりと伝えないと。

「長門は長門で忙しいだろ？」

「むう……、重桜での席は三笠様にお譲りすれば事済む話だ」

「三笠は三笠で嫌がると思うけど？」

三笠は重桜どころか、この母港の仲間達と比べても長カンレキを持つ艦船。本来ならば彼女が長門の変わりに重桜を指揮するはずだが、そんな大層な役はやれないと辞退して長門に譲り渡した。その彼女に再び白羽の矢が立つのは長門も避けたいのだろう。自分で名前を出しながらも、「むう」と再び唸りながら黙る事になる。

「それに、次の秘書艦は決まってるんだ」

「……どういふことだ？」

ついさっきまでの俺ならば、こんな事を言わなかっただろう。きつと誤魔化すように考えようとしてたはず。それでも、今は違う。

天城に相談し、今回の事態の解決策を教えてくれた。それを目指して舵を取る。

「今度の演習でいい結果を残した艦船を秘書艦にするよ。それまでは臨時でベルファストをお願いする事になったんだ」

そう、天城はそれが良いと言ってくれた。

艦船達が出る模擬戦に出て結果を残したモノが秘書艦となれば皆不満を口にする事はなくなるだろう。そこまでいかなくても減ることは確かだ。赤城達の勘違いが役に立った。彼女達も挑んだ演習で結果を残せなければ不満はあれど口にする機会は減ると思う。

シリアスには伝えていない。今決めたこと。それでも、彼女なら……。

彼女なら、きっと最高の結果を出してくれる。そう信じるしかない。俺の優秀な秘書艦ならば。

「指揮官、演習は遊びではない。訓練の一環でそのような大事を決めてもいいのか？」

「報酬があつたほうが皆頑張れるでしょ？ 嫌なら断ってくれれば他の艦船にお願いするし」

「そうか、報酬か」

長門は軽く笑を作るとそつと俺を見る。

「ならば、最高の結果を出した艦船ならば指揮官は文句なく迎えるという事だな？」

「……そのつもりだけど」

はつきりと肯定は出来なかった。彼女の笑口元のみ比べて全く感情を感じ取らせない瞳に何が映るのか想像もしたくない。

「ふふふっ、面白くなってきた」

少なくとも、そんな恐ろしい事ではないだろうが……。それでも、俺は少し後悔をした。

「指揮官、余は争いは好まぬが、此度は別だ。

特別にこの長門、全力を持って全ての艦船達に挑もう。

指揮官、その隣の席は余が貰い受ける」

「……ほ、ほどほどに頑張つてね」

偉く熱の籠もった瞳に変わると、そんな彼女の頼り甲斐のある言葉に苦笑する。

……シリアス、大丈夫だよな？

自分の秘書艦の身を心配しつつ、軽くため息をつく。

ああ、これからは一言相談する癖を作ろう。そんな自らの愚かさに対して。

今日は疲れた。何時もの3倍は疲れた。

自室のベッドに横たわると1日を振り返る。今日だけで色んな艦船達に出会った。

大鳳、赤城、加賀、天城、長門。それ以外にも重桜の艦船達と何人か出会って軽く挨拶をした。

今日会った艦船達には秘書艦の事をきちんと伝えた。演習の事を。皆張り切ってくれてたけど、その熱意が少し怖くなる。

結局、明石には会えなかったから本当の豪華報酬についてはわからなかったけど、説明は天城がしてくれると言っていた。明石に伝われば後は勝手に広がるだろう。それだけ彼女の顔は広い。

問題は、シリアスだ。

天城の話ではこれでシリアスが結果を残せば何も問題なく元に戻れると言ってくれた。俺自信そう感じる。シリアスがその実力を示せば、きつと皆彼女を蔑ろにしなくなる。

……応援することしか出来ないのが情けないが、それ以外特に行き得る事はない。

それよりも、目先の問題だ。

スケジュールを確認しなくてもわかる。重桜の報告が終わったら次に行くところは決まっている。

先の問題と先延ばしにしていた問題がついに目先となって立ち上がる。だかる。

溜め息が出てくるが、徐々に会うことになる彼女を思うと少しだけ嬉しくなった。

元気にしてるといいんだけど。そんな風に不機嫌そうな顔をすることが多い彼女を思っていると。

「寝坊は感心しないわ、指揮官」

「寝坊は感心しないわ、指揮官」

何時もより遅れて入った見慣れた部屋に最近見ていなかった顔が1人既にソファアに座りコーヒーを飲みながらの横目視線と合うと彼女、ティルピッツは淡々と俺に言う。

一回部屋から離れ、仕事部屋である指揮官室を確認する。そうしたい程には珍しい客人が朝早くから来ている事に驚いていた。それ以外にも理由はあるが。

「今日は非番じゃなかったっけ？」

艦船達にも休みが欲しいという要望が多々あった時に戦力も揃ったからと導入した休日制度。シフトのようなもので、決まった形はないが各陣営の長達が頭を悩ませて組み上がったのを確認する程度しか俺は触っていないが、それでも一通りは把握しているつもりだ。手帳に書かれている彼女の名前を見て口にする。

感心した様に目を少し開けて驚く姿に、細やかな仕草とはいえ彼女が来たときと比べて変わった事を感じた。初めは北の寒さという彼女の艦歴を使った例えをして人との接触を拒む所があったが、今ではそんなことも鳴りを潜めてきており本来持っていたであろう彼女らしい明るさが出てきている。ここに来て良い方向に変わった艦歴として見ていると、頑張っているかいるかがあると思えて自画自賛のような嬉しさを感じていた。

「指揮官、そんな所に立っていないで。仕事をして頂戴」

「えっ？ ああ」

催促されてようやく自分の世界から戻って来れた。そのまま現実にあるテーブルの山の前に立つ。すると、おかしな変化に気がついた。

「あれ？ 仕分けされてる？」

何時も饅頭達が早くからテーブルに溜まっている様々な書類を置いてくれている。取りに行く手間が省けて助かるのだが、饅頭達には余り複雑な事が出来ないのだろう。テーブルに置くと言われたらそ

のまま置くことしか出来無い。だから、朝一番の仕事はテーブルに広げられた書類を纏める事から始まる。

饅頭自体よくわからない技術の結晶の様なマスコットのため深くは要求しない。むしろそれだけでもありがたいと思っている。

そんなマスコット達はきつと今日も早くからテーブル上に書類を放っていたと思うのだが、それが既に山として出来上がっていたのに驚いた。

「ベルファストか？」

一番してくれそうな彼女の名前が零れ出る。彼女が秘書艦として務めてもらうのももうすぐ先の事。少し早めにと秘書艦としての仕事に手を伸ばすのはメイドとして人に仕える事に慣れた彼女だから領ける。しかし、それは溜息と共に否定された。

「私よ。酷かったから整理しておいたの」

コーヒーを一口含みつつ流れに、その何処か冷たさを感じる冷静な横顔で追い打ちをかける。

「部屋の汚れは心の汚れ。机の上だつて汚れていては指揮官の心も汚れてしまうと思つて簡単に片付けておいたの」

「そっか、ありがとう」

手厳しい言葉に苦笑いを浮かべてしまう。

「ビスマルクには黙つといてね」

人差し指を口元に立てて可愛らしくお願いしてみる。残念そうな瞳と共に再び溜息が返ってきた。

「饅頭達が置いただけでしょう？ 姉さんも朝一番は片付けから始めるわ」

「知つてたんだ」

「ええ、知つてたから姉さんには言わないから安心して」

そんな一言に安心していると「それと、それ可愛くないから他の子に見せない方がいいと思う」とやはり追い打ちのように苛める彼女に苦笑い。その様子を見て優しく微笑む横顔を見ると、やっぱり嬉しくなった。

「いきなり仕事というのは精神的によくないわ。先ずはこれでも飲ん

で一息ついて」

そう言うのと対面に置かれていたカップを取って俺の前に差し出してくれた。本当はそこに座って顔を合わせて話したがってたのだろうか。悪いことをしてしまった。

「ごめん、ありがとう」

受け取って軽く謝る。ブラックコーヒーのホットだったのだろうか。生温さを下で感じると彼女がどれだけここで待っていたのかが少し気になってしまう。ジッと観察するように視線を向けていたテイルピッツに尋ねることにする。

「もしかして、結構待ってた？ 急用かな？」

「いえ、そんな大した用はないわ」

そつと首を横に振る彼女を見て一安心。最近母港を巻き込むようなトラブルこそないが、俺を巻き込んだトラブルが多くて気が滅入っていた所だ。

天城が力を貸してくれるとはいえ、やはりトラブルというのは避けたいもの。もつとも、原因を辿れば俺の努力不足になるのだろうか。

「今日は貴方が鉄血に來ると聞いていたから、私が仕事の手伝いをと
思ってたのだ」

「休みなの？」

勤勉な事を言う彼女に驚いてしまう。これでは休みにしている意味がない。

「わるいよ、ゆっくりしてて」

「休みの日に仕事をするのは指揮官も一緒。貴方が休む間もなく仕事
をしているのに私が休むわけにはいかないわ」

そんな心配と優しさを感じる言葉と表情にまたもや苦笑い。

たしかに、俺も仕事が終わらなくて休みの日にここに来て仕事を
する事はよくある。というか、最近そればかりだ。

シリアスは秘書艦として俺の休日と合わせて貰っているが、そんな
日も彼女はずっと一緒に居てくれた。

誇らしき指揮官様がお仕事をされているのに、シリアスはそれを
放って休み事等出来ません

そんな心優しい言葉を言ってくれて感謝しかない。それがソファアに姿勢良く座りながら何もせず微笑む顔を向けて言うのが少し残念なポイントだが、彼女らしくて俺は好きだ。

「ん？ でも……」

一応俺が休みの日でも仕事をしている事は秘密にしている。ティルピッツのように責任感の強い人達がそれを知って休む事なく仕事をする事を避けるために。特に彼女ならば絶対に休まずに何かしらの事に手を付けるのは目に見えていた。

「私は指揮官の事は何でも知っているつもり。隠し事なんて通用しないわ」

本当に何でも伝わってしまったているのか、頭の中の疑問を口にする前に見事に応えてくれた彼女。俺の事をよく見てくれているようで少し照れくさい。

「それと、明石から聞いたのだけれど、先日から秘書艦がいないと聞いたの」

明石から聞いたのは何処までだろうか。秘書艦がベルファストになる話も、次の演習でMVPになった艦船が秘書艦になれる権利を得ることも全て天城が明石に言いふらすように指示を出すと言っていた。明石は母港の艦船全体で見ても最も顔が広い艦船だ。陣営に捕らわれず様々な艦船達と交流がある。そんな彼女の協力のおかげがこの話は3日も立たずに全体に周知される事となった。

それからというと、秘書艦になりたいと言う艦船達がみんな頑張つて訓練に励んでいる。いるのだが……

「はあ」

「どうしたの、溜息なんかついて」

思わず漏れた溜息に心配そうな視線をくれた。

「いや、ちよっとね」

流石に話すわけにはいかないと誤魔化す。それに対して向けられたそれは怒りを込めたものへと変わった。

話せるわけがない。あんな事。深く目を閉じて目の前の感情から逃げるも、思い返されたのはやはり、その逃げた感情。最も、その主

は他の艦船なのだが。

「MVPで秘書艦ですか？」

重桜での話し合いの翌日。執務室に行く前にロイヤル寮へ赴き目的の彼女、シリアスへと天城と決めた話をした。

誰にもバレないようにと案内された物陰で彼女は真剣に俺の話聞いて答える。

「……誇らしきご主人様の秘書艦として選ばれた身。それが情けや慈悲ではないと示したかったのでそれはかまいませんが」

苦渋な表情を浮かばせながらも話には乗ってくれたようだ。

「ですが」

俺の目を真っ直ぐ見ると、彼女は感情を感じ取れない表情をしていた。しかし、そこには確かに怒りを感じ取れた。

「なぜ、天城さんとそのような大事を決めたのでしょうか？」

今はまだ秘書艦はシリアスのはず。

誇らしきご主人様の命ならばこのシリアス、何時だろうと如何なる場所であろうと命じるままに戦果を勝ち取る所存です。

ですが、天城さんが決めたとなるとシリアスは心配です。

指揮官様は心優しく、懐が広いお方。

だからこそ、そこにつけ込み悪さを考える方もいるかもしれません。

天城さんが、ではありませんが……。

シリアスは誇らしきご主人様の仕事を手伝う事こそ出来ませんが、少なくとも目先の敵を警戒し切り伏せる事は出来ます。

ですので、シリアスのいない所でどうか、どうかこのような大事をもう決めないようにして下さい」

息つく間もなく囁し立てられた言葉達を聞き、軽く頭を下げ謝罪をした。心配性な彼女らしくどうやら俺の勝手な行いを良しとはしていない様だ。

言いたい事を言い終え、少しむすつとした彼女。しかし、今回はただこの決め事に余裕を感じ取っていたのだろう。戦闘艦である彼女もまた、母港全体で見てもMVPを取る有力候補なのだから。

それでも、怒らせてしまった事には変わりはない。俺は再び謝ると「頭を上げて下さい」と打って変わって優しい口調に変わる。

「指揮官様、貴方様がメイド風情に頭を下げる事などあってはいけません。」

もしも、もしもシリアスにした仕打ちに少しでも反省する所を感じたのならば、不躰なこの卑しいメイドと1つ約束をして頂けないでしょうか?」

「約束、か。いいよ。出来る事なら」

「ああ、たかがメイドにも向けて頂けるその優しさは指揮官様の素晴らしい点の1つ。」

ですが、どうかシリアス以外に向けてはなりません。

卑しいメイドは貴方様のその優しさを1人この身に当てて、悦に浸りたいと思つてしまいます。

それこそが、指揮官様を楽にさせる方法であり、シリアスを満たす唯一の方法」

「それは……出来ないかな。皆に優しくしないと、またシリアスだけが言われちゃうし」

「……そうですか、そうですね」

視線を地面へと移す。その顔がどうなっているかはわからないが、少なくとも良くは思っていないだろう。心配故に言ってくれた言葉を無下にしたのだから。

「いえ、それこそがシリアスの誇らしきご主人様。」

母港の艦船達皆を気にかける配慮、それに気づかず私欲を願い出したシリアスがどれだけ卑しい存在か改めて気付かされました」

「そんなことないよ、シリアスは何時も俺の事を気にかけてくれる。ありがとう」

深々と頭を下げる彼女。自分を守ってくれている存在にこんな事をさせる自分が情けなくなる。

感謝の思いが少しでも届いたのだろうか、顔を上げると嬉しそうに微笑みながらそつと俺の頬へと手を当てた。

「ああ、シリアスは不安です。」

天城さんの願いは通り、シリアスの願いが叶わない事に腹を立ててしまっています。

このまま、このまま指揮官様はまた私を置いて行ってしまうのでしょうか」

「……………」

見上げると映ったその不安気な瞳。俺の軽率な判断は何時も彼女を傷つけてしまう。

寂しげな彼女の顔を見る度に自分が情けなく思ってしまうがない。

「大丈夫、俺は大丈夫だから」

何度も同じ言葉を繰り返す。それだけでも変わると信じて。

伝わったのだろうか、繰り返している内に彼女の顔から笑みが戻るとそつと口を開いた。

「では、シリアスとの約束は指揮官様が何をされたか、何を誰と話したかをシリアスに教えて頂くといいのはどうでしょうか？」

毎朝シリアスの方から指揮官様の部屋へと伺いますので、前日に何かあったかをシリアスに話して下さい」

「朝？ 夜じゃなくいいの？」

「はい、指揮官様は仕事が多いですから夜はゆっくり休んでください。シリアスは朝、その日の用意をしながらでも構いませんので」

「そっか」

考えてみる。何でも話すというのは抵抗を感じる様な気がしたが、思い返せば何時もシリアスに相談をしてばかりだ。別に今更気にする程でもないだろう。

「わかった、それぐらいなら大丈夫だよ」

「ああ、ありがとうございます誇らしきご主人様。」

このシリアス、毎朝指揮官様の顔を見れると思うとそれだけで胸が満たされてしまいます」

その大きな胸を強調するように腕で当てて喜ぶ姿に視線を反らす。

大鳳にしろシリアスにしろ、無意識でそうやって挑発的な態度を取られるのは質が悪い。

「では、シリアスは本日もベルファストさんに給仕に関して学んでいきますので」

「うん、頑張つて」

また深々と礼をして去っていく彼女の背を見えなくなるまで手を振って送っていった。

その約束からそんなに日は経っていないが、それでもその弊害は少し出てきている。毎朝自室に來た彼女を向かい入れるとベッドに腰掛けてどんな話でも真剣に耳を傾ける彼女。

それ事態は別にいいのだが、ベッドの上で時折見せる妖艶な仕草が少し辛い。普段はあまり気にしていないが、メイド服なのに無駄に露出の多い服から嫌でも視界に入る、出る所がはつきりと出ている美人な彼女が愛用しているベッドの上で腰掛けて談笑しているという異質な光景に慣れないし、着替えをする時も「どうかシリアスの事は気になさらずに続けて下さい」と言い部屋から出ようとしない。流石に彼女の前で服を脱ぐ勇氣はなく、俺は寂しくトイレで済まそうとしたが。もつとも、メイドである彼女が主人にそんな事させるわけにはいかず、結局着替えの間は外で待つてもらっている。

それでも、自分の精神衛生上余り良くない状況にはなっている。

……ああ、こんなの誰かに相談して広がったら余計に面倒な事になる。特にテイルピッツやビスマルクなんかには。

ビスマルクは特に自分が鉄血を率いているという強い責任感からだろう、自分の陣営はもちろん、他の陣営も俺の事も何か目についたらしつかりと注意をしてくれる皆の姉のような存在だ。そんな彼女に朝からシリアスが無意識に誘惑されて困ってるなんて知られたら……。

「大丈夫だよ、気にしないで」

「……そう。貴方がそう言うのならこれ以上言わないわ」

念を押した言葉に引き下がるテイルピッツ。その顔は納得とは程遠いものだが。それでも、一度言った以上何も言わないというのは彼女の真面目な性格からして信頼できる。

「とにかく、秘書艦がいないと聞いたから私が休みの今日ぐらいは指揮官の手伝いをもと思ったのだけれど」

「……うーん」

本当は断るべきなのだろう。彼女は今日は休みなのだから。ゆっくり休んで貰いたい。

しかし、送られている真剣な眼差しをチラリと見る。視線が合っても眉一つ動かささない彼女の意志を変えるのは至難の業だ。意思が固く、そして強い。鉄血はそう言う艦船達が多い。彼女や姉なんかはまさにそうだ。

「わかった、お願いするよ」

だったらいつそ手伝ってもらおう。それで気が済むというのならそれがいい。そう思う。

少なくとも、嬉しそうに少しだけ口角を上げた彼女の顔を見るとこれが間違っているとは思わない。テイルピッツなら大鳳の時のような事は起きないだろうと思うから。

「私は何をやればいい？ 指示をくれ指揮官。」

貴方の指示に私は全て従う。

さあ、何でも命じてくれ」

「そうだね、じゃあ……」

お互いに飲み終えたカップをテーブルに置き綺麗に積まれた山を捲つていく。自分でも出来そうなものとそうでないものに分けられているようだ。やっぱり、何を言っても手伝いを辞める気はなかった様子。

まともに休めていない俺を気遣ってくれる彼女の優しさが身に沁みる。

あれ？ そういえば、何でテイルピッツは知っているんだろうか。皆に知られないように気をつけていたはずなのに。

……………

まあ、俺の詰めが甘くて誰かに仕事をしているところを見られたの
だろう。いけないな。気をつけよう。皆優しいから、心配をかけさせ
ちやう。

仕分けされてる山の1つを彼女に渡しながら、改めて自分の気を引
き締めた。

「指揮官様紅茶を……」

扉を開け深々と礼をしかけたところで、彼女、ベルファストはティ
ルピッツの顔を見てその動きを止めた。

ティルピッツの手助けもあり予定よりも早く仕事が終わりそうで
内心喜んでいた矢先に来た彼女の顔は今まさにトラブルが起きると
物語るようないい笑顔だ。

「来客がいらしたとは。失礼しました。秘書艦としてきちんと把握を
しなければいけなかったのに。このベルファスト、反省いたします」
自分を秘書艦と強く強調して深く一礼を再開すると手にしたト
レーから取り出した紅茶を俺のテーブルへとそつと置く。

「シリアスが淹れたモノです。以前とは違い格段に良くなりましたの
で報告と共に感想をと思っております」

同じメイド隊の成長が嬉しいのだろう。その表情に隠しきれてい
ない。彼女のお墨付きならばと疑う事なく口に入れる。幾ら飲んで
も飲み慣れなかった苦さや甘さが感じられない良くも悪くも普通の
紅茶がそこにはあった。

「美味しいね、ありがとう」

一口含んでテーブルに戻す。

シリアスも苦手な事を懸命に取り組んで成長している。そう感じ
られる印象的な一杯だ。

「今は掃除を懸命に努めています。その一言がより彼女の励みになる
と思いますから、後でそのように伝えておきます」

ベルファストも大変だったろうに。それでも、部下の成長が喜ばし
いのか俺の感想を聞きよりその笑みを強くした。

だが、そんな団らんとした雰囲気はすぐに壊れる。

「それで、ティルピッツ様は何の御用でしょうか？」

半分以上は減った書類の山ばかり見て彼女の事に興味すら持たないティルピッツも流石に名を呼ばれてしまうとそのペンを止めざるをえない。

「指揮官の手伝いをやっていただけ」

「そうですか、それはありがとうございます。」

では、ここからは私が変わりますのでティルピッツさんはどうか持ち場に戻ってください」

「いえ、今日は休みだから大丈夫よ。私が好きでやっているの」

「そうですか、ではゆくりと休息を取ってください。」

働き詰めてしまつてはお体が持ちません」

「そうね、壊れてしまう。」

大事な家族が休みもなく働いていると聞いたから手伝いに来たのよ」

挑発的な言葉と共にベルファストを軽く睨む。戦場で見る時のような冷たい視線の迫力は、向けられていない俺の背中をも充分に冷やしてくれた。

「指揮官、ロイヤルメイドは優秀かもしれないけど、それは家事全般だけ。」

次の秘書艦は任せて。

必ず鉄血の艦船をその席に入れてみせるわ」

更に煽るような事を平然と口にするティルピッツは優しく俺に視線を変えた。ロイヤルの事を馬鹿にする。そんな事、彼女の前では禁句に決まつてるだろうに。

「あら、鉄血は仲間意識が高いと聞いてましたが、陣営が違うというだけで母港の艦船達と手を取り合えない集団でしたか。」

あなたがそれでは、その姉も底が知れているのでしょね」

逆鱗に触れた一言に返すのは同じく逆鱗を踏み潰すような言葉。流石のティルピッツもこの言葉に細い目をさらに細めた。ベルファストはその笑みをより強くして続ける。

「それに、その家族が休みもなく働いているからといって指揮官様の仕事を手伝う道理はあるのでしょうか？」

「あるわ。」

指揮官は私達鉄血の大事な家族。

そんな人が苦しんでいるというのなら、家族として私達は手を差し伸べ身を乗り出す。

例えばどんな荒波だろうと家族を救うためなら飛び込むのが鉄血の絆よ」

「そうですね。それは素晴らしい絆ですね。」

ですが、指揮官様を家族というのは違うと思えますが。

指揮官様はあくまでも皆の指揮官。

鉄血だけを贖済する事なく平等に接して下さいるお方です。

その優しさに触れて自分達だけが特別だと誤認されるのはいいのですが、余り外では言わないほうがいいかと」

「周りにどう思われようと関係ない。」

指揮官は私達の家族であり、私達鉄血は指揮官の家族であり道具。

ロイヤルメイドのように捨て身で働く人を放って置くようなモノは存在しない」

「……………」

ベルファストは笑顔こそ崩さないが、近くで見ると唇を軽く噛んでいたのがわかった。

ロイヤルの、といよりもシリアスの事を悪く言われているのだろう。ベルファストは自分の仲間を否定されている事に頭にきているようだ。

「…………そのように見えてしまうような仕事振りで見られている様で申し訳ございません」

そつと頭を下げてベルファストは謝罪をする。自分の部下の不出来さを。

こういうことがすんなりと出来るから彼女はメイド長として慕われているのだろう。自分の部下のために、事が大きくなればロイヤルという名に傷がつく事を避けるために無関係な彼女が平気で頭を下

げるのだなら。そんな姿を見せられると情けなくなる。

「悪いのは俺だよティルピッツ。俺がきちんとシリアスに教えられなかったから」

合わせて頭を下げる。本当は俺が一番に頭を下げるべきだったのに。彼女に嫌な思いをさせてしまった。

「いえ、指揮官は悪くない。」

メイドといつて自分達の役割を押し付ける彼女達が悪いのだから「そんな事ないよ。シリアスもベルファストも、他のメイド隊達だって頑張ってるんだから」

精一杯のフォローを入れるも効かないのだろう。とても耳に届いている様には感じられない。

「指揮官、大丈夫よ。」

演習が終わればあなたの家族が傍でサポートするようになる。

邪魔なモノを全部壊してでも、私達があなたを守るから」

不吉な事を優しく言う彼女。邪魔なモノと言われ恐る恐るベルファストを見る。顔を上げた彼女のそれは、先程の笑みとは違い真剣なものに変わっていた。

「ティルピッツ様、そのような物騒な発言は感心致しません。」

この母校では陣営等関係なく皆仲間と言い指揮官様は常日頃務めていらつしやいます。

鉄血の方々は指揮官様の働きを存じ上げてないようですが……

ここでは、陣営に囚われて他の陣営を叩くような事は控えるべきかと。

そのような思想があるからこそ、あなた方のデータで作られた開発艦は物騒な物言いをして怖がられているのでしょうか」

今度はベルファストが囁し立てる。初めはイラツとしていたティルピッツも開発艦、ローンの事を口に出されると明らかに目を逸らし逃げるように視線を何処かへやった。

「そうだよ、ティルピッツ。皆同じ仲間なんだから、演習だって訓練なんだから……」

「わかっているわ。」

そもそも実弾を使えないんだから、本当に壊せるなんて思っていない。

物の例えが悪かったようね」

ティルピッツも負けを認めたのだろう。頭こそ下げないが、被っていた帽子で目元を隠しながら「悪かったわ」と小さな声で謝罪した。さあ、後は

「ベルファスト、今日はティルピッツが好きで手伝ってくれてるんだ。彼女の好意を無下にしたくないから、今日の所は2人で仕事するよ」「……よろしいのでしょうか?」

「同じ仲間なんだ。誰か手伝ってくれても俺は嬉しいよ」

彼女は不審がる様子で未だにティルピッツを見ていた。それでも、俺の冗談めいた口調で話すと少しづつ飲み込めていったのだろう。最終的には大きく息を履くと

「かしこまりました。では、ティルピッツ様の分の紅茶も至急お持ち致します」

「うん、お願い」

ティルピッツに向けて一礼、扉前に俺に一礼をして彼女は退室する。

そこまで大きな争いにこそならなかったが、それでも目の前で悔しそうにする彼女を取り残した状況に悩んでしまう。

「まあ、その」

懸命に言葉を探す。言いたい事は決まっている。問題は伝え方だ。傷ついている彼女をより傷つけないように伝える方法。

針の音がやけに大きく聞こえる。数回鳴り響いた辺りで、とりあえず口を開くことにした。

「ありがとう、心配してくれて」

彼女の視線が上がる。珍しい呆けた顔。姉も彼女のこんな事を見たのは少ないだろうな。そう思うと不思議と頬が緩んでしまう。

「嬉しいよ、まだ家族って呼んでくれて」

「……家族の絆は永遠よ、指揮官。」

何があっても変わることも壊れることもない」

「そっか」

先程と、何時もとも違うか細い声。

そんな傷ついた彼女はゆっくりと近づくとその綺麗な細長い指で俺の片頬を優しく撫でる。グローブ越しにほんのりと伝わる冷たい体温が絆に飢えていたかつての彼女の手だと実感させられた。

「私が来る前からあなたは私達の家族だった。」

初めは受け入れられなかったけど、その優しさに触れて私の中の氷が溶けていくのを感じた。

人と触れ合う楽しさ、喜び。

忘れていた歓喜の心をあなたが取り戻させてくれた。

ありがとう、指揮官」

頬に当てられた手の先。その指の爪が首筋で立つ。グローブ越しだから辛い痛くはないが、それでも不快感はある。最も、弱った彼女の前でそんな事を言っただけで突き放すような勇氣はない。

「指揮官、私は。」

いえ、私達はお礼をしたいの。

離れ離れになった家族達を再び合わせてくれたお礼。

新しい家族を迎え入れてくれたお礼。

だから、私達はあなたに従う。

この恩を返すために。

そして、それがあなたに証明できる私の価値だから。

その言葉一つで私は何でもやってみせる。

邪魔な敵がいたら誰だろうと何だろうと排除する。

傷ついたのならばその小さな背を包んで守ってあげる。

私達、いえ、私はあなただけの道具としてずっと傍にいるわ。

指揮官、あなたの傍を離れない。

もう、あんな思いはしたくないから」

縫るような感情が最後には漏れていた。心なしかその瞳も潤んでいるようにも感じる。彼女にも過去はある。重い、重い過去。

俺も彼女も過去縛られているのだろう。深い傷を、治りようのない傷を負っているのだろう。

それでも、ここで楽しく過ごさせている。

笑いながら、喜びを共感しながら。

それができているのだ。

彼女の手に触れながら、感謝の言葉を伝えた。道具としてではない、テイルピッツという人に向けて。

その時の笑顔を見ると、本当に指揮官としてここに居る事に喜びを感じた。

「ねえ指揮官、私を抱きしめて」

「ねえ指揮官、私を抱きしめて」

鉄血寮に入ると早々に過激な歓迎の言葉と共に出迎えてくれた彼女、アドミラル・グラーフ・シユペーは小さな存在感を大きく出すように両手を開き今か今かと待ちわびた視線で俺を見上げて言った。

「はいはい」

人肌恋しいのか、顔を合わせたびに聞く願いに対してもはや特別何かを言う事はない。ただ優しくそっと彼女の背中に手を回す。

「……あたたかい」

くすぐったい吐息が肩にあたる。嬉しそうな横顔を長々と見ていると邪な気持ちが見れそうになるため極力見ないように努める。

「私の汚れた手じゃ抱きしめられないけど、こんな私の事もあなたは抱きしめてくれる。だから、もっと……」

目を細めてそう続ける彼女。自分で言う通りその手はぶらりと宙を舞っていた。

「大丈夫、綺麗な手だよ」

「あなたを汚したくないから、そんな事言っても私からは抱きしめないよ。変わりに、もっと抱きしめて」

言われるが求められるがままにそのまま抱き寄せる。この際背後から聞こえたため息は無視して。

シユペーは自分の腕を気にしている。

傍から見れば年相応の小さくて可愛らしい綺麗な腕。それでも、その腕は血と硝煙にまみれた汚れた腕と、何かを壊すための腕だと自分を卑下する。

そんな自分を象徴するように、戦場で立つ彼女の腕は禍々しい船装に包まれている。綺麗な腕等何処にもないと言わんばかりに。

自分を兵器だと語り、戦う事に意義を見出す彼女。見た目だけではとてもそんな重い思想を持っているなんてわからない。その小さな身では潰れてしまいそうな思いを持つ彼女。

母港に来てから時間が経ち少しずつだが戦場以外での繋がりや自

分の楽しみを見出してきてはいるが、やはり何処か心配だ。
いつか壊れてしまいそうで。

そう思ってしまうと、ついつい彼女を甘やかしてしまう。

「あなたの暖かさが好き。」

あなたの腕の中が私の居場所。

指揮官もつと、もつと……

もつと強く抱きしめて。

壊れるぐらいに強く。

あなたの腕の中にいると、私にはつきりと伝えて」

壊す気はないが、それでももう少しだけ強く抱きしめる。「むう」と
不満の息が聞こえたが、これ以上くっつかれるのは精神的に少し辛
い。口にもこせせないが。

「相変わらず仲が良いわね」

後ろから今度はクスクスとした笑い声と共にテイルピッツは優し
く言う。

「うん、久々に会えたから嬉しい」

「そうね、指揮官ももつと来てほしいわ」

「……頑張ります」

前後に挟まれた視線から苦笑いで返す。

寂しい思いをさせていると感じさせるのは、何処に行ってもだな。

そんな風に自傷のような気持ちを抱いて直ぐの事、その優しい声が
聞こえるまで全く気づかなかったが、彼女はシユペーごと俺を横から
優しく抱き寄せてきた。

「ふふふつ、私も2人とハグしたいです」

そんな間延びした声と共にその豊かな胸に思いつきり俺達を力強
く押し当てながら、彼女ローンは口元を緩ませながら言った。

「ロ、ローン!!」

柔らかい感触に気を取られたが、流石に不味いと思いつきシユペーから
手を離して彼女から逃げようと腕を取る。

「むう、ローン邪魔しないでよ」

包容を邪魔されたからか、シユペーはシユペーで不機嫌そうに呟

く。

「あらあら、いいじゃないですか。3人仲良く抱き合いつ子しましよ
〜」

「はいぎゅ〜」という言葉と共によりその力は増していく。頭に当た
る柔らかい感触は、ついに全体を包むぐらいに密着された。

「ローンも甘えん坊」

「ふふふつ、そうですよ。私も甘えん坊だから、仲良くハグしましよ
〜」

「うん、わかった」

何をわかったかはわからないが、少なくとも現状に妥協したのだろ
う。ローンに向けていた視線を俺に変えると、再び求めるような視線
と共に「もう少しだけ」と呟くシュペー。

「いや、流石に離して!!」

柔らかい感触から逃げるようにさつきから全力で引き離そうとす
るがピクリともしない。俺が弱いだけなのかそれとも……。

いや、考えるのは辞めておこう。

こういう時、助けになるのは再び聞こえたため息の主なのだろう。
視線を向けると呆れた顔をしていた。

「ローン、指揮官も困ってるわ」

「えー、いいじゃないですか。テイルピッツさんも入りましょうよ」

「……私は」

顔をわざとらしく反らす、視線はチラリと俺を見る。

「そうだな、少しだけ」

「テイルピッツ!!」

彼女にしては珍しい悪戯な笑みとともに、ローンと2人で挟み込む
ように抱きつく彼女。

真つ白な軍服を着た堅苦しい容姿だが、確かにそこには柔らかい物
があった。

「指揮官、あなたが悪いのよ。」

皆あなたに会いたがっているのに中々来てくれないから寂しがっ
てる。

私もね。

偶にしか来ないのなら、その偶にで家族らしい思い出を私達に頂戴。

そうしないと、暖かさが消えてしまう」

切実な望みを語らうように呟く様に、皆黙ってしまおう。

俺もまた、黙ってしまおう。

「私、指揮官ともっと一緒にいたい」

「私も折角着任したんですから、指揮官と一緒にいたいですね」

シユペーとローンも同意すると、心なしかローンに絡まれた腕がより強くなった気がする。

「もっともっと、会ってくれないと私、寂しくて嫉妬で狂ってしまいうだから――」

「何やってんのよあんた達」

そんな呟きを邪魔する声に呆れた声の主は、抱きつき合う（というか挟まれている）彼女を見ると血相を変える。

「ちよつと!! シユペーになにしてるのよ!!」

指を指して怒るやいなや彼女、ドイツチュラントは俺同様にサンドされていたシユペーを引つ張り出して救助する。

「ドイツチュラントさんも一緒にどうですか」

「いやよ!!」

「でも、指揮官もいるんですから」

「何でこんな下等生物に抱きつかなきやいけないのよ!!」

怒りっぽい彼女らしく、ローンからの提案を尽く強く拒否をしている。

俺は俺で意識がそれている間にこっそりと離れる事に成功した。

「指揮官、もう少し暖かさを感じたかったのだけど」

「……今度ね」

名残惜しそうに言うテイルピッツには申し訳ないが断らせせてもらおう。流石に疲れた。

「シユペー、大丈夫？ 怪我はない？」

「姉ちゃん大丈夫だから。心配しすぎ」

姉と呼ばれたドイツキュラントは俺達に向けるそれとは違い、優しい瞳でシュペーを見回す。彼女は彼女でそんな過保護な姉にため息を吐きつつも何処か嬉しそうだった。

妹の無事もわかると、その優しさは何処へやら。俺達に厳しい視線を突きつける。

「何やってたのよこの下等生物!!」

どうやら俺にだけらしい。聞き慣れた下等生物呼びにはもう注意はしない。したところで買うのは反感だから。

「久々に来たからってハグをしました」

「シュペーが抱きしめてほしいって言ってたのに、何でローンやティルピッツとも抱きつくのよ!!」

「いや、俺か抱きついてたわけじゃ……」

「言い訳無用!!」

「ご、ごめん」

問い詰めと共にだんだんと距離を近づけるドイツキュラント。ついにその差が無くなると大切な妹を蔑ろにしたと言わんばかりに怒った顔と歯ぎしりが聞こえてくる。

「ドイツキュラント、指揮官を怒らないでやってくれ。私達が悪いんだ」

「そうですよ、指揮官は悪くないです」

流石に可愛そうに見えてきたのか、ローンとティルピッツは部屋の隅にあった四人賭けのテーブルに腰掛けつつフォローを入れてくれた。最も彼女からしたらそれすらも気に食わないのだろうか。

「そうやって甘やかすから下僕が調子に乗るのよ」

とは言いつつも、流石にシュペーと共に挟まれていた俺に否はないとわかつてはくれていたのだろう。シュペーの手を取り、2人で仲良く隣合わせにテーブルに腰掛けた。

残念な事にテーブルの席が埋まったため俺は適当に傍で立っていることにした。普段が殆ど座りっぱなしで仕事をしていただけに立ちっぱなしで過ごすというのが久しく感じる。

「それで、なんであんたがここにいるのよ。ビスマルクとの話し合い

にはまだ時間があるでしょ」

「それ私も気になった。おかげでいっぱい過ぎせるけど」

「早く来るなら早く来るで連絡しなさいよ。シユペーは非番なのに朝からここで待ってたんだから」

「ドイツチュラントも事あるごとに様子を見に来てたよ」

「うるさい」

仲良し姉妹の楽しそうな談笑をほほ笑みつつ見てしまう。言われたくないことを言ったシユペーの頭を軽く叩きつつ、ドイツチュラントは顔を軽く赤く染めた。

「まあ、働きっぱなしの下僕を労るのも主の仕事だし、何よりも下等生物のくせに私達を放ってる事に文句を言いに来たのよ!!」

「ごめんごめん」

なんやかんや言いつつも、俺が来る事を喜んでいたのでろう。珍しく声を荒げで動揺するドイツチュラントの方ばかりを見る。

パンパンと自らの膝を叩いてジツと見てくるティルピツとそれを楽しげに微笑んで見ているローンの事なんて見ない。

「たまたま私も非番だったから、指揮官の仕事を手伝ったのよ。そして、思ったより早く終わったから家族に会いに来てもらった」

俺の代わりに答えてくれたティルピツ。頼むからジツと見つめ続けるのは辞めてほしい。

「へー、私達は忙しいのにあなたは暇で構ってほしいんだ」

「あつ、私もビスマルク様に呼ばれてるからそれまでお相手しますよ」

「……………」

どうやら仕事があるのはドイツチュラントだけらしい。悔しそうに俺の顔を見て来るのに気まじくなり反らしてしまう。

反らした先に手が伸びていた事について知らず。

「わっ!?!」

痺れを切らしたティルピツはついには俺の腕を掴んで強引に自らの膝の上へと引つ張っていく。ただ、体制を崩した俺の足は地面に転がり頭だけが彼女の膝に案内されたのだが。

「テイルピッツ!!」

「指揮官、私ばかり構ってくれないのは寂しいわ。

仕事を手伝ったのだから、少しぐらい見返りを頂戴。

少しだけ、もう少しだけ私の冷たい心に暖かさを頂戴」

そんな事を言いつつ俺の頭にそつと、以前の彼女を表すようなヒンヤリとした心地よい手がそつと優しく撫でられていく。

「……恥ずかしいんだけど」

「あら、次は私もしたいです」

「指揮官、私はしてほしい」

「下僕、特別に私を撫でることを許可するわ」

俺の気持ち等関係ないと言わんばかりに仲良く揃って上から言い合う皆。

どんな顔をしているのだろうか。下からではテーブルが邪魔で見えないけど。少なくとも、下から眺めるテイルピッツの微笑みを見る限りでは仲良くやっているのだろう。

重桜の時は揃いも揃って一触即発な雰囲気だったが、ここは違う。皆仲良く居心地良い。暖かさを感じる。

余り見れてはいないが、それでも仲睦まじくやれてると感じると思わず俺の頬が緩んでいった。

時間というのは止まらない。

少なくとも、あの暖かな雰囲気を感じた建物に居るとは思えない程の張り詰めた空気が肌に触れる。

目の前の彼女が怒っているのは俺が遅れてしまったからか、それとも非番であるはずの妹を連れてきてしまったからか。

何れにせよ言えることは一つ。

久々にあった彼女はやはり、この指導者として凜とした振る舞いと共に弛んだ俺に厳しい一言を言い放った。

それはいい。それは俺が悪いから。

その後の遅れた訳を聞き、何を思ったのか自らの膝をポンポンと軽

く叩く彼女に俺は、何を言うのが正解なのだろうか。

「たるんでいるんじゃないかしら、指揮官」

「たるんでいるんじゃないかしら、指揮官」

手にしていた書類をそつと机に戻しつつ、わざとらしく視線を掛け時計に移すと嘆息混じりに彼女、ビスマルクは言った。

そんな彼女に頭を下げつつ俺は相槌を打つことしか出来ない。

隣りにいるローンやテイルピッツは申し訳無さそうにしながらも表情のみで援護の言葉はない。最も、時間を忘れていた俺が悪いのだが。

「指揮官、人の上に立つ以上約束は大事。特に部下との約束は。」

上司として、些細な事から部下との信用を失ってしまう。一度綻びが生まれたら直すのは大変なの」

「はい」

「私だから大事にはしないけど、他の子たちにそんな事したら大変よ?」

「はい、気をつけます」

「指揮官、貴方を信頼してるからこそ言っているの。しっかりとしなさい」

「はい、頑張ります」

傍から見たら何方が上に立っているのかわからないその光景に少し情けなさを感じる。

言い訳ではないが、人の上に立つという経験の長さは彼女の方が遥かに長い。だからこそ、まだまだひよつ子の俺を見ると色々と言いたくなるのだろう。

ビスマルク

鉄血艦隊の指導者であり、鉄血代表ともいえる艦船。

仲間を守るといふ信念は、誰よりも固く強い彼女。

シリアスを除くと誰よりも俺を支えてくれた彼女。

だからこそ、人の上に立つ指導者としての振る舞いを忘れない彼女。

そんな彼女を見ているだけで、教科書なんかでは学べない沢山の事

を学べる。

最も、それらを全く活かせていない現状に頭を抱えていそうで申し訳ない限りなのだが。

「指揮官、聞いていて?」

「聞いてます」

「そう、ならいいわ」

思考に囚われ相槌を忘れていた所にすかさずメスを入れる彼女。頼りになると同時に怒らせると怖いという事を改めて認識させられてしまう。

「姉さん、悪いのは指揮官じゃなく私。これ以上は私を怒ってくれ」

一旦一方通行の会話が止まったのを見計らったようにテイルピッツが一步前へ出る。

「テイルピッツ、貴方は休みのはずでしょ?」

俺の時とは違う優しさや気遣いが前に出た声で矛先を変える。

立派な指導者とはいえ、妹であるテイルピッツを前にすると姉としての側面が前に出る。

「まあいいわ、貴方から何故遅れたのか話を聞かせてくれるかしら」

「わかった」

彼女が前に出て来てくれたおかげでようやく顔を上げる事ができた。

そのまま、テイルピッツはここに来る前の様子を事細かに話してくれる。

本当に、細かく。

「……なるほどね。艦船達と遊んでいたら遅れたという事」

「ごめんなさい」

再び軽い頭を必至に下げて上から聞こえる溜め息にビクビクと震えていく。

何を言っても言い訳になるどころか、言い訳にすらならない言葉達しか思いつかない。

そんな俺の内面すらお見通しなのだろう。「指揮官」と呟くと再度重々しい息が聞こえてくる。さつきはまだちよくちよくと顔色を見

れたが、今回ばかりは怖くて顔を見ることすら出来ない。

どんな言葉が来るか不安に怯えつつ床に垂れていく冷や汗が弾けるのを見て気を紛らす。

「……………まあ、貴方に会いたがっている子達が大勢居るのは知ってるわ。」

鉄血だけでも、貴方と話したいと言ってる子達が大勢いる。

そんな子達の相手をしていたから遅れたとは思ってたけど、甘えて遊んでいたら遅れたなんて」

「すみませんでした」

さつきまでいた何処か暖かさを感じるリビングとは打って変わって冷たく重々しい空気に満ち溢れた部屋でその恐ろしいプレッシャーを肌で感じるとヒリヒリと痛み始める気がした。

嘘をつけない生真面目な性分のテイルピッツは、こんな空気にした事に責任を感じてかより申し訳無さそうに。ローンはさつきまでのことを思い返しているのか「あらあら」と言いながらのほほんとした笑みを浮かべていた。こんな空気でもマイペースでいられるのは彼女の柔らかい雰囲気とマイペースな性格だからだろうか。少しでもあやかろうと気付かれないようにローンに近づこうとした時。

パンパン

と、部屋に張り詰められていた空気を一気に爆発させるよう手を叩くビスマルク。自分の浅はかな思考が読まれたと思うと更に汗が垂れていく。

「指揮官、頭を上げて」

「はい、すみません。…………えっ?」

「頭を」

「え? あ、はい」

言われるがままに顔を上げる。彼女にしては珍しい悪戯な笑みが口元に薄っすらと浮かべているのが印象的で良く見えた。

「ほら、シャキっとする。胸はしゃんと、目ははつきり!!」

「は、はいー」

よく分からないまま言われた通りにしていく。

これはもう傍から見なくても何方が上なのかわからなくなってきた気がする。

「よしー」

細かな指摘を受けつつも彼女の言葉を借りるにシャキッとしたのだろう。確認を終えて満足気にすると咳払いを1つして。

「指揮官、貴方はこの肩書の通り艦隊のトップ。

誰よりも偉く、誰よりも冷静にならなければいけない。

そんな貴方が周りの子達に甘やかされているのはいけないわ。

そう、それはいけないこと」

「はい」

頭を垂れかけたが鋭くなった視線に気付いて慌てて言われた通りの姿勢に戻す。

「それでも貴方は優しい人。

私も昔から傍で見ている身。その優しさに触れていた身。

いけないと言う事は出来るけど、辞めろとは言えない」

「はい」

「だから、いえ、だからこそ」

パンパン

と再び軽く叩く音が聞こえる。

手ではない。眼の前にいる彼女はわざとらしく自らのふとももを叩く。

「ほら」

「……ほら、とは？」

思わず上司を相手にするように返してしまった。突然の奇行に走る上司を相手するように。

少なくともさつきまで味わっていた経験を思い返すと、三度目の大量の冷や汗をかいていく。

「私だって女なのよ。

貴方を甘やかす事ぐらいなら問題なく出来るわ」

「ビスマルク、冗談はやめてくれ。

俺は甘えたいわけじゃないんだ」

「ほら」

「ビスマルク、頼むから話を」

不穏になりつつある雰囲気から逃げるように一步下がろうとしたが柔らかい感触が後頭部に当たり止められる。「あらあら」と柔らかい声が頭上から聞こえると、その主はそつと両肩に手を乗せて楽しげにしていた。

「ほら、今度はビスマルクお姉さんに甘えましようね」

そんな言葉と共に俺を生贄に捧げるように無理やり前へと送るローン。

「姉さんは言い出したら中々折れない。諦めて指揮官」

助け舟を出す気を微塵も感じさせないテイルピッツは手を出すことはないが俺を見送るように視線を向けた。

「ほら、指揮官」

そんな風に膝を叩く彼女に向かって。

私を見たというのに自沈しないでだけでなく沈めるのに私の手まで煩わせるなんて……許せないっ!!

そんな怒りに満ち溢れた声がテーブルに置かれたレコーダーから聞こえる。先日の海域の見回り時に彼女が発した言葉。それをたまたまデータとして偵察機が撮っていたものがまさしくこの言葉だ。

他にも出したらきりがないような物騒な言葉達を眼の前に柔らかな笑みを困らせているローンが言うというのだから信じられない。

「すいません、戦闘になると興奮してしまつて」

言い逃れ等出来ないと思つたのかあっさりと頭を下げる彼女。

「指揮官、何も相手に向かって言つてるんだ。味方に対してではない。大目に見てくれないかしら」

ビスマルクはローンを援護するように下に向かって口を開く。もつとも、そんな俺は

「見ないで、頼むから、見ないで」

彼女の膝の上に座させられ、回された手で体を密着させられてい

た。まっかな顔を両手で隠しつつ独りでに眩きながらその必至さをアピールする。

少しでも逃げようなら女の力とは思えないような手が思いっきり俺を引っ張り全身で彼女に包まれるようになってしまう。既に3回やった。泣きそうな思いで胸が一杯になる。

だからこそ、今はこうして泣き言で継るようお願いしているのだが

「指揮官、話を聞いてないのかしら？」

「いけませんね、ビスマルクさん。もう少し近くで話してあげたらどうでしょうか？」

「そうね、そうするわ」

「聞いている！ 聞いているから!!」

泣き言を聞いてくれない彼女達。隣に座るテイルピッツは羨ましそうに此方を見てるのと目があった。相変わらず助ける気はなさそうだ。

「私の女性らしい体付きは戦場では不向きと思ってたけど、こういう時はこの身体でよかったとを感じるわね」

「姉さん、余りイジメないで。私だって指揮官を癒やしてあげられる」

「ふふふっ、テイルピッツさんの次は私もいいでしょうか」

「ほら、話が反れてるから！」

ついに手を離してボイスレコーダーを指差す。

観念して本題に入る俺を見て皆も綻びた顔を戻していく。

「相手は敵なんだから、キツイ言葉を言う事に問題があるのかしら」

「姉さんの言うとおり。相手は敵。沈めるのだから慈悲はいらない」

「そうだけど、うーん」

鉄血はやけに好戦的な艦船が多い。故に、戦闘になると物騒な物言いをするのが多いからこそ余りこの問題に気を向けないのだろう。

そんな艦船達のデータを元に作られた彼女は、特にその傾向が強いのだろうか。

特別計画艦

テイルピッツやビスマルク、シリアスやベルファストのような艦船

達は謎の多いキューブの力を使って建造している。セイレーンの力であるキューブを使って。

でも、ローンは違う。

キューブを使ってはいるが、それだけじゃなく艦隊で取れたデータを元に建造された彼女は、他の艦船達とは違う。

俺の母港ではローンを、他の艦隊ではまた他の特別計画艦のためのデータ収集、建造をして配置されている。

初めて人類が作り出した艦船だと技術者達は言うらしい。その辺りは疎いたため余りピンと来ないのだが。

とりあえず、好戦的な鉄血のデータを取り纏め作られた彼女が好戦的になってしまうのは致し方ない事なのかもしれない。

それでも

「駆逐艦の子達はローンの事を優しいお姉さんと思ってるから余計に怖いんじゃないかな？」

そのうち皆慣れるかもだけど、怖がる子がいる間は気をつけてね」
これぐらいは言っておく。

彼女が浮かべるほんわかとした笑みから敵を糾弾するような言葉が出るのを想像すると確かに怖い。駆逐艦の子達の気持ちもわかる。

少し肩が震えると俺を抱える手が締まるため余計に震えそうになるがグツと堪えた。

「ローンは優しいから、言葉遣いさえ気をつければ皆こんな事すぐに言わなくなるから大丈夫だよ」

「……はい、気をつけます」

反省してるのかしてないのかわからないが、眉一つ動かさず応える彼女の返事を聞いて少しだけ満足した。

艦船によっては注意してもすぐに反発するモノもいる。

最近会った艦船達だと赤城、加賀、大鳳だろうか。彼女達は齒に衣着せぬ物言いと語る。俺の為と話している以上中々言う事も言えない。最も、それだけ信頼されてるといふ風に捉えているけど。

そう思うと、反省してるかしてないかは別として大人しく引き下がってくれるローンは大人なお姉さんという風を感じれて好感を持

てた。

「今度のメンテナンスの時に相談してみますね」

「メンテナンス？」

急な単語にそのまま返してしまう。

「はい、今度本部に行きメンテナンスを行うんです。

特別計画艦自身のデータも集まってきたので、次の対象の為のデータ提供と不具合がないかを見るらしいですよ」

「そんなのあるんだ」

「この間伝えたわ。指揮官」

「えっ！ 嘘!？」

脳内スケジュールと共にポケットに仕舞っていた手帳を取り出して確認する。一通り見ても思い返しても何処にもそんな記述はない。

「いつやるの!」

「まだ未定ですが、近い内と聞いてます」

「マジか……」

頭から抜け落ちていた。本部が関わる大切なイベントを忘れるなんて。

また行くことになると思うと溜息が無意識で漏れてしまう。

「指揮官、しつかりして。貴方がここの代表なのだから」

「……ごめん」

頭上の言葉に謝りつつ反省する。気が抜けていたのだろうか。忙しさにかまけていたのだろうか。

今までこんな事なかったのに。

「当日は指揮官も同行ですよ」

「俺も? なんで?!」

「なんでも、私の普段の様子を話すためにですよ」

「……そっか」

普段も何も仕事場に籠もりつきりだ。会ってすらいらないのに語る事なんて出来ない。

頭を抱えると空いた所を埋めるように手を添えられ優しく左右に揺さぶられる。

「資料は私が用意しておくから問題ないわ。貴方はそれを頭に入れて挑んで頂戴」

「……いつも助かります」

「問題ないわ。いつもの事よ」

優しく吐かれた息がくすぐったく頭にかかる。そんな息に伝染して俺も息を吐いた。情けない自分自身を咎めるように。

「ありがとう。気をつけるよ」

「そうね、気をつけて」

そんな返しに対して。

「ローン、テイルピッツ」。

後は指揮官と2人で話すことがあるから席を外してくれるかしら」自己嫌悪に沈む俺を庇うように2人に言うビスマルク。その言葉にこの話は終わりを意味し、ローンは「わかりました」とテイルピッツも「そうね」と呟き席を立つ。

「テイルピッツ、貴方は休みなのだからゆっくりしなさい」

「今日は指揮官の暖かさに触れられた。」

寒さの中で忘れた温もりを思い返せたのだから、後は休まさせて貰おうかしら」

「ローン、今日の話は忘れないように」

「はい、まだここに着任して日が浅いですから。」

皆さんと、指揮官と仲良くなれるように気をつけますね〜」退室する2人にそれぞれ声をかけ、その背を見送る。

本当にいい上司だ。部下思いの、家族思いの。

自分との余りにもある違いに本当に嫌になる。

「さあ、久々の2人つきりね指揮官」

凜とした彼女らしからぬ甘い声で囁くと、何もしてないのに回された手でまた力強く引き寄せられた。

「ビスマルク、恥ずかしい」

「いいじゃない。ここは私と貴方しかいない」

嫌がっても外してくれる様子はない。妹の言うとおり、彼女は言い出したらそう簡単には折れない。そう思うと抵抗するのも無駄だと

感じてその身を預ける。

「相変わらずのダメダメっぷりね。見てて恥ずかしいわ」

「……ごめんなさい」

また頭を撫でられ始めた。

「指揮官。よく聞いて。」

上に立つ者として嬉しい事と悲しい事は同じ事。

下に居た者が巢立つこと。

力ある者が巢立つ時は自分の事のように喜ばしく、力ない者は自分が守れなくなる事に悲しく。

「貴方は力がない」

厳しい言葉とは裏腹に優しく力を込める彼女に身体を預ける。

「もちろん、貴方は始めから私の部下ではなかった。」

それでも、ここにはじめて正式に着任したのは私。

何もわからない貴方を助け続けたのは私。

だからこそ、貴方が何も出来ないというのは誰よりも知っているつもり」

彼女の柔らかかさに包まれると、ほのかに感じる甘い匂いが鼻をくすぐる。

「私は私でやる事はあるわ。」

でも、何時だって私を頼って。

力なくしてひとの上に立つことを強いられる貴方を助けてあげられるのは私だけ。

だって、他の艦船に貴方の無能さを広めたら示しがない。

きつとなめられてしまうわ。

だから、貴方を助けられるのは私だけ」

「私だけなの」そう耳元で呟く。

愚弄されているなんて事は俺にだってわかる。

それでも、それでも。

それでも、彼女の言葉に奇妙な安心感を覚えてしまう。

いつも、いつも。

周りの艦船達とは違う。しっかりと俺を見て、過大評価せずに無能

と認め口に出す。

自分を見てくれている、そんな風に思えてしまう。

誇らしきご主人様

そう語る彼女が常に傍に居るからこそ、彼女の等身大の評価が心地よく感じるのだろうか。

「指揮官、貴方が辛くなったら何時だって逃げていい。

その時は私の元に来て。

何時だって助けてあげる。

私が着任した時からそうだったでしょ？

軍務は何時も私任せだった。

情けない姿で戸惑う姿は今でも思い出せる。

だから、何時だってあの時みたいに私に泣きついていいの。

私だけが貴方の味方。

私の部下達が貴方の味方。

貴方を苦しませない、本当の味方」

そんな甘い言葉を繰り返すビスマルク。

肩の力が抜けていく。部下に言われてはいけないことを延々と言われているのに。

それでも、心地よく感じてしまうのは、人は上に行くよりも下に下るほうが楽だからなのだろうか。

彼女の甘言に包まれながら、俺は力なく頷いていくことしが出れなかった。

秘書官の席をかけた演習が始まると、明石さんが騒いでいました。

なんで明石さんが言いふらすのでしょうか？

薄暗い自室のベッドに座りそつと指を添えて考える。

それでも、ここまで噂になっても指揮官が否定をしないという事は、きつと無言の証明。皆さん何時も以上に訓練に身を打っています。

さあ、私はどうしましょうか。

明石さんが騒ぐのがとても気になる。指揮官が直々に言うのではなく何故明石さんが？

購買部という立場上色んな艦船と接せる機会が多い彼女だから？

それでも、彼女は重桜の艦船。策士の女狐がいる重桜の。

……あらあら、本当に難しい。

もしも、もしも世界の盤面が目に見えていたら簡単なのに。誰がこの一手を打ったのか見れたら、どうにでも出来るのに。

それが出来ないから、生き残るのは大変ですね。

誰が打ったのかわからない盤面。誰の思い通りに行くかわからない盤面。

ならば、いつそのこと……

特別な私は、指揮官には言えない特別な権限がある。

不都合や不具合があれば指揮官を飛ばして本部に直接連絡出来るような権限が、他の艦船達とは違い、本部で建造されたからこそ出来た権限が。

ここにきて直ぐに思った。

皆に愛される彼を奪ったら、壊したらどうなるのだろう。

皆の顔はどうなるのだろう。彼の顔はどうなるのだろう。

幼さを感じ取れる可愛らしい顔に、軍服が似合わない背丈の彼。そんな彼の壊れる顔を想像するだけで――

本部の方に日付を言う。

彼が久々に表に出るといふ皆が楽しみにしている日付を思い出すとつい口にしてしまった。

あらあら、私っちらはしたない。でも、口に出した以上はしようがないですよ。

後はビスマルクさんに口裏を合わせてもらいましょう。丁度今度指揮官が来ると言っていた。

きつと彼女も……いえ、鉄血の皆さんは協力してくれる。

私の中にある皆のデータがそう証明してくれる。だからこそ、自信

を持って言える。

もしも、もしも誰かがこの盤面を作ったのなら
壊してしましましょう

盤面なんて見えないのだから。誰かが駒を動かすのなら私は私の
愛する駒のみ大切に仕舞って残りを全て壊せばいい。簡単な事。

自分でも不思議に思う。

会って間もない人をこんなにも思うなんて。

それでも、そう思ってしまうのは私を作るデータ達と同じ思いなの
だから。

みんなみんな同じ思いなのだから。

だから、私の思いは皆の思い。

人一倍強い感情も、嫉妬も、憎悪も。

湧き上がる醜い感情に歓喜し、感情が昂ぶってしまうはしたない私
は思わず声に出してしまう。

私の大切なモノを奪うなんて……許せない!!

私達の間を邪魔するものは全部、全部壊してやる!!

「指揮官、サラトガちゃん怒ってるんだよ!!」

「指揮官、サラトガちゃん怒ってるんだよ!!」

勢い良く扉を開けた彼女は、その言葉通りに何時もの悪戯つ子な可愛らしい笑みを捨ててむすつとした顔を見せて彼女、サラトガはそう言った。

正直な話、彼女が怒っている理由というのに瞬時に検討がついた俺がどう説明するか悩んでいると、部屋の隅に佇んでいたベルファストが代わりに答えてくれた。

「サラトガ様、どのようなご用件でしょうか」

用件を尋ねているわりには表情には若干の疲れが見えた。

無理もない話。彼女を秘書官に一時的に任命して早数日。その間に来た艦船達は皆サラトガのように怒りながら来ると同じ話を持ち出してくるのだから。

「演習よ！ 演習!!」

エンタープライズ凄じらしみにしてたのに急に来れませんなんてイタズラにはたちが悪いよ!!」

普段イタズラをして怒られる側の彼女だか、意図的に誰かを傷つけるような悪質なイタズラはしないと云う。

だからこそ、今回大事な仲間を傷つけた俺を酷く怒っているのだから。

「サラトガ様、こればかりは仕方の無いこと。」

貴方様もわかっていないのでしょうか」

冷たく突き放すように言うベルファストに「でもでも」とごねるサラトガ。

嫌われ役を買ってくれる彼女には悪いが、責任は俺にある。続けて口を開こうとするベルファストよりもなんとか早く口が開いた。

「ごめんね、本部からの急な帰還指令だから断れなかったんだ」

帰還指令

鉄血寮でビスマルク達との話し合いをした翌日に来たこの指令は、ローンを連れて本部に戻るようになしか書かれてなかったため具体的

に何を聞かれ、もしくは何を自分がやらかしたかすらわからなくて不安な日々を過ごすことになった切っ掛け。

ただ、ある程度の目星はついている。

ローンと同伴で久々の本部に帰還。

開発船の彼女のメンテナンスかデータ取りでも行うついでの呼び出しだろう。

言われることもなんとなくは予想している。

本部に行くのも避けたいのに、その日程が最悪だ。

演習前日の夜に出港して、演習後の翌日に母港に帰還なのだから、意図的とすら思えるそのスケジュールに皆不満を漏らしていたが、大半の艦船はその場では納得してくれた。

その場、では。

「でも、皆悲しがつてたよ」

その幼い容姿からは想像出来ないが、サラトガはユニオンでも艦歴が長い。

だからこそ、話を聞いて初めは納得したのだろう。

本部からの命令に背くことは雇い主に背くこと。そんな事出来るはずが無いと。

艦船である彼女達だからこそ、命令に背くことの困難さと無謀さは知っているだろう。

それでも、こうして話がるのは他の艦船が傷ついている所を見たからだろう。

ユニオンは明確な指導者がいない。

良くも悪くも自由な彼女達だが、それでも団結力は凄い。

明確なリーダーがいなくても纏まっている彼女達はある意味では他の陣営よりも結束力が強いのだろう。

だからこそ、今回のように誰かが傷つくのを凄く嫌う。

大切な仲間を傷つけられた事を。

「うー」

怒っている。

それでも、自分の中では理由に納得している。

だからこそ、その唸るような声に少し迷いのようなものを感じた。きつとベルファストも感じたのだろう。押し黙る彼女を更に押し付けるように話し出す。

「エンタープライズ様は今回の件に不満を持たれてるのでしようか？」

「上官の命令だからしようがないって言ってるけど……」

けど、だけど。そう呟くサラトガ。

「ごめんね、次の演習は必ず見に行くよ」

便乗するように俺も勝手な謝罪を押し付ける。

「……もう!! 今回の埋め合わせしてくれないともう指揮官に2度とイタズラしないからねっ!!」

考えた故の落とし所なのだろうか。

指を指して軽く睨みながら微笑ましくもあり、残念でもある台詞を吐くサラトガ。

わかるからこそ、感情のぶつける先がわからないのだろう。

そう思うと、命令に従順な彼女達艦船達が不憫に思えて仕方がない。

どれだけ嫌いな相手でも、憎い相手でも自分を行使する指揮官が相手ならば従わなければならない艦船達が。

だからこそ、友好的に接しなければいけない。

関係を大切にしなければいけない。

それが、それだけが俺の出来る仕事でもあるから。

暗い顔をしていたのだろうか、サラトガもベルファストも不安気に見つめていた事に気づく。

「指揮官、本当に反省してる?」

変な空気になったのを変えようとしたが、それよりも先にサラトガは呟くように問答をしながら近づいてくる。

「してるよ、次は約束を破らないように頑張る」

彼女の顔が視界一般に広がり、歩みを止めたのを見て改めて伝える。

「本当に?」

「本当に」

今度は念を押される側に回った。

それでも、少しでも怒りが収まるのならば、それでいい。
そう思ってはいた。

「じゃあ」と呟いてサラトガが俺の頬に口付けするまでは。

「チュツ」

「サラトガ!？」

「えへへ……」

照れ臭そうに笑いながら小走りで離れ、有無を言わず部屋を出ようとする彼女。

「サラトガちゃんの可愛いイタズラをまた受けたかったら、約束破っちゃ駄目だからね。」

破ったら、イタズラじゃなくて怖いこわーいおしおきをサラトガちゃんがしてあげる。

指揮官が泣いちやうようなおしおきを、ね

指揮官がもうサラトガちゃんや皆をイジメたくなるようなおしおき考えとくね」

そう静かな部屋に言い残して最後、彼女は逃げるように部屋から出ていった。

いや、ようにはなく逃げたのだろう。

俺のすぐ後ろで何処から出したウエットティッシュを手にする彼女から。

「指揮官様、顔を」

「……はい」

その眉一つ動かすことのない綺麗な笑みから一瞬視線を反らしたが、捉えるようなその声に再び向き直した。

「サラトガ様もいい加減な事をなさいますね」

何も言えずに優しさを少し感じる力加減でキスをされた頬を念入りに何度も、何度も何度も拭いていくベルファスト。

「ああ、こんなに汚されてしまって。これでは掃除が大変です」
クスクスと笑って入るがその目は確かな怒りを感じた。

サラトガ、大変なことをしてくれたな。

いち早く逃げ去った彼女を忌々しく思いつつ、目の前の怒りにどう声をかければ落ち着くのか考える。

「ご主人様」

「な、なに？」

嫌でも引きつってしまふ俺の笑みとは比べて終始変わらない笑みを浮かべる彼女。

「……気をつけるよ」

逃げるように眩いたのをよしとしたのか、乾ききったウエットティッシュをこれでもかと丸めて捨てる彼女。

「おはようございます、ご主人様」

「おはようございます、ご主人様」

その声で気づく意識。薄目で見ると優しい微笑みを浮かべながら彼女、ベルファストの顔が視界一杯に映った。

逃げるように反らした視線の先に映った時計の針は、お決まりの時間を指していた。

「……おはよう」

またか、なんて思いつつすぐ横にある使っていた、本来ならば俺の頭の下にある枕を見る。

そのまま、本来なら感じるはずのない柔らかな感触から逃げるように気だるい身体を起こしていった。

「ご主人様の可愛らしい寝顔をもっと見たかったです、もうそろそろ起きないと遅刻になってしまいますよ」

クスクスと笑いながら俺の頭を置いていた膝を優しく撫でている彼女。言葉とは裏腹にもう少しと誘っているようにも感じる。

使い慣れたベットのの上に絶世の美女、更にはメイドときた。

本来ならば、感情的に扇情的な気持ちに一杯になり動いてしまうだろうが……。

残念ながら、違う。

どちらかといえば怖い。恐怖心でそんな気持ちは忘れさせてくれる。

ここ最近、彼女は夜な夜な、もしくは朝方に俺の部屋に入り込むと膝枕をさせて楽しんでる。

秘書艦になったその日から。

初めは大変だった。

思わず声を荒げて自分の気持ちを押し殺すように当たったが彼女は不思議そうに首を傾げながら

「ご主人様の起きる所から瞳を閉じるその瞬間までに見届ける事。

それこそが今のベルファストの務め。

「ご主人様の隣に立つ私の役割でございます」

という一言を言われて何も言えなくなった。

言ったところで、これ以上の事を言われて朝から重い気持ちを引きずるのは勘弁願いたい。

だからといって、これがよしとは思わないが。

これが、ずっと続くなら

「演習は明日だね」

毎朝ぶらりと力の抜けた手でカレンダーを指差して彼女とこの日を確認している。

演習が終われば、彼女は秘書艦から外れる……と思う。

誰か秘書艦になるかはわからないが、少なくとも朝からわざわざ起こしに来る艦船だけは勘弁してもらいたい。

「ええ、そうですね」

意図が伝わってるかどうかは別として、領きながら確認をした。

「私が今後とも隣に立ち、最高の給仕を常に提供できるよう頑張らさせて頂きます」

鼓舞していると取られたのだろうか、嬉しそう話し出す彼女。

思いというのは中々伝わらない。

かといって、直接的に伝えることは……

両手を重ねて、自分の胸に当てるベルファスト。

大切そうに両手で包むように持たれた何かが見えた。

指と指の間にチラリと見えたそれは、この部屋の鍵。

指揮官である俺が使っている部屋の鍵だ。

秘書艦に預けるようにとこの艦隊のルールとして決め、それ以来ずっと他の艦船が持っていたはずの鍵。

その新しい主が明日決まる。

本当ならば、こんなもの渡したくはない。

それでも、もしものことがあつた時にと提案されて秘書艦にだけという名目ならばと渡してしまった。

当時も秘書艦を変えてほしいと要望はあつたが、艦船達が増えると同時にその声も大きく、強くなっていく。

明日秘書艦になる艦船が誰になるのか。

わからないが、変わってほしくないという望みはあった。
口には出さないけど。

「指揮官様、お着替えの用意が出来ております」
他の艦船の事を考えていたのがバレたのか、はたまた考えにふけていた様が目立ったからか。

彼女の言葉と視線の先にあるベット隅には、俺が着るべき制服が丁寧に畳まれていた。

こういった準備、用意をしてくれる姿は本当にありがたい。

ただ、毎朝膝枕をされるのに目を瞑る必要がある事を考えると素直に評価できないが。

「ありがとう」

それでも、感謝していることは伝える。

彼女がきつと、望んでいる言葉を。

「貴方様のメイドとして、これぐらいの気遣いは当然です」

少しだけ誇らしげな顔を見ると、彼女が喜んでいると実感できた。

艦船も人と変わらない。

喜ばれたら嬉しいしは嫌がられたら悲しいし。

艦船も人も変わらない。

「それでは、着替えの手伝いをいたします」

「それはいいかな」

毎朝見る首を傾げて何故？　と言わんばかりの顔。

毎朝見せられても俺の言葉は変わらない。

「ベルファスト、着替えぐらいいは1人で出来るから大丈夫だよ」

「わかっております」。

ですが、ご主人様の身の世話をすることがメイドの務め。

メイドとしての業務をメイド長たる私が怠るわけにはいきません。

指揮官様の妨げにならないよう、全ての世話をベルファストが完璧にこなしてみせます。

更衣、入浴、排泄等の日常に付きまとう事はもちろん、朝の紅茶、日中の業務、夜間のお世話等の細事に至るまで私が付きつきりでお手伝いを致しますので、どうかご主人様はベルファストにその身を全て委

ねてください」

「……ええ」

言葉が出ない俺を見て、何を思ったが両手を広げる。その視線は、どこか促しているように感じた。

やれと？　と言葉に出そうになったがそれを抑える。

実際にそれを口に出したら「はい」と即答されるのが落ちなのだから。

初日で踏んだ轍は踏まない。

「ベルファストだって忙しいでしょ？」

「はい。」

ですが苦にはなりません。

愛すべきご主人様の身を預かり、私の全霊をかけてお相手する。

これ以上ない幸福でございます」

「……そうか」

ここまで思ってくれる事に感謝するべきか、思い過ぎと注意をするべきか悩んでしまう。

それでも、やる事はわかっている。

緊張感で気だるさが吹き飛んだ身体をベットから無理矢理引き出し、ベット横に立つ。

時間を見ると、そろそろ着替えて用意をしないと厳しい時間。

必死に大きく息を吸って吐き出す。

これも仕事。

そう思いながら

彼女は艦船彼女は艦船彼女は艦船……

そう何度も頭の中で呟きながら。

「……ベルファスト、恥ずかしいから余り見ないでね」

観念した言葉を出すと、やれやれと言わんばかりのため息をつかれた。

「ご主人様、結局最後には私にその身を委ねるのですから抵抗はしないでください」

「……納得してないからな」

「ええ、今はまだ納得がされてない様子ですね」
今はまだと言われるが、これからも納得しないだろう。
そう思いつつ、彼女を真似て広げた両手にその綺麗な細長い指が絡められていった。

「今日も誇らしき主人様は負けてしまわれたのですね」

ロイヤル寮の裏庭で膝を抱えて顔を隠す俺を慰めるように彼女、シリアスは優しく言ってくれた。

最も、今日もという部分に少し傷ついたが。

「……今日が最後だから」

頑張つてこれた理由を強がりながら呟く。

明日になれば、新しい秘書艦が決める。

明日の朝はベルファストに会うことはない。

朝の洗礼は今日が最後なんだ。

「明日戻られた頃には指揮官様に喜んでいただけるような報告を差し上げることを約束致します」

秘書艦かれ外れてもなお、こうして俺の話を聞いてくれるシリアス。

しかし、外れた事に納得している事はない。

演習で結果を出して秘書艦の席へと戻る。

それが彼女の最優先の目標なのだろう。

その自信あり気な言葉に安心感を覚える。

こうして毎朝会うことを約束しているからか、彼女の顔に懐かしさを感じることもそない。

それでも、見慣れた部屋で見ていた横顔よりもこうして同じ視線になつて隣で座っている横顔は新鮮だ。

ずっと隣で居てくれた艦船の顔すらまともに見ていなかったように感じて少し自分が情けなくなるが。

「……明日かあ」

朝の悩みも大事だが、明日の事も悩ましい。

重くなる頭をますます膝に埋めていく。

「シリアスの勇姿、誇らしきご主人様に見届けて頂きたかったです」
まだ始まってもないのに自分が活躍する前提というのも如何なものなのだろうか。

まあ、それだけ事戦闘に関しては自信があるという事なのだろう。

「ごめんね」

顔も見ずに謝罪の言葉を入れておく。

明日、というか今日の夕方には本部に出向しなければいけない。

船に乗って数時間の長旅の末会いたくもない人達に頭を下げにいかねばならない。

仕事というのは大変だ。

目に見えてわかる面倒な事にも全力を尽くして挑まなければいけないのだから。

本当に気が重くなる。

「指揮官様が本部に行くというのは聞いたことがない話ですが……」

「まあ、普通は行かないよね。」

長時間母港を離れる事なんて基本出来ないし」

仮にも指揮官として艦隊を預かっている身なのだから無理に離すこと等しいはず。

それでも、こうして呼び出しをくらったのは前に比べて遥かに平和になってきたからだろうか。

大きな戦闘もなくなってきたし、他の艦隊からもそんな話を聞かなくなつた。

……平和になつたんだ、皆の頑張りで。

「セイレーンの活動も目に見えて減っております。」

「これも誇らしきご主人様の日々の努力のおかげですね」

「皆の努力だよ。」

俺は何もしてない」

平和になつたら……俺はどうなるのだろうか。

俺は……

「平和、か」

呟いてしまう。

本来ならば希望に溢れたその言葉を。

「もう行くよ。」

準備もしないといけないし」

重い頭を無理矢理上にする。

青い空に大きく輝く太陽が、嫌になるぐらい目立っていた。

そんな光に少しでも近づくと立ち上がる。

「……誇らしき主人様」

「なに?」

ただ、彼女はそれを許してくれなかった。

声に振り向こうとした身体を力任せに自分の方へと引き寄せる。

急な力に不意をつかれて、バランスを崩して倒れかける。

いや、倒れたんだ。

ただ、倒れそうになった俺の身体を倒した本人であるシリウスがその柔らかな身体に向かつて抱き寄せてきたから倒れてないだけで。

硬い地面に転ばされた下半身とは別に、柔らかな身体に包まれた上半身。

特に頭は彼女のその立派な胸に当てられている。

幸運なんかじゃない。

そうするように、彼女がした。

頭に回された腕が、俺を離さないと伝えるように強く押さえつけられる。

「シリウス、痛い!!」

色々と言いたいことがあるが、全てを誤魔化すように文句をつげ言って抜け出そうとする。

だが、非力な人間である俺の力では彼女の腕は動かさなそうだ。ピクリともしない拘束と、強くなる締め付け。

息苦しさと生暖かな柔らかな感触、そして甘い匂いに満たされる。満たされそうになってしまう。

「誇らしき主人様」

彼女の顔を見ることもできない。

それでも、何処か寂しそうなこえが頭上から眩かれる。

「シリアスは例え戦場がなくなった平和な世界になつたとしても、戦艦船としての役目を終えるその日が来たとしても……。」

シリアスは貴方様の隣で永遠を過ごしたいと思っております。

例え、指揮官様がその役目を終える日が来たとしても。

シリアスだけは、役目をなくした貴方様の隣でい続けます。

ですから、どうか……

どうか、シリアスを捨てずに最後まで傍に居させてくださいませ。

メイドとして果たしませんが、これだけがシリアスが誇らしきご主人様に望むたった一つの願いなのです。

どうか、この卑しいメイドの願いを聞き届けて下さい」

……彼女の願いを耳にする。

何も言えない。言う言葉がない。

ただ

「そうだね、聞けるように頑張るよ」

そんな無責任な言葉を言う。

これぐらいなら言ってもいいと思うから。

艦船という、平和な世界には不必要な存在に対して。

平和な世界に不必要な存在からの言葉として、これぐらいしか言いようがない。

彼女もきつとわかってきている。

俺の言葉を聞いてそつと力が抜けていく。

その柔らかな感触から離れると、何処か諦めた様な笑顔が目に入った。

彼女も、艦船達もきつと思うところがあるかもしれない。

平和な世界に対して。

「……誇らしきご主人様、お忙しい中お止めして申し訳ございませんでした」

立ち上がり頭を抱える下げる彼女。

「いいよ、俺の方こそいつもの話を聞いてくれてありがとう」

せめて言えるだけの事を伝えてこの場から離れていく。
逃げるように、離れていった。

頭を上げることない彼女の顔を、もう見ないように見えないように
逃げながら。

結局、複雑な気持ちのまま時間は過ぎていく。

ベルファストは、俺が自室を出て指揮官室に戻る僅かな間に服を汚
した事に怒っていたが、俺の顔を見てから少し静かになっていた。

どんな顔をしていたのだろうか。

余り考えたくない。

新しい服を着せ替えられて、やるのは何時もの事務仕事。

それが終わるとローンが迎えに来てくれた。

ニコニコとした笑顔を引っさげながら。

彼女のために本部に行く。

気が重いが、そんな思いを口に出せない。

多少無理にでも笑顔を作って彼女と共に船に出向く。

演習前で忙しいのに、色んな艦船が出迎えに来てくれた。

その中には、もちろんシリアスもいた。

朝とは違い何時も通りの柔らかな笑みで俺の出向を無事に終える
ように願ってくれた。

船が動く。

色んな艦船達に手を振替しながら小さくなる姿を見ていると少し
だけ寂しくなる。

久々に母港を離れるな。

そう思いながら。

ふとローンが口を開いた。

曰く、テイルピッツから伝言があるそうだ。

そういえば、彼女は来ていなかった。

面倒見の良い彼女の事だから、出向前に二三注意と小言をくれそう

なものだったが。

興味と共に言葉を早くと視線を送る。

鉄血は皆、指揮官の選んだ道に最後まで付き合う

……何のことなんだろうか。

首を傾げて尋ねる俺に、彼女も首を傾げて返してきた。

今日はなんだが、色々考える1日だ。

だが、こんな日ももう終わる。

本部に行ったら簡単な挨拶を終えて休むだけ。

問題は明日だ。

上司に会うのも嫌だけど……。

秘書艦は誰になるんだろうか。

楽しみでもあり、不安でもある。

様々な思いや考えを仕舞いながら、彼女と同じようにニコニコとしてみた。

少なくとも、今は目の前の問題に全力を尽くそう。

そう思いながら。先立つ不安を隅に追いやった。

「指揮官もぎゅ〜ってしてあげますよ」

「指揮官もぎゅ〜ってしてあげますよ」

部屋に入るなりいきなり彼女、ローンはその豊満な胸を強調するように腕を広げながら楽しそうな笑みを浮かべてそう言った。

「指揮官もって、俺の前にだれをぎゅ〜ってしたの？」

「そこで可愛いオフニヤがいたのでぎゅ〜ってしてきました」

見の前の虚空を抱き寄せるようにしながら、感触を思い返しているのかさらにその頬は緩んでいた。

本当にマイペースというか、自由な人だ。

目の前の大人びた、でも何処か可愛さを感じる女性が戦場に立つと豹変するというのが信じられない。

最も、今はそれよりも信じられないことがあるのだが。

「ほらほら、指揮官。」

そんなソファで横になってないでベッドで横になりましょうよ」

そう言いつつ部屋に1つしかないベッドに腰掛けると隣をポンポンと叩いて誘うような仕草をとる。

もう一度言う。

部屋に1つしかないベッド、だ。

「……俺はソファでいいよ」

「もう、最近座りっぱなしで腰が痛いつて言ってるんですか。ちゃんとした寝具で寝ないと駄目ですよ」

「うん、寝たいからソファにするんだ」

本部での宿泊ということ今回充てがわれた部屋はそこまで大きくない。

1人用だろうとベッドと比較的小さい俺が横になっても足が少しはみ出てしまうようなソファが1つ。

後はテーブルの上に簡単な小物類やクローゼットが置いてあるだけ。

それだけでもう部屋の殆どが埋まっているのだから圧迫感が激しい。

最も、これでも広い方なのだが。

「ふふふっ、私は気にしませんから一緒にぎゅゅってしあいながら寝ましようよ」

すぐ隣に誘うように更に強くポンポンと叩く彼女。つい先日ぎゅゅつとされたばかりだからか、変な感触を思い返すと恥ずかしさで一杯になる。

言葉ではなく姿勢で示そうとして彼女に背を向ける。

このまま変にじつと見てしまったら、セクハラなりパワハラなりと言われそうで怖いし。

何よりも、ベッドに誘う彼女の顔をまともに見れない。

自分の意志に反するように、思い返した感触をより鮮明にしようとしてしまうのか視線が少し下にズレてしまう。

女性というのは視線に敏感だと言う。

俺が自分の本能に従っていた事に察するよりも早く彼女は前屈になってよりそのたわわな局部を強調してくるのだ。

うん、既にパワハラやセクハラの類な気がしてきた。

これ以上の冤罪……というよりも、実行犯呼ばわりされないために俺は自分を守るために背を向ける。

「ローンこそ疲れてるでしょ？ ゆっくり休みなよ」

「いえいえ、簡単な検査と点検だけでしたら何も疲れてませんよ」

「そっか、何やったの？」

「ボディチェックと言われて、色んな所を触られてしまいました」

「ぐっ!!」

変な妄想を仕掛けた所を舌を噛んで遮断する。

おかげで変な声が出たが大丈夫。

顔を見せてはいないとはいえ、変に綻んだ顔をもしも見られて何か言われたり思われたりしたらたまったものではない。

少なくとも、俺の変な反応に彼女はキョトンとした顔をしているだろう。

もしくは、からかいの反応に満足してイジワルな笑みを浮かべているか。

天然なのか、性悪なのか。

よくわからないのが彼女の良さでもあり悪さでもあると感じてしまう。

「でも、同じ女性に触られるとはいえ知らない人に色々と触られるのは少し疲れましたかね」

「……なら、ゆっくりベッドで休みなよ」

「いえー！ 疲れた時は可愛いものをぎゅ〜ってしながら寝るのが一番いいんですよ」

「……オフニヤでも借りてきたら？」

「軍備を、ましてや本部の物を私的に使う権限なんて私にはありませんよ〜」

「お願いしてくるよ」

「いえいえ、お疲れ気味の指揮官に鞭を打つような行為はもつと出来ません」

「じゃあ……」

と周りを少し見渡そうとしたが辞める。

庇ってくれそうな物は何も無いのぐらいわかっているから。

「……ふふふつ、私の『お願い』ですよ」

「……………」

嫌に強調された言葉にため息を漏らす。

彼女の場合、本当に意図的なのかもしれない。

少なくとも、俺がその言葉に弱い事くらいは気付いてそうだ。

俺を支えていたソファアーの感覚が徐々に消えるのが本当に寂しい。

出来ることなら、朝日を拝むまではこの硬い感触を味わっていたかった。

眼の前にあるベッドは絶対にこの硬さよりはるかにましなのだろう。

ただ、その感触を楽しむ余裕は俺にはないだろうという予測が優に立ててしまうのな情けないのやら悲しいのやら。

「ほら、ぎゅ〜」

諦めた顔をして前に立った俺だが、ローンにそんな獲物の感情は興

味ない。

そう感じる程には手早く、迅速に俺を捉えるとその豊満な柔らかな感触に押し付けつつベッドへと押し倒された。

「ちよっ!？」

「ふふふつ、あゝ癒やされます、癒やされますよ指揮官」

真つ先に勢いよく落ちた頭をカバーするように配置されていた枕に放り投げられ、次第に落ちた身体は重力よりも先に回された手と彼女の重みによって早くその柔らかさに包まれた。

使い慣れたベッドとは見ただけでわかる程度には貧相なベッドだったが、その程度の感触すらわからなくなる程に上から掛けられた暖かく、優しい感触が全身を襲う。

本当に、本能を抑えるのが難しくなるような感覚が……!!

「ああ、今日は指揮官のおかげでぐっすりと休めそうです」

耳元で囁かれると、その吐息が耳をくすぐって変な気持ちになる。

優しく頭を撫でられるのが変にくすぐりたい。

絡められた両足が生暖かい体温を一際強く印象づける。

頭から足先まで嫌にでも彼女を意識させるように、させられるような体制に我慢が出来なくなりそうだ。

「こんなにも!!… こんなにもくっつくことないだろ!!」

「いえいえ、身体中を触られたのですから、身体中で可愛いものを愛でる必要があるんですよ」

「暴論だ!!」

「ふふふつ、そんなに煩くしてると、人が来ますから静かにしましょうね」

唇に人差し指をツンと付けられる。

優しいお姉ちゃん。

まさしくそんな風に表現するが適切だろう満足気な笑みを見てると、やっぱりイジワルなだけなんだろうなと思う。

楽しんでるのだ。

俺の反応を、俺がどうするかを。

そのスリルが彼女を興奮させているのだろう。

両頬が薄っすらと紅く染まっているのが本当に……。
俺はきつと、彼女以上に。

いや、頬所か顔全体が真っ赤になってるんだろな。

「さあ、明かりを消して一緒に楽しみましょう」

静かになつた俺を見て、次のイタズラのためにか部屋の明かりを消すために俺から離れる。

彼女が離れた瞬間に逃げるといふ選択肢が思い浮かんだ。

からかわれてお終いならまだいい。

ただ、俺にも限界というのがある。あるのだ。

何事に置いても、色々と……!!

なら、逃げてどうする？

泊まれる場所等他に用意されていない。

同じ軍に所属しているとはいえ、俺は違う艦隊にいるのだから。

自室等あるわけない。

休憩所はあるためそこで一夜を過ごす事は可能だ。

明日の昼には帰るし、それまで俺がやる事など何も無い。

俺一人休もうと思えば幾らでも手はある。

だが、ローンはどうだ？

俺が部屋を出て、彼女は諦めてここで一晩過ごすのだろうか？

過ごしてくれるなら別にいい。

俺が何処で夜を明かそうが皆興味ないのだから。

もしも、ローンが逃げた俺を探すように本部を歩き回ったら。

夜な夜な、夜通し徘徊されたら。

特別船という人類の英知の結晶。

その技術を見出した人達が彼女のそんな姿を見たら。

まず間違いなく俺の責任になるだろう。

彼女達艦船のコンディション管理も俺の立派な仕事だから。

それが出来てないと、注意を受けてしまう。

それすら出来ていないと言われてしまう。

……それは、嫌だ。

ほんの少しとはいえ持っているプライドがそれを許してくれない。

これだけはあると思って毎日頑張っていることを否定されるのは、嫌だ。

「ああ、明かりを消すと何も見えないですね」

結局俺はその場から動くことなく固まっていた。

薄つすらと見えていたローンの顔も近づくとはつきりと見える。

変わらぬ笑みを浮かべながら、楽しむ彼女の顔が。

不思議だ。

さつきまで変に興奮していたのに、今は抱き寄せられても何も感じない。

嫌な事を考えていたからだろうか。

本部にいるという事実を思い返して緊張感の様なものも共に思い返したのかもしれない。

それとも、明日を思ってたのか。

なんにせよ、さつきまでの変な雰囲気を一気に崩してくれたのはありがたい。

あのままここにいたら、それこそどうなるかわかったものでもなかったから。

「ん？」

動かなくなつた人形を不思議そうに見つめるローン。

少しだけ静かに頭を撫でられる時間が出来た。

心地良く撫でられているせいか、何だか無性に眠くなってきた。

そういえば、3大欲求の中でも睡眠欲が一番強いと聞いた。

特にここ最近の仕事が忙しいし朝から騒動があるしと満足に寝た気がしない。

こんな時でも皆に助けられたな。

最近の騒動で色々な艦船達と改めて触れ合うことができた。

触れ合う機会が出来たのか、意図的に反らしていたのか。

今となってはよくわからなくなってきた。

俺が居なくても回る現場に満足していた所は事実。

それは俺がきちんと見ていなかったただけなのかもしれない。

なんて考える事が出来たのはいいきっかけだったかもしれない。

「指揮官は今日は何をされていたんですか？」

「……何って、特に何もしてないけど」

「もう、それじゃお話が進みませんよ」

わざとらしく頬を膨らませるローン。

俺を寝かしつけてくれないのか、気がつけば撫でられた手は離れて
変わりに隣に横になってそつとその胸に再び俺の頭を押し付ける。

……一瞬とはいえ眠気が覚めた。

本当に一瞬。

一瞬だけ!!

目を見開いて驚いたけど、今はその柔らかさが以上に心地良いと感じてしまう。

甘い匂いがリラックスゼーションの役割でも担ってくれているのかもしれない。

変な事を考えないように思考を必死に母港にいる皆に戻す。

本当に、皆のおかげで色々気づけた数日間だった。

「母港の現状を伝えただけだよ」

「それ以外は何かされたんですか？」

「うーん……昔お世話になった人に会ったぐらい？ ローンの現状観察と確認が主な内容だったから俺は特に何もやらなかったよ」

「なら、私がない間は何処で過ごされてたのでしょうか？」

「何処って……ここだよ。暇だったから皆のSNS見た」

「ああ!! 私も見ましたよ」

「あつ、と感じたのは口にしてから。」

今はまだ、その話はしたくなかったのに。

思い返したくない現実を口にしたせいで自分から目の当たりにしてしまふ事となる。

「反らしていた明日という現実が。」

「残念でしたね指揮官。」

「シリアスさんがMVPとれなくて」

「……ああ、本当に残念だよ。」

嫌でも来る明日から逃れ様とすると、次第に顔に当てられた柔らか

さが頭に響く。

しまった、なんて感想も抱けぬまま俺は、直ったおもちゃの反応に満足するローンの瞳からも目を反らした。

やっぱり、早く明日にならないかな。

このままだと、違う意味で色んな人に怒られ……いや、怒られるどころで済みそうじゃない。

始末書ですら終わらないかもしれない。

逃げようとする身体を思いっきり押さえつけられながら絡められた両足。

どうやら俺は再び完全に拘束された様だ。

明けてほしい、でもやっぱり明けてほしくない。

そんな複雑な夜はまだ続く。

目の前の優しいお姉ちゃんと共に。

「残念でしたね、指揮官。本当に残念な結果に終わっちゃいました」

「残念でしたね、指揮官。本当に残念な結果に終わっちゃいました」
優しく、でも何処か誘いに乗りたくないような甘い言葉を耳元で
ローンは囁いた。

何時も見erような慈悲に溢れたような笑顔を浮かべているのか。
それとも、弱った獲物を見るような狡猾な笑みを浮かべているの
か。

後ろから抱き寄せる手が少しだけ強くなる。
まるでこつちを見てと、互いに向き合って欲しいと言われているよ
うだ。

いや、そう思わせて俺がどう反応するかを楽しんでいるのかもしれ
ない。

わからない。

本当に、彼女の考えてることが、何も。

母港で見るような優しいお姉さんといった姿も彼女だし、戦場で見
せるという暴君のような姿もまた彼女自身だ。

彼女を見てこなかったからこそその感性に共感が出来ないのか。

見ていたところで出来なかったのか。

今となってはそれすらもわからない。

ただ、俺が今わかるのは何時までも無言で無反応を示す俺の姿に
ローンが満足していないという事だけ。

早く、早くと言うように徐々に強くなる力と、それを忘れさせてく
れるような柔らかな感触が後頭部を埋めていく。

大分眠気が去ってしまった。

明日になるのが怖くなったからだろうか。

それでも、柔らかな感触を楽しもうという気にすらならないのは今
も怖いという事なんだ。

「残念って、何が？」

わざとらしくとぼけてみる。ちよつとした強がりだ。

そんなの彼女は優に見抜けるだろうに。

「だって、どうせ指揮官の事ですからMVPをシリアスさんにとってもらって明日からもいつも通りの日常ですよ〜ってしたかったと思いましたが」

「そう？ そう思ってたんだ」

「あら？ 違ったんでしようか？」

何も違いはしない。

ローンの言う通りすぎて言葉が出ない。言い訳すらも。

「初めから俺の秘書艦はシリアスだけだって言っちゃえばこんな事にならなかったのに」

「……でも、それだと秘書艦になりたいって言ってくれてる艦船達を傷つけちゃう」

「ふふふつ、やっぱり指揮官はお優しいんですね」

悪い事をして正直に謝った子供を諭すように、彼女は優しく俺の頭を撫でてくる。

「頑張ってる良い子ですねー」とわざわざ付け加えながら。

「でも、本当に艦船達の事を考えてそうしたんですか？」

「……………」

何も言えない。

ただ、顔を少しズラして横目で彼女の事を見る。

とぼけた顔をして、明らかに考えてますとわざとらしく顔に出す彼女の顔と目があった。

待っていたのだろう。

俺の視線が彼女を向く事に。

俺が彼女を直視する時を。

獲物が罠にかかったのを見て、ローンはニツコリと優しく笑う。

狡猾に、笑う。

「嘘つき」

たった一言で俺の身体がピクリと一瞬震えた。

見たくない現実から逃げようにももう遅い。

俺を締め上げていた手も、優しく撫でていた手も今は俺の料頬に添えられて彼女の方へ無理やり倒され動かない。

異様な程冷たい手。

本当に生き物なのかと疑いなくなるような。

そんな思考が働くとも知恵熱を出さないためなのだろうか全身に嫌な汗をかきはじめてしまう。

「嘘ばかり」

追い打ちのような言葉に泳ぐ視線を押さえつけて睨むように向き合う。

「嘘じゃないよ」

「艦船達のためにつて、本心なんですか？」

「本心だよ、嘘なんかじゃない」

「忙しいと言って部屋に籠もって皆の顔すら見ないの？」

「……でも、誰かが仕事をやらないと困るのは皆だから」

「直接来た人の話だけ聞いて、細かい不満は無視をして」

「全てを適えるなんて不可能だよ。わざわざ言いに来た人の大きな不満を優先しただけ」

「すぐに叶えず自分で決めず。」

「先送りにする事ばかり口にして」

「……あれが一番不満が残らないと思っただから」

「皆に決めさせて、自分はその結果に不満を思っても口にしない」

「……大事なのは皆だから」

「嘘ばかり」

言葉が震えてるのがわかる。

ローンの一言一言を考えもせずに口から返答が出てしまう。

ずっと考えてた、言い聞かせてきた言い訳だから。

「本当は自分で決めたくないだけなのに」

「……そんなことないよ。指揮官っていう立場なんだから。」

簡単に事を決めるのはいけないけど、最後はやっぱり俺が決めるよ」

一番震えた言葉だった。

「本当は決めるのが怖いんでしよう?」

「……何でそんなこと言うの?」

上司に、言ってしまうえば所属する母港の責任者に対してとは思えない質問。

俺個人に問いかけているのであろう。

余りにもピンポイントすぎる追求から逃してくれたのはやっぱり彼女だ。

完全に主導権を握られていた。

「このお部屋狭いでしょう。」

建造されて出港になるまでの間は私はここで過ごしてたんです」

お互いの問いから生まれた彼女の話に耳を傾ける。

少しでも気をそらしたいから。

「私を作るために集められた鉄血の皆さんのデータ。

皆が皆、あなたの事を思っていた。

会いたい、話をしたい、抱きしめられたい、抱きしめたい、一緒にいたい、傍にいたい、離れたくない、壊したい、愛したい、愛されたい。

様々な艦船達からのデータなのに、この思いは皆一緒。

会ったこともない人の事を思い続けなきゃいけなかった」

特別計画船

各陣営に所属する艦船達のデータを集めて作ることとなった艦船。

ローンならば鉄血の皆のデータを元に作られた。

対象とするのが普通の人ならば、戦闘データだけを集めて作られたのだろう。

しかし、彼女達は普通とは呼べない。

作られた彼女達だからこそ、様々なデータを集めて元にされたのだろうか。

それが、可能なんだろうか。

過去を懐かしむように目を細めながら与えられていた小さな部屋を見渡しつつ、何処か楽しそうに彼女は続けた。

「顔も見た事もない人のことを気になっても仕方がないですか

ら、お願いをしたんです。

配属される指揮官の事を少しでも知りたいて。

「そしたら面白い資料を貰いました」

正直な話、最後まで聞かなくても見当が行った。

だからこそ、諦めたようなため息がこみ上げる。

色々と、諦めた。

「ふふふっ……」。

面白かったですよ、指揮官の半生をここで何度も何度も何度も何度も読み込む時間は」

「大したこと書いてないと思うけど」

「ええ、大したこと書いてなかつたですよ。」

ただ、軍に所属する少し昔の事が書いてあつただけ」

その少し前を知られるのが一番嫌なわけで。

先ず見せてはいけないものだと思うんだが……。

それを見せたのは、俺の過去なんてどうでもいいも思われているからか。

それとも、彼女の機嫌取りは人の個人情報なんかよりも遥かに優先順位が高いからなのか。

「可愛そうな指揮官。」

本当に可愛そう。

自分が何気なしに選んだ事のせいであんなにも苦しい思いをしただなんて」

憐れみの視線、同情の言葉。

その全てを気泡に帰すような口元の笑み。

与えられたおもちゃをあそぶ子供のような無邪気な笑み。

ローンは何をしたいんだろうか。

俺を使つて遊びたいだけなんだろうか。

彼女の冷たい体温が俺の心を冷やしてくれる。

何を言われても、何を見ても感じない程には。

「ねえ指揮官。」

資料には箇条書きで大雑把な事しか書いてありませんでした。

ですから、教えて下さい。

何をしたのか、何でしたのか。

どうしてあの日、あんな事を選択したのか」

「……………。人に話すような事じゃないよ」

考えて、拒否をした。

言うかどうかじゃない。そんなの初めから決まっていたから。

考えたのは、何で俺はあんな事を言ってしまったのか。

あんな事をしたのかという話。

今となつては、自分でもよくわかつてなかった。

ただ、俺は――

「そんなことないですよ。

私に話したらきつと楽になりますから」

「楽に？　なんで？」

「だって、私は指揮官の事を誰よりも知ってますから。

知った上で、あなたの事が大好きなんですから。

そんな私に話したら、きつと心が楽になりますよ。

優しく抱き寄せられながら。

私の胸で泣きながら。

私だけの前で、私にしか出来ない話。

一生懸命話すあなたをあやしなから、私は一字一句聞き逃すことな

く共感しますよ。

今あなたの傍にいる人で一番あなたの事を知ってる私は、あなただ

けの味方ですからね」

せつかく冷たくした心を今度は暖めるような笑顔を向けられる。

冷やしたり温めたりと本当に何をしたいんだろうか。

わかるのは、彼女なりに気を使ってくれてるかもしれないという事

だけ。

知ってるからこそ、俺の事を心配してくれてるかもしれないという

事。

冷たい手が頬から離れると、全身で温めようと今度はまた抱き寄せ

られる。

抵抗する気も。力もなくされるがままにそれに応じた。

「ああ、可愛そうな指揮官。」

初めてあった時、頑張ってお仕事をする姿に私は惚れ直しましたよ。

あんな事があつたのにまだ私達を好きでいようとしてくれる姿に、惚れ直しちゃいましたし、惚れました。

ああ、私の好きな人は頑張り屋さんの良い子なんだなって。

あんなお仕事を頑張って努めようとしてるんだなって」

「ああ、俺の仕事のことも知ってるんだ」

「はい、もちろん!!」

それは本当にどうなんだろうか。

当事者でもある彼女に伝えるのは……本当に特別扱いを受けているんだと感じた。

「セイレーンの出現が減って薄れていった驚異。

でも、完全に無くなったわけでもないからこそ艦船の力は欲しい。謎に包まれたその技術の理屈も。

そんな思想の元で作られた艦隊。

艦船達の研究と力をより知るために作られた自由な母港。

指揮官という飾りの元でそれぞれが好きに考え、戦う自由な研究所」

「飾りは……傷つくな」

「実際そうじゃないですか」

まあ、実際そうなんだけど。

ただ、傷つくと言った俺の言葉に気が触つたのか優抱き寄せられる力が少しだけ強くなった。

「私は皆が知らない事を一杯知ってますよ。

艦隊の事も、あなた事も。

だから、ほーら、私にだけでいいですから話してください。

いいじゃないですか、既に事の顛末は知ってるんですから。

今更隠すような事はないですよ。

ただ、聞きたいだけ。

あなたの口から直接聞いて、私達だけの秘密にしたいんです。教えてくれないと、私が知ってる色んな事皆に言っちゃうかもしれないよ」

「べつにいいよ」

ああ、よかった。

ようやく彼女に一矢報いる事ができた。

予想外の言葉に呆けた顔をするローンを見て、少しだけ勝ち誇れた。

「べつにいいよ、話しても」

「……皆指揮官の事を嫌いになるかもしれないよ」

「それは……困るけど、それでもべつにいい」

困った……というよりは、少しでも怒った様子だ。

浮かべた笑みこそ変わらないが、ローンの雰囲気そう感じさせた。

ああ、戦場ではこの笑顔のまま狂言を吐くんだろうか。

そりゃ駆逐艦の子たちが怖がるわけだ。

でも今は、その顔が見れて少しだけ風向きを感じた。

艦隊の話で俺の方に風が来た。

彼女の話が、彼女の聞かされた全てなんだろう。

それももちろん皆には秘密だけど。

皆は他の母港もこのこと大差ないと感じてると思うから。

他はもつとちゃんとした指揮官が率先して指示を出して戦場に立ち、皆を引っ張るだろう。

実際、そう聞いている。

でも、ここはそうではない。

増えすぎた艦船達を管理するための母港。

それぞれの特色を出すために、彼女達を主役として立てて俺はその引き立て役。

作戦も、戦術もそれぞれが得意な艦船が前に立ち指揮を執る。

俺はそれを聞いて許可を出すだけ。

考えず、思考停止で。

最悪な指揮官であり、それが仕事だ。

だから俺が指揮官なんだけど。

彼女はそれが言いたいんだろう。

選ぶ事が嫌になった俺に対して、全てを知る自分が居ると伝えたいのだろう。

でもね、ローン。

俺の事は知ってるかもしれないけど、母港の事は全部は知らないよ。

だってその並べた理念も飾りなんだから。

「ローン、俺は皆の事が好きだよ」

「……本当ですか？」

「うん」

「あんな事があつたのにな？」

「……うん、今は好きだよ」

「今『は』ですか」

「うん」

満足したのだろうか。

少なくともさつきまで肌で感じていた感情は鳴りを潜めていた。

口にした事がなかった。

皆の事が好きだなんて。

する機会もなければ、する気もなかったのかもしれない。

俺の事を知ってるからこそ、気になったのかもしれない。

……余計な事を知ったから。

「ねえ、俺の資料には何て書いてあつたの？」

「えっ？… えっと……」

指揮官が住んでた町がセイレーンに襲われて住んでた人は指揮官を除いて全滅したと」

「そう、なら俺が話す事はないよ」

知られて困るような話ではない。

話したくないのは気持ちの問題が大きい。

けど、中途半端に知られてたら困る。

見栄を張ったが言われて困るのは俺だ。

何よりも、彼女は最悪にも中途半端に知られている可能性がある。中途半端に知って、全部知ってるという顔をされるのは一番困るんだ。

だったら、言わなきゃいけない。

言い慣れた言い訳を。

「で、ですが、資料には指揮官がセイレーンを手引した可能性があるとか……だから、軍に入れて監視してるとか」

「そんな人間が指揮官になれるはずないでしょ？」

「そうなんですよね、そこが知りたいんですよ」

「そこは俺もよくわからないけど……あの日の事は話せるよ。

ただ、たまたま——

たまたま、遠くの街に遊びに行つた日にセイレーンが現れて襲われたんだ」

何度もしてきた真実を話す。

だけど、誰も聞く耳も持ってくれない。

だからこそ、話したくないんだけど。

セイレーン

突如現れてこの世界の海を支配した侵略者。

アイツらのおかげで世界規模で大パニックになった程だ。

今となっては艦船達のおかげで平和になってきているが。

それでも、あいつらが奪っていったものは大きい。

見せしめと言わんばかりに海沿いの町——俺が住んでた町を含めていくつもの都市を攻撃して占拠してたのだから。

簡単に言ってしまうえば、俺は都合が良すぎたのだ。

普通の平日。

何時もなら学校に通う日だったが、たまたま知った都会の景色を一目見たくて必死に貯めていたお小遣いで学校をサボって行ってしまった。

帰ったら怒られるだろう。そんな甘い頭だった。

これが休日や祝日だったらよかったのに。

早く早くと我慢が出来ずに溜まった翌日に町を出てしまった。
セイレーンという驚異がその日、現れてしまった。

突如として襲ってきた支配者達の魔の手から逃れてしまった。

俺1人だけが。

都合が良すぎた。

平日なのに町を抜け出し、たった1人生き残った人間の言葉に誰も
耳を貸さない。

町が襲われたのを知り、皆の無事を確認しようにも助けを求めた人
達は俺を怪しげに見つめて拘束する。

こいつが手引した、と。

人というのは、理解が出来ない問に対して簡単な回答を用意したが
る。

俺という人間に全ての罪を押し付けて、答えをわかりやすくした
かったのだろう。

ただ証拠等何もない俺が罪に問われることもなかったが。

それでも、信頼が無いというのは一種の罰だ。

艦船という突如現れた、さながら世界の救世主たり得る存在が現れ
るまでの長い間俺は拘束されていたし、その後も軍から抜かれる事は
なかった。行く宛もなかったし。

ちやうど良かったと思えばよかった。

けど、長すぎた。

せつかく手に入れた小さな自由よりも、永遠のように感じた閉じら
れた部屋の中で考え続けた言葉の方が俺の心を埋めていく。

何で俺は、町を出ていったのだろうか。

出ていかなければ、皆と一緒に死ねたのに

何で俺は、人に助けを求めたのだろうか。

助けを求めなければ、こんな目にあわなかったのに

たった2回の選択。

この選択が、俺の全てを変えて、奪った。

たまたまだ。

たまたま、出ていった日と被っただけ。

助けを求めるのはしようがない。
助けがなければ、生きていけなかつただろうから。
そこまでして、生きていたいかと言われたら、NOと言ったのだから。
うけど。

あとは周りと変わらない。

軍人を希望して入隊した人達はガタイがいい。

俺みたいな小柄じゃない。

それでも、俺もやる事は変わらない。

未知の勢力と戦うために志願した人達は知恵がある。

俺の様な子供じゃない。

それでも、学ぶ事は変わらない。

身不相応な場で、地獄のような環境で過ごすことしか出来なかつた。

仲良く話せる人なんて片手で数えられる程だ。

皆が皆俺をスパイと罵ってくる。

何も知らない、無実な俺を。

わかりやすい罪の形に押しはめようとしてくる。

そんな地獄が過ぎると、この飾りを貰った。

お飾りの称号を。

「……ああ、可愛そうな指揮官」

一通り話し終える頃には、彼女は満足気に笑いながら子供をあやそうように抱き寄せながら頭を撫でていた。

彼女の冷たい手が、今度は心地よく感じる。暖かな身体がよりそれを引き立たさせていた。

「それで、なんで指揮官になれたんですか？」

「……そんなの俺は知らないよ」

「むー、そこが知りたかつたんですが」

可愛らしく頬を膨らませるローン。

怒っている素振りを見せて入るが、そうでもなさそう。

少なくとも、俺の話を直接聞けてご満悦という様子だ。

「……眠くなってきたよ」

既に目を跨いだのを見ると思わず呟いてしまう。普段ならもう少し起きているが、人肌が身近にある事に安心感を覚えてしまっているからだろうか。睡魔が強く俺を引き寄せる。

「……そうですね、本当は話したいことがまだありましたが、また今度にしましょう。」

ベツタリとくつついていたシリアスさんから離れる事になりましたからね、お話しする機会は一杯出来そうですから」

そうか、もう明日じゃないのか。

薄れていく意識の中、やってきてしまった今日という日が気分を憂鬱とさせた。

今日からガラリと変わる。

傍にいる艦船が変わるだけで、きつと日常にも強く変化を与えるだろう。

……嫌だなあ。

本音を口に出さないように口を重く閉じる。

首を動かすのもおっくうだ。ちらりと上目遣いで彼女を見る。

可愛らしく映ったのだろう。

「もう、誘ってるんですか!？」と興奮気味で強く抱き寄せられた。

暖かさと包まれる柔らかさに心地よさと変な悪寒を。

彼女の満足気な笑みに気持ち悪さを感じた。

特別計画艦とはいえ、使われている技術の大半はブラックボックスだ。

セイレーンという未知の脅威から得られた技術の結晶であるキューブから生まれた、未知の存在。

俺から家族を、友人を、自由を奪った存在の力。

そんなこと知らなかったし知りたくなかった。

KAN—SEN

人類を脅かす驚異に対して現れた救世主。

初めてそれが現れ、セイレーンを撃退したと聞いたとき震えた。

神がこれを人類に差し出したというのなら、身も心も捧げようと覚悟した。

だからこそ、全てが嫌になりつつも頑張れた。
何も出来ない、艦船達が統べる事となる艦隊のお飾り指揮官だろうと構わなかった。

眼の前でセイレーンを倒せるなら。
ささやかだろうと復讐できるなら。
よかったのに。

俺が捧げた神とやらも、元を言えばセイレーンなんだから。
全てを知った時にはもう遅かったけど。
神を呪えるのなら、全てを差し出してもいいと今でも思う。
ここでは俺が皆を見るんじゃない。
皆が俺を見る。

セイレーンが俺を助けるために勢力を集めるなら、手厚い艦船達がそれを退ける。

そんな構図にするために。
セイレーンとセイレーンの力の欠片たちがぶつかる場所。
意味のない餌をぶら下げる場所。

魚はそんなものに興味を示さないだろうに。
選ぶ事も、指揮することもない。
俺にそんな権利はあるはずなのに、ない。

艦隊の皆はそれを知らないけど、俺は知っている。
ここが、誰のための艦隊なのか。
何をやる艦隊なのか。

指揮官として、知っておかなければならない秘密。
誰にも言えない秘密は、まだあるのだから。
重くなる瞼を閉じる。

嫌な事を思い返した。
だから、ローンの事を不快に感じた。
忘れようと閉ざした気持ち。

一度思い返したら、中々元に戻せない。
彼女はそれをわかっていたのかもしれない。
俺の本当の気持ちに。

やっぱり、嘘つきなんです
ね。そんな言葉が聞こえた気がした。

「急にごめんね」

「急にごめんね」

困ったような、照れているような感情を隠すように笑いながら誇らしきご主人様は私の、シリアスの部屋に入った。

非番という普段は何をしていいかわからない1日。

気まぐれに散歩をしたり、他の方々とお話をしたりと平和に過ごす事が一般的とされていますが、シリアスの落ち着く時間は指揮官様の傍に居る時。

何時もならばそう言って仕事に励む誇らしきご主人様の傍でゆっくりとくつろいでいる1日。

最も、仕事の日でもやっている事は変わらないのが傷ではありませんが。

しかし、そうはいきません。

今日：：ひいては、今後は。

予定通りならば誇らしきご主人様は出向されており、帰宅は夜になると聞いていました。

今はまだ昼手前。

やる事もないため、早めの昼食を取りに出向こうかと思っていた矢先に聞こえたノックの音。

他のロイヤルの方々かと思えば、そこにいたのは何かを隠すように笑っている誇らしきご主人様の姿が。

余りにも急すぎる事態に驚きつつも、来客者を外で待たせるのも無礼なもの。

指揮官様を自室へと案内した。

聞けば、後はローンさんお一人で事が済むため無理を言っただけに帰ってきたとのこと。

此方から理由を尋ねなくても指揮官様はそう矢継ぎ早に言った。

まるで、聞いてもいない言い訳を言う子供のように。

しかしなぜ、シリアスの部屋に来られたのでしょうか？

深くは聞かない。

ただ、来てくれたという事実でシリアスは——
会いたかった。

片時も離れたくないという気持ちが強く、抑えれない。
会いたくなかった。

気持ちだけで常に傍に居られるとは限らないと見に滲みたばなり
でしたから。

様々な気持ちが複雑な形になり、歪に歪むのを感じます。

その気持ちを整える間もなく現れた指揮官様。

酷い方。

それでいて、とてもお優しい方。

本当はいけないと思いつつも、落ち込んだシリアスの前に現れた事
の意味を見つける。

駄目なメイドをその優しきで包んでくれるのだと。

指揮官様のお手を取り、そっとベッドへと誘導する。

置かれていた椅子を指さされていますが、せつかく体と心を休める
ベッドがあるのに椅子でするなといけません。

都合のいい言葉を並べながら、ベッドへと導くとその縁へと座られ
る。

体裁を保つという言葉をベルファストさんから指導を受けている
際に教えていただきました。

榮譽を損なわずに事をなす様。

メイドとしての体裁を保つ為にもと指導していただきました。

誇らしきご主人様。

その名誉に傷をつけないように事をなしたいと言うのであれば。

このシリアス、貴方様に慰めてもらう為ならば如何様な演技もいた
しましょう。

縁に行く指揮官様との距離を更に縮め、普段から時折チラチラと見
られる胸部を前に出し、顔を近づけていく。

「誇らしきご主人様、傷ついたシリアスの為に——」

「話したいことがあるんだけど」

何かを察したように言葉に割り込む様にシリアスは

「……誇らしきご主人様の心身共に安らぎを与えられるのがメイドたるシリアスの努め。」

指揮官様、シリアスの為にと思つて何なりとお話ください」

少なくとも、メイドとしての体裁を保つ事は叶ったと思ひましよう。

顔を赤くする誇らしきご主人様。

きつとシリアスも、同じぐらい顔を真っ赤に指定るのでしよう。

違いがあるとすれば、彼の目には薄っすらと隈があるということぐらい。

指揮官様の話は深く要領を得るには断片的すぎるものだった。

言えない事もあるのでしよう。

ただ、察しがついたのはシリアスが知らない事を、知ることもできない事をローンさんが知っているという事。

それを使つて誇らしきご主人様を傷つけたという事。

……許せない、とあの方はよく口にすると言いますが、この件に関しては此方がそれを伝えたい。

そんな気持ちに過敏に反応するように、誇らしきご主人様は「俺が悪いから」と言つて宥めようとする。

彼の手前、落着いてるように装うが気持ちは全く収まらない。

様々な感情をぶつける先にと余計にローンさんを悪く思つてしまう。

この艦隊で誰よりも傍にいた。

そんなシリアスですら知らない、知り得ないことを知る事を

どんな形であれ、それを共有する事を

嫉妬してしまう。

顔に出ていることをわかつていても、隠すすべを知りません。

「温かい物をお持ちいたします」

来客者を持って成すには余りにも遅いタイミングでの声かけでした

からか、指揮官様は気まずそうにされる。

それとも、シリアスの顔を見るのが、でしょうか。

ただ、求めていた言葉が帰ってくる。

「甘いのが飲みたいかな」

心配そうに見つめる指揮官様を部屋に置いて紅茶を淹れに行くことにした。

教えられた通りに、美味しい紅茶になりますようにと願いを込めて。

あわよくば、これが最後の機会にならない事を祈りながら。

ベルファストさんに教授して貰ったことを必死に思い返していく。

キツチンには他のメイド隊の方々もいらっしやった。

軽い挨拶を交わしながら、用意を進めていく。

誰かに見られていた方が、間違いがあつた時に教えて貰えるというもの。

最後になるかもしれないのだから、せめて美味しい紅茶を頂いてほしい。

指揮官様の事を思い浮かべながら過程を思い返す。

学んだ中で一番に驚いたのは、紅茶を注ぐ前にカップを温めておくという事だった。

最も、作法の中でも常識に値するものらしく、驚く私を見てベルファストさんは呆れた顔をされていた。

曰く、入れ物が冷たいと温かい紅茶のせつかくの香りや風味が損なわれてしまうからとか。

美味しいものを美味しく出すためには、周りのものから念入りに手間を掛けなければいけない。

全ての事が全て順次良く出来て初めて美味なるものが主に配られる。

それがメイドとして抑えなければいけないこと。

そう教えられました。

周りのことから、周囲のものから抑えていかないと大切なものは手

に入らない。

そう言われているような気がした。

シリアスが欲しい物は、初めから得ていたもの。

秘書艦として誇らしきご主人様の傍に、誰よりも傍に佇みその一挙手一投足を見届ける事。

そのためのらば、誰に何を言われようとかまいません。

初めて出会った艦船だからと言われようが

秘書艦としてのスキルがないと言われようが

メイドとして落ちこぼれていると言われようが

かまいません。

誇らしきご主人様の傍に居られる、それだけが私の全てであり幸せだった。

そう思える。

今でも、何時でも。

ベルファストさんは凄い方だ。

ロイヤルメイドのメイド長としてメイド隊を率いる手腕。

それは、クイーンエリザベス様も認めるスキル。

ロイヤルだけじゃない。

他の陣営の方々も、彼女の能力の高さは勝っている。

彼女が秘書艦として収まれば、周りの不満も出づらいのだろう。

周囲の者から手を回している彼女なら。

ただ、彼女も誤算はあったと思います。

秘書艦選びが演習によるMVPを取ったものという選考になったのだから。

もつとも、そうなつても表情一つ崩さずに余裕を持った笑みで事を行末を見守っていたベルファストさん。

きっと、他の手もあるのだろう。

シリアスのように、欲しい物を欲しいと願う事しかしないタイプではないのだから。

羨ましくもあり、妬ましくもある。

彼女の一言さえなければ、今頃――

今も、こんな不安を持たずに誇らしきご主人様と共に過ごす時間を
楽しめたのだから。

温まったカップの温度を保つように紅茶が注がれる。
目分量はいけないこと。

確りと測った砂糖を加えてゆつくりと混ぜていく。

最初は纏まった物がゆつくりと落ちていく。

でも、次の瞬間にはバラけて目に見えなくなる。

残ったのは色も香りも変わらない紅茶が1つ。

中には砂糖という不純物が入ってるのに、その姿は何もかわらな
い。

綺麗に消えた。

なくなつた。

目に見えない程に、感じ取れない程に細かくバラけてなくなつてい
く。

「皆消えればいいのに」

自分自身急に何を口走ってしまったのかわからない。

ただ、自分の失言を誰かに聞かれないか慌てて見る。

周りの方々はそれぞれ仕事に夢中だったり、お話に熱心になられて
いる様子。

幸い、誰にも聞かれていない様だ。

安心感から来る息を大きく吐いて紅茶を手にする。

温かい物を冷めない内にお出りする。

これぐらいの当たり前はシリアスにもあります。

挨拶をしながら、そつとその場を早足で後にする。

これ以上、不快な気持ちを皆様に向けたいためにも。

後ろからコソコソと声が聞こえた気がした。

シリアスの事を話しているのでしょうか？

：：：だとしたら

だとしたら、せっかく抑えようとしてるこの感情を誰に向ければい
いのでしょうか？

「誇らしきご主人様、今紅茶を」

そこまで言って気づく。

シリアスしか使う事のないベッドの隅に丸まるように、指揮官様は休まれていた。

そういえば、昨晩は余り眠れなかったと話されていた。

普段から睡眠だけはきちつと取られていた方だ。

そこにだけは、こだわりが強かった。

ただ、最近はベルファストさんに朝から無理矢理起こされる日々が続いているとも話されていた。

疲れが溜まっていたから、こうしてシリアスの傍に来ると安心してしまふのだろう。

そう思うと、シリアスの気持ちも少しだけ楽になる。

「誇らしきご主人様」

ベッド傍のテーブルにカップを置いて、その頬に手を添える。

温かい体温が伝わる。

シリアスの冷えた心を温めるように、肌から肌へと。

「ずっとお慕いしております」

ただ、指揮官様の傍にいるという事実だけでシリアスは満足してしまふ。

それ以上を望みたい。

そんな事は毎日のように夢見てる。

ただ、それはいけない事。

私はメイドで、彼はご主人様

私は艦船で、彼は指揮官

彼は人で――

「…誇らしきご主人様。

どうか、どうかその慈悲深い心でこれからのシリアスの行いをお許し下さい。

卑しいメイドのワガママを。

何度目にのるかもわからないワガママを。

その深い心でお許しを」

そつと誇らしきご主人様の唇を自分の唇で合わせていく。ベルファストさんには感謝をしなければいけない。

周りの物から用意をしていく

それがこんなに素晴らしい教えだとは。

気づけば、シリアスは指揮官様と向い合せになるように横になる。

両頬を確りと、だけど優しく両手で包んで。

もう一度、もう三度と唇を重ねていく。

キスという前段階だけでこんなにも身体が暖かくなる。

冷え切った気持ちが暖まるのを感じる。

こうしてシリアスのベッドで身体を重ねるのは二度目だ。

あの時も、こうしてシリアスが無理矢理に――

ああ、指揮官様

規則正しい、暖かい吐息が鼻に、口に触れる。

目に触れると少しくすぐったくて口元が緩む。

もつと、もつと感じたい。

その顔を自分の胸に押し当てながら、小さく小さく呟く。

聞かれないように、聞こえるように。

願うように、祈るように。

語るように、騙すように。

「誇らしきご主人様、傷ついたシリアスの為に――」

どうか、どうか

その身をシリアスにお貸してください。

「お主は何を戯れておるのだ？」

「お主は何を戯れておるのだ？」

頭上から降り掛かる心配そうな声にチラリと目線を上げて応える。彼女、三笠さんは少し気まずそうにしながら、その瞳は俺の顔色を伺うように。

何時もより少しだけぎこちない笑みで俺を見下げていた。

「……大丈夫です」

甲板の上で身体を小さく丸め、必死に口を抑えながらのこの言葉は信用に値しないのも当然。

とりあえず、ポーズだけは取ろうと思いついた傍にあつた柵を掴んでなんとか立ち上がる。

船に乗ったのは初めてだ。

海沿いの生まれだったから何度も遠目で見てはいたけど。

波に揺れて浮かぶ様を眺めながらの登下校していた。

そんな事をふと思いつくと、もう戻れないと悟つて嫌になる。

揺れている、なんて思いながら見ていたけどこんなにも不思議な揺れを自分が体験する事になるなんて思つてもいなかった。

元々乗り物には強い……と言いたいが、乗り物に乗った事自体経験は少ないから強いかどうかはわからないけど。

それでも、車なんかは何時間と乗つていても特別気分を悪くすることとはなかった。

ただそれは、何時も誰かと乗っていたから。

誰かと話していたからかもしれない。

誰かと話していると、口を開いていると気が紛れて乗り物酔い対策になると聞いたことがある。

それは誰が教えてくれたんだろう。

誰に言われたかは置いといたとしても、その教は本当にそうなのかもしれないと身を持って体験するのはこれが最後にしたい。

話し相手がいれば、気は休まるんだろうけど。

ただ問題は、ここで誰かと話したいと思えない事。

話し相手がいないのだ。

人はいる。

ただ皆俺の事を腫れ物のように扱う。

話したくなんてないのだろう。

セイレーンと繋がってる、なんておかしい疑惑を掛けられている俺に。

俺が誰かと話す時は決まっている。

相手に呼び出された時だけ。

ストレスのはけ口に、人の目のない所に呼び出される時ぐらいだ。どうしてこうなったんだろう。

何時も思い、悩む。

ただそれは、思っておしまい、悩んでおしまいというわけではない。そう考えて、誰が悪いのかどうしてこうなったのかずっと考えていないと気が狂いそうになる。

そう感じたから、そうするだけ。

そう思うから、そうするだけ。

少しでも自分を守りたいと思うから。

そんな生活も終わる。

終わってしまう。

次の環境が今よりもマシとは限らない。

そう思うと、今のように腫れ物のような扱いをされているだけの生活の方が幾分かマシなのかもしれない。

そう思うと、気分も憂鬱だ。

今から行くところを少しでも知っている分、余計に嫌になる。

ただもう引き返すことは出来ない。

残念な事に、無知な俺は自分を苦しめる運命へと舵を切ってしまったのだから。

……今からでも引き返したいよ。

「大丈夫ですから」

心から湧き上がる負の感情を表に出すわけには行かない。

特に、目の前のモノには。

自然と浮かんだ愛想笑いに少しだけ感謝をする。
少ない経験から学んだ俺の処方術。

これからも役立つ事を祈るとしよう。

「…………ふむ」

ただ、彼女との付き合いは幾分長い。

俺が保護という形で連れてこられて数年。

それを語るとなると、彼女との話題は避けて通れないぐらいには。

三笠さん

皆に見下され、同じ人として思われたいような扱いを受けていた中に現れた彼女。

ここでは唯一の友人であり、先生でもあった。

俺の事を部下として、専属の上司として付き添ってくれた彼女。

軍人として必要な知識だけではなく、人との付き合い方のような普通に過ごしていれば勝手に学んでいくような事までも教えてくれた。

普通に生きれなくなった俺のために。

知らなかった。

知りたくなかった。

ただの、ただ普通の気の良い先輩ぐらいに思っていたかった。

「もうすぐで基地に着く。」

そんな情けない後ろ姿を見送りたいくないのだが」

「…………申し訳ございません」

彼女の顔を見るくらいなら、と深々と頭を下げる。

そのまま上げる気はなかったが、背中に突然襲われた痛みとバンつと海に響いた音で無理矢理に俺の身体は起こされた。

「いらい」

お主は指揮官となる身。

その立場を持つ人間が安々と艦船に頭を下げるなど何事だ!!」

珍しく来た怒声に再び頭を下げそうになる。

今度は他意なく普通に。俺個人の反射的な措置として。

しかし、それで怒られて直ぐに下げるわけにもいかない。

頭を一瞬下に下げただけでキツく睨まれたため、何とか踏み留めれ

た。

「……私は心配だ。

お主はまだ勉強途中。

いきなり実践に飛び込む事になるのは不安でしかない」

ため息交じりにそう言われつつそつと俺の頭に触れようと手を伸ばす三笠さん。

そんな手を、軽く振り払う。

「大丈夫です。

今回の任、果たして見せます」

とは言っておくが、正直俺のやる事なんてそう多くはない。

ただの看板であり、餌だ。

俺の名前を使って目立たしい活動をしなくなったセイレーン達を挑発するために。

そんな事に意味があるとは思えないけど。

運が良いだけなのに、未知の敵から急に来た攻撃に対して世界中で唯一生き残ったと言われる奇跡のような存在を、その奇跡を疑う事し
かない大人達が証明させようとしているんだ。

俺で吊れたら、セイレーンは未知の敵ではなくその存在に人類が絡
んでくる可能性が出てくるのだから。

だから俺を餌にする。

飼育員を同じ未知の生物にさせるといふ気でも狂ったと疑いたく
なる方法で。

知らなかった頃は、素直に嬉しかった。

その時は、確かにそう感じていた。

正直な話、今でも少しは嬉しさは残っている。

三笠さんに報告した時の、彼女の気まずそうな笑みに気になっては
いたけど、気にしない事にした。

彼女のような大先輩の心の内を知る術なんて俺にはないから。

そう決めつけて。

指揮官

それは、俺が保護されてから数ヶ月して現れた英雄。

セイレーンという制海権の9割をも損失をさせた化け物達を退けた存在。

俺がそれを知ったのは新聞の一面だ。

そこにはその時の指揮官と三笠さんの姿があった。

何もない部屋で1人、誰にも会えない——いや会いたいと思うような人はもういないけど。

無機質なカメラの目に晒されながら無為な日常を過ごしていた時の事。

余程人類の初の勝利が嬉しかったのだろう。

もしくは、悔しがる俺の顔を見て楽しみたかったのだろう。

初めて見た看守の1人が無作為に放り投げた新聞の一面記事。

それが、指揮官と呼ばれる人の指揮でセイレーンを撃退したというものだ。

何をどうしてこんな功績を残したかは軍事機密なのか深くは語られていなかったが。

ただ、セイレーンに一矢報いたという記事だけが俺の希望だった。

それまで何度も様々な国が敗北を喫し撃退なんて夢のまた夢だと思っていた中での唐突な朗報。

それは、全人類夢にまで見た吉報といっても過言ではなかったのだろう。

俺もまた、その一人だ。

セイレーンがいなければ。

今頃学校にでも通っていたのだろう。

進路の話でもしながら、下らない話でもしつつぶぎけた冗談で笑い合うような人並みの生活を。

出来ていたのだろう。

今ではそれが下らない妄想に成り下がっているけど。

そんな事を考えて、絶望して何度も考えて1人笑っていた俺に初めて生きる希望というのをくれた存在。

だと、思っていたのに。

雰囲気から感じ取られたのかもしれない。

無愛想な俺が悪いのかもしれないが、何を言っているいいなもわからず黙り、気まずい空気から目を逸らしていると三笠さんはその場で座ると俺にしたのとは違い自分の膝を優しく叩く。

その仕草から彼女が催促する事は経験から予想がついた。

「ほれ」

「……嫌ですよ、人前で恥ずかしい」

「なっ!？」

間髪入れずの火亭に少し驚かれてしまう。

いや、驚かないでくださいよ。

何時もとは違ってちらほらと人の目がある。

何よりも、そんな気分じゃないぐらひは察しているだろうに。

「何時もはすぐに飛びついてくると言うのに」

「何時も渋ってるつもりですけど、三笠さんが無理矢理押し付けてくるんじゃないですか」

「何を!？」

初めの頃は嬉し恥しそうに寝そべっておったぞ!!」

「何年前の話ですか! 今は違いますから!!」

徐々にヒートアップしてく言葉のやり取りに遠巻きから視線を感じる。

誰に見られてるか見ようとすると皆目を合わす前に顔をそささらされてしまう。

嫌われてるのはいつもの事。

そんな態度に何か感じる様な心はもう持ち合わせていない。

「……いいじゃないか」

他所を見ているとそんなか細い声が聞こえた。

泣きそうとは言わないが、それでも寂しそうに物悲しそうな瞳が俺に向く。

「こうしてゆっくりするのはこれが最後だ。

明日からはもうお主はおらん。

だから、皆に見せつけたいんだよ」

「見せつける?。」

「ああ、見せつける」

か弱く握られた両拳が俺に向くとゆっくりと開かれていく。誘うように、手を握ってほしいと、ここに来てほしいと標をしめす。「お主は普通の人だぞと。」

もう少し、もっと早くに過ちに気づいておればこんな子供に深い傷を負わせること等なかったと。

お主を虐げた輩共に見せつけたいんだ。

主等が化け物の手先と呪った者は、普通の人であり子供だったと。そんな子供が今からわずかな知識で最前線に立たせられると。見せつけたい。

私の大事なモノは、主等のせいで壊されるかもしれないと」

彼女は真つ直ぐ俺を見る。

真剣な顔で、何処か怒りを孕んだ瞳で。

周りの事など見てすらない。

それでも、その言葉が届いたのだろうか。

甲板にいた人達は皆逃げるように早足で掛けていく。

各々の言い訳を口にしながら。

「……俺は」

「ほら、人目が消えたぞ」

「そりゃ、あんな事を三笠さんに言われたら逃げたでしょうに」

「人前じゃなければ恥ずかしくないのだろうか？ ほら」

再び自分の膝を優しく叩く。

その音に向かって俺はゆっくりと導かれる。

ため息をしながら、言い訳をしながら。

これが最後だ。

彼女に、三笠さんに甘えるのも。

そう重ねていく。

何度も、何度も。

「怖くないぞ」

わかってる。

怖くなんてない。

少し前までは、彼女にこうして誘われれば準じていたのだから。色々教えてくれた姉のような彼女。

話し相手として、眠れない時は一晩中付き合ってくれていた彼女。そんな彼女を怖いだなんて思わない。

思わないよ。

「KAN—SENはやっぱり怖いか？」

それでも、その言葉は聞きたくなかった。

必至に目をそらしていた感情をくすぐられたように。

イタズラに刺激されたその感情に体が凍る。

三笠さんも狙っていたのだろう。

膝を曲げ、ゆっくりと腰を落としていた矢先の問答。

彼女の開かれた両手に挟まるようなタイミングでの言葉に俺は、返す言葉を必死に探す。

「……怖くないですよ」

そう強がってみるけど、効果はない。

感情がすぐ表に出してしまうからなのか、三笠さんだからわかるのかは知らないけど。

彼女はきつとわかっている。

だから、その両手を狭めて俺の頬を優しく包み込む。

きつと、俺の気持ちなんてすぐにわかってしまうのだろう。

「少なくとも私は怖くない。

怖くないから、大丈夫だぞ」

耳元での優しい囁きに飲まれそうになる。

「大丈夫だ」

そんな言葉に何も返せない。

言葉としても、行動でも。

KAN—SEN

それは人類が手にした希望。

未知なる敵に抗う術。

人々が英雄と呼ぶべき存在。

それは、未知なる力から生み出されたモノ

セイレーンとの戦闘で偶々手に入れた謎の物質を研究し、その結果生み出したモノ。

それは、セイレーンと同じ未知なる存在。全く同じ存在

人類を滅ぼすか、守るかという違いがあるだけであつて。

そんな存在を人々に知られるわけにはいかないから。

だから、KAN—SENの事は軍事機密として処理される。

人々にはただ『勝った』という結果のみを知らせて。

その存在について知らせようとしな

誰にも、極一部の人の

幸か不幸か、俺はその一部に入ってしまった。

夢のような話だと思

セイレーンに抗うための組織に入れるなんて。

その一部になるなんて。

夢のままできてほ

その力は、蓋を開ければセイレーンのものだなんて。

彼女達と変わらないだ

夢は夢のままの方がいいだなんて誰かが言っていた。

その通りだ。

夢が叶うと、自分が見ていた夢は悪夢だと気づかされたのだから。

これから俺は、未知のモノに囲まれて生きる事になる。

自分の家族を、友達を、大切な人達を殺したモノと同じだと言われ

ているモノ達に。

自分を殺さなかったモノ達に。

そんな存在を怖くないと言ったら嘘になる。

実際、上の人達だつて怖がつていたから。

だから、三笠さんは俺と一緒にいた。

セイレーンと繋がりがある同士で監禁し、ずっと様子を監視されていた。

何年も、ずっと。

戦力となるKAN—SEN達はすぐに信頼を勝ち取れたと言う。

いや、信頼するしかなかったのだろう。

だって、セイレーンと戦うには彼女達がいないと話にならないのだから。

それでも、三笠さんが俺の傍に居てくれたのは自分の意志だと教えてくれた。

他ならぬ彼女の言葉だ、信じたい。

三笠さんは俺の傍に居てくれた。

居なくても言いと何度も言われても、ずっと傍に居てくれた。

何を思っただろうとしたのかは知る由がないけれど。

ただ分かるのは。

だから俺は飼育される事になったという事。

艦船達となら問題はないんじゃないかと判断されて。

信頼される彼女達の元に置いておけば、不信感極まる俺の動きに制限をかけられると判断されて。

……おかしな話だ。

セイレーンの活動が落ち着いたらすぐにこれだ。

俺も、彼女達も纏められるんだ。

もうすぐ来るであろう平和な世界に悪しき文化を忘れるために、再び悪夢が訪れた時に処理させるために。

少しでも怪しい物を纏めるだけだ。

「えいっ」

そんな可愛らしい声と共に無理矢理に俺の頭は膝に乗せられた。

俯せで寝かせられたせいで視界は肌色を通り越して真っ黒に染まる。

何をしていたかわからなくなると動けなくなるのは悪い癖だ。

今もどう接していいかわからずにされるがままにされている。

「……ふふふっ、これはくすぐったいし恥ずかしいな」

俺の吐息が直に太腿に触れているからだろう。

恥ずかしいと言う割には何処か嬉しそうにそんな事を言われてしまふ。

とりあえず、と思い身体を半回転させて仰向きになる。

「怖くないですよ」

なんとなく再び口にする。

彼女の見慣れた優しい笑みに釣られたからか、はたまたその悲しげな瞳に釣られたからか。

ただ、こう言うのが正解だと思った。

言っただけで、そう求められている気がした。

だから言う。

口にする。

言葉だけなら安いから。

「……そうかそうか」

嬉しそうな顔を見せてくれた。

俺は何を行っているんだろう？

そう思いつつも、これでよかったと感じれた。

喜んでくれるなら、それで。

これだけで落ち着いてくれるなら。

「お主は優しい子だ」

そつと頭に手が触れる。

今度はそれを邪魔したりしない。

されるがままに、なされるがままに身を任せる。

「お主はこれから先、色々な艦船と出会うだろう。」

その全てにこんな優しさを見せなくてもいい。

仕事だと割り切って、流されずに事を進めればいい。

艦船達がセイレーンと戦い、平和な時が来るのを待てば良い。

だから、艦船達皆に不必要に優しくしなくても良い。

我も今の計画が終えればすぐに向かう。

お主の傍に居てやれる。

それまでは、嫌な事があっても我慢するんだぞ。

我が着任したら、全部話してくれ。

嫌な事も、嬉しい事も、楽しい事も、悲しい事も

私が全部聞いて、受け入れてあげるから。

私が傍に居るから、他の艦船達とはきちんと距離を保つんだぞ。

指揮官として、部下達との距離を考えて接するんだ。

私が、ずっと傍に居てやるから。

無理せずに、辛いことがあつたらすぐに連絡をするんだぞ。

離れていても私は、私だけは味方でいることを忘れないように。

他の艦船達が怖くならば、私を思ってくれれば良い。

怖くない、安心できる艦船もいる事を思い出してくれれば良い。

私だけは、ずっと味方でいるから」

怖い？

怖いんだろうか。

わからない。

わかりたくないだけかもしれない。

そんな気持ちに蓋をしてくれる彼女の言葉に笑みを浮かべる。

三笠さんは、三笠さんだ。

そう思うようにする。

俺の笑みに返してくれる彼女を見て。

初めて会った艦船が三笠さんで良かった。

人として接してくれた、接されたのだから。

艦船は怖くないと思わせてくれたから。

「船酔いは話していると落ち着くらしいが、どうだ？」

「……ああ、少しは落ち着きました」

「ふむ、少しならばこれも試そう」

俺を不憫と感じる彼女。

艦船として生まれた彼女。

人類に必要な彼女。

「金平糖ですか？」

「うむ。」

甘味を携帯するのは女子力と教えてもらったから常に携帯して
おる」

「……その発想がすでに」

「文句あるのか？」

「いえ、なにも」

セイレーンという存在に関わる彼女。
セイレーンという存在に関わられた俺。

「飴を舐めると船酔いはマシになると聞いたからな」

「金平糖は飴なんですか？」

「似とるだろ」

「……それでいいのかなあ？」

初めて会ったのが彼女で良かった。

彼女の事を艦船だと思えないでいる自分がいる。

それはつまり、人間と変わらないと思えるから。

「はら、あーん」

「……………あーん」

そんな風に気持ちに見切りをつける。

不安感も不信感も恐怖感も何もかも箱に無理矢理に詰めて心のど

こかに蹴飛ばして目につかないようにする。

してもなお、その存在には目を詰めれない。

忘れよう。

今は無理でも、何時の日かは。

「気分はどうだ？」

俺は、俺自身の感情なんかいららないんだ。

慣れている。

人と会えない生活も、艦船と過ごす事も慣れているはずだ。

何年もそうしてきたから。

ただ、変わるだけ。

狭い部屋が広い母港に

一体の艦船が複数の艦船に

カメラの目が艦船の目に

変わるだけ

そう思ってケジメをつけたい。

すぐに切り替えれないのは俺がまだ子供だからか。

納得出来ないからか。

「どうだ気分は？」

「……………」

俺は何時になったら艦船を受け入れるのだろうか。

何時になったら、この不快感を忘れられるのだろうか。

いつかそんな日がくるのだろうか？

少なくとも今は、味方でいいなければいけない。

今？

ずっとか。

平和になるまで、ずっと

仲良くしないといけないんだ。

「気持ち悪い」

そんな弱音を吐きながら、俺は何時もよりも上手く出来るように気を使いながら愛想笑いを浮かべた。

「シリアスの身体はいかがでしょうか？」

「シリアスの身体はいかがでしょうか？」

薄っすらと紅く染まる頬に潤んだ瞳で少し不安そうに俺を見ながら彼女、シリアスは尋ねてくる。

その問いに応えるような余裕はない。

目をそらすわけにもいかない、けど視線が泳ぐ。

どうしてこうなったのか。

そんな言葉を生唾と共に飲み込みながら。

俺の左手は確かに柔らかいものを掴んでいる。

いや、掴まされている。

彼女の片手にグツと握られたまま、その主の巨大な胸に押し付けられているのだ。

いかが、と言われても返答に困る。

……本当に、どうしてこうなったんだろうか。

こんな状況に陥ったのは自分でもよく理解できていない。

一人でシリアスの、女性のベットで横になっていたのは覚えてる。

たしか、彼女が紅茶を淹れてくれる間に眠気が我慢できずに少し横になろうと思ったんだ。

昨晩は隣で寝ていたローンに強く抱き寄せられていたせいか、変な気持ちと……ちよつとした嫌悪感を感じていた。

生暖かい嫌な感覚に包まれていた。だから、不思議と休めたという感覚じゃなかった。

それと、初めは優しくだったかもしれないけど、寝ている間に力加減を調節出来なかったのか内臓が吐き出すのかと思うぐらいに強く抱き寄せられた苦しみで起きてしまった。

幸いにも、1時間も経たない間に力が弱まったから何かが吐き出す前になわとか抜け出された。

あと少しでも遅かったら何が出ていたのだろうか。想像すらしたくない。

無理矢理にでも起して何が何でも一端離れた所で寝ようとも思っただけ

「私の言う事を聞かないなんて……おしおきが必要ね」

なんていう寝言なのか俺宛のメッセージなのかわからない呟きのせいでそれすら出来なかった。

結局の所、日が昇るよりも早く目覚めた俺は改めてソファで横になったが少し身体中を襲う痛みと、すぐ前で寝ている美女が視野に入るせいでまともに寝付くことは出来なかった。

最も、それだけ早く起きていたおかげでこうして予定よりも早く帰ってくる事が出来ただけ。

そんな寝不足な俺が横になってたら寝てしまうのもしかたがない。そう思いたい。

いや、そりや女性のベットで男が寝ていたのを怒る理由はわかる。俺も自分の寝具で女性が寝るのは少し嫌だ。

結婚していたり付き合ったりしているといった理由付けがあるのなら許せるだろうけど。

そんな親しみある間からでもない人を寝かせるのは嫌だ。

特に最近はベルファストが毎朝のように膝枕をしながら俺を起こすことが日課になっているため、自室に誰かを招くことすら拒否感を覚える。

だから、シリアスが寝ていた俺に嫌悪感を覚える事には共感するし、眠気に負けた俺も悪いと思う。

でも、いきなり突き飛ばして起こすことはないだろう？ と問いた

い。

……聞く暇なんてなかったけど。

そう、寝ていた俺を起こしたのは、ベルファストの時のような優しい声でもなく急に突き飛ばされ、壁にぶつかった衝撃だ。

驚きと共にすっかりと目が覚めた俺が目にしたのは、見たこともないシリアスの顔だった。

何と表現していいのかわからない。

ただ、凄い深刻そうな顔をしていた。

絶望に打ちひしがれているとでもいいたそうなの。

いつも傍で見ていた様な優しい瞳はどこにもない。

見たこともないような冷たく、暗い瞳。

いや、以前見たことはあった。

似たような瞳を。

他の艦船から。

ただ、その見開かれた瞳に真っ直ぐ射抜かれるのは始めてた。

怖かった。

彼女とは長い付き合いになる。

そんな彼女の見たこともない一面を一方的に見せつけられる。

言葉も出なかった。距離を置くことも痛みに対して弱音を吐くこ

とも出来ない。

ただ何もできずにうずくまりながら次の一言を待つことしかでき

なかった。

次の動きを見ることしか出来なかった。

艦船は強い。

単純に人間よりも力がある。

シリアスも見ただけで言えば美女のような風貌だがその中身は

人のそれとは全く違う。

彼女が本気で殴つたら、それこそ痛いで終わるとは思えない。

だから、怖い。

その瞳に映る俺は情けなくも小刻みに震えていた。

彼女の手が動く。

俺の腕を掴み、そつと持ち上げていく。

何も言えないし抵抗もできない。

反抗した先に何が待っているのかわからないのだから。

そう思っていた矢先に訪れたのがこのシチュエーション。

絶望に染まった顔は羞恥心に変わり

見開かれていた瞳は恥しそうに少し反らしながらも俺をしっかりと

と捉え

その手は確かに俺の腕を掴んで自慢の胸へと押し当てていた。

うん、どうしてこうなった。

「……誇らしきご主人様」

「え、は、はい！」

彼女の胸に手を当てて数分が経つ頃にようやく次の言葉が聞こえる。

緊張しているのか少し上ずっていたが、混乱している俺の方がその気持ちを強く出していた。

「その、もしよろしければ感想を教えてくださいなのですが」

「か、感想？」

「はい」

より強く自分の胸に手を押し当てて続ける。

柔らかい感触が腕全体へと広がっていった。

「シリアスの身体はどうでしょうか」

「……どうって言われても」

「素直な気持ちを教えて下さい」

「……………」

どう答えるのが正解なのだろうか。

間違えたらまたあんな顔で睨まれるのだろうか。

こんなシチュエーションなのに、胸に刻まれた先程の光景からか、不安と恐怖で心が埋まる。

もしも、もしもこれが一呼吸あれば。いや、それでも怖かったらうけど。

それでも、一呼吸入れるタイミングがあれば、入れているタイミングがあれば気持ち切り替えたのかとか、何か唐突に考えが浮かんだのかだとかといった考える余裕があった。

それすらない。

一呼吸置かずに、間髪入れずに冷たい瞳が何時もの優しさに変わった。

暖かい雰囲気とこの甘酸っぱい雰囲気にも少しは飲まれていたのかもしれない。

それがない。

急な変わり様に切り替えというよりも上塗りされたような印象が強い。

一步でも間違えれば、また……。

「や、柔らかいよ」

「それだけででしょうか？」

「あたたかいね」

「他には？」

「……気持ちいいよ」

数撃ちや当たるというけれど、数が打てそうにないこの場面。

嫌がる素振りも否定的な素振りも見せれない。

「気持ちいい、ですか？」

「……う、うん」

だからといって、恥ずかしさが消えるわけもなく。

どんなに怖いシチュエーションとはいえど、感じるものは正直になてしまう。

言わされているという雰囲気を出さないようにただ、シリアスの言うとおりに率直に感じた事を伝える。

「誇らしきご主人様」

「なに？」

「シリアスの身も心も全て貴方様の物でございます」

そう言うと、彼女は俺の腕を離してそっと抱き寄せてくる。

先程まで掴んでいた柔らかいそれを今度は頭全体で感じるようになる。

視界いっぱいが暗くなる。

さつきまで窺っていた顔色も全て消える。

それだけで、不思議と少し落ち着いた。

優しく頭を撫でられる度に、甘い匂いを嗅ぐたびに何時もの彼女に戻ったんだと実感できる。

まだ、何も終わってないのに実感してしまう。

「シリアスは誇らしきご主人様のためだけの物。

貴方様の傍に居続ける事だけが幸福で、それ以外はいりません。

「ご主人様の忠実なるメイドです。

貴方様が求めるならば、どんなご奉仕だろうと受け止めますし、どんな指示でもやり遂げましょう」

「だから」と続く。

息を呑む俺を、逃げるように終わったと思っていた俺を離さないように。俺の目を奪うように。

そつと顔が上がっていく。

大切に、壊さないようにそつと包まれた両頬の手が俺に示す。

この暗い瞳から、逃げるなど。

無言の指示が俺に飛ぶ。

「ですから、シリアスを傍に置いてください。

わかっています。

皆様との約束を反故すると言うことは、それは誇らしきご主人様の名前に傷がつく行為。

本来でしたら、このような願いは胸に潜めるのも。

ですが、駄目なのです。

貴方様のお顔を見ると、シリアスは我慢が出来ません。

こんなはしたないメイドで申し訳ございません。

ですが、この気持ちを隠して明日を迎える事など出来ません。

もしも

もしも、誇らしきご主人様の傍から離れるというのであれば――

「――」
そうだ。

忘れていたわけではない。

色々とありすぎて、立て込みすぎて話題を切り出せなかった。

俺は、シリアスに言いに来たんだ。

「シリアスがずつと傍にいてくれて助かったことが一杯あった。
シリアスが秘書官じゃなければ、きつとここまで上手くできなかった。
た。

ありがとう

ずつと傍で支えてくれて」

今までありがとう

そう言いたかったんだ。

シリアスが秘書官じゃなくなる。

寂しいのはあるし、やっぱり嫌な気持ちはある。

ずっと、傍に居てくれた人がいなくなるのは嫌だ。

そう思う。この気持ちは本当だ。

それでも、皆に言った以上は、変えるといった以上は変えるしかない。

きつと、上に立つ者として個人の我儘で私情で我を通すなんて間違っているから。

だから

「だから」

言わなきゃいけない。

今までありがとうって

言わないと

「だから」

言わないといけないのに。

彼女の視線とぶつかる。

俺の言葉の先に期待を向ける眼差し。

さっきの言葉で、自分の気持ちと同じだと感じたのだろう。

その顔は希望に溢れている。

ついさっきまでの顔とは真反対だ。

従う主からの言葉を今か今かと待ち焦がれるその瞳。

その瞳が好きだ。

彼女に見られていると、ちゃんとしなれないと思える。

きつと、他の艦船が秘書官だったら俺はもつと現状にやさぐれていたのだろう。

艦船に囲まれ、ただ皆の上にいるだけで何もしないし何も出来ない。

接し方一つわからないまま、ただ何もせずに過ごしていたのだろう。

シリアスと出会えてよかった。

その全幅の信頼を寄せるような瞳が常に後ろにある。そう思うだけで、頑張ろうと思えてきた。

そんな瞳が俺に期待する。

次の言葉を自分の望む言葉を。

「……………」

言わなきゃいけない。

形だけだろうと、名前だけだろうと指揮官なんだ。

上に立つ者としての姿をその瞳に見せつけなければいけない。

何時までも、その眼差しに縋ることはできないと、声に出さないと
いけない。

俺は、俺は

「……………お願い、して、みるよ」

俺はずっと逃げてきた。

嫌になる現実に立ち向かうことなんてしない。

だって、立ち向かったから

希望があると思って選んだ道がこれなんだ

指揮官として、艦船達の傍にいる事

それは、俺には苦痛だ。

きっと、苦痛なのだろう。

自分の運命を強引に捻じ曲げた存在。その力から生まれた破片。

それが彼女達だ。

まともに相手をしていたら気が狂いそうになる。

いつ自分が――

自分も、殺されるのだろうか。

そんな不安を思ったこともある。

だから媚びる。

だから逃げる。

きつとこんな事しなくても彼女達はそんなことをしない。

そう思う自分もいる。言い聞かせようとする自分が。

保証なんてない。

セイレーンが突如として現れ、世界に混沌をもたらしたように艦船が現れ、人類に希望を見出したように世界は予兆もなく変わる。

当たり前前と思つた認知はそうじゃなくなる。

常識は一瞬で吹き飛ぶ。

それを体感してきた身だからこそ、怖いんだ。

だから、シリアスの瞳が好きだ。

彼女の尊敬を受けると、この怖さを隠せる。

自分を慕う子に恐れる事なんてない、そんな姿見せたくないと思えてくる。

だから、必要だ。

必要なんだ。

「……誇らしきご主人様」

「なんとかなるといいけどね」

「ふふふつ、貴方様のお言葉なら大丈夫ですよ。」

周りが反発したとしても、シリアスだけは傍にいます。

貴方様のお傍で貴方様を否定するものを遠ざけます。

シリアスがずっとお守りしますから、ご安心ください」

逃げたところでいいことなんてない。

わかっている。

きつと、他の艦船達が声を荒げるだろう。

……だったら、また部屋に閉じこもればいい。

周りの声を聞いている振りして遠ざければいい。

そうやって逃げればいい。

気づくと開放されていた顔は自然と下に向かっていった。

情なく宙にぶらつく両腕。

これこら来るであろうこの逃げに対する責任に、自分の言葉の無責任さに肩が重い。

この重さはどこからくるのだろうか。

皆からの失望が目に見えるからか。

それとも、形すらこなせない自分の無能さからだろうか。

「誇らしきご主人様？」

かけられた声に向くことすら出来ない。

それでも、媚びるような笑みを、浮かびなれた作り笑顔を浮かべて床を見る。

情けない自分の腕を見ながら。

「ああ、シリアスとした事が忘れていました。紅茶を淹れてきたのですが……。

もう冷めているようなので新しいのを淹れしてきます」

少し離れたテーブルに置かれたティーカップ。

俺が壁にぶつかかった衝撃がそこまでいつていたのか、少しだけテーブルへとその中身が溢れていた。

小さな水滴が俺の顔を写す。

あはは、今度は俺の目が暗くなってる。

笑えない顔に乾いた笑みを浮かべて彼女が手にしたカップを奪うように取り飲み干した。

「……美味しいね」

「はい、練習致しましたから」

ベルファストの淹れる紅茶にはまだ負けるが、それでもどぎつい甘さも苦しい苦味もない。

それでも、乾いた喉を癒やすには十分だ。

「次はもっと甘いのが飲みたいな」

「……淹れますよ、何時ものお部屋で何度でも。

指揮官様がお望みとあらば、シリアスがいつだってご用意させていただきます」

「ありがとう」

少しは潤う喉とは違い笑みは何時までも乾いている。

そんな俺の頬にそっと手がそえられると、それはゆっくりと下へ降りる。

首筋に指先が触れると、自分の唇を当てながらシリアスはにっこりも微笑んだ。

ああよかった。

もう、怖いのはなさそうだ。

逃げるようにそんな風に思考を反らす。

ここから先はどうしようか。

考えなんてもちろんない。

考えたけど今回の件はやっぱりなかった事にしました。

なんて言って納得してくれる艦船なんていないだろう。

皆秘書官になりたいって言ってくれていた。

そんな皆の頑張りを気泡に返すような言葉を言わなければなら
ない。

ますます重くなった手に何かがぶつかる。

ポケットに入れていた小さな欠片。

「それは？」

「金平糖だよ、昔お世話になった艦船に貰ったんだ。

その艦船のおかげで、予定よりも早く帰してもらったし何より

ちよつとアドバイスを……」

そこまで言っと思って出す。

困った時に助けてくれる艦船の顔を。

何も希望を見出したわけではない。

希望なんてないから。逃げているだけの俺に、そんな甘い言葉は存
在しない。

ただ、最悪の結果に向かっていく俺に対して少しでも結果を改善紙
てくれそうな妙案を出してくれそうな

もしくは、俺に対する皆の反応を先に肌で教えてくれて、心の準備
をさせてくれそうな

そんな彼女の存在を。

シリアスが不思議そうに見るお菓子を口に放り投げる。

口いっぱい広がる甘さは、俺が望んでいたものだ。

自分に対して甘い俺に、より甘いものがあると教えてくれるよう
な。

甘さを感じる度に思い返すことがある。

私が傍に居るから、他の艦船達とはきちんと距離を保つんだぞ。

指揮官として、部下達との距離を考えて接するんだ

今日も言われたその言葉は、俺の皆との接し方を考えさせられる。保つように。部下のような距離。

それは何処で学べるのだろうか。

故郷が消えてから指揮官になるまでの間。

ずっと三笠さんが上司として傍に居てくれた。

彼女と俺のような距離感にはどうやればなれるのだろうか。

……いつになったら、彼女は俺の傍に居てくれるのだろうか。

助けてよ、三笠さん。

俺に教えてよ。

俺は、形ですらまともに出来ないこなせない指揮官なんだ。

落ちこぼれにはこの現実には重たすぎるよ。

「……こんな時間に雌の匂いをさせながら、なんの御用でしようか？」

自分が何をしたいのか、何をやりたいのかわからない時がある。いや、いつもわかってないのかもしれない。

わからないから身勝手に、浅い考えていってしまう。

わからないから、その場の空気に流され続けてしまう。

思えば、始めから秘書艦を変えるだなんて言うべきではなかったのかもしれない。

そんな話に耳を傾けなければよかったのかもしれない。

シリアスを秘書艦から外したい？

そんな事は思っていない。

彼女が秘書艦でいることに満足してるし、不満なんて感じてなかった。

ただ、ベルファストや大鳳、テイルピッツ達が少しでも秘書艦のように仕事の手伝いをしてくれていた時には正直嬉しかった。

シリアスはとても頑張ってくれていた。

ただ、頑張りすぎて色々と裏目になってしまうことが多かった。

そそっかしいというか、天然というか……。

だから、彼女達のようなしつかりとした大人のような艦船達と共に仕事をするというのは新鮮であり、実際色々と助けてくれていた。

書類の整理や代筆、項目毎の仕分け等短い間ながらも気配りをして手伝いをしてくれた。

嬉しかったし、何よりも楽になれた。

それを知ると、秘書艦を変えろというのも一つの選択肢なんだと感じていた。

別にシリアスが傍にるのが嫌になったというわけではない。

へこんだ時は励ましてくれて、嬉しい時は一緒に笑ってくれる。

細かい事から大きな事まで、ここに着てからずっと同じ出来事を艦上を共感してきた彼女と離れるのは辛いし、少し悲しい。

三笠さんも俺と離れるときに似た気持ちだったのだろうか。
シリアスよりもずっと付き合いが長かった。

たくさんの時間を共有した。

そんな俺と離れる時に、同じような気持ちだったのだろうか。

あの時の俺は、様々な気持ちと感情が混ざり合って何かを感じる余裕はなかった。

今でも寂しくなる時はあるけど、会う機会はあるし何よりも、いつかはここに来てくれると信じてるからこそ弱音を吐かなくて住んでいるのかもしれない。

それに比べると、シリアスと離れる事に気持ちが受け入れるのは早かった。

決め手となったのは、自分がそれを決めた事という一種の責任感と
いうのもある。

上に立つものとして、形だけでもちゃんとしなさいといけないという
思いがあった。

あつたのに……。

俺は、今から自分がしようとしてる事に足取りが重くなる。

何をしていいいかなんてわからない。

どう口を開いていいかも。

艦船達の顔を見たくない。

何も言われたくない。

また誰かとあって、空気に流されてしまったら収集がつかなくなる。
る。

もう収まるかどうかすらわからない事態になってきているのに。

そんな重い足を引きずりながらも、誰かに会わないように慎重に、
早足に俺は重桜の寮へと向かっていった。

「……こんな時間に雌の匂いをさせながら、なんの御用でしょうか？」
部屋に訪ねた俺を見ると少し驚いた顔をしたが、すぐに花を咲かせ

るヒクヒクとさせると、彼女天城は明らかに不機嫌そうな態度を取る。

雌の匂い……と言われると、心当たりしかないため苦笑いしかできないのだが。

そんな俺の態度が気に入らないのか細くなった瞳を少し吊り上げ、自身の鼻を軽く腕で抑える。

たらりと垂れた赤い着物の袖が口元ともに顔の半分を隠すと、その吊り目を余計に強調させているようにも感じる。

「ここに来るまでに誰かに会いましたか？」

「えっ……とー、シリアスしか会ってないけど」

余計な嘘は見抜かれるだろう。

正直に応える。

幸いにも重桜とロイヤルの察には他の艦船達の姿が少なく誰かに絡まれる事なく無事に着くことが出来た。

それを聞くと、少し安心した様に息を天城は溜息をついた。

「よかったですね。」

先日の演習の結果に納得行かなかった赤城と加賀が手の空いている者を引き連れて訓練場に行ったおかげで人影が少なく大事にならずにすんだようで「

「大事？」

いや、そりゃ指揮官が艦船と共に寝ていたのは確かに大事だ。

だが、決してやましい事はしてはいない。

俺なんかの言葉を信じてくれる人がいるかどうかはしらないが。

勝手に1人落ち込んでいると、天城は手元にあつた手鏡を持って俺の顔を写す。

大きく写し出されたのは、疲れ切った俺の顔。目の周りの隈が濃くなっているのが気になる。

「この辺りをよく見てください」

そういつて俺の首筋を指差し、手鏡を見やすいように動かす。

そこに写ったのを見て、俺は反射的に言い訳をした。

「えっ!? いや、俺知らないよ!!」

「……………そうですか」

どうやら、目の前の彼女は俺の言葉を信じてはくれないらしい。
いや、それも納得だ。

上司が首筋に真新しい真紅のキスマークをつけて尋ねてきたら、誰だつて呆れて物が言えないだろうから。

軍服の襟に隠れていて目立たなかったが、少しだけ端が見えるようにつけられていたそれが、余計に説得力を持たせる。

本当は、皆に隠すようにつけたかったと無言の説得をするよう

皆の知らない所で俺は、彼女と遊んでいると言うように、遊ばれていると言うように。

「……………指揮官様」

「ほ、ほんとだつて!!」

「そんなに女と戯れたいというならば、天城に相談をしてくれればいいのに」

「ちがう、戯れてない!!」

「…………私だから指揮官様の事を信じますが、赤城や太鳳がこれを見ればきつと激しい感情に身を任せていたのでしょうね」

「うっ」

助かった。

彼女達がこれを見たらきつと、こんな問答では終わらないだろう。

これを付けた犯人を徹底的に炙るところか、容疑者だろうが構わずに攻め入るに違いない。

愛されている、好きでいてくれるのだろう。

こんな俺でも、俺の事でも好きでいてくれるのだから嬉しい。

過激な行動に出してしまうのは困りものだけど。

「では、このマークを付けた犯人の心当たりのご説明をお願いできますか?」

「えっ?」

腕が離れて顔が見れるようになる。

すると、今度は何時も以上の満面の笑みが現れた。

「こんな所にキスされるということは、指揮官様もある程度は許した

いということ。

まあ、相手なんてほとんど決まっていますが……。

ですが、指揮官様の口で言っただけです。

貴方を汚した女の名前を」

「汚すって」

「ええ、汚されています。

私達重桜以外の者がやったとなっては大きな事です。

誰だつて自分の持ち物に傷を付けられ、汚されたら怒るように私も赤城のように怒りに身を任せたいですが……。

それでは話が進みません。

これが指揮官様が望んで付けられたのか、望まないまま付けられたのか

貴方様が望まれたというのなら……話は変わっていきませんが、何も知らずに付いていたというのなら、相手が何処まで好きに指揮官様を汚したのかを知る権利が私達にはあります。

同じ重桜の者として、同胞が無理矢理に汚されたワケを知らねばなりません」

「……そ、そっか。

でも、イタズラぐらいしかされてないよ。

シリアスの前で少し、ホントに少ししか寝てなかったし……」

「そうですか。

では、やましい事はないかは私が後程直接尋ねに向かいますよ」

「……わかった」

何処まで信じてくれたかわからないが、話の区切りを告げるように天城は再び大きく息を吐く。

「ですが、指揮官様も覚えていたほうがいいですよ。

女というのは、好きな異性のためならば何をするかわからないのですから」

「はい」

「確実に貴方様の力になる様な、貴方様の事を考えてくれる女性に心を開き、他の者には一線を引く。

そうして頂かないとひやひやとして天城は心配で夜も寝付けません」

「気をつけます」

「困った事、助けてほしいことがあればすぐに天城にお申し付けください。」

指揮官様のような危なっかしい方には、私のように手助けをする者が傍にいないといけません。

特に、知らぬ間に首筋に接吻をするような卑しい女なんかは争いの火種を巻くことしかできないのですから」

火種という言葉に体がピクリと反応する。

キスマークの件ではなく、実際に巻かれた火種の回収にその知恵を借りたいと言ったら彼女はどう反応するのだろうか。

俺の申し訳無さそうな目を見ると、天城は何かを察したのだろう。

俺が口を開くよりも前に彼女は言う。

「とりあえず、そのような雌の匂いは不快です。」

一旦洗い流してください」

先ずは彼女に話さなければ事が進まない。

進めるためにも俺は、彼女の言葉通りに従う事にした。

キスマークというのは簡単に落ちないらしい。

らしいというのには、実際にシャワーで洗い流しても全く落ちないという事を経験した事、天城に出来る理由を教えてもらったと言う事だ。

鮮やか赤味は消えたが、まだその形はくつきりと残っている。

付いていた口紅が落ちたぐらいなのだろう。

残っているのは、薄っすらとまだ赤さが残る跡だけ。

痣のような……というか、痣らしい。

吸引性皮下出血という内出血の1つ。

数時間で消えるのものではないだとか。

天城に教えてもらって助かった。

後は、誰に付けられたか……だけど、答はわりと簡単だ。

ローンかシリアス

その内、ローンと会った後には向こうで何人かと会っている。

三笠さんなんかは一緒に話していて母港までの船まで出してくれたのだから。

更には、時間はあるからとわざわざ船と一緒に乗ってくれたのだから。

そこまで共にして、隠していたとはいえ見え見えだったマークに気づかないほど抜けてはいはない。

だが、シリアスは違う。

シリアスから天城に会うまでには誰にも会わなかった。

天城が真つ先に気づいたこのマークを付けた犯人。

答は簡単に見つけられた。

だが、何の為に付けたのだろうか。

悪戯？ なんだろうか？

よくわからない。

今日1日で大分彼女の事がわからなくなった。

急に怒ったと思ったら誘惑し、我儘を言う。

怒る彼女を見た事はなかった。

あれがなかったら、まだ彼女の願いを断る事も……出来たのだろうか。

わからない、自信がない。

言われた事にイエスマンとして答えることしかない俺に、そんな事が出来たかどうかなんて。

1人になると気持ち沈んでいく。

そんな身体も湯船に浸っていると不安定なバランスで仰向けに浮いていく。

重桜の浴室は広い。

普段なら絶対俺が入る事はないのだが、こんな匂いを撒き散らして皆を不快にさせるといふ事で今回だけは特別に貸してくれるそうだ。

まあ、天城が現在進行系で長門にお願いに行っているらしいが。人払いもしているらしいし、少しだけゆつくりしたい。

1人でこの不安定な感覚に身を任せたい。

少しでも間違えたら広い湯船に1人溺れるような感覚。

別に足が着くから溺れた所で何ともないのだが。

でも、現実が違う。

纏まる所を滅茶苦茶にしようとするのだから、これから先の一步は不安定な吊り橋だ。

落ちたらひとたまりもないだろう。

落ちた先に何かあるのだろうか。

いつその事、全部放ってみたらどうなるのだろうか。

考えて、止めて、また考えてしまふ。

考えた所で意味がないと知っていながらも1人だと考えてしまふ。

そんな俺の気持ちに彼女は察してくれたのかもしれない。

「指揮官様、お背中お流ししますわ」

そんな言葉と共に扉が開かれる。

「……はあ?」

当たり前のように浴室に入ってきた天城は、その顔を赤くしながら魅惑的な体をタオルで隠す。

出る所は出ている、それでいて引き締まるところはきちつとしている彼女の体を薄い布1枚で覆うには少し厳しいのだろう。

すぐに視線を外したが、その一瞬でも溢れている肌が目に入って焼き付いていく。

「いえ、日頃から疲れているであろう指揮官様の背中と疲れを流すのも艦船の努め。」

他の子にやらせるよりも、私のような親しい者が行う方がよいかと思ひまして」

「い、いらぬよ!!」

俺もタオルで慌てて前を隠して湯船に深く入り、彼女に背を向ける。

「いいではないですか。」

すでに他の女と遊んでいるのですから、私の事は火に見惚れた蛾と
思ってくださいればいいんですよ」

「遊んでないって!!」

「ふふふっ、確かに。」

遊びなれているのなら、そのような初心な反応はしないでしょうし
ね」

楽しそうな笑い声が聞こえると、後ろから水音が聞こえる。

ゆつくりと湯船に浸かりきった後は、一歩また一歩と音が近くな
る。

「いえ、指揮官様は何時も籠もられているため何をしているのか、何を
されているのか私共もわからないのです。」

ずっと同じ女と部屋で籠られているのを見てみると、周りの者も
様々な噂を流しそれが大きくなり、鵜呑みにする者も現れます。

私がそれを否定したくても、貴方様が間違いを犯してないと証明す
る術はありませんでした」

音が消えたと思つたら、新しい音が耳をくすぐる。

少し荒々しくなった息遣いと、どちらのかわからない激しい心音が
広い部屋を埋めるように俺の頭に響く。

「ですが、この度秘書艦を変えろという判断をされたのは英断です。」

このままあられも無い噂話が流れ続けたら、それこそ指揮官様の名
前に勝手に傷が付けられるところでしたから。

貴方様はあの女とは密接な関係ではない。

他の者だろうと平等に見る気持ちはある。

誰かを指名するのではなく、演習で決めるといふ事にすれば皆その
ように考えを改めて新しい一歩を踏み始めることでしょう。

ただ、天城の考えではMVPは重桜の者が取るのが理想でしたが
……。

中々事は思い通りに運びませんね」

「……その事なんだけど」

彼女はわかっていたのかもしれない。

わざわざ、こんなタイミングで秘書艦の話をしてくる事に細やかな

考えが見て取れた。

怒っているのかもしれない。

演習の後に、新しい秘書艦ではなくシリアスと会った俺に。

そして、彼女に何かを吹き込まれたんじゃないかと、不甲斐ない俺はその言葉を飲み込んだのではないかと。

だからこそ、首筋に見せびらかすような証を付けて現れたのではないかと。

「……秘書艦を、シリアスに——「いけません」

言い終わるよりも先に否定される。

すると、急に視界の隅に巨大な何か湯船から浮上した。

彼女の大きな尻尾が、水に濡れたその尻尾が俺を後ろから包み込むように隠す。

誰かから盗むように、見つからないところへと隠すように自分の懐へと忍ばせるように。

彼女の尻尾に囲まれて、目の前が真っ暗になる。

そんな俺に進むべきを教えるように目の前の壁が無理矢理俺を後ろへと追い出す。

半歩も下がれば、柔かな感触に辺り、それを合図と言わんばかりにその両腕は俺を包み込んだ。

「いけませんよ、指揮官様。

上に立つものがそんな風に言葉を変えては……

これでは、本当にあの女との関係を肯定しているようなもの。

私も含め、皆納得しません」

「そうだけど……」

「だけど、ではありません。

何をされ、何を言われたかわかりませんが、ここで彼女を支持するような真似は絶対に辞めてください」

「……………」

「此度の演習は、皆目が違いました」

まだ俺は大雑把な結果しか聞いていない。

皆がどんな風に戦ってたかも、頑張っていたかも知らない。

「赤城も加賀も、何時も以上に演習前に仕上げてきて、それに付き合った他の重桜の子たちも何時もは文句を言っていました。今回は皆真剣に取り組みました。」

他の陣営もそうでしたよ。

ただ……」

小さくクスクスと笑い声が聞こえる。

「ユニオンとロイヤルはどうやら、演習の事よりもその先に目が行っていたようですが」

「……」

「何時もはユニオンとロイヤルの優勝争い。」

鉄血はロイヤルに、重桜はユニオンとぶつかりそれぞれ結果を残せずにいました。

今回は大番狂わせでしたね」

グループというのは何処に行っても厄介なものだ。

特にここは。

様々な陣営の艦船達がここに来る。

艦船達は人の記憶や願いといった抽象的なモノを人の形として生まれるが、それには元となったものがある。

だからだろうか、重桜とユニオン、鉄血とロイヤルで互いに何処か複雑な関係を見せている。

寮をそれぞれに分けているのもそれが理由だ。

まだ小さい内は一緒くたにできたが規模が大きくなるにつれて収集がつかなくなり分けることにした。

演習を始めると、天城の言ったように決まってそれぞれがそれぞれと因縁ある所に向かう。

宿敵や怨敵等の複雑な関係を持った者へと挑む数少ない機会なのだから。

そして、結果はいつも重桜と鉄血が負けて、ユニオンとロイヤルが戦いどちらかが勝利を手にする。

シリアスがMVPになれる可能性があると思ったのも、それが理由だ。

優勝候補の陣営にいるのだから、可能性は高いと思っていた。

だが、今回は違った。

「鉄血は特別計画艦のデータ収集のためにここ最近海域によく出勤してましたからね、地力がついていたのででしょう。」

重桜もまた、計画が進んでいるために最近の出勤機会はありましたが、何よりも先ずは勝たなければ話にならないと赤城が皆に発破をかけていましたからね。

先ず勝てると思っていた者共の足を掬うことが出来てよかつたと、私自身はこの結果に満足しています」

「……そっか」

「指揮官様は、そのように頑張られていた皆にどんな顔をして言うのでしょうか？」

「……」

冷たい言葉を淡々と言われると、体の芯が冷える。

そんな身体を暖める湯船に対して、冷たい現実を突きつけようと濡れた尻尾が雫を零す。

「いけませんよ、指揮官様。」

我儘ばかりを言われては」

「そう、だよね」

「もしも、あの女に囁かれたというのなら天城が言い返してあげましょう。」

私共の指揮官をひとりよがりに使ってはいけないと

貴方様は皆のモノであり、皆は貴方様のモノ。

その隣に立つモノは、貴方様の事をよく理解しているモノでなければいけません。

貴方様の弱さも、強さも、脆さも、危うさも

全てを知り尽くしたような良き女でなければいけません。

それこそ、賢妻と皆に呼ばれるような存在が理想でしょうね」

「……」

「天城には荷が重いかもしれませんが、少しならばその役もこなせれると思っただけですが……。」

今回は力及ばずその機会すら得ることが出来ませんでした。貴方様の隣に立ち、皆と共により良き未来へと道を示す力になろうと思ったのですが。

ただ、あの方もまた多忙な身。

もしも秘書艦という役が無理だというのなら——」

そこで天城は言葉を止める。

不思議に思い振り向くが——

……ッ!!

ど、どうやら考え事に夢中らしい。

顎に手を当てて考え込む彼女は自分の体を隠すことを忘れていた。露出した肌が視界の隅に入りすぐに視線を前に、彼女に背中を見せる。

すると、目の前が明るい事に気づく。

取り囲んでいた尻尾が退かれ、俺は暗闇から開放されていた。

「……いえ、そうですよね」

そんな暖かな声が聞こえる。

「指揮官様はお優しい方。」

お願いをされたら断れず、全てを受け入れようと頑張ってしまうお方。

1人では決して抱えきれない程の思いと願いを背負おうとしてしまう。

今回の悩みも、きっとそれが原因のはず」

「……天城?」

解かれていた両腕に再び囲まれる。

「これも賢妻になるための試練と思いませんか。」

指揮官様の小さな背中に乗った悩み事、この天城が解決してみせましょう」

急な変わりように少し戸惑いは覚える。

「……どうしたの急に?」

「いえ、天城の指揮官様が困っているのなら私が放り出すわけにはいかないと思っただけです。」

裏も表もありません。

何時ものように、天城の言葉を聞いてくださるだけでいい。

その上で、それをやるのもやらないのも自由なのですから」
俺の返事を待たずに続ける彼女。

「そんな言葉に耳を貸す。」

それは、悪魔の囁きのようにも感じるが――。

それでも、続ける事ができる糸はこれだけだ。

不安定な今に、希望をもたらししてくれるのは、この言葉だけなのだ。

「話がある時は、事前に連絡してとお願いしたはずだったけど」

組織

それは、1つの大きなコミュニティだ。

その名前の下で様々な人が協力しながら事に挑むことになる。

だが、名前だけでは人は集まらない。統率なんてとれやしない。

その組織を統一させるような人が、上に立つ人がいて始めてそれは成り立つ。

その下に人が集まってようやくコミュニティは形成される。

その輪が広がれば広がる程に上の目は全体を見渡せなくなっていく。

誰かがサボるとかじゃない。

皆よく働いていることは、俺が一番知っている。

知ってるつもりでいる。

広がった輪の中にもまた輪があつて、その中にも輪があつて……

そうやって様々な縁が円を作っていく。

当然増えていく円は他の円と重なり合う。

それは仕方のない事だと思う。

100人いて100人皆と皆が友達になることなんて出来ないんだ。

人間がそうなのだから、それを模した彼女達にそれを求めることは出来ないと思う。

何も知らない人が知らない円に触れるのとは訳が違う。

彼女達は、記憶というのがあるらしい。

はつきりとしたものであるモノもあれば、曖昧なものもいる。

それは彼女達がKAN—SENになる前の記憶だここに来る前に聞かされた。

それは、この母港のように皆が皆1つの輪の中で過ごすような穏やかな記憶とは程遠いもの。

互いに互いを傷つけ合う争いの記憶。

重桜にいるモノがユニオンを憎むように。

鉄血にいるモノがロイヤルを毛嫌うように。

始めから出来ていた、重ねられていた面。

それに触れたモノが、大小問わず様々なトラブルを起こすことになる。

言ってしまうえば、俺の仕事の1つはそれの解決なんだろう。

上に言われたわけではないけれど、ここに来てまだ日の浅い頃にはそう感じていた。

大きな組織の中にある輪の1つ。

その輪の上に立つ俺の仕事だ。

何事もなく平穏な日常を維持しつつ、外敵を討ち戦果を上げる。

その流れをスムーズにさせるのが俺の仕事。

はたして俺は、それが出来ているのだろうか。

自問自答にもならない。

答えなんて、誰に言われなくてもわかっているのだから。

暗くなる内心を隠すように口元に笑みを浮かべてみる。

鏡を見なくてもわかる。いつも道理の軽い笑みがあつという間に浮かび上がった。

自分の軽はずみな言葉が、態度がいつも事を大きくする。輪を乱す。

統一させなければいけない立場の人間が、一番それが出来ていない。

自分でもわかっている。

わかっている、どうしようもできない。

どうすれば成長が出来るのか。

自分の何がいけないのか。

何処を直せばいいのか。

成長の仕方も、治し方もわからない。

何もわからない。

俺はそんな気持ちを皆に見せるわけにはいかない。

上に立つ人として、不安を下に見せてはいけない。それは、彼女が教えてくれた言葉の一つ。

駄目な子供に駄目とはつきりと言ってくれる大人の言葉。

ある意味では、この母港で一番信頼しているかもしれない。

そんな艦船の言葉。

そつとドアを数回ノックすると、すぐに「どうぞ」と返事が聞こえた。

ドアノブを掴むと手が止まる。

この感じは懐かしい。

悪い事をした後に母親に謝りに行く行くような感覚。

嫌だけど、不思議と嫌いにはなれない。

それは、俺を叱ってくれる人なんてもう数えられる人なんて、彼女ぐらいしかいないからだろう。

三笠さんもシリアスも天城も——他の艦船達も、やさしく注意こそするがしっかりと怒るということはしない。

当然だ。三笠さんを除いて俺は彼女達の上司であり、指揮官なのだから。

三笠さんは怒るといふより諭すというやり方だった。

きつと、家庭によつてはそうやって子を育てるところもあるのだろうけど、薄っすらと残っている記憶では我が家はそんな感じではなかったな。

やっぱり、彼女のようにしっかりとやってくれる人の方が近かった気がする。

もう、余り思い出せないけれども。

扉の先にある重圧が重くなる感じが伝わる。

わざわざ招いたにも関わらず一向に顔を見せない事に腹を立てられているかもしれない。

怒られる前の感じは、本当に家族に接しているような感触に触れられて嬉しくなるけど、怒られること自体は好きじゃない。

恐る恐るドアを開けつつ、顔を出して彼女の様子を伺ってみる。手にしていた書類から目線を離す彼女と視線が重なる。

呆れた顔をしながら数秒立ち、溜め息と共に彼女は言う。

「話がある時は、事前に連絡してとお願いしたはずだったけど」

彼女、ビスマルクは視線を書類に戻しつつそう俺に冷たく言った。

「ごめん」

「それに、指揮官の帰りはまだ後だと聞いていたわ。

早めに帰ってきたのならきちんと皆に伝えないと」

「……ごめん」

「あと、あなたと一緒にいったローンは何処かしら？」

彼女を放って一人で帰ってきたわけじゃないでしょうね」

「……ごめんなさい」

再び重い溜め息が部屋を満たす。

少しでも空気を入れ替えようとドアを大きく開けてから部屋に入った。

彼女も手にした書類を束の上に戻すと、今度は真剣な眼差しで俺を見る。

そして――

「……えっ、何その手？」

「？　なんだ、甘えたくて来たんじゃないのか？」

此方に来てと示すように前に大きく開かれた両腕と、不思議そうに首を傾げる彼女。

それをみて、ああ、そんな話あったな、とつい先日の事なのに随分昔のように感じる出来事を思い返した。

「ほら」

「いや、ごめん。今日は少し真面目な話を」

「そうか、ほら」

「あの、だから」

「ほら」

……とりあえず、俺自身で先ずは治すべきところを見つけた。

それは、強引な空気に逆らえない所なんだろう。

お尻と背中を感じる柔らかい感触と、離さないと主張するように強く巻かれた腕の感覚。

さらには、ほのかに感じる甘い匂いがまるで今の俺が餌に釣られた獲物のような気がしてならない。

眼の前の誘惑と念押すように置かれた餌に逆らうすべを持たない子鹿だ。

「まあ、色々と言いたいことはあるが今は気分がいい。

とりあえず、指揮官の話聞きましようか」

耳元で囁かれると吐息が触れてくすぐったくてこそばゆい。

軽く震えた俺の反応を見て楽しそうにクスクスと笑うのを見ると、本当に今が上機嫌なんだなと感じた。

普段ならこんな冗談のやり合いのような事彼女は避ける。

特に、今のようになんか仕事なら絶対に。

顔は見えないが、見えないからこそ話しやすい事もある。

空気の流れに逆らえない俺には、こうして少しでも風除けをしないと進むどころが立つことすらも出来ないのだから。

本当に、立つのがやつとな子鹿のようだ。

「……MVPおめでとう」

先ずは、と思いきや純粋な気持ちから言葉を並べる。

全ての事を大きく歪ませる原因になった役を勝ち取ったビスマルク。

きつと、今機嫌がいいのはこれが大きな割合を含めているのだろう。

「ありがとう。」

これも鉄血の皆が必死に頑張った故の結果だ。

最近特別研究とやらで他陣営よりも出撃する機会が多かったから、細かな連携や実践での経験値も他陣営より一歩出し抜けたようだ」

これまた珍しく柔らかい口調でかたるさまは、まさに勝利の美酒に酔っているという表現が正しいのかもしれない。

そして、それを俺に直に伝えるようにとそつと頭を撫で始めた。

「ここでの演習で、鉄血として他陣営相手に成果を出せたのはこれで初めてだ。

皆大いに喜んでいたよ。

駆逐艦や潜水艦の子達なんかはそこで大はしやぎだった。
あなたにも見せてあげたかったよ」

「そっか」

きつと、成果も大事だけど皆の喜ぶ顔が見れて上機嫌なんだろう。
誰よりも鉄血の艦船を大切にしている彼女。

大切なモノ達が喜ぶ顔を見れて満足したようだ。

「それに、MVPももらえたしな」

「……………そっか」

言葉に詰まりかけたが相槌は打つ。

今はまだ、急には話せない。

彼女が、彼女達が今回の演習でどれだけ頑張ったのか。

どれだけ喜んでいたのか聞いてからじゃないと。

それらを聞いて、彼女の怒りを受けて始めて俺は、自分の馬鹿さ加減を知ることが出来る気がするから。

「普段の私なら、こんな名前に余り興味は持たないが……」

今回はプレゼントがあるそうだから、少し嬉しいわ。

オイゲンなんて、私のほうが指揮官をもっと喜ばせられるから代わってって言われちゃって。

でも、今回は駄目。

指揮官を喜ばせられる艦船なんて既に決まっているって言うておいたわ」

「そっ——」

相槌を打とうと思ったが、それよりも早く俺の口は閉じた。

両頬を軽く抑えられ、無理矢理に上を向けられたからだ。

勢いで軽く舌を噛みそうになった。

「ねえ指揮官」

柔らかい声ではあるが、逆さに見える彼女の真剣な顔つき。

その真っ直ぐな瞳を見るのが怖い。

俺が隠すように笑うように、彼女も俺に何かを隠していたのだろうか。

俺が笑顔で隠すのが上手いように、彼女は顔で隠しきれないから見

せないようにこんなふうには膝に載せたのだろうか。

なんとなく、そんな気がした。

「あなたを一番喜ばせられる艦船は誰かしら？」

喜ばせられる艦船……？

質問の意味がわからない。

でも、曖昧な応えで返してはいけない気がする。

「傍にいて一番落ち着く、心地よさを感じる艦船よ。

難しく考えないで。

あなたの思ったように、思った通りに私に話して

落ち着く……。

心地よさを感じる。

頭の中で復唱しながら、考えようとしたけれど口は不思議と先走った。

「いないよ」

言われたとおりに素直に返した、のだろうか。

自分でもよくわからない。

ただ、反射的に返してしまった。

「そんなの、いない」

一瞬自分の事がわからなかった。

でも、念を押すような言葉はビスマルクに向かって言ったわけじゃない。

たぶん、自分に向かって言ったんだ。

「俺は、皆の事が大切だから特別な誰かなんていないよ」

これは付け加えておく。

自分の言葉で。考えて。

少しだけ、本当に少しだけだけど嫌な感じが湧き上がる。

嫌悪感、というやつだろう。

全身に感じる柔らかかな、暖かな感触が急に嫌になってきた。

「ビスマルク、悪いけど下ろしてよ」

「……ああ、わかった」

何も言わずに彼女は俺から手を離してくれる。

そつと彼女のそばから離れて、前に立つ。
長身のビスマルクとはいえ、座っていれば流石に俺の方が背は高い。

視線的に見下ろすように彼女の全身が映る。

俺の返答を聞いて考え込む彼女の姿が。

それが、少しだけ気持ち悪い。

人間の姿で人と同じように思考し、会話をし、コミュニティを作、啜み合い、親睦を深め合い、手を取り合って生きていく姿が。

人と触れているように暖かさがあり、感情があり、思いがある姿が。

艦船は特別な力を持っている。

それだけで、人と何ら変わらない。

それは、三笠さんが俺に伝えてくれていた。

でも、その言葉は未だに飲み込めていない。

ビスマルクや他の艦船達が嫌なんじゃない。

怖いんだ。

結局、わけのわからない力で、人類を攻撃してきた人外の技術を遣って生まれてきた彼女達が。

少しだけ、怖いんだ。

「指揮官?」

「……あつ、なに?」

震える手を隠すように後ろに回して、必死に笑顔を作る。

最も、今更そんなことをしたところで遅いだろうけど。

「……そうね、ごめんなさい。

いじわるな質問だったわ」

ただ、幸いなのは彼女は俺の姿を見て違い解釈をしてくれたという事だろう。

「私の前だもの、そう言うしかないわよね。

でも、正直に言ってほしかったわ。

シリアスが一番だって」

「シリアス?」

「そうでしよう?」

今日の今日までずっと傍に置いていたのだもの。

特別な感情があつたつておかしくないわ。

少なくとも、私はそう感じたわ」

「そうかな？」

そりや、ここでは一番付き合いが長いし、傍で見守つてくれてるけど……」

ここは彼女の名前を素直に出しておくべきなんだろうか。

艦船という存在に対する俺の価値観を忘れたら……無理矢理奥に押し込めたら、彼女の問にもつと何時もの俺として応えられたのかもしれない。

きつと、何時もならシリアスの名前を出したし、肯定したのだろう。でも、今は少し無理だ。

久々に三笠さんに会つて、昔の事を思い出してしまったからか。

それとも、シリアスの何時もとは違う姿を見せてつけられて、封じる箱の蓋が外れかかっている。

割り切つた、と言えるほど大人じゃない。

ただ、与えられた役をこなせるようにと気にしない事にした。

そうするしかないと思つた。

彼女達は艦船。

人ではないけど、人と変わらないんだと自分に言い聞かせてきた。

だから、何時もならそれに、自分自身にかけて暗示に乗つ取つて振る舞う。

それでも最近では疲れてきたからか部屋に引きこもるようになったけど。

……シリアス。

今は少しだけ、彼女が怖い。

何を考えているのかわからない。

シリアスが、じゃないか。

艦船がだ。

人と同じ様に見えても、その力では人をはるかに凌駕する。

時が時なら化け物とレットルを貼られていたかもしれない存在。

いや、実際に貼られている。

ただ、それは艦船ではなくその生みの親のような存在に対してだ
が。

そんな艦船達と過ごすのが、俺の仕事だ。

だから、だからこそ、本当ならば彼女達に不審に思われないように、
不安定にさせないように綺麗な円からはみ出さないように、はみ出さ
せないように仕切らなければならない。

身の丈を大きく超えた仕事だ。

「うん、シリアスも大切だけどやっぱり一番だなんて言えないよ」

たぶん、これでいい。

これが一番不満が残らない。

ロイヤルメイドをビスマルクの前で褒めるだなんて、後々しこりが
残りそうだ。

無難に終わらせよう。

この会話ぐらいは、せめて。

「そう、残念ね。」

秘書官をあの娘にしようと思ったのだけれど」

「そうなん——えっ?」

思ってもない言葉に驚く。

俺の相槌がてきとうに打ってることがバレたかもしれないが、今は
そんな事よりも大事な話が出てきた。

「……秘書官、やらないの?」

ビスマルクは俺の反応を見て楽しそうに口元を歪ませる。

その顔、さつき見た気がする。

「ええ、そうよ。」

やりたいのはやまやまだけど、私は私で鉄血のリーダーとしての仕
事があるわ。

指揮官がどうしてもと言うなら私が秘書官になるけれど」

「……それは」

それは、どう応えたらいいのだろうか。

もしも、もしもシリアスが秘書官継続となったら。

きっと彼女も落ち着くだろう。

それに、いざという時ように天城に教えてもらった事を違う形で生かせばいい。

それで、この話は丸く収まるんじゃないだろうか。

でも、ビスマルクにそういつていいんだろうか。

さつき特別はいないなんて言った舌の根も乾かぬうちに。

「指揮官」

「……なに？」

「私は指揮官の為を思つて言つてるのよ。」

このまま鉄血の子の誰かに譲つたらそこで争いが起きるでしょうし、もしその子が秘書官になつてもあなたはきつと何も言わずに受け入れるでしょう。

でも、そんな風に無理はさせたくないの。

あの子達の喜ぶ顔はたくさん見れたわ。

だから、今度はあなたの喜ぶ顔を私に見せて頂戴」

「……ビスマルク」

口元の笑みがより強くなる。

でも、そんな事に気づくことなく、それ以上に柔らかな笑みに俺は魅力を感じてしまった。

「ありがとう」

だから、俺は感謝をした。

申し訳なさと、自分の不甲斐なさを感じながら。

だが、現実というのは甘くはない。

「ただ」

物事にはいつだって

「これを得るきつかけは私だけじゃなくて鉄血皆の力で得たもの」
等価交換という手段が用いられる

「なによりも私は嬉しい思いをまだしていないわ」

「嬉しい、思い？」

「ええ。」

「この権利をシリアスに譲る代わりに、あなたにお願いがあるの」

さつきまで下にいたビスマルクだが、立つとやっぱりそのモデルのような身長が目を引きく。

彼女の笑みに惹かれたまま、俺が視線を上げるとその対価は発表された。

「キスをして。あなたから、私に」

その言葉に、俺は何も言えなかった。

「大丈夫よ。」

私達は艦船なんだから、あなたの所有物のようなもの。

少なくとも、今の私の事はそう考えてちょうだい。

主が物を大切にするのはあたりまえのことよ。

放りっぱなし、投げっぱなしでは物の方から主を見限ってしまう。

だから、そうなる前に私を愛してほしいの。

キスだけでいい。

それ以上はまだ望まないわ。

艦船であり、女である私をあなたらしく愛してほしいの。

今だけ、だから」

「だ、だめだよ!!」

「あら、なんでかしら?」

艦船を愛しちやいけないなんてルールが指揮官にはあるのかしら」

「そんな、そんなの!! 想定してルールなんて作ってないよ!!」

「ならいいじゃない」

「だめ! だめだから!!」

声を荒げて必死に抵抗してみるが、彼女は意外にも早くそっけなく返した。

「そう、なら指揮官の新しい秘書官はローンにしてもらうわ」

「ローンに!?! なんで!!」

「今回の演習に参加出来なかった事悔しがってたし、彼女は他とは違う特別計画船だからここで秘書官として地位を与えても周りに説明がつくわ。」

指揮官の傍に置いて効率よくデータの収集をさせるため、とかね。

彼女の事だから、きつとあなたの事を精一杯甘やかしてくれるでしょうね。

秘書官には指揮官の部屋の鍵も渡されるらしいし、夜も一緒に過ごしてくれるんじゃないかしら」

ローン……夜……

それは、昨晚の事を思いっきりフラツシユバックされる。

あんなのが毎日続くのは、流石に嫌だ!!

それに、彼女は怖い。

というか、慣れない。

執拗に甘やかしてくるかと思いきや、今度は攻め立ててくるあの姿は俺には荷が重すぎる。

「せめて、他の艦船に——」

「だめよ、シリアスカローンのどちらか。

それ以外の艦船にしたいなら、私とキスをしたあとあなたが指名してちょうだい」

……だめだ、さすがに、こんなのに乗つかるのは。

「だめだよ、そんなの。

せめて他のにして」

「条件を出すのは私よ。

そして、私はこれ以外のことを求めてないわ」

「……………」

何を言ってもビスマルクの意見は変わらないのだろう。

笑みを崩さず、彼女の口調だけ徐々に強くなっていく。

「指揮官、私はあなたのモノなのよ。

私だけは、あなたの忠実なるモノ。

だから、愛情を注ぐのは主の義務であり責務よ」

「ビスマルクは物なんかじゃないよ。

艦船だって——生きてるん……でしょ？

なら、物扱いなんてできないよ

それに仮に物だとしても、ビスマルクは鉄血の物だからぞんざいに扱えないよ」

「ここで愛を示さない事こそがぞんざいな扱いよ。確かに、私達は各々の軍の所有物かもしれない。

でも、造り手や所有者がそうだとしても、私達はそれを使う主を愛しているの。」

使用者であるあなたが、私達の所持者なのよ」

「ちがう、ちがうよ」

「何が違うのかしら？」

「キスなんて誇大表現だよ。」

もつと丁度いいのがあるはずだ」

「そうね、指揮官と私では生まれが違うから価値観が違うのかもしれないわね。」

キスだなんて、挨拶のようにする文化がある国だってあるわ。」

あなたがこの行為にそれだけ意識してくれるなら、私としては喜ばしい限りだけど。」

挨拶のようにするキスもあれば、愛を証明するためにキスをする時もある。」

私は、あなたに気持ちまで求めていない。」

ただ行為を求めているだけよ」

反対する言葉はまだあるはずだ。」

それらが出てこないのは、彼女が俺に答えを示しているから。」

それを鵜呑みにしたほうが、きつとこのトラブルが円滑に終わると理解してしまってるから。」

「指揮官、私達鉄血を愛して。」

この場だけでもいい。」

あなたが愛を示してくれたら、私達はなんだってするわ。」

これはその証明。」

あなたの我儘を、あなたの願いを聞き届ける代わりに私が求める者。あなたに愛されてる、あなたを愛してるっていう実感が欲しいの。だから、お願い——

私の願いを聞いて」

願いを聞くだけ。」

それは、俺が何度もやってきた事。

そして、それをして何度も痛い目を見てきた。

どうしてこうなったのだろう。

初めは、ベルファストの願いを聞いた。

秘書官を変えてほしいという願いを

次は、天城だ。

秘書官を変えるなら、演習を絡めれば皆のモチベーションがあがると。

ローンもそうだ。

俺がいなくても変わらないのに、半ばむりやり本部に共に行くことになった。

そのせいで、エンタープライズの演習を見届けてほしいという願いを叶えられなかった。

今度、ちゃんと謝ろう。

そして、シリアス

彼女が秘書官でいたいなんて言わなければ、こんな事態にはならなかったんじゃないだろうか。

もし仮に、このネガがなくてビスマルクがローンを秘書官に指名していたら、幾らでも強気で返せたんだ。

——みんな、願い事を俺に言う。

普通に口にするものもいれば、教授として遠回りに口にするもの、こうして脅迫のように押し通すもの。

千差万別だ。

本当に、人間みたいだな。

笑みが溢れた。

眼の前の事態から目を逸らすように視線を逃したら、不思議と溢れてしまった。

軽く息を吐いて、もう一度向き直す。

その顔を目で、ビスマルクも察したのだろう。

膝を軽く曲げて、俺に合わせてくれる。

……こういうのって、男が合わせるものの気がするけど。

まあ、気にしてもしようがない。
突き出された赤い唇。

普段そんなに気にしてないけど、こうして差し出されると、色つばい赤色と、少し濡れて光を乱反射させているのが艶かしさを感じる。
これに今から……。

生唾を飲み込み、自分に言い聞かせる。
いつも通りだ。

俺は、いつも通りみんなの願いを聞いてるだけ。
艦船達の、少しだけ人とは違うモノの願いを叶えるだけ。
そこに特別な感情はない。

意思も、意味も。

自分を正当化出来ていない。

自分自身を納得させることすらできてない。

それなのに、彼女は俺に早くと視線で訴える。

いつもこうだ。

周りに巻き込まれ、理不尽に飲まれるようになし崩しの事に進む。
む。

そこに俺の意思はない。

だからこそ、それを直さなければいけない。

本当はそれを学ぶために、見つめ直すためにここきたのに。

自分がどうしようもない上司だと再確認して、どうやって直していくべきかアドバイスを貰おうと思っていたのに。

蓋を開けたら、何一つ叶わなかった。

いや、1つだけ叶ったのか。

俺はやっぱり、指揮官なんて向いていない。

人の上に立つなんて向いていないんだよな。

そつと彼女が目を閉じたのは、俺が徐々に彼女の顔に唇を近づけたから。

お互いの両頬が赤くなる。

ビスマルクのこんな顔が見れるなんて、珍しいな。

そんな風に俺は、問題から目を逸らしながらそつと彼女の唇にキス

をした。

ふふふふつ

ああ、すまない。

いや、嬉しかったんだよ。

まさか、本当にしてくれるなんて……。

大丈夫、わかってるわ。

今回だけ、今だけよ。

あなたに愛してもらったという感覚を今だけ味あわせて。

……そうね。やっぱり嬉しいわ。

好きな人に愛して貰えるのは、やっぱり嬉しい。

私だって女よ？

自分を満たしたい時ぐらいあるわ。

ありがとう、指揮官。

そんな、顔を真っ赤にしてまでキスをしてくれて。

私も赤かった？

当然よ、私もファーストキスだったんだから。

ええ、キスを挨拶代わりにする文化もあるわ。

鉄血にもあったのかしら？

鉄血にあるとは一言も言っていないわ。

だから、そう怒らないで頂戴。

そうね、でもこれで指揮官もわかったんじゃないかしら？

「私は何時だって、あなたの事を愛してるわ。

あなたが望むなら何だってしてあげられるし、何だって出来る。

だから、望みがあるなら私に言って。

その変わり――

対価はちゃんと、払って頂戴ね」

「やっぱりご主人様はダイドーを捨てるんですね」

「やっぱりご主人様はダイドー達を捨てるんですね」

朦朧としていた意識を取り戻したのは、掠れた弱々しい声が聞こえたから。

その声の主である彼女、ダイドーは両目を真っ赤にしながら尚止まらない涙を隠すように手にしていた小さなシリアスに似た縫いぐるみに顔を押し当てていた。

「ダイドー？ どうしたの急に」

シリアスと同じダイドー級であり、彼女と何処と無く似ているダイドー。

というよりは彼女の方が姉なのだから、シリアスが姉に似ているだけなんだろうか。

とにかく、シリアスの面影を感じる彼女が指揮官室にいるのは少し違和感だ。

姿だけは何処か似ているようで、視覚的には何時もの少し前までのこの風景のように感じてしまう。

しかも、いつも彼女が座っているソファにうづくまっているのだから余計に違和感を強くさせた。

「ドジですが可愛くて愛嬌のあるシリアスを捨てるということは、ダイドーもきつとその内に捨てるんですね……？」

ダイドー、仕える方であるご主人様だけが生き甲斐なのに……そんなご主人様に捨てられたらもう生きてはいけません。

貴方様ならば、きつともうダイドーもシリアスも捨てる事はないと思っていたのに」

俺が口を挟む間もなく問い詰めるように、恨み辛みを殴り書くように続ける。

「捨てられたシリアスを拾ってくださいったご主人様なら、きつとこの先も、未来永劫にダイドー達の傍に居てくださいると思っていましたのに。」

用がなくなったらすぐに捨てる。

仕事がなくなったらすぐに捨てる。

この世界が平和になったらすぐに捨てる。

ご主人様も他の指揮官達のように役目がないからって捨てるんですね。

ダイドー、最近は不安でした。

鏡面海域も日に日に減っていき、戦場に立つ日も少なくなってきましたから、もしかしたらご主人様もダイドー達をもう捨てようとしてるんじゃないかって。

シリアス達はご主人様はそのような方じゃないと言ってくれましたが、ダイドーは不安でしょうがありません。

ご主人様に会うたびに同じ事を聞き、大丈夫と言われるだけで安心してしまいます。

ご主人様

どうか、どうか今一度不安な心で押し潰されたダイドーを安心させてください」

……とりあえず、不安で胸が一杯だというのはわかった。

きつとシリアスが秘書艦から離れると聞いて、捨てられると感じたんだろう。

捨てるというのに過敏な彼女だから。

「大丈夫だよ。誰も捨てたりなんてしないから」

そんな権利があったら、もう使ってると思う。

自分で纏める事なんてもう出来ない程に大きくなったこの母港を、少しでも纏めやすくするために。

「……大丈夫ですか？」

ですが、シリアスは捨てられてしまおうですよね？」

「シリアスの事も捨てないよ」

「そうでしょうか。」

先程酷く落ち込んでいるシリアスに話を聞いたら、メイドの分際でご主人様に大変な粗相をおこしたと言っていました。

もしかしたら、また捨てられるんじゃないかと酷く不安がっていて

……

姉として、大丈夫と言えればよかったです……。

「ダイドーもそんな話を聞いたら居ても立っても居られなくなり、不安で一杯でございます」

悲しげな瞳で様子を伺うように俺を見つめてくる。

少しでも不安を取り除けたらと、何時ものように笑みを送ってみる。

少しだけ、彼女が落ち着いたような気がした。

「大丈夫だよ。」

秘書艦も今まで通りシリアスにお願い出来るようにビスマルクに頼んできたし」

「秘書艦、変わらないんですか？」

「うん。やっぱりシリアスが秘書艦でいてくれたほうが……過ぎしやすいと思うし」

自分で言っていて少し辛くなるように感じた。

ふと思うけど、俺は誰が秘書艦ならよかつたんだろうか。

考えて、すぐに辞める。

誰にしても変わらないと思っから。

「でしたら、これまで通りにシリアスとご主人様はここで共に過ごすということでしょうか？」

「そうなるのかな」

「……そうですか」

一瞬だけ視線を反らされ、再び突きつけられた視線はまた落ち着きをなくしたように暗く沈んでいた。

「嬉しいです。」

「嬉しいですが、やっぱり嫌……」

「嫌って……なんで？」

「思わず聞き返してしまう。」

シリアスには今までと変わらず傍に居てもらおうから捨てることなんてないよつと言われて落ち着くと思っただのに。

「シリアスはいいですよね。」

ドジだからってご主人様によく面倒を見られて。

それに比べてダイドーは……………

ダイドー、できちやう子だからご主人様にも放つて置かれてしまいます。

たまにあつても、ご主人様から直接仕事を受けることなんてありません。

シリアスのように傍にいて、直接話せて、仕事を貰って、それが出来たら褒められて。またお仕事を貰って――

そんな風に、ダイドーを頼りにしてくれたら嬉しいのに。

でも、ダイドーはできちやう子ですから。

ご主人様のお言葉がなくても仕事をこなせますし、それが出来ても皆当たり前のように接してきます。

シリアスのように、常に傍で誰かに見てもらうわけでも、出来たことを褒められることもありません。

ダイドーも、もっとご主人様を感じたいです」

彼女は何を言いたいのだろうか。

わからないならば、聞いてみるのが一番だろう。

少なくとも、彼女相手ならそれが一番な気がする。

「ダイドーは、シリアスが秘書艦になるのが嫌なの？」

「……………」

黙って考え込むダイドー。

先程までの、口調とは違い少しだけ落ち着いた様に自分の気持ちを教えてくれた。

「とても嫌、というわけではありません。

ですが、とても嬉しいわけでもなく。

複雑なんです。

とても言葉では伝えきれません」

再び静かになった彼女。

そんな彼女の気持ちに寄り添うように隣に座る。

言葉では伝えられない不安があるというのなら、これで少しでも落ち着いてくれればいいんだけど。

「ご主人様はダイドーよりもシリアスの方を愛しているのですか？」

シリアスの事を特別に愛しているのですか？

それとも、ダイドールが嫌われているだけでしょうか……」

愛、なんて言葉を聞きたくなかった。

少なくとも、今一番聞きたくない単語だろう。

どうしても、少し前の出来事を思い返してしまおう。

「特別ななんていないよ。皆好きだよ」

ついさっきも同じような事を言って失敗したのに、またこの言葉が出してしまう。

出てすぐに、ビスマルクの顔が思い出す。

普段なら見せないような、頬を赤くし真っ赤な唇を差し出す彼女が。

「いないよ、いないから」

何度も呟き言い聞かせる。

誰に対してなのかは、わからない。

「皆好きで、皆平等に見てる。それじゃ駄目なのかな？」

それで良しとしてほしい。

それ以上の言葉を望まないでほしい。

「お優しいご主人様はきつとそのようなお言葉を下さると思っていました。」

それなのに、ダイドールはそんな甘い言葉では満足できません。

本当に、卑しいメイド……

言っただけなんです。

シリアスだけじゃない。他のロイヤルメイドでもない。

この艦隊にいるどの艦船よりもダイドールを信頼していると。

言葉や形でダイドールに示してほしいのです

ダイドールを求めてほしいから」

言い終わった頃に気がついたが、寄り添うためにと隣に座った俺の手を彼女は震えながら両手で掴んでいた。

寄り添うため、なんて甘い気持ちじゃないだろう。

求めるように、なのだろうか。

「シリアスは戦場でこそ輝く艦船。」

メイドとしての役割を果たすのは難しいでしょう。

対してダイドールは、戦場で期待された戦果を出すためにももちろん頑張りますがシリウスには劣ってしまいます。

ですが、メイドとしての責務は期待された以上に果たせると思います。

少なくとも、シリウスよりは確実に」

膝の上に置かれていたシリウス人形は、彼女が身を乗り出すと共にコテリと地面に転がった。

「ダイドールがご主人様の傍に居ることはいけないことなのでしょうか？」

愛しいご主人様の傍で、求められる事をこなしてみせます。

ダイドールのご奉仕で身も心も癒やしてさしあげます。

だって、ダイドールはご主人様だけのメイドですから」

少なくとも、今は何も癒やされていない。

身も心もガリガリと削られている感じが強い。

「そこまで言ってくれるなんて嬉しいよ。ありがとう」

「い、いえ!!」

ダイドールは愛しいご主人様が居るからこそ存在できているのです！

そんなご主人様の事を何よりも、誰よりも優先して考えるなんてダイドールには当然の事ですから!!

ああ……こんな当然な事を言っただけで、ご主人様に感謝されるなんて……!!」

感謝の言葉一つで見えて分かるほどに喜ばれた。

形が欲しい、そう言われたがこの様子なら……

「ダイドールには何時も感謝してるよ。」

「ごめんね、中々会えないから言う機会がなかったんだ」

「何時も、ですか?」

「うん、いつも」

ダイドールだけじゃない。

皆に感謝している。

俺が部屋に引きこもっていても、小さな揉め事はあっても無事にその日を終える日々が過ごせたのだから。

もつとも、始めから艦船達が各々判断して仕事が出来て……俺はただ、話しを聞いて承認するか否認するかを選ぶだけ。

そんな簡単な役だからこそ、俺なんかがこうして指揮官になれたんだと思う。

そうじゃなければ、俺みたいな厄介者がこうしてこんな所にはいない。

「不安だったよね。」

何時も皆が働いてくれてるのに、俺は部屋に引きこもってばかりだし」

「そんなこと……」

「ご主人様はご主人様の仕事を励まれている事は、ダイドールは知っていますよ。」

不安は……確かにあります……

ダイドール、このまはまご主人様に会えないまま捨てられるんじゃないかって思うと……何時も不安。

ですが、用もないのに会いに行くことも出来ません……そんな迷惑をかけたらと思うと……!!

「ご主人様のお顔を見るのも、その言葉を聞くのも……ダイドールには簡単にはいきませんから」

「もつと会いやすくなったなら、不安じゃなくなるの?」

「はい、きつとご主人様の顔を毎日見れて、毎日ご主人様と話せるだけでダイドールは不安じゃなくなります」

「毎日……は、無理だと思うけど」

残念そうに暗い顔をされたが、俺の反応に違和感を覚えたのかダイドールは首を傾げる。

「秘書艦を増やして、俺の仕事の一部をベルファストにやってもらうと思うてるんだ」

天城から言われた案。

秘書艦を1枠と考えず、もう1つ増やしたらという案だ。

確かに。

素直に納得した。

秘書、なんて言葉がついてるから1枠だと思っていたけど別に何枠にしようが決めるのは俺なんだ。

秘書艦(という存在は前にいた他の指揮官が作ったルールのようなので消すことは出来ないって言われたけど)。

流星は天城だ。

困った時に助けてくれる彼女は本当に心強い存在だ。

そんな天城やビスマルクに言われたのが、俺が部屋に引きこもっていてはいけないという事。

皆の顔をちゃんと見に行かないから、秘書艦として傍に居られる存在に価値が生まれてしまうと。

確かに、大鳳や赤城それに鉄血の皆と少し会えただけでも皆とても喜んでくれていた。

もちろん、それを見てもう少し外に出ないといけないと思っただけだ。

それを言われたのもあるし、少しでも良い上司になるためと思い、こうする事に決めた。

皆の不満が少しずつでも無くなっていけば、もうあんな無茶なお願いを押し付けられることもないと思うから。

少しずつでも満たしていけば、後々になって大きな欲をぶつけられることも無いと思うから。

「ベルファストさんが、新しい秘書艦として迎え入れられる」

「もちろん、シリアスもこのまま秘書艦として——」

「やだ」

ダイドーもそれを聞いて落ち着いて、無事に話も解決——なんて甘い展望を描いていたけど、それは叶わないようだ。

握られた手が大きく震える。

同じように、彼女の瞳も。

「いやだ!!」

なんでベルファストさんなんですか？

ロイヤルメイドでいいなら、出来のいいメイドを望むのならば、ダイドーだつて居ますよ!?

そうしてベルファストさんやシリアスだけ愛して……ダイドーの事は捨てるんですか……??

ダイドーは、ご主人様にとっていらぬ存在なんですか……??

ダイドーは、こんなにもご主人様を必要にしてるのに……!!

ダイドーは、ただ愛しいご主人様に必要にされたいだけなのに……!!

なのに、ご主人様は……ご主人様は、ダイドーをいらぬいつて言つて……捨てるんですね……」

「す、捨てないから！ 大丈夫だから!!」

「いやです、捨てないでくださいご主人様

この子みたいに……あの時のシリアスみたいに捨てないで……!!」自分で捨てた、というよりも落としたこと気づかなかつたのかもしれないが。

地べたに落ちたシリアス人形を抱き寄せながら震えた瞳は確実に俺を見据えていた。

「大丈夫だよ、ダイドーをお願いしたいこ——」ダイドーに出来る事ならなんだつてします!!」

言い終わるよりも早く食いつかれた。

揺れは落ち着き、今度はさつきまでの動揺を殺した様な必死さと力強さを前面に押し出してくる。

「ダイドーにお願ひしたい事は……」

ここは慎重に言葉を選ばないといけない。

「それは、ね」

ただ、そんな事考えてなんていない。

自分の事だけで精一杯だ。

艦船達のこともちちんと考えないと。

そう思い一歩踏み出そうとした時に今すぐに私の事を考えろと言われても、困る。

せめて、もう少し時間がほしかった。

必死に考える。

落ち着かせられるような役割を、仕事を与えてあげられないかと。時間はない。

すぐに力強さは消えていき、再び揺れが現れ始めた事が俺にそう告げている。

「ダイドーには、ね」

本人も言っていたが、ダイドーは優秀な艦船だ。

本当に、何でもやれちやう子だ。

シリアスとは対照的に。

失敗した、そう後悔してしまう。

そんな後悔する時間はないのに、思考はどうしてもそっちへと逃げてしまう。

始めからベルファストの名前を出さなければよかった。

メイド長のベルファストの名前を出せば、他の艦船よりも角が出さないだろうし、名前を出さなければ自分がやると言ってくると思ったから口にしたのが運の尽き。

結局何を選んでもこうなったんだろう。

ダイドーには何か、仕事を与えれば落ち着く。

たぶん、そう思う。

役に拘る彼女に与えられる役割を。

「今度、今度なんだけどね」

もうスムーズに言葉を選ぶ時間もない。

勢い任せで言うしかない。

「今度、久々に海域に出ようと思うんだ」

思っただけのこと。

エンタープライズの約束を破った代わりに、彼女が頑張ってる姿を傍で見届けようと思っていた。

先ずは手始めにこれから動こうと内心決めていたことだ。

後は、彼女に役割を決めるだけ。

「その時にね、ダイドーにも付いてきて欲しいんだ」

「ダイドーが、ですか？」

「うん、海域には他の艦船も行くんだけど……護衛っていうのかな？
俺の事を守ってほしくて」

「ダイドールが、ご主人様の身をお守りする……!!」
震えなんてあつという間に消えた。

眩しいぐらい輝く瞳がようやく事を終えたのだと告げてくれる。

「ダイドールが、愛しいご主人様の身をお守りする」

何度も繰り返される復唱に水を差さない。

差したらせつかく落ち着こうとしている事の和が乱れそうだから。

「ですが、戦場に立つということならばシリアスに任せて、普段の秘書艦をダイドールにすればいいのでは……?」

「シリアスにはシリアスの仕事があるから」

本当はシリアスに任せようとしていたことだ。

母港での活躍はベルファストに、海域ではシリアスに。

そのように秘書艦の役割を分けたら、彼女が相応しくないだなんて声も減ると思っただから。

まだ時間はある。

シリアスに何をしてもらうかは追々考えていこう。

「俺はダイドールをお願いしたいと思っただけだ」

「いえ!!」

ダイドールは、ご主人様に任せられた事は全力で励みますよ。

ご主人様の身は、ダイドールがお守りします。

ずっと……ずっと守ってみせますからね」

「そっか、ずっとか……」

深くは追求しないでいこう。

「今回の結果が良ければ、今後もダイドールに任せていただけますか?」

「……うん、考えておこよ」

「ふふふつ、なら頑張らないといけませんね。」

ダイドールがご主人様に捨てられないように……

ご主人様の望む仕事を何時でも果たせるように、頑張りますね

ダイドールは仕える方、つまりは、ご主人様が生き甲斐ですから」

嬉しそうな笑みを見ると、少しだけ俺の気が落ち着いた。

秘書艦を変える、そんな話から色々と発展したように感じる。

これが良い方向にかえばいいけど……。

でも、ダイドールと話していて過ごしただけ思ったことがある。

こうして望みが溢れる前にきちんと欲を満たせば、大きな事にはならないという事。

今日ダイドールと会えず、彼女をあのまま放っておいたら……。

こんな事では解決できなかった気がする。

やっぱり、もう少し皆とちゃんと会おう。

そんな風に思う。

少しでも、皆と触れ合っておいたほうが、きっと大きなトラブルは起きないだろうから。

それに、きつと皆今回の事の顛末を聞いて大なり小なり不満を持つだろうから。

変えると言ったりやっぱり変えずに増やしますと言ったり……

自分のことながら、本当に無責任だと思う。

もつと、俺も自分の言葉に責任感を持たないといけない。

だから、責任感を持たなければいけない。

艦船達と触れ合って、こんな子たちの上にいるんだと、自分に言い聞かせれば少しは気持ち芽生えるのだろうか。

正直な話、色んな艦船達と接しながら日々を過ごすことに少しだけ抵抗がある。

けどそれは、きつと今だけ。

まだ一度荒れた気持ちの整理がついてないだけだ。

そう、タイミングの問題だ。

………暫くは、無責任な俺がやってしまった事に対しての火消しになるのかな。

そう思いながら、先ずは上手く行ったであろう彼女と共にこれからの幸先を祈りつつ笑った。

「あの下僕は何がしたいのよ」

「あの下僕は何がしたいのよ」

彼女、クイーンエリザベスの呆れた声が静かな部屋に響く。

隣で聞いていたウォースパイトもまた、今回の顛末に呆れた顔を見せていた。

そんな二人の前で膝をつくベルファストだけは、内心溢れる嬉々とした気持ちを隠しきれずに口元に薄っすらと笑みが見えていた。

秘書艦を変えてほしい

そんな自身の一言から始まった騒動は、望む結末とは言わないまでも充分に妥協出来る程度にはいい結末を迎えたからだ。

秘書艦を変えることはしないが、枠を増やすことにする。

結局はそんな結論で終え、その増えた場所はベルファストが収まることになる。

眼の前の女王同様に仕える主の傍でこれからの日々を過ごすという未来は、彼女には充分過ぎる幸福な未来であった。

「……まあ、結局はロイヤルメイドがあいつの面倒を見ることになったのは良い事なんだけど」

納得したような口振りだが、クイーンエリザベスはその不満そうな顔を隠す気はない。

演習の結果で秘書艦を決めるといいう話が決まり、彼女はそれに対して未来を見据えていた。

今迄の演習では、ロイヤルがこの母港でも強さを見せていたからだ。

次点のユニオンに負ける事もあったが、勝率で言えば大差つかないが此方に分がある。

今迄通りに挑めば、きつと自身の何れかの部下がその席に座ると見据えていた。

しかし、現実とは違う。

今迄真つ先に挑まれてきた鉄血を撃退してから次の敵を見据えていた。

それはユニオンだった。

彼女達も自分達のように挑んできた重桜相手にケリを着けていたのだ。

演習ではそんな流れが既に出来ており、誰もがそう思っていた。

ユニオンとロイヤルの皆は。

「……………」

彼女が演習での出来事を思い返すと、その不満げな顔はより色を増す。

それを見たウォースパイトも主の考えを察して気まずそうに顔を背ける。

初めての経験だった。

海域での本戦でも見せられなかった程の圧倒的な力の差を見せつけられたのは。

前衛にいた艦船達は殆どなんの成果も上げられずに沈み、主力として、主の傍に立ち守るための剣として佇んでいた自身もまたその力の前に沈んでしまった。

オールドレディと他称され、自身もその渾名を用いるのは自信の顯れからだ。

数々の戦場を経験し周りと比べても長い艦歴を持つ自分の呼称に相応しいと思っている。

そのプライドを傷つけるには充分すぎるような出来事に言葉が出ない。

結果だけ見てしまえば、増やした枠にはベルファストが入ることになつた。

元からの枠は、変わらずシリアスが務める事にもなる。

何ら変わらないどころか、ロイヤルがより指揮官の傍を固める形になり喜ばしい事。

しかし、ベルファストを除いてそれを喜ぶものはいない。

彼女の横で未だに頭を下げ、口を開こうとしない者もその顔に感情は顯れていなかった。

そんな彼女を見てクイーンエリザベスは言った。

「で、シリアスはどんな手を使って秘書艦に戻ったのかしら」
名前を呼ばれて初めてその顔を上げる。

クイーンエリザベスの目を見て、一度逸らしてしまう。
自身の行いに恥ずべきことがあったのは確かだ。

だが、陛下にそれを聞かれた以上は隠すことはできない。

視線を戻してから、彼女は自らの主人への行いを口にする。

早めに帰ってきた彼が、わざわざ自室まで来てくれたことを。

疲れた主が横になって休んだ事を。

邪な気持ちがあつた事は流石に隠し、服にしわが着くことを恐れた
と名分を作つてその服を脱がそうとした事を。

その話の時にベルファストは明らかに不機嫌になったが、その気持
ちはすぐに逸れる。

主人の首元に、誰かのキスマークが付いていたという事実には皆が絶
句した。

「本当に、あの馬鹿下僕はなにをやってるのよ!!」

直ぐに口を開いたのはクイーンエリザベスだ。

怒りに湧いた力を足に込めて地面を蹴り上げるように椅子から立
ち上がる。

優雅とは程遠い振る舞いと共にその感情をぶつけていく。

「本部で仕事をすするって言うから見送つてやったのに！」

女と遊ぶのが仕事つてわけなの!!」

当てる宛がない矛先をシリアスに向ける。

それを言われたところで、彼女は何も言えない。

静かに聞くことでその怒りが落ち着くならと傾聴する。

「誰が私の下僕に手を付けたわけ!!」

そんなやつ、処刑よ！」

「相手に関しては尋ねましたがわからないと仰られてしまい」
「何よっ！」

遊んだ女は名前も知らない奴つて事なの!!」

収まるどころが増していく感情。

ウォースパイトも収めようと考えはするが、彼女もまたその相手が

気になって仕方がない。

ベルファストも同じ気持ちだ。

2人は共にこのまま陛下が直接向かった方が知ることが出来るのではないかという考えに至ると鎮めようという気持ちが少し薄れる。

「もういいわっ!! 私に直接聞いてくる!!」

2人の願いを聞いたかのように言うのと、その小さな足が大きく前へと運ばれる。

しかし、二の足が出る前にシリアスは言った。

「今回はローンさんと共に本部に行かれたとの事です。

話を聞くと、夜間も彼女と同室で過ごされたそうで……。

緊張で余り眠れなかったと言われていましたが、ご主人様は少しはそこで休まれたとも話されていました」

「なら、犯人は鉄血の新顔なのね」

「……可能性が高いのは、彼女かと思えます」

鉄血の言葉を出して益々機嫌が悪くなる。

歩みを戻して椅子に乱暴に座ると、組んだ足を指で軽く突いていく。

不規則なペースで音も出ないが、その姿を見ただけで怒りを感じる程にはわかりやすかった。

「本当になんなのよっ!!」

演習では散々な結果を送られた。

自身の部下達が不甲斐ない結果を叩きつけられたのを目の当たりにした。

そして、その演習の裏では指揮官にキスマークを付ける。

まるで、自分達の所有物だと言われていると思うと腹の虫が居所を失う。

「……それで、シリアスはどうして秘書艦に戻れたのかしら?」

聞きたいことを聞いたウォースパイト。

ウォースパイトもまた主と同じ気持ちではあるが、その感情を陛下の前で見せるわけにもいかない。

話を変え、自身を落ち着かせる為にも次へと促す。

「……それを見てしまい、気が動転してしまつて思わずご主人様を突き飛ばしてしまいました」

申し訳無さそうに呟く。

それを聞くベルファストは眉をピクリと一瞬動かす。

喉元まで咎める言葉が出てきたが今は抑える。

陛下の手前で、粗相を犯すことはメイドとして許されない。

言及も仕置も後で行えばいいだけの話だと言ひ聞かせる。

「ふんっ!! いいさまね!!」

よくやったわシリアス」

それを聞いてクイーンエリザベスは少しだけ機嫌を良くすると続けた。

「私達以外の艦船に粗相を犯したんだからいい躰よ!!」
ロイヤル

せつかく人員を割いてまで世話をしてやつてるのに、他の奴らに目移りされたら困るわ!!」

指揮官自身は何もしていない。

そんな事は彼女もわかっているが、やはり許せない。

例え一方的にされた事だとしても、彼自身が気づいていなかったとしても——。

他の陣営に勝手を許したのは自分のミスなのだからと責め立てた。

「……まあ、指揮官にした事は置いといてその後はどうしたの?」

ウォースパイトはこの中で一人悩んでいる。

シリアスの様に後悔する理由もないが、クイーンエリザベスのように当然の報いだと喜ぶ気持ちもある。一方で、ベルファストのようにシリアスが主に手を上げた事に対する怒りも少しはあるのだ。

複雑な気持ちだが、それらを決めるのは今後で良い。

話を聞き終えた後に、指揮官をどう思うかは決めればいいのか
ら。

「その後は、秘書艦を外れたくないと我儘を口にしてしまいました。

シリアスは誇らしきご主人様のお傍を離れたくない、と。

そう口にしたら、心優しきご主人様が何とかすると言つていただけ
たのです」

最後は嬉しそうに話した。

笑いながら自身を求めてくれた主の顔が思い出すと不思議と笑みが漏れてしまう。

多少ぎこちなさも感じたが、それは気のせいだろうと補完する。

無意識に、勝手な修正を加えていた。

「で、下僕は何とかして秘書艦をシリアスのままにしたの？」

「何をしたかまでは聞いておりませんが、ビスマルク様と話した結果そうなったと言われておりました」

「……そう」

結果だけ見ればロイヤルは勝ち組だ。

演習には確かに負けたが、大切なのは指揮官の傍を固める事。

それが今後において最も比重が置かれる。

それは、鉄血も同じはずだ。

指揮官の傍に居られる機会をわざわざ放った事に意味があるのだろうか。

それに、演習で見せつけられた圧倒的な力の差も。

本人達はここ最近の海域での戦闘で経験の差が開いたと言っていたが、それだけでは説明できない何かを感じていた。

重桜に負けたユニオン達も皆何か疑問を抱いていた。

その力に不思議な違和感を。

口に出るほど明確ではなく、自分達が負けた言い訳と思われるのはプライドが許さないためおっぴらに口には出来ないが。

「……まあ、今は考えても仕方ないことね」

誰にも聞かれないように呟きつつ一度思考を止める。

例え眼前の壁がどのような大きさだろうと、自身の優秀な部下達ならば超えられる。

そう信じて彼女は止まらない。

「ウォースパイト」

彼女の名を呼ぶが、その視線はその先にあるテーブルに向かっていた。

窓際に置かれたそれは、夕焼け空に照らされて鈍く輝く。

だからこそ輝かない一枚のメールがその存在感を確かにさせていた。

「……はっ」

視線の先にあるものを彼女はわかっていた。

いや、彼女にしかわからない。

メイド長としてメイド隊を束ねているベルファストも、指揮官の傍に長くいるシリアスもその中身は欠片も知らせていない。

知っているのは、自分の忠実な部下であり最も信頼している彼女唯一人。

その中身を他の艦船達に知らせるわけにはいかない。

ウォースパイトはその視線に対してその身を傳かせて忠誠を見せる。

それだけで、クイーンエリザベスは満足気に微笑み領いた。

「ベル、暫く他のメイド隊にも指揮官の世話をさせなさい」

「僭越ながら、ご主人様にはベルファストが付いております。

他のメイド達が居なくとも当面は不便はないかと思われませんが」

「いいから！」

あいつが何も不満を覚えないよう、全てにおいて満足させるようなサービスを徹底的にさせなさい!!

ニューカッスルと相談して、具体的な形にしといて頂戴」

「……かしこまりました」

渋々といった様に一礼しその指示を受けた。

その仕草を見終え、隣に立つシリアスへと移る。

「シリアス、あなたはもつとあいつの傍にいて頂戴。

今後あなたにはきつと、今迄以上に他所から厳しい事を言われるわ。

わざわざ指揮官がその言葉を曲げてまであなたを秘書艦にしたんですもの、他所からは疎ましく見えるでしょうね。

でも、そんな奴らの事なんて何も気にしなくていいわ。

あなたは誇り高いロイヤルのメイドの一員。

秘書艦にも成るべくして成ったと思いなさいっ！

一々負け犬の遠吠えを聞いていてもきりが無いわ!!」

「今後とも誇らしきご主人様の傍に居られる様に精進致します」

シリアスもまた、ベルファストのように一礼する。

ベルファストのような優雅に魅せるようにとは言わないが、少しでもそれらしく見せようと努力をした形跡が伺える。

それは、ここに来る前のシリアスを知っているロイヤル艦船達には微笑ましく見えた。

誇らしいと称する主の為に、その傍に居られるためにと必死にメイドとしての責務をこなそうと努める姿を。

実を伴っていないとはいえ、その姿を指揮官に見せるだけでも良い。

その努力する姿をきくと、あの指揮官は評価するとクイーンエリザベスは思っていた。

「あいつは私達のモノよ」

今度の眩きは傍にいるウォースパイトにも聞こえた。

だからこそ、小さな領きと共に応える。

「他の艦船達にも経験を積ませるために、海域見回りの強化として出撃機会、ロイヤル間の演習増加を指揮官に伝えておきます。

栄えあるロイヤルネイビーとして、次は無様な結果を出さないように私も鍛錬に励まない」と

「そうね」

ウォースパイトの言葉に頷いて返す。

「私達栄光あるロイヤルは欲しい物は必ず手に入れるわっ!!」

それも、向こうから寄ってくるような輝きを持ってして。

一流のメイド達による奉仕に、一流の艦船達による戦歴。

次の演習では、あんな惨めな真似はさせないことを余所者たちに見せつけなさい!!

そして、あの馬鹿下僕にロイヤルこそがこの母港で必要な存在だと思わしらせるのよ!!」

その号令と共にクイーンエリザベスは再び立ち上がる。

視線の端で捉えたその手紙に誓うように眩く。

「誰にもあいつは渡さない。触れさせすらしない。」

あいつは、私達が貰うんだから」

それが、ロイヤルの為になると彼女は信じて疑わなかった。

「キスで満足するって、まるでおこちゃまじゃないの」

話を聞いてからかうように笑いながら彼女、プリンツ・オイゲンは少し呆れた声で言った。

話し相手であるビスマルクはその言葉に笑う。

「好きな相手にキスをされたら、誰だって満足するものじゃないかしら？」

言葉でこそ反論するが、おこちゃま扱いにバツが悪い。

普段仕事に使うテーブルへと視線を反らして逃げる。

月明かりに照らされたテーブルには、明日の分にと仕分けた書類と共に普段被っている帽子が照らされていた。

その明かりにこれも照らすようにと、プリンツ・オイゲンは手にしたジョッキを伸ばす。

中に入ったビールが振動で零れそうになるのを見ると、慌てて口元に寄せて軽く含んだ。

「されたらっていかさせたの間違いじゃない」

「……私はされた側だ」

「はいはい」

友人の少しムツとした顔にクスクスと笑みが溢れた。

キスをするのではなくさせた事に拘りを見せるその姿が益々子供に見えて愛らしい。

「でも、私だったらもつと過激なお願いをしたのに」

酒も良い感じに回り軽くなった口から出た言葉にビスマルクは笑う。

「過激なお願いなんてしたら、嫌われるかもしれないわ」

「やり方があるのよ。」

女として見てほしいなら、もっと上手くやらないと」

「……そういうものか？」

肩をすくめるビスマルクに対して、その豊満な自身の胸をプリンツ・オイゲンは寄せる。

同じ女性の形をしたビスマルクから見たら、邪魔な物と思っていたが今はそれが羨ましく思えてしまう。

「どんな場面でも武器は必要よ。

戦場でも、恋愛でもね。

相手は何時だって1人とは限らないんだから、自分だけの得意な得物を把握しておかないとね」

「オイゲンはその胸が得物なのかしら」

「当然、生まれ持ったものは有効に使わないともったいないわ」

今度はプリンツ・オイゲンが肩をすくめた。

「ビスマルクももっと魅力を出さないと、他の艦船に取られちゃうかもしれないわよ」

「……それは困るわね。

彼にはまだ知って欲しいこともやってほしいことも沢山ある。

まだ私は全く満たされてないわ。

この乾きや飢えに似た感触を取り払ってくれるまで、指揮官を取られるのはお断りよ」

「そう」

短い返事の後に再びビールを一口含む。

自身の喉の乾きは直ぐに満たされるが、目の前の相手はそう簡単にはいかないらしい。

真似るように口に含んではいるが、こんなものでは乾きは拭えないのだろう。

「なら、尚更秘書艦を下りることなかったじゃない」

「……………」

その言葉に返事はない。

「秘書艦として傍にいたほうが、もっと距離を詰められたでしょ。そうすれば、もっと自然な距離で好き合えたのに。」

それに私も、あなたが秘書艦でいてくれた方が自然と指揮官に会えるから嬉しかったのに」

残念そうに呟きつつもその口元は笑っていた。

ビスマルクはからかう様な言葉に対して、今度は付き合う素振りは見せない。

真剣な眼差しは再びテーブルへと向かっていた。

「……時間がないんだ」

「まあ、でしようね」

プリンツ・オイゲンは静かに目を閉じた。

事を急いては仕損じる。

そんな言葉があるが、物事は慎重に進められるほどいつも簡単ではない。

大抵の事には、必ずリミットが設けられる。

唐突に、突然に。

「自然に距離を詰めるのには時間が掛かりすぎるし結果が見えない。

だったら、印象に残る終わり方にした方がいいでしょう？」

それに、困った彼を助けた事もきつと強く印象に残るはずよ」

「あなたがそこまで恋愛に考えが回るなんて珍しいわね」

「……女狐の入れ知恵よ」

女狐と言われプリンツ・オイゲンは目を細める。

そんな表現を鉄血の艦船達には決してしない。

皆を大切に思う彼女なら、決して。

狐の正体に何となくの当たりをつけるると一気に気分が悪くなる。

「今回の一件は、彼を困らせただけの茶番劇だったのかしら？」

「そうだったのか、そうしたのはわかからないわ。

でも、火付け役はロイヤルメイド。

私達は彼を困らせた彼女達を窘めただけよ。」

その案を教えて叶えてあげただけ」

「……そう」

それを聞きまだ半分以上入ったビールを一気に口に流し込む。

最後の一滴まで飲み干すと、ジョッキをそっと机に戻した。

それは、もう終わりという合図だ。

「まあ、指揮官を困らせるのはいけないことよね。

人気者の彼はただでさえ大忙しなのだから。

私達のような理解者がきちんと面倒を見てあげないと」

「そうね。

手綱は常に握っておかないといつか面倒事になるに違いないわ」

互いの気持ちを確認し合うと、プリンツ・オイゲンは立ち上がる。

それを見て、ビスマルクのジョッキも空になった。

「彼にはわかってもらわないといけないわ。

この世界には必要なものが決まっている事に。

不必要な存在にまで手を広げたら、余計な足枷になってしまう事

に」

「そうね。

取捨選択を迫られた時に大切な物をすぐに思い出せるように私達が助けてあげないといけないわ。

冷酷な判断を出来ない彼に、私達が答えを事前に教えておかないといけない」

「鉄血には、指揮官が必要な存在よね」

「そうね、必要なものは守ってみせるわ。

もう失ってはかりは嫌だもの。

『この世界』でぐらい幸福を守りたいものね」

互いの意識が揃った事に対して不思議と二人揃って微笑み合う。

互いの顔を見て最後、プリンツ・オイゲンは部屋から出ていった。

扉が閉まる音が響く。

静かな部屋に反響した音が消えると、ビスマルクは小さく呟いた。

「……守りたいモノの幸せのために、私達はなんだってするわ。

鉄血の皆もそう言ってくれてる。

私達だけは、何時までも貴方の味方よ。

指揮官

あなたは誰の味方なのかしら？」

そんな呟きを言い終えると、再び扉が開く。

誰か来たかと少し警戒した視線を向けるが、扉の隙間からひよこつと顔を覗かせたその笑みに緊張の糸が解けた。

「……ローンか、どうした」

名前を呼ばれるとローンはそつと部屋に入る。

手にした大きな封筒を彼女に見せびらかす様に手前に持っていた。その中身に見当が付かないビスマルク。

中身を尋ねる前に、と彼女を自分の対面に座らせるように促した。

「ふふふつ、ありがとうございます」

笑みを崩さず案内された席に座ると、目の前の空のジョッキに目が行った。

自分の前に置かれたそれと、ビスマルクの前に置かれたものに。

「誰かと飲まれていたんですか？」

「ああ、オイゲンと少しね」

「珍しいですね、ビスマルクさんが飲まれるなんて」

「今日は良い事があったから、その祝に飲もうと誘われたの」

友人の飲みのだしに使われたただだが、久々のお酒というのもあり短いながらも楽しい時間を過ごせたと彼女は感じていた。

今日は楽しい事が多くあった。

その最後になろうイベントが楽しくなる事に期待を寄せつつ、視線を封筒へと向けた。

「ああ、これですか」

向こうにいた重桜の艦船がビスマルクさんに渡してくれと渡されただんですよ」

「重桜の艦船からね」

「はい、とても古い型でしたので艦歴が長い方なんだと思いますよ」

なんでも、指揮官の昔からの知り合いだそうです」

「……そう、彼の知り合いね」

誰が送ってきたかにビスマルクは興味がなく流し聞きをする。

重要なのは、重桜の艦船がローンを通じて送ってきたこと。

公的な手段ではなく、人伝いに渡してきたような書類。

封を開けると、中から数十枚の紙が出てきた。

どれも両面一杯に文字が刻まれたその膨大な量に酔いが覚める。

「……………」

どうやら楽しいことではなさそうだ。

そんな思いに辟易としながらも最初から順に目を通していく。

「そういうえば、あの人今日も指揮官とお会いしたそうですね。」

わざわざ私を置いて母港に返しちやっただんですよ……………」

せっかくなら、帰りの船旅も楽しく帰りたいかったですけどね」

ローンの言葉に返事もしない。

彼女が話し終える頃にはビスマルクはもうその書面に夢中になっていた。

そんな彼女の真顔に目を細めつつ、楽しそうに微笑みながらローンは一人続けた。

「これ、他の艦船達に見せたらいけませんよ?」

「……………見せたらきつと暴動が起きるでしょうね」

その言葉に反応するとビスマルクは顔を上げて書類を封筒に戻した。

その顔にはもう、楽しさの欠片もない。

「量が量ね。」

時間をかけてゆっくり見させてもらおうわ」

「そうしてください。」

当面は、ビスマルクさんと重桜の艦船の何名かにだけ知らせる話だ
そうですよ」

「……………重桜の艦船は知ってるのがいるのね」

「ですから、向こうはユニオンやロイヤルが嫌いなのかもしれません
ね」

無理矢理奪ってこんな事してるんですから」

そう言つてローンはクスクスと笑った。

彼女が何に笑っているのか気になるビスマルク。

先程の自分もこのように笑っていたのだろう。

そして、それは尋ねられても素直に皆に話せるかと言われれば
そうでもない。

キスをされただけで浮かれているなど、余り多くの艦船には言えない。

プリンツ・オイゲンのようにはからかうのもいれば、自分の行いに苛立つモノもいるだろうから。

応えられなければ答えてくれなくてもいい。

そう思いつつ尋ねてみた。

「そんなに楽しいものかしら？」

その疑問にローンは口元を手で隠す。

手で隠していない目は、楽しい表情を映したままだが。

「いえ、これからきつと楽しくなると考えると思わず……」

「すいません、これの中身が楽しいと思ったわけじゃないんですよ」

自分でも隠しきれていないと察し、ローンは一度目を閉じる。

再び開けた時には、感情を隠すように無理をしていた。

「こんな、指揮官が本部でどんな扱いを受けていたかなんて……知った所で、喜ぶ私じゃありませんから」

指揮官と呼ばれる彼が、どんな扱いを受けてきたか等ビスマルクは知る由もない。

なかった。

しかし、報告書の始まりを読んだだけで何となくの察しはついた。

セイレーンの関係者の疑い、等という一文だけで。

監禁した等という物騒な言葉も視界の隅で見えていた。

ただ、中身が気になるのも事実。

自分が止めた先には彼が関係者と疑われる理由についての記述があつたからだ。

指揮官という人間をよく知るためにも、中身は把握しなければいけない。

中身は時間を重ねて読むことになるだろう。

これを読みながら、自分の気持ちをより固めなければいけない。

ついさつき口にした、彼を守るという気持ちを。

そのために、何をするかをより明確にしなければならない。

「……ふふふつ、いっぱい敵が出来たら私もこんな平和な世界で退屈しなくてもいいですもんね」

そんなローンの小さな呟きは、考えに没頭していたビスマルクには届かなかった。

秘書艦を変えてください

そんな言葉で始まった騒動が終わった。

その翌日、俺は当たり前のように部屋にいるメイドの膝枕で起こされてしまう。

秘書艦の枠を増やす

そんな強引のような、解決とすら言えない手段で幕を閉じた騒動に当然皆納得がいかない。

朝から行列と共に色んな艦船達が俺と、いや、殆どがシリアスとベルファストに向かって強い言葉が部屋に響く。

仕事どころの騒ぎじゃない。

そんな艦船達に俺は、秘書艦を増やして仕事を減らして皆ともっと会えるようにする、シリアスが秘書艦のままなのはビスマルクには鉄血を纏めて貰ってて忙しいから、と同じ言葉を何度も口にした。

それに対する反応は様々だ。

納得行かないが渋々引き下がる艦船

怒りをぶつけて止まない艦船

やっぱり秘書艦はシリアスから変えてくれないのだと涙ながらに訴える艦船

………

本当に、皆違った反応を見せてくれる。

まるで、本当に色んな人を相手にしているようだ。

………

また1人、勢いよく扉を開けて入ってきた艦船がきた。

今度の彼女も凄く怒っている。

怒声を浴びながら、今日だけで何十回と言いつづけた言葉を言う。そこに不満はない。

結局、俺が何をしたかったかなんて俺自身わかっていないのだから。

変えるとか変えないとか、やっぱり増やしましたなんて……。

本当に、俺は何がしたかったのだろうか。

困った時に手を差し伸べてくれる艦船が居ることだけが救いなのかもしれない。

困らせるのも艦船なんだけど。

ようやく彼女の怒りが収まってきた。

俺は言い慣れた謝罪の言葉を重ねる。

人の姿をした彼女。

人の姿をしているだけで、人間ではない。

でも、人間のように感情を持ち思考をする。

本当に人のようだ。

でも、人ではない。

なら、人と艦船の違いは何だろうか？

簡単だ。

戦えるか、戦えないか。

幼児のような艦船にさえ、俺は勝つことは出来ないだろう。

根本的に出来が違うのだ。

だから、人じゃない。

そう思う気持ちもありつつ、でも、人として接さないとと思いつつ……。

人ではない、化け物かもしれない存在。

セイレーンという化け物の力から生まれた存在を。

俺は、今日も大切にしなければならぬ。

ようやく帰った彼女の背を見て、テーブルに置かれたコーヒーを一口含む。

エグみを感じる甘さが、油断していた俺を襲う。

吹き出しそうになったのを耐えられたのは、ベルファストが俺をじつ

と見ていたからだ。

彼女に悟られないように笑みを作って飲み込んだ。
紅茶を差し入れしてくれたシリアスは、ベルファストの顔色を伺い
つつ俺に視線を向けてくる。

ああ、甘いのが飲みたいてってリクエストしたっけ。

……本当に、何がしたいんだろう。

自分自身に呆れつつも、「ありがとう」と伝えた。

それだけで、嬉しそうに微笑むシリアス。

………ああ

何故だろうか。

艦船達を振り回し、振り回された後だからだろうか。

不思議と、気持ちが戻ってしまふ。

ここで過ごすと覚悟を決めるより前の自分に。

今だけだ。

そう思いつつ、紅茶を再び口に含む。

きつと、時間が経てば忘れるはず。

自分の気持ちなんていらぬ。

仕事に私情を挟んではいけない。

そう、三笠さんに教えてもらった。

だから、今だけ。

もう少ししたら、そんな人と人型の区別なんて忘れるはず。

何時ものようにソファアに座るシリアスと、彼女の淹れた甘い紅
茶。

違いがあるとすれば、ベルファストの存在ぐらいだ。

それもきつと、すぐに日常になる。

日常に浸れば、自分の気持ちなんて忘れた習慣になる。

ただ、今はまだ忘れられそうにない。

嬉しそうに笑う彼女。

人である自分よりも圧倒的に強くて、それこそ、気まぐれで俺を殺
す事なんて簡単に出来るのだろう。

実際艦船達は――

諦めたように笑いつつ、俺は口の中の甘い液体を飲み込んだ。
「気持ち悪い」

幸いなことに、不思議と漏れた言葉は誰にも聞かれなかった。

番外編

「あなたに対する愛情をぎゅ〜って詰めたチョコレートを持ってきましたよ〜」（バレンタイン前篇

バレンタイン

チョコを貰えるかどうかで一喜一憂する日

チョコレートという物に特別な価値が付与される1日。

少年もまた、この日に対して一喜一憂する時があった。

まだ『普通』の人と変わらない時は、小さな町で生まれ育っていた事もあり幼馴染とも呼べる女性と仲良く過ごしていた。

毎年この日にはその少女からチョコを貰っていた。

町が消え、『普通』というレッテルが剥がされ、薄暗い牢獄のような場所に監禁されてからは三笠が彼へ特別にと大福を送り共に食べていた。

周りの軍人達は何処かで買ったのか、甘い物を彼に見せびらかすように食べる事が多かった。

それは、彼にそんな嗜好品を買う権利も金も無い事を知っていたから。

提供される食事に、そんなご馳走はなかったからだ。

それでも、三笠は人の目を盗み時折彼に恵んではいたが。

だからこそ、彼は今でも甘い物が好きなのかもしれない。

少年は思い返してクスリと笑う。

いい思い出ばかりとは口が裂けても言えないが、それでも楽しいと思える時は確かにあったのだと。

その時はがりは、『甘い物』というものに対して彼は特別な価値を見出していた。

物には必ず価値がある。

バレンタインというイベントにとって、チョコレートという菓子に価値が付くように。

この特別な日に、自らの思いを乗せて価値を付与させようとする女性達。

この母港において、少年は大多数の者たちにとっての特別だ。

その特別を一重に受ける少年からしたら、この日はある意味憂鬱なのだろう。

思いという価値が乗った物を渡されるこの日。

少年からしたら、絶対に受け取りたくないものがやってくる。

だからこそ、この価値が邪魔となるのだ。

バレンタインという地獄の1日が始まりを告げるように目覚ましが鳴り響く。

「あなたに対する愛情をぎゅゅって詰めたチョコレートを持ってきましたよ」

陽気な声と共に満面の笑みを浮かべて彼女、ローンは部屋に入る。

入ってすぐ、何時もとは違う異様な光景が飛び込んできて彼女の笑

みは苦笑へと変わった。

まだ朝早いと言うにも関わらず、部屋の済には大量の箱が山積みになっていて。

大きいものから小さいものまで、崩さないようにと丁寧に積んでいるその様が彼の几帳面さを表しているように感じる。

それだけではなく、少年は普段のように仕事机ではなく来客用のソファーに腰掛けて眼の前の巨大なチョコレートケーキを必死に口にしていた。

明らかに一人で食べるには苦痛であろうその大きさに、少年は疲れ切った笑みを浮かべていた。

「ああ、ローンありがとう」

力ない返答に「ええ……」と返してしまふ。

まさか自分が早くからこんな引くことになるとは。

思ってもいない始まりにつまづいてしまふ。

「ローンさん、ご主人様はこのケーキを先ずは口にしないといけません。」

ですので、そのチョコレートは先に預かった後に然るべきタイミングで提供させて頂きます」

巨大ケーキを挟んだ先にいるのは、彼の秘書官であるシリアス。

彼女はスプーンの変わりにナイフを持ちご主人様である指揮官の前にある皿が開くのを今か今かと待っていた。

1/4の程平らげで入るが、そこで流石に限界なのだろう。

彼女が健気に待っているにも関わらずその皿に置かれたケーキはまだ半分を消えずに彼のスプーンで遊ばれていた。

「……えっと、なんでそんな巨大ケーキを朝から食べているんでしょうか？」

当たり前の疑問を投げかける。

今日しか答えることのない問いかけにも関わらずスムーズにシリアスは応えた。

「ニューカツスルさんとベルファストさんから今日は特別な日だから、と甘い物好きなご主人様に対しての褒美としてプレゼントされました。」

ですが、ロイヤルの冷蔵庫は今そんなにも余裕がなくこのようなケーキを入れるスペースがありません。

このまま破棄するのは作り手に悪いと言われ、誇らしき御主人様がこうして懸命に食していらっしゃるのです」

「そうなんですかあ。」

確かに、残したりしたら悪いですもんね。

でしたら、私もお腹が空きましたし少し頂いてもいいですかあ？」

「駄目です。」

これはメイド隊の殆どの皆さんがご主人様に向けて作られたもの。

他の者に口にさせてはいけない、とシリアスは命じられています。

ご主人様もそれを了承の上でこれを頂いたのですから」

それはそうだ。

こんな物を貴方のために頑張って作ったから一生懸命食べてね、なんて言われればこの指揮官が断るはずがない。

ローンはチラリと横顔を顔を見る。絶賛後悔中と書かれたその顔を。

何時もの作り笑顔にも切れはなく、死んだ目をして口元にのみ浅い笑いを浮かべていた。

「ごめんねローン。」

本当は今すぐ食べたいんだけど、今日は少し……」

ああ、これが狙いなんですね。

思っていた以上に薄味な反応を見てすぐに理解した。

1人で食べ切るには絶望的なケーキを与え、その日に食べないといけないも理由をつける。

優先的にそれに手を付けると、自然と他のチョコには食指が伸びない。

このバレンタインに対して他者からの物を口にさせない、封殺させるというわけだ。

……それでこんな物を朝から作って出すなんて。

メイドと言っておきながら、ご主人様の栄養管理全無視していいんでしょうか？

普段はロイヤルメイドと息巻いて指揮官の世話をする彼女達が自分の利益のためだけに主人に毒を与える光景に呆れ返る。

「……そうなんですか」

朝一は狙う艦船も多いだろうと少しズラしてきたのだが、どうやらいつ渡してもその反応は変わりそうにない。

隅に広がる撃沈された艦船達の思いの山がそう告げていた。

ですが、私は少し趣向を凝らしていますよ。

内心の笑みを隠すように満面の笑みを浮かべてローンは指揮官に近づいていく。

「残念です。」

本当は、眼の前で食べてもらって感想をお聞きしたかったのです

が」

「ごめんね、流石にキツイかな」

彼が断るのも無理はない。

実際、急いで食べなければいけないケーキですらもう心が折れているようなのだから。

その言葉で、また今度食べてね、と渡して出来たのがその山だ。最も、それでも食べさせるのがローンのやり方だが。

「では、これをどうぞ」

ローンは後ろ手に隠していた包箱を差し出す。

その際に、自らの指を見せつけるようにしながら。

「怪我したの？」

受け取りつつ、指揮官はその指に反応をした。

様々な場所にバラけて数枚貼られた絆創膏を見て心配そうな顔をする。

「ああ、これは……」

恥ずかしそうに、照れくさそうに頬を指で描きながら苦笑する。

「料理だなんて私余り慣れてなくて……少し怪我しちゃいました」

「チョコ作りに？」

「むう、チョコ作りでも包丁とか使って危ないんですよ」

頬を膨らませてわざとらしく怒っているような雰囲気を作る。

だが、それも少しの間。

すぐに悲しげな笑いを浮かべて一歩離れる。

「ですが、指揮官もお忙しそうですし……」

感想はまた今度の方がいいですよね。

こんなにあるので、私なんか作った物なんて後回しになるかもしれませんよね……」

「……あつ」

その言葉に彼は後ろに積まれたチョコの山を見つめる。

それだけで、ローンは心の何処かで確信を持てた。

「いいんですよ」。

私の初めて、指揮官に上げたかったですけど

ですが、初めて作ったからといって私の物が優先されるわけではないですもんね。

このチョコが特別なのは私だけで、あなたにはそうでもないですから」

「そ、そんなことないよ!!」

放生もいいですが、こうして餌を与えて反応する姿を眺めるのも楽しいものがありますね。

慌てて首を振る姿に、餌に釣られた魚のようなわかりやすさに思わず彼女は微笑んでしまう。

「……………食べるよ」

「ご主人様!？」

「えっ」

「うん、全部食べるとは言えないけど、少しだけ今食べたいな。

良かったら感想聞いてくれないかな?」

「……………指揮官!!」

その言葉を聞いて、すぐにローンの身体は動いた。

彼の優しさに付け入るように、そつと横に陣取る。

そして、小さな彼の身体を簡単に持ち上げると

「ちよっ!?! ローン!!」

「もう!!… そんなかわいいこと言ってくれるなんて、私喜んじやいますよお」

自分の膝の上に乗せてぎゅっとハグをする。

急な拘束に彼は軽く暴れるが、大きく動くとテーブルにあるケーキが崩れてしまいそうでそう激しく身動きが取れない。

そんな光景を不満気に見つめるシリアスを横目で見て、これ以上は横槍が入ると思ったタイミングで切り上げた。

「ふふふっ、それでは私が作ったチョコのプレゼントですよお」

そう言いつつ包箱を乱雑に開けていき、中から現れた数個のトリュフチョコを彼に見せた。

「初めてにしては上手くいったと思うんですけど、どうでしょうか?」
「…………トリュフチョコ?… いきなり難しそうな選んだね」

拘束する手は緩んだものの、離される気配のない手に諦めつつ少年は話を進める。

この手も話が終われば離されるだろうと見通しを立てたからだ。

「はい、指揮官はきつと沢山の方から貫うと思ったので小さめの物にしたんです」

氣遣ってますよとアピールをしつつ、料理初心者が小難しそうなものに挑戦したとアピールをする。

あなたのためにがんばったんですよ、ときちんと伝えながら。

「見た目は上手くいったんですけど、味は自信がなくて……」

「ローンは料理とか得意そうだから、大丈夫そうに感じるけどね」

「ふふふつ、そう思いますか?」

「優しいお姉さんってイメージだからかな?」

イメージだけで決めつけてごめんね」

「いえいえ、指揮官のためなら料理も上手で家庭的なお姉さんを目指しちゃいます」

!!」

やり取りを重ねつつ、ローンはチョココーっ掴んでそつと運ぶ。

「はい、あくん」

「……自分で食べるよ?」

「もうっ、今は優しいお姉さんなんですから少しぐらい甘えてくださいよ」

「……それは」

「そこまです」

彼の困った視線を受けてシリアスは立ち上がる。

苛ついた表情を隠そうとしているが、その目つきは鋭いものがあった。

「ご主人様ごお困りになつていますので、それ以上は止めて下さい」
「指揮官、困ってますか?」

「……困るっていうか、恥ずかしいかな」

「……そうですか」

残念そうに呟きつつ、ローンは軽く頭を下げた。

「では、この一個だけ食べてもらったら私は帰りますから。

一個だけ、あくんさせてください」

「そのような事は、ご主人様がお困りになられてますので……」
「……………」

一個、という言葉に指揮官の心は動く。

初心者にしては困難そうな物を作り、それも自分のために。

この奇行も嬉しさの余りに出てしまったものだとするのなら、と。

「それじゃ、一個だけね」

軽く考えて苦笑しつつ答えを出した。

「ふふふつ、ありがとうございます」

「……………」主人様は、残念になられたのですね」

落胆するシリアスと嬉しそうに笑うローン。

そんな二人に挟まれつつ、早く終わってほしいと口を開けローンに見せた。

「それじゃ、あくん」

そう言いつつチョコを口に運んでいく。

確かに入ったことを確認し、そつと指を話していく。

生暖かい吐息が指に当たる。

その感触に、ローンは言いようの無い高揚感を少し覚えた。

悪戯、ではないがちよつとした遊び気分で彼の舌に指を当てる。

「んっ!？」

反射的な勢いで噛まれそうになったが寸前の所で歯が止まる。

噛まれないように、それでもその時間を少しでも長くゆつくりと

舌に指を添わせながら離していく。

口から出た指は、透明な糸が少し伸びていた。

それもすぐに切れてしまったが。

「……………」

何か言いたげな顔で軽く睨んでくる指揮官に、ローンは気持ちのままの笑みで応える。

その笑みに何を言っても効かない。

そう思うと何か言う気も失せていく。

変な感触を残したまま、チョコを味わい食していった。

「……うーん？」

飲み込んですぐに違和感が押し寄せてくる。

眉間にシワを寄せ、首を傾げて考える。

「不味かったでしょうか？」

「いや……そうじゃなくて」

一転して不安そうな顔になった顔を見て、ますますさっきの事に言及しづらくなる。

シリアスとローンの2人に見守られながらゆつくりと感想を述べていった。

「なんつていうか、甘いんだけど……変な後味？　があつたような」

「——ああ、それ当たりですよ」

「あたり？」

「はい、当たりです」

よかった、と安堵の息と共に呟いてローンは続けた。

「全部同じ味じゃつまらないと思つたので、1つだけ味を変えたんですよ。」

少し変わった調味料を入れたので、たぶんその味ですね」

「……えっ、プレゼントにそんなロシアンルーレットするの？」

「はい、刺激さを演出してみました」

「……まあ、美味しかったから別にいいけど」

「ふふふっ、美味しかった、ですか」

感想を聞き、満足そうに反復しながら膝の上に座つた指揮官をドカしてローンは立ち上がった。

本当はお別れのぎゅくをしたかつたが、今の興奮のままでは全力で彼を締め付けてしまう。

自分の全力では、人の身で更には小柄な彼は持たないだろう。

自分の欲に打ち勝つためにも、ここは早く退散することにした。

「では、残りの感想は後で聞きに来ますからちゃんと食べてください
ね」

「うん、ありがとうローン」

再びケーキに向かい合い、盛大なため息を漏らす。
そんな彼の反応を最後にローンは退室した。
廊下を歩きつつ、手についた邪魔な絆創膏を剥がしていく。
そこには怪我なんて何処にもない。
綺麗な自身の指を隠していただけだ。

演出

自分の物を眼の前で食べてほしかったから
鉄血だけでもここ数日は指揮官へ送るチョコ作りに忙しかった。
殆ど皆が暇があればキッチンに出向き、各々目指すものを手作りし
ていた。

普段はリーダーとして振る舞うビスマルクも、この時ばかりは一人
の女性として挑んでいたのは印象的だった。

もっとも、彼女は友人でもあるプリンツ・オイゲンにからかわれな
がら作業していた姿の方が印象に強かったが。

鉄血だけで見ても競争相手が多し中、他の陣営だって大半の艦船が
張り切るだろう。

そう踏んだ彼女は、自分のチョコをより印象的にさせるためにわざ
わざ絆創膏を貼り、料理初心者と嘘ついた。

自分のチョコに『価値』を付けた。

別に料理ぐらいなんてことはない。

鉄血の子達にはよく振る舞う程度には覚えはある。

それでも、自分のために懸命に作ったと聞けば指揮官なら優先して
くれるだろうと感じたからこそその嘘。

思い通りにことは運んだ。

他の艦船からのチョコの山に囲まれながら、自分の物を口にするあ
の姿を思い返し、ゾクゾクとする感情が全身を襲う。

興奮が荒い吐息として現れる。

それだけではない。

1つだけ外さない指差の絆創膏。

これだけは、本当に怪我をしていて外せない。

奇しくもその指は、さつき彼の舌で転がした指。

流石に悪戯がすぎると思い、ロシアンルーレットとして1つだけに仕込んだ隠し味。

自分でもどれがあたりかなんて把握していない。

ただ、他の女共のプレゼントに囲まれながら『特別』を口にしてくれるだけで満足だった。

例えば、その場に自分がいなくても。

「本当、こんなことされたら運命を信じたくなくなりますよ」

そつと絆創膏ごと指を舐める。

それはきつと、彼の味であり、彼が口にした自分の味だと思おうと制御出来ないほどの興奮が彼女自身を襲った。

そんな興奮と不思議な幸福感に包まれながらも、まだ足りないと言えってしまう。

そうだ、いい事を思いついちゃった。

クスリと笑いつつ、善は急げとローンは目的のために動き始める。

ああ指揮官。

今日はとっても楽しいバレンタインになりそうですね。

「皆さんはご主人様を甘やかしすぎです。このままでは、ご主人様は、ご主人様がダメ人間になるに違いありません」
バレンタイン中編

「皆さんはご主人様を甘やかしすぎです。このままでは、ご主人様がダメ人間になるに違いありません」

彼女、シエフィールドは表立って感情を出すことはないが、それでも確かに怒りを込めた瞳をしながら部屋に入る。少し

何時もの気だるそうな瞳は、心なしか少し吊り上がっていた。

シリアスや指揮官はそんな違いに気付けるほどに過敏ではなかったが、それでも直感的に彼女が苛立っていることを理解はできた。

先輩メイドである彼女の登場にシリアスは姿勢を正す。

「どうしたの急に？」

珍しい彼女の視線に過ごしたじろぐ。

特別何かをしたわけでもないが、わざわざ会いに来た彼女の真意は少年にはわからない。

しかし、指差されたケーキの残骸を見て少しだけ納得をした。

もう時間は正午。食べ始めて大分立ったが、その山は未だに半分近く形を保っていた。

昼食を無視してこれ一つに挑んで入るが、半分から先が余りにも長かった。

開封してからそれなりに時間も立ったのもあり、独特の甘さはよりクドさを増してしまい胃に通ることを強く拒否してしまう。

ペースもかなり落ち、食べる事に拒否感を覚えながらも目の前に当事者のメイドがいるため、逃げる事が出来ず無理やり口にしていた所だった。

「そのような物をご主人様に送るなどありえません。」

ただでさえ思考の甘いご主人様が更に甘くなってしまう」

「……うん、これは流石に多すぎたと思う」

「思うのならば、受け取る時に断るべきです。

これではまるで、1人で考えることのできないガイチュ……無能なご主人様になってしまいます」

「……ごめん」

うなだれながらただ謝罪の言葉を呟く。

受け取る際に断ることができていれば、眼の前の甘い塊が鎮座することはなかった。

食べきれないことなど初めからわかってはいたが、どうしてもという願いと頑張ったという言葉だけで二つ返事で受け取ってしまったのが彼の運の尽きでもある。

「……シリアス、あなたはあなたで傍にいたのなら受取拒否を進言するべきでした」

「……申し訳ございません」

シリアスは事前に指揮官が喜ぶと聞き、先輩メイド達の言葉を疑う事なく信じていた。

ケーキを受け取った際の苦笑いにも気づかず。

初めは勢いよく食べており、その姿を見て喜んでると微笑ましく見えてはいたが、次第に落ちていくペースを見て少し疑問に、完全に止まった腕を見て初めてこの量は多すぎるのでは？ と疑いを持った。

その頃には既に自分が何かを言う事など出来ず、オロオロとしながら見守ることしか出来なかったのだが。

「……はぁ

先程漸く冷蔵庫の中身の整理を終えました。

そのケーキも、皆様から頂いたチョコ達を仕舞うスペースも空けましたので一旦しまい、お召し上がりは後日にして下さい」

落ち込んでいる2人を見てこれ以上責める気もなくしたシエフィールド。

そんな彼女の言葉に指揮官の瞳は輝きを増した。

「ほんとに!?! 今日はまだ食べなくていいの!!」

せっかくのプレゼントに酷い言い草だが、彼の胃は限界を迎えていた。

更に押し込むことをしなくていいと思うと、喜ばずにはいられなかった。

「はい。」

これ以上肥えてしまつては害虫から豚へと変わつてしまいますので」

そんな反応に暴言で返すが、少年は何も気にせずケーキを箱へと戻していく。

ここで言葉を返して機嫌を損ねてこの話が無しになるような事はしたくない。

多少悪く言われようとも、何も言わずに素直に言う事を聞く方が助かる道だと判断した。

「……シリアス、これは貴方が責任を持つてしまつてきなさい。」

この件はご主人様だけではなく、秘書艦として付き添つていた貴方も同罪です。

後片付けは貴方がやりなさい」

「かしこまりました」

主人が開放され喜びを見せている中で水を差すわけにもいかない。それに、ただ座つていた自分とは違い主人を助けるために動いていた先輩にも口答えをする権利などない。

そう思いつつ、何もしなかつた自分に落ち込みつつも、これで挽回できるならと意気込む。

「いいですかシリアス。」

これは後日ご主人様が口にしてしまいます。

ですので、形を崩さないように慎重に運んでください

いつものようにドジを踏んで転ぶなんて……ないよう、気をつけてください。

足元に気をつけて、ゆっくり運ぶんですよ」

「は、はい!!」

自分への態度とは違い、優しく念を押す用に何度も伝えるシエフィールドとそれを受けて表情に緊張が走るシリアス。

まるで姉妹のようだと微笑ましく少年は眺める。

実の姉は、大量に置かれた箱の山を見て涙目になりながら折れた心を指揮官にぶちまけ、数十分の傾聴の末に貰った艦船達からのプレゼントの整理をする仕事をするということと落ち着いて帰っていったのだが。

「では、ご主人様。」

シリアスは暫し席を外しますので」

「うん、気をつけてね」

そう言つて漸く助言を終えたシリアスは恐る恐る一步を踏み出しながら、他にした箱を宝物のように力強く、それでいて箱を崩さないように大切に持ちながら退室した。

「……はあ、大丈夫でしょうか」

自分から振つておきながらそんな言葉を漏らすシェフィールド。

ここからロイヤル寮の冷蔵庫にはそれなりに距離がある。

ドジが多いシリアスでは、大切なものを運んでいる時に限りその道中で転んでしまう可能性はそれなりにある。

しかし、彼女が責任を持つて片付けをしなければいけない。

それが、シェフィールドの考えた彼女への責任の取り方なのだから。

「とりあえず、これでシリアスへの仕置きはお終いです」

シリアスへの対処は終えた。

残りは、自分にも来るのかと思ひ当たる節しかない、必死に目は泳がせる少年だ。

「あー、そうなんだ」

話題を変えてみようかと当りを軽く見渡すも、変わったものといえど隅に置かれた箱の山だけ。

ケーキの件で怒られているのにお菓子のお話を振ったところで誤魔化すどころか悪化させる恐れしかない。

「ご主人様。お隣失礼します」

一言声をかけてから隣に座るシェフィールド。

一見して分かる堅苦しい軍服を着た少年と、メイド服を着こなす無愛想な少女。

絵になると共に、主従関係を一目でわからさせられる様な二人だが、その力関係は真逆だ。

「ご主人様はもつと人の好意を否定するべきです」

「でも、せっかくのプレゼントだし……皆がくれものだしさ」

始まった説教に項垂れつつも、自分の主張だけは伝えていく。

「皆忙しい中作ってくれたんだし、ちゃんと受け取らないと」

「そのような甘い考えをしていると、いつか女性と大きな問題を起こします」

「……そこまで行かないようには気をつけるよ」

「気をつける、そう思っているだけでは治りません。」

痛い目を見るか、治してくれる人が傍にいない限りは決して人の癖など治らないものです」

感情を読み取れない瞳が指揮官を責め立てていく。

「シリアスやベルファストだけではなく、他の艦船達もご主人様にすぎます。」

もつとご主人様には、びしつと言えるような方が傍にいるべきかと」

「びしつとねえ」

真つ先に思いついたのはビスマルクだが、彼女は彼女で忙しい身。

自分の隣に居て欲しいなどとてもじゃないが口には出来ない。

したところで、そんな風に自分に甘えてばかりではいつまで立つても成長しないとビシツと言われて終わりそうだ。

「ですので、ここは僭越ながらシエフィールドがご主人様の調教……もとい、教育を代行しようかと思えます」

「調教?」

「教育……です」

言い直す前の物言いに食いつくも、何もなかったかのように振る舞われる。

何か言いたげに、それでも自分からは何も言わずに彼女の動きを守る。

「では、今からご主人様の調教教育を始めます」

そんな前振りと共に、シエフィールドはその席をソファから少年の膝の上へと移す。

「なにやってるの!？」

「ですから、教育です」

少年の胸に後頭部を軽く乗せ、座り心地を楽しんでみる。

まあまあ、ですね。

そんな風に評価を決めるも、口元は少しだけにやけてしまう。

いけません、と少年に見られる前に口角を手で直しながら数口つけたまま置かれたケーキが乗る皿を手取る。

「これは片付けないのでしょうか？」

「口付けちゃったし、これだけは食べようかなって思ったんですけど」

「そうですね。」

一度口を付けた以上は責任を持って最後まで処理しなければ

そのままスプーンを手にし、その半分が満たされる程度にケーキを乗せて上を向く。

すぐ目の前に顔を真っ赤に染める主人の顔が不満そうに遠目を眺めていた。

「ご主人様」

「なに？」

「いやならば、しっかりと嫌だと伝えなければわかりませんよ」

これが教育。

自分の気持ちをはっきりと口にさせるために、否定の言葉を伝えさせるための教育だ。

それを言われて、指揮官はその意図に気づく。

「……そっか、なら嫌だからどいてくれない？」

「ですが、これはご主人様へのお仕置き……ですから、今回は我慢して下さい」

「……嫌なら嫌って言うって話はどこへ行ったのかな？」

文句をぶつけるも、シエフィールドはわかっていた。

こんな事では眼の前の主人は怒らないと。

いや、何をしたら怒るのかすら彼女は把握できていない。

誰に聞いても、彼が怒ったという話は聞いたことがないのだ。

その境界線を探してみたいという好奇心もある。

線がわかれば、何処まで許しが貰えるか逆算して接することが出来るのだから。

しかし、最悪その線はわからないままでもいい。

少なくとも現状は他の艦船よりも度が過ぎた行為をしない自分の範疇ならば好きに出来るという事なのだから。

「はい、あーん」

「……………」

「あーん」

「……………」

「ご主人様…………シエフィールドもこう見えて恥じらいを持っていません。

早くしていただかなければ羞恥心で悶てしまえそうです」

「なら、しなくていいんじゃない!？」

一向に口を開けようとしないう間近にある主人の顔を見て、拗ねた素振りを見せる。

だが、指揮官からしてもこれは教育。

嫌だと伝える場だと思えば思えば接することと決めた。

少なくとも、このまま素直に受け取ったら何を言われるかわかったものではないのだから。

「シエフィールドの言うとおりだよ。

俺は、もう少し自分の意見を持ったほうがいいんだって思ってる。

たぶん、そうじゃないといけないって。

だから、今回は練習させてもらうよ」

「……………そうですか」

自分の教え通りに頑張っている。

それを見て嬉しい反面納得できない。

他の艦船達には喜んで尻尾を振るにも関わらず、自らには拒否を示す姿を。

まあ、自分が言っただけというのもあるのだろうが。

嫌なら嫌と伝えてほしい。

この言葉も気持ちも行動もはつきりとした自分の願いだ。

この場だけ、というのは気がかりだがそれでもそう思う切っ掛けになれたというのなら喜ばしい。

だが、自分がやりたいこともある。

言動と行動が伴わないチグハグさに自分でも不思議に思う。

願いのままに言う自分と、気持ちのままに動く自分。

そんな差に戸惑いつつも、口は動いてしまう。

「ですが、それではご主人様への罰にはなりません。

シエフィールドとて、好きでこのような事をしてるわけではないのです。」

早く終わらせなければ、何時までも害虫にくっつかれた後味の悪さで吐き気を覚えてしまいます」

「なら離れてよ……」

「それはだめです。」

これは、害虫であるご主人様が人になるための訓練なのですから。

シエフィールドはその為には例えこの後すぐにシャワーを浴びる事になるのも覚悟の上です」

「なら早く離れてよ!!」

差し出されたスプーンを目にすると、これを口に入れるだけで終わるんだよな、と少年の思考が逃げてしまう。

それはいけない。

そんな考えがいけない、と首を振りつつその考えを取り除こうとする。

「ご主人様。」

シエフィールドは普段の物言いのせいで感じられないでしょうが、ご主人様を慕う気持ちは本物。

そんな慕う方とこうして肌を重ねていること心臓が破裂してしまいそうです。

早く離れて一呼吸したい……ですが、ここでシエフィールドから離れてしまえばご主人様への仕置にならない。

その思いで葛藤しているのです。

そんなシエフィールドの気持ちに、ご主人様は応えて下さらないのてじょうか？

それに、これはシエフィールドからのバレンタインのプレゼントでもあります。

お仕置きであり、ご褒美なんです。

何時も頑張っているご主人様への感謝の気持ち……それをお仕置きと言つて誤魔化している女性の態度を、無下にされるんですね」

結局彼女は何を求めているのか、指揮官はわかりはしない。

彼女自身が戸惑っているのだから。

どうせなら、やりたい事をしたあとに、嫌なら嫌と言うようにと伝えたほうがスムーズに進んだのだろう。

更には、普段から害虫扱いしてしまう自分の態度も悪いのかもしれない。

この時ばかりは、口が悪い自分を少し呪つた。

少年も、彼女の教えをここで実践しても上手く行かず、それどころかその瞳の揺れが大きくなるだけ。

不安げに揺れてしまうだけ。

それを見ていると、振り払おうとした思考は逆にそれ一辺倒になるように固まってしまう。

プレゼント

そんな風に表現されては、他の艦船達から受け取っていて彼女だけ受け取らないのは失礼だという気持ち。

あーんで終わるのならば、ローンで既にやっちゃってしまつているといふ罪悪感。

結局、そんな気持ちに流されるように彼は大人しくなる。

「……………あーん」

何時ものように結局逃げて、言う通りに口を開く。

それを見て彼女は軽く微笑んだ。

本当に、駄目なご主人様

自分の気持ちに伝えてくれて嬉しいようで、言ったところで最後に

は負けてしまう負け癖になんやかんやで彼らしさを感じる。
恥ずかしくて目を閉じる彼にはそんな笑顔は見れないが。

「では、先ずは一口」

そう伝えてスプーンを手取る。

すると、いたずら心のような物が生まれる。

教育と言う体で伝えた願いと、結局それを最後まで実行できなかった不甲斐ない主に対する一種の嫌がらせのようなことを。

あえてクリームを唇に付けるようにわざとらしく、たどたどしく口に運ぶ。

普段から世話をしているシリアスのおかげで、そういったフリは上手くできた。

目を手じている彼にはそんな演技はいらなかったが。

口に運ばれてすぐに、当たった所からクリームを取り除こうと手を伸ばしたが、その両手は止められる。

「申し訳(ご)ざいませ(ん)主人様。

シエフィールドが粗々を働いてしまいました。

メイドの粗相を改めるのはメイドの努め。

何より、ご主人様に汚れた物を触れさせるわけにはいきけません」
普段よりも棒読みで語りつつ、背中に預けていた背を少し伸ばす。

それだけで、一瞬で二人の距離は縮まる。

嫌な予感を感じた少年は離れようと頭をどかそうとするが、すぐに小さな両腕が彼の額を固定する。

そのまま、逃げる事など許さないと伝えられるように、シエフィールドは彼の唇に自らの唇を合わせる。

彼の唇に付いた汚れを取ろうと、舌を出して隈なく舐め取るような熱いキスを

「んっ……っ!! んっ!!」

それはすぐに指揮官から剥がされて終わってしまうのだが。

「まだ掃除は終わっていません」

「……自分で取るからいいよ」

ティッシュを取り出して口元を軽くふく。

もうクリームの汚れはないが、自分のものでは無いであろう唾液がそこには付着していた。

少し見て、気持ち悪さと羞恥心で一杯になりゴミ箱に向かって思いつき投げつけた。

「シエフィールド!!」

満足気な微笑みを崩さない彼女に戸惑いと困惑を入り交じった視線を向ける。

何をどう言うべきか考えるが、口を開こうとした矢先に柔らかな指先がそつと唇に触れた。

それだけで少しだけ自分がわかる。

わかった気がした。

彼に対して、嫌なら嫌と伝えてほしい。

自分以外の好意に。

自分だけは、許してほしい。

自分だけは『特別』でいたい。

自分の中にあつたそんな甘えた現実に酔いしれながらも、当人には隠すように物言いをする。

こんな気持ちが大変な事では、どう思われてしまうかわからないのだから。

ご主人様。

これが、はつきりと嫌と言えないと起きる人の末路です。

女性というのは、好きなもののためならば何だってしようとする。す。

多少強引にでも……。

好きであれば好きである程に。

時にはこやって強引に唇を奪う事も、その先をしようとするかもしれない。

ですから、好きでもない相手に好意を向けられても拒否をしなくてはいいけないのです。

そうしなければ、シエフィールド以外の人に……更に酷い目に合わされるかもしれません。

シエフィールドが傍にいれば、そんな事は誰にもさせませんが、ご主人様の傍にいるのはよりにもよってあのシリラス……。

正直……とても心配です。

ですので、ご主人様には早く立派な人となってほしいんですよ。

その為ならば、シエフィールドは幾らだって汚されてもいい。

ご主人様になら、幾らだって

シエフィールドは、ご主人様の事を——」

「メイドの分際で、偉く盛ってるんですね」

最後の最後の言葉を待ってましたと言わんばかりに、楽しそうな邪魔する声が二人に届く。

声の主は、満面の笑みを浮かべたまま冷たい目で二人を見下していた。

「……ローン」

彼女、ローンは楽しそうな微笑みと共に不愉快な物を見るような目で静かに開けたドアをゆっくりと閉じた。

「メイドの分際で、偉く盛ってるんですね」バレンタイン後編

「メイドの分際で、偉く盛ってるんですね」

最後の最後の言葉を待ってましたと言わんばかりに、楽しそうな邪魔する声が二人に届く。

声の主は、満面の笑みを浮かべたまま冷たい目で二人を見下していた。

「……ローン様」

「こんにちは指揮官。チョコの感想を聞きに来ましたよ」

口元にだけ薄っすらと笑みを作りつつもその視線は変わらない。

彼女、ローンは普段よりも笑みを強くする。

「なのに、私ったらいけない現場を見てしまいました」

まさかメイドがご主人様にむりやりキスをするだなんて……」

「キスではありません」。

「ご主人様の口元が汚れてしまっていたので仕方がなく口で掃除をしましたまでです」

「あら、なら手ですればいいじゃないですか」

「あれは一部のメイド隊が朝から手作りしたもの」。

「そこまで汚れてないのであれば、少しでも捨ててしまうのは彼女達の気持ちを傷つけてしまいますので、仕方なくシェフィールドが処分をしたまでです」

「手で搦って食べてはいいだけでは？」

「シェフィールドは見ての通り害虫と戯れており手が汚れています」。

「ご主人様の手等、今更言う事ありませんが」。

「それならば、まだ汚れていない口を使っただけです」

「あらあら、ならその口ももう汚れてしまいましたね」

「はい、これはもう消えない汚れになりました」。

「貴方が何を言おうが、何をしようがこの汚れた口はもう綺麗にできませんよ」

2人の視線が激しさを増す。

指揮官はただ、肩を震わせながらどうしようかと考える。

そんな思考をさせる間もなく2回戦が始まった。

「ローン様はなんの御用でしょうか？」

ここはご主人様の仕事部屋。

余程の事がなければこの部屋に無闇に入られては困ります。

ましてや、ノックもせずに入るなど」

「ノックはきちんとしてましたよ？」

ただ、返事を待っていたら指揮官の大声が聞こえたので何事かと思
い覗いてみたんです。

そしたらまあ、メイドが欲情して主人を慰め物にしようとしてたな
んて」

「欲情などしてはいけません。」

ただ、これはご主人様の躰と仕置をしていただけです」

「躰と仕置なんて……」

可愛そうな指揮官。

メイド風情に犬のような扱いをされるなんて。

私なら、そんな事はしませんのに」

「犬のようなものです。」

すぐに粗々をして……様々な女に手を出すご主人様に対して、待っ
たを覚えさせている最中ですから。

そんなにも女が欲しいというなら、他のメイド達を毒牙にかけられ
るぐらいなら……とシェフィールドが立候補したまです」

「あらあら、でしたら私はどうですか？」

こんなちんちくりんな口の悪いメイドと違って、私でしたら指揮官
の事をいつでも慰めてあげますよ？」

ぎゅーってハグ、いつだってしてあげますよ？」

「貴方のようにすぐに指揮官を甘やかす人がいるから、シェフィール
ドがこのような役を買って出ていることを理解して下さい。」

皆がもつと大人しければ、こんな教育は不要でしたのに」

「甘やかしてはいけないんですか？」

いつも頑張っている子にご褒美をあげるのは悪いことじゃないと思いますけど」

「頑張っているご褒美も、頑張らせるための仕置もシェフィールドが考えて判断します。」

他の方はそんな事に気しなくていいです。……業務に励むことがご主人様への一番の奉仕となる事でしょう」

「秘書艦が言うならともかく、なんであなたがそんな事を決めるんでしょうか？」

「簡単です。」

シリアスもベルファストも他の艦船達もご主人様を甘やかしすぎですから。

ここは、シェフィールドが厳しく……時には優しく躰をしなければいけません。

そうすることで、ご主人様は自らを律する力を得ていくことになります。

他の艦船達の優しさに惑わされることなく自らの道を歩む事になると思いますので」

「……指揮官はそんな事望んでないと思いますよ？」

優しい指揮官は、あなたのような独りよがりな艦船をさっさと取り除いて皆で仲良くこの母港で、過ごしたいと思っていますけどね

ねえ、指揮官？」

「あ、あのっ」

急な話の振りに少年はたじろんでしまう。

二人の視線が、早くしろと返事を急かす。

そんな視線に負けるように思ったことをそのまま口にした。

「き、キスはやり過ぎだと思う……かな？」

「そうですね、指揮官もそう思いますよね」

指揮官の同意を得たことで、追い風が来たことを示すのようにローンは勝ち誇った笑みを浮かべる。

「ご主人様と慕っている人に対して、自分の思い上がりで好き勝手に

扱うなんて最悪ですよね?」

「そこまで言うつもりはないけど……」

「いえ、そこまで言っていないんですよ。」

はつきりと言わないと、伝わらないじゃないですか。

言わないと、膝の上にいる発情猫はずつと指揮官にベタベタと馴れ馴れしくくつついてきて暑苦しいですよ?」

「常にくつつく事などしません。」

必要がある時にするのみです」

「今がその必要な時だつて言うのでしょうか?」

私には、独りよがりによがっているだけにしか見えませんが」

「必要ですよ。」

これは、ご主人様への躰であり、お仕置きであり、シエフィールドの気持ちを届けるためでもあるのですから」

「気持ち?」

私は貴方に欲情してますつて伝えるために?」

「そんな卑猥な思いなんて全くありません」

そんなローンの様子など全て無視して上を仰ぎ、主人の顔を見る。

顔を青くしながら、おろおろとどうしようか困り果てている主の顔を。

「ご主人様は愛されているお方。」

きつと沢山のプレゼントを頂くでしょう……。そうじゃなくてもケーキを丸々一つ貰ってしまったては食べ物とは避けるべき。

形に残るものにしても、そんな物を何時までも置かれては邪魔になる日が来ます。

……ですから、形に残らないもので日頃の感謝を伝えたかったので。

何時もお慕いしているご主人様に、シエフィールドの気持ちが少しでも伝わればと」

「それでわざわざキスをしたつて、そんなの言い訳にもなってませんよ?」

感謝を伝えたいからつて指揮官の気持ちを無視して勝手にやるな

んで、最悪だと思います」

「無視なんてしてません。

きつと、ご主人様も喜ばれたはずです」

「あっ……あのっ」

再び投げかけられた応えづらい問に完全に言葉を失う。

肯定の気持ちはある。

実際に、好きと言われて悪い気はしないのだから。

否定の気持ちのほうが強い。

ローンの言う通り、全てを無視して独りよがりに行動に移すのは褒められたものではないのだから。

しかし、ここでそれを口にするわけにはいかない。

シエフィールドの、艦船の傷つくようなことを目の前で口にするとは指揮官としてやってはいけないだろうと感じるから。

口にしたら、きつとトラブルが更に膨れ上がるのだから。

「指揮官が何も言わないからって、そんな風に付け入るのは最低ですよ」

「そうですね、ご主人様は何も言わないお方。

お優しい方なのです。

だからこそ、シエフィールドが確りと管理をしなければいけません」

「管理？」

ローンと共にその不吉な言葉に引っかかる。

シエフィールドは胸に秘めた思いを口に綴る。

自らが思う、理想の関係を。

「ご主人様は一人で物事を決めるのにとっても不向きな方。

それでいて、情けなくて弱いまさしく害虫のような存在。

ですから、シエフィールドが立派な人になるように明確に管理をします。

他の艦船達のような優しく……無意味に甘やかすこともしません。

口にする物も、運動量も、仕事量も、睡眠時間も、他の艦船とコミュニケーションを図る時間も

全てシエフワールドが管理します。

こうして騒を終えるたびに、ご主人様は立派な人へとなっていく。そんなプランを用意してあります」

「そんなの、完全に指揮官を独占するようなものですよね？」

「はい。」

物資というのは必ず限りがあります。

ご主人様という存在にも、出来ることにも限りがある。

それをわからず、今日のように全ての艦船達の気持ちに応えようと奮闘するからこそこのような問題が起きるのです。

ですから、シエフワールドがそれを全て管理すれば事は上手く収まります。

本当に皆に平等になるように振り分けてしまえば、この限りある心の隙間に綺麗に皆様方収まるように、更にはご主人様の心に余裕を持たせるように分配するだけ」

「……それって、指揮官を独占するってことですか？」

ローンが明らかに怒りを表す。

笑顔でかくすことなどしなくなる程に、彼女はその苛立ちを表に出していく。

「まあ、一度そうしなければいけないでしょうね」

「それは……あなたがすることなんですか？」

「はい、シエフワールドが一番平等に分けることができ、適度にご主人様を管理することも可能でしょうから」

「……指揮官を独り占めだなんて……そんな最低なこと……許せるはずないわよねえ!!」

指揮官は皆のもの、そんな綺麗事をローンは言うつもりはない。

むしろ、その逆。

自分のモノだ。

誰が決めたわけでもない。

自分が生まれた時から漠然とあるその感覚は彼女の中の常識であつた。

鉄血陣営が持つ彼への愛情の重さ。

その全てを混ぜて作られた彼女からの愛情もまた、シエフィールドと同じ独占欲として現れる。

「指揮官がそんな事望んでるはずない!!」

それでも、そんな勝手な事を言っつて、勝手にするっつ言うならそんな傲慢な態度を見せられないようにしないとねっ!!」

「……まあ、貴方に理解して頂くこうなんて思っつていません。

シエフィールドが優先すべきはご主人様です。

何を言われようが、どう思われようが関係ありません」

急な変貌に戸惑いを強くする少年。

対して、シエフィールドは興味なさげに見下げていた。

自分の言っつたことが全てだ。

彼女にとつて、優先すべきは主である指揮官であり、陛下であるクイーン・エリザベスである。

その他のモノ……特に、その他の陣営に何を思われようが、どう言われようがさして関係ない。

特に、指揮官のことをわかっつていっつてと言いたげな顔をするモノ等。そんなことはない。

彼の事を一番わかっつていっつてるのは自分達メイド隊であり、何よりも理解できているのは自分なのだから。

そう思っつてしまっつてるが故に、ローンの怒りの感情には呆れしか生まれなかつた。

「では、ご主人様は何をお望みなんでしようか？」

「そんなの決まっつてますよ」

その問いに一呼吸入れる。

語るのは、自分が望むこの母港の姿。

「指揮官には、皆に愛されてもらわないと。

母港にいる皆に愛され、慕われたいといけなない。

だっつて、その姿を間違で見るのが私の母港こゝろでの楽しみなんですから」

「そうですね、ご主人様には皆に慕われたいといけません。

ですが、必要以上に慕われすぎでは困ります。

物事には適度というのがありますから。

……それが測れない害虫を管理する人が必要では？」

「それがあなたなんですかあ？」

「あなたではないと思いますが」

互いに静かに見つめ合う。

片方は睨みつけ、もう片方はそれを気にする様子なく。

「ご主人様には管理する人が必要です。」

……シエフィールドは、驕は得意な方です。

適任だと思えますけど」

「放生も時にはいいものですよ？」

好きに育ち、好きに生き、好きに消える姿を見ているのが生きてる

物を見る楽しみ方ですからっ」

「わかりませんね」

「あなたの考えもわかる気がしないわっ」

一向に交わる気配のない議論。

その終着を求めるように、同じタイミングで二人の視線は変わる。

オロオロとし、困った顔をしながらも必死に二人の話を聞こうとする

少年に。

「ご主人様はどうされたいですか？」

ただ……これはご主人様がいい加減な態度と気持ちで艦船達に向

き合っている結果です。

シエフィールドがこのような事を起こさないよう、寸分変わらず管理

してさしあげれますが」

「そんなことないですよね？」

指揮官は指揮官の好きなように振る舞い、愛され、溺れていくのが

好きなですよね？

私、そんな風にちよつとおつちよこちよいな指揮官がだく好きで

すよ」

口元の微笑みに反して全く笑わない瞳を向けるローンと、変わらず

感情を感じさせない表情と視線を向けるシエフィールド。

2人に挟まれ、話を振られても何を言うべきかわからない。

どちらか片方に賛同すれば、必ず角が立つから。

言葉だけ聞き素直に言うのなら、ローンの方が魅力的に見えるが彼女の笑みに裏を感じて言い出せない。

シェフィールドに管理というのは、明らかな地雷だろうと直感できた。

「あ、あの」

困りきった声を出す。

そして、彼女は何時もそんなタイミングで救いの手を差し伸べる。

秘書艦として、死地に追い込まれた主を助けるために。

「ご主人様はご主人様の考えて動いております」

扉前にいるローンに隠れているが、その凜とした声だけで指揮官は思わず安堵の息を漏らす。

「お帰り、シリアス」

「ただいま戻りました。誇らしきご主人様」

ローンを避けて部屋に入り、シリアスは彼の横に立つ。

膝の上にいる先輩の姿に一瞬首を傾げたが、今はそこに追求する時ではない。

「ご主人様はご主人様の考えを持って皆様と接しております。

そこに誰かの管理等不要でしょう。

好きにやっている、というのも違います。

ご主人様は何時だって母港の事を、艦船達のことを考えてて動いてくださっています。

シリアスは誇らしきご主人様の描く母港を見たいと思い、何時までも傍で見守り続けようと日々思っております。

その道中で意見を思い、口にするのは母港のためになると思います
が、ご主人様の思想そのものを変えるような意見は相応しくないと」

当たり前のように隣に立つ姿に2人は一瞬冷たく睨む。

同じメイドとはいえ、自分では当然のようにそのような振る舞いを出来る機会は少ない。

それなのに、そのように振る舞う姿を

に収める姿にローンの隠そうとした怒りが再び現れ始める。

「指揮官へのチョコーつ渡すのにもあなたの許可がいるんですか？」

「そうですね、ご主人様の口に入る物は全て私達が一度見たものでなければ困ります。

栄養バランスは人間であるご主人様にとって大切なことですから」

「自分達はあんな物渡しといて……人のものには口をだすんだっ!？」

「あれは他のメイドが勝手に……。」

それに、物としては口にして問題ないものですから大丈夫かと」

「あんな物食べさせるんなら、私のチョコぐらい食べても大丈夫なはずだよねえ!!」

「そうですね、普通のチョコなら今更止めることはしなかったかもしれません」

「……………」

その物言いに自らの手を隠すように背中へ回す。

その反応と共にやってきた静寂に、少年は隠した指先を見た気持ち伝えた。

「ローン、怪我増えてない?」

朝見たときよりも絆創膏の位置が変わっていた気がした。

それは貼り直したただけかもしれないが、明らかに彼女達の血に似たような液が滲んでいたのだ。

一度見た時は、貼ってあるぐらいの感想しか出てこなかったのに。

「……あははっ、張り切りすぎてまたやっちゃいました」

言い訳をするような苦笑いだが、シエフィールドはそんな事では逃さない。

「そうですねか。

料理で怪我をするのは慣れてないのならしようがないでしょう。

それが方が一入っていたとしても、仕方がない事でしょう。

ですが……私達の身体に流れている物がご主人様の口に入っていないものなのかわかりません。

飯に大丈夫だとしても、そんなものは出せません。

「ここは一度検品し、判断した上で後日提供させてもらいます」

「……そうですね、そこまで考えてなかったです。」

指揮官、申し訳ありません」

「えっ？ いや、いいんだよ。」

また作ってくれてありがとう」

軽く頭を下げられただけで彼はそんな風に許してしまう。

それがまた、シエフィールドの頭を抱える原因となるが。

「そんな優しい言葉をすぐにかけてしまうから、このような物を貰うことになるんです」

「そうですね、指揮官は普段からメイド達が作った美味しい物を食べるんですから、私のなんていらぬですよ……」

「そ、そんなことないよ!! ローンからもらえで嬉しいよ」

掛けられた追い打ちのような言葉にわざとらしく泣いてるような素振りを見せる。

その反応に対する返事はわかりきっていた。

思い通りの言葉に思わず笑みが溢れてしまう。

「そうですね、それはよかったです。」

でしたら、今度は普通の食事も振る舞いますねっ!!

……そこにいる邪魔な害虫がいない時にでも」

自らが害虫扱いされる事に苛立ちを感じるシエフィールド。

その気持ちを乗せるように強めの言葉で返した。

「そうですね。」

でしたら気をつけてくださいねご主人様。

以前本で見た話ですが、極稀にわざと自らの体液を入れた料理を振る舞う方もいるそうです。

そんなものを食されては、害虫のように弱いその身体が壊れてしまうでしょうから」

「……そんなの、フィクションの話でしょう」

「チョコ作りには酷い怪我ですね。」

シリアスぐらいでなければ、そのような怪我はしないと思います

が

顔を背けそうになるのを抑えるが、自らから湧き出る冷や汗は止まらない。

調子に乗り、2度目を作ってきた自分の傲慢に罰が来た事を痛感する。

そんな彼女には彼女で、救いの手がやってくる。

「……まあ、勘の悪い人には、手料理に何を入れたのかなんて言わなければ分からない話でしょうが」

不自然な言葉の付け足し。

シエフィールドの言葉に苦笑いを浮かべる少年はそんな事に気づかない。

シリアスもまた、引き合いに出された所か怪我をすると断言された自分の不甲斐なさに落ち込む。

ただ、視線を向けられたローンだけはわかった。

自らが見た光景、それを黙れば見過ごしてくれると。

そんな事を遠回しに言われた、と。

勘の悪い指揮官には黙ってけると。

「……そうですね、何も言わなければ愛情と思ってくれるかもしれない」

「あなたのこれは愛情が籠もっている？」

「ふふふつ、勿論ですよ」。

私は、何を入れたのかなんて教えませんよ。

皆に秘密にしておきます。

だって、全部愛情で出来てるんですから」

そんな冗談めいたやり取りだが、伝わったのだろう。

釘を差すような視線を最後に、シエフィールドはその目を離す。

これ以上いた所で、もう美味しい思いはできそうにありませんね。

そんな事を思いつつ、彼女は一步下がる。

「では、私はもう帰りますね」

「あつ、うん」

そんな声に少年は笑みを送り、別れを伝える。

「他のチョコも食べたけど、どれも美味しかったよ。

当たりが一番印象に残ったけど……他のは普通に美味かった。

ありがとう」

「……そうですね、その感想を聞きたくて来たので、そう言ってくれて嬉しいですつ!!」

最後にそれを言われただけでも喜びましょうか。

そう思いつつ、2人の姿に目をやる。

まだ落ち込んでいるメイドと、話は終わったと言わんばかりに主の上で寛ぎ、その背を押し付けるメイド。

メイド達の愛を一身に受けながらも視線も、言葉も自らに向けられる。

ほんの一瞬の出来事が、ローンにとつてのここでの生きがいだ。

他のモノに愛される人が、自分に靡くその姿が。

もっと味わいたい、感じたいが今日はもう難しいだろう。

「では、失礼しました」

礼をしつつ、彼女はゆつくりと退室していく。

扉が締め切り切るその瞬間まで、膝の上で勝ち誇るメイドを見ながら。

——ああ、彼女を壊したらそこが私の席になるのかしら？

そんな言葉に思考が染まる。

その嫉妬もまた、自らを興奮させてくれる。

その満足感に満たされながら、扉は閉まっていった。

「……シエフィールドさん、何時までご主人様にくっついていらっしゃいますか？」

それは、ローンが退室して直ぐにシリアスがようやくといった様子で言えた言葉だった。

「これはご主人様への罰です。

まだまだ罰としては不十分ですが……」

流石にそろそろ離れた方がいいですね。

シリアスの不満気な顔と、彼女が来た事で味方が増え、彼の自信に繋がる事を恐れる。

否定は何度もされた。

だが、された所で気にしなかった。

この人はわからないだけ。

そう思う事で自身を納得させたから。

しかし、他の女の言葉を真に受けて自分を否定するのは、嫌だ。

誰かの言葉を自分よりも優先させられるのだけは、自分の気持ちをお納得させられない。

そして、その不満気な姿を見せることもその思いをぶつける事も許されない。

メイドとして、主にそのような醜態を見せるわけにはいかないからだ。

「……まあ、続きは後日としましょうか」

そう言つて彼から離れる。

ようやく一段落ついたことに少年は安堵の息を漏らしつつ、シリアスを連れて箱の山へと向かうシェフィールドの後ろ姿を眺めていく。

ローンの登場により有耶無耶にされたが、彼女にされた仕置を思い返し1人顔を赤くする。

誰かに言う事も出来ない、言えるはずがない。

そんな大きな悩みのタネを与えた彼女を。

「では、シリアスと共に残りのチョコをしまつてまいります。

ローン様のもですが……他の方の物も検品した後にご主人様にお渡ししますので、少し時間はかかると思います。

……今年も、メイド隊一同での作業になりますね」

その山から持てるだけ自分達の両腕に抱え、それをシリアスに渡してため息をつく。

「シリアス、あなたはチョコの運搬です。

落とさないように気をつけるんですよ」

「シェフィールドさんは？」

「私は他のメイド達に声をかけて手伝いを増やしに行きます」
その指示を聞き二人の顔を交互に見る。

自分がない間に過度に密着した先輩とまた二人つきりにさせる。
それに不安を持つが、今度は彼女も部屋を出るといふ。

数秒かけてその言葉を信じ、静かに一礼した後部屋を出ていっ
た。

「……では、ご主人様のお仕置きはまた後日に行いますので」
数秒とはいえ自らに不信感を与えた事に良しとは思わない。

同じメイド隊として、仲良くとは言わないが仕事がスムーズに回る
程度には関係を作っておかないといざという時に困るのは自分達だ。
指揮官に仕えるメイドとして、いざという時に何時でも活躍が出来る
ように備えなければならない。

それが、彼に見せられる自らの評価点なのだから。

「……お手柔らかにね」

逃がすような視線を見て、シエフィールドは少しにやける。
少しだけ挑戦的な事をした。

彼ならば、他の物にこれ以上に迫られてそうなのに。

こんな事でもすぐに意識を奪えてしまう。

今だけ、かもしれないが。

「——では、失礼します」

礼をする事なく、自らの唇に指を当てながらそう伝える。

その時の彼の反応を見て、彼女は満足する。

邪魔が入った事など許せる程には。

耳すら真っ赤にさせて視線を釘付けにした自らの唇を最後まで魅
せるようにしてシエフィールドもまた部屋を出ていった。

「……………疲れた」

そんな言葉を残しつつ、ソファにぐったりと座りながら少年は呟い

た。

皿に残ったケーキをようやく口にし、彼もまたこの日の業務を終えたのだ。

本来の仕事は……また後日回すこととなるのだろう。

「お疲れさまでした、ご主人様」

そんな劳いの言葉とともに、彼女はそつと紅茶を差し出す。

テーブルに置かれたそれを見て、少年はそれを手にした。

口に含んだ瞬間、先程まで残っていた甘ったるさが掻き消され、今度は甘みという感覚を潰すような苦味が胃を襲う。

一口飲んで、それをそつとテーブルに戻しつつ、吐かないように気をつけながら必死に笑みを作る。

「……うん、苦いのが飲みたかったからありがたいよ」

「はい、甘い物のあとには苦味がいいと教えていただきましたから」

誰に教えられたのだろうか。

そして、この苦味は紅茶で出せるものだったのだろうか。

そんな疑問を持ちつつも、もう疲れ切った少年には口にする元気がない。

更には、今日も助けってくれた恩人に難癖付けることなど。

「……今日も疲れた」

思い返して再び口にしてしまう。

シェフィールドとのキス

更には、ローンとシェフィールドの言い合い。

自分が間に入り止めることが出着ればいいのだが、如何せん何を言ってもいいかわからず黙ってしまう。

何を言っても、火に油を注ぐ気がして黙ってしまう。

「……」

そんな彼に何も言わずにシリアスは対面に座り静かに見守る。

そんな彼女の姿が、ある意味では少年の癒やしでもある。

誰かとぶつかることはあっても、自分を守ろうとしてくれる姿に。

最後には自分の気持ちを優先してくれる彼女に。

そして、逃げることしか出来ない情けない自分を誇らしいと言って

くれる。

その言葉があるからこそ、彼女にそう言われて胸を張れる自分になりたいと思わせてくれる。

今はまだ、その言葉と期待が重くて仕方がないが。

バレンタイン

愛する者への気持をプレゼントとして渡すイベント。

義理と言ひ感謝の気持をプレゼントとして渡すイベント。

一人だけ、プレゼントと称して物ではなく言葉とキスを渡した少女もいたが……。

今は片付けられたが、先程まで部屋には大量のプレゼントがあった。

一握りが本命なのか、半分が本命なのか、一握りが義理なのかそれは、渡した本人にしかわからない。

受け取った者には、受け取るだけではわからない。

本命と勘違いして舞い上がってはいけない。

義理と思ひ込み肩をすかしてもいけない。

ただ、貰ったものに貰った相手に相応しい態度と対応を。

今年も、これで殆ど無事に終わることができた。

安堵と共に落ちた日が照らす部屋を見回す。

何時も通りの部屋が、何故だがとても心地良い。

置かれた紅茶を無理やり一口含み、咳き込みつつそれを戻す。

そして

「ご、ご主人様」

明らかに夕日のせいではないとわかるぐらいに顔を真っ赤にそめたシリウスは真っ直ぐに指揮官を見つめた。

「なに？」

力なく返答しつつ、その様子に少しだけ嫌な直感がくる。

「おの、お隣に座ってもよろしいでしょうか？」

「……………うん、いいよ」

間を開けてからの返答。

彼女はそんなこと気にしないが、少年は1人冷や汗をかく。

大丈夫、大丈夫だから。
そう言い聞かせつつ。

「1つ聞いていい?」

「はい。何でしょうか?」

「……シリアスも、あのケーキ作ったんだよね?」

「はい、シリアスも少しだけですがお手伝いさせて頂きました」

それを聞いて安心した。

ダイドーやシェフィールドのように一部のメイド隊は参加しなかったケーキ作り。

参加しなかった彼女達は、個人的に指揮官へプレゼントを贈った艦船達だ。

シリアスも参加した、それはつまり彼女からのプレゼントは今年はないということだから。

「ですが、これはメイドとしてではなく、秘書艦としてお世話になっている気持をお届けしたいと思い今年も作らさせて頂きました」

「……あ——そっかー、今年も……作ったんだー……」

顔は必死に隠すものの震えた声と視線がシリアスが大事そうに持つ小さな箱に注力される。

シリアスの料理は余り美味しくはない。

それは、本人も知っている。

だからこそ、普段の彼の食事やデザートは他のメイド隊が用意している。

料理に関わる仕事など、食事を運ぶか要望された際に紅茶を淹れらかぐらいだ。

その紅茶も甘いのを求めれば奥に砂糖の塊が見えるような、苦いのにすれば本来楽しむはずの匂いや味が全て失っているような物が出てくる。

そんな彼女が毎年送る手作りのチョコレートは、指揮官にとってバレンタインという日を地獄のようなイベントに変えさせるほどに。

食べられないわけではない。

一口咀嚼するだけでザラザラと砂糖の感触と甘さを口いっぱい

感じるのを耐えればいい。

食べるだけなら問題ない。時間をかけてゆっくりと食べればいい。

そう、時間があれば

「……では、主人様」

一声かけて彼の横へと座り、箱から取り出したチョコを一口大に砕く。

砕いたものを摘み、じつとそれを見たあとは大きく一呼吸入れて

「……あーん」

羞恥と期待と共にそつと目の前に運ばれる指先。

お腹がいっぱいだから食べられない

口の中が既に甘ったるすぎてもう無理

また今度貰うから仕舞つという

そんな弱音な言葉が次々に浮かぶが、とれも口にできないのはその視線があるから。

せつかく作ったものだ。

美味しいと言ってほしい、美味しく食べてもらいたい。

バレンタインという『特別』な日の内に。

そんな気持ちを汲み取れてしまうから。

「……………」

何時もならば、そんな気持ちに流されて口を開ける。

だが、今年はそうは行かない。

胃が既に甘いのを拒否している。

これ以上口にするなど脳に向かって強い拒否を。

それを表すように視線を反らして逃げ出した。

「……………」

「主人様……………」

残念がる声と共に、そつと頬に手を添える。

柔らかい片手一つで逃げた視線は強制的に戻された。

逃げようとしたその顔は、悲しそうに瞳を揺らしつつ真っ直ぐに彼を見る。

「主人様」

確かに、ご主人様は先程までそのようなケーキを口にしたらばかり。これ以上何かを口にする事は難しいかもしれません。

シリアスもそう思っていました。ローン様のは受け取り、口にしてるのを見てしまうと……

シリアスの作ったチョコも、どうか召し上がって頂きたいと思っていました。

あの人の時のように、シリアスが食べさせてあげたい——そう強く思っていました。

メイドとして、本来ならばご主人様に無理を強いるのはいけない事ですが……どうか、今日この時だけはシリアスの我儘を許して下さいませ。

誇らしきご主人様」

揺いだ瞳の奥に嫉妬のような気持ちを残して思いの丈をぶつける。

ローンが既にやったのに、自分の番で断る事は許さない。

そんな気持ちを隠さずに。

「……少しだけね」

「……ええ、わかっております」

他の艦船の名前を出され、彼女だけ特別なのかと責められては何も言えない。

そう思いつつそつと口を開いて、舌先に置かれたチョコをくわえる。

ザラザラとした気持ち悪さを感じさせるような感触から逃れようと必死に飲み込もうとしても、舌がそう動いてくれない。

飲み込みやすいように必死に噛むことしか出来ない。

それも、目の前の女性に合わせるように笑顔を浮かべて。

ようやく飲み込むと、その指先は新しいチョコを出すか出さまいかと悩みようにチョコの周りを彷徨っていた。

少しだけと言った自分が決めれることではない。

だが、もう少しだけ……そんな気持ちを表すように。

「……もう少し貰おうかな」

何時もお世話になつて艦船の困った顔に反射的に声が出る。

後悔しかない。

しかし、嬉しそうな彼女の顔を見るとこれでよかったと思えてくる。

そつと運ばれる指先と共に、小さな声が聞こえてきた。

「シリアスがご主人様の傍にいる艦船。

ご主人様の隣にいるモノ。

シリアスだけが……シリアスだけの……

ご主人様の汚れた所は、シリアスが綺麗にして差し上げますので、これからも思う存分皆と触れ合ってくださいませ。

シリアスだけの誇らしきご主人様」

自分から見た彼の『価値』を伝えながら指先を口へと運んでいった

2章

「自分が守る海を見つめ指揮官は物思いにふけていた、と」

「自分が守る海を見つめ指揮官は物思いにふけていた、と」

からかうような声に顔だけ動かして彼女、シャングリラを見る。

クスクスと笑いながら口にした言葉を書いたのだろうか、手にしていたペンと本を仕舞った。

「そんなかつこよく見える？」

「どうやら、今すぐに帰りたいと顔に書いてあるみたいですね」

再び本とペンを取り出すと、シュツシュと横線を引いて新たにペンを走らせた。

そんな姿に溜息を漏らしつつ再び何もない海の先をぼーっと眺める。

小刻みに揺れる甲板上は、まるで俺の中から何もかもを吐き出させようとしているように感じる。

これだから、船は嫌いだ。

ただ、海域を守る指揮官なんて職にいる以上はこの揺れからは逃げ切ることは難しい。

「そんなにお辛いのなら、部屋で横になればよろしいのでは？」

この辺りの索敵ももう終わりますので、その後で良ければ私が話し相手になりますけど」

「いや、船酔いには遠くを見てると言いつて教えてくれた人がいるからこのままのんびりしとくよ。それに」

言葉が続けながらポケットから飴を取り出して一つ啜える。

「飴を舐めてるといいらしいしね」

「そうですか」

再びペンと本を取り出すと、彼女はまたもや書き始めた。

「苦手な乗り物にも仕事とあらば事前に準備をし、万全な状態で仕事に挑む指揮官であった、と」

「一々書かれるのは恥ずかしいな」

苦笑しながら彼女が本を仕舞うのを見ていると、シャングリラは済ました顔をする。

「あなたとこんな傍に居られるなんてまたとない機会。」

こうしてあなたの事を、あなたが体験したことを、あなたが感じたことを、どんな些細な事でもこのノートに書き記す。

今は今迄会えていなかった事をお聞きして補填するいい機会なんです。

そして、目の前の動きを自分の目を通して自分の言葉で綴る最高の機会。

どんな細かな事でも私はあなたの事を書き記したい。

ですから、私が書くことに不満を言わないでください、指揮官」

「……………そっか」

目を輝かす彼女から視線を反らして再び海へと向ける。

別に彼女が苦手というわけではないけど、わざわざそのノートに書いてもらえるような立派な存在ではない。

誰かにそれを見せられたら恥ずかしすぎる。

ただ、彼女のノートは誰かに見せることはないと言う。

「これは私が楽しむ書物です。」

指揮官の事を色々書いて、あなたの事を触れるための私のコレクション。

楽しむのは私だけですから、どうか付き合ってくださいね」

「……………約束だからね」

苦笑しながら念だけは押しておく。

彼女がどう俺の事を表現してるかはわからない。

一回読ませてもらうおうと思っただけど、強く断られてから聞いてもいない。

どんな風に書かれているのか、とても気になる。

格好良く書かれていたら恥ずかしすぎるし、格好悪く書かれていたら……………ありのままのかなと落ち込むだろう。

「ふふふっ。」

指揮官、早速ですが尋ねたいことが――」

「シャングリリラ!!」

彼女が全てを言い切る前に少し怒ったような言葉が間に入る。

俺とシャングリリラでその声の主へと視線を送ると、彼女サラトガは可愛らしく両頬を膨らませながら大きな足音を立てて近づいてきた。

「もう！ 指揮官とのお喋りはお仕事が終わった後にしてって言ったでしょ!!」

「サラトガ先輩……その、これは」

「言い訳禁止!!」

先輩と呼ばれたサラトガは、その容姿こそシャングリラと比べてしまうと幼さを前端的に感じる。

いや、シャングリリラが大人っぽく見えるのもあるが、サラトガが子供っぽく見えずぎるのだ。

そんな大人なシャングリリラが、背丈だけでみたら子供に見えるサラトガに頭を下げる姿はとてもシニールに見えた。

「ごめんなさい、サラ先輩」

「もう！ あと少して報告のあった海域に着くんだから、調査が終わった後にしてよね」

「……はい」

見た目子供な少女に怒られてしゅんとするシャングリリラ。

その異様な光景に頬が緩みかけたが、すぐに引き締まったのは俺もまたサラトガに指を指されたからだった。

「指揮官も、お仕事中の艦船捕まえて話しかけるのは調査が終わった後にしてよね!!」

「えっ、あつ、ごめん」

話しかけた覚えも捕まえた覚えもなかったが、それを口にしたらますますシャングリリラが怒られるだろう。

そう思い、頭を下げる。

「ごめん、暇してたからついつい話しかけちゃって……」

「気が緩みすぎよ、指揮官」

膨らんだ頬が少しだけ窄む。

少しだけ落ち着いてくれた様だ。

「指揮官と話せる機会だから嬉しいのはわかるけど、接敵前の空母の索敵はいち早く敵の位置を知る大事な役割なんだからね。」

今だけは我慢してお仕事するように」

「わかりました」

再びサラトガ俺に頭を下げるシャングリラ。

サラトガに見えないようにありがとうございます、と口を動かした。

庇った事にたいしてだろうか。

これも彼女のノートに書かれるのだろうか……。

事実だけを淡々と書いてくれてる事を祈るばかりだ。

「索敵よろしくね、シャングリラ」

「わかりました」

力強い言葉を残してシャングリラはこの場から離れていく。

どうやら俺の予想は当たったらしい。

彼女の背中越しにノートに対して文字を綴る姿を見ながら祈りを吐きかけるように溜息をついた。

「むっ」

そんな俺の態度に対して唸り声が聞こえる。

せつかく縮まった両頬は再び膨らんできていた。

溜息禁止と言われたらどうしようか。

彼女達と接する度に漏らしてばかりだから、最近癖になってきているから困ってしまう。

幸せが逃げるから禁止、だなんて可愛らしい事を言い出しかねない相手故に身構えてしまう。

「サラトガちゃん、まだ怒ってるんだからね」

「な、なににかな?」

「こないだの演習の事!」

演習、と言われて色々と思いついて頭が痛くなる。

つい先日の出来事だが、忘れようと無意識に閉ざしていたのかもしれない。

無理矢理封じてた記憶の箱が飛び開けてくる。

「見に来るって言われてエンタープライズはとても喜んでたのに、いけないって言うし。」

演習終わって間もないのに急に指揮官同行で海域の見回りなんて言うし……。

最近海に出ることなんてなかったのに、急にご機嫌取りみたいな事されてもサルトガちゃん許さないんだからね!!」

「演習にいけなかったのは上の人に急に呼び出されたからだし、この見回りも急な依頼で編成を組まなきゃいけなかったからだよ。」

俺は悪くない、とは言わないけど少しはわかってほしいんだけどな」

実際無責任な事を言ったのは俺なのだから、悪い所はある。

彼女の言う通り、自分が戦う所を見ていてほしいとエンタープライズに言われたため、それが出来なかった事への埋め合わせとして今回はユニオン艦隊でこの依頼を受けた。

ご機嫌取りと言われれば、それまでだ。

「……そうだけど、わかってるけど」

頬もしぼみ困った顔を向けられる。

「でも、指揮官の言葉一つでみんな一喜一憂する事をわかってほしいの。」

サルトガちゃんだって、指揮官に自分達があなたの為に頑張ってるって所を見てもらえて嬉しいよ。

だから、無責任な約束はしないでほしいの。

あと、この見回りもそう。

こないだの演習で散々な結果を残したすぐ後にこれだから、皆変に肩の力が入ってる。

シャングリラだって、普段なら無駄にお仕事にお喋りなんてしないのに気が逸れてる。

今迄にないぐらい演習で負けちゃったから、皆落ち込んでる。

それなのに、急に指揮官を守って戦うなんて言われても困ってる娘達も多いんだよ」

「……ごめん」

配慮が足りない、そう言われているのだろう。

彼女も俺を攻める気はなかったのかもしれない。

俺の一言で慌てて言葉を重ねた。

「指揮官が私達の事を考えてくれているのはわかってるよ。」

私も、埋め合わせしてねって言っちゃったし。

でもね、演習であんな結果になるなんて思ってもいなかったの。

ユニオンの娘達も皆そう思ってる。

だから、落ち込んでる間はゆっくりさせてあげたいなって思ってたの。

本当はもつと早く言うべきだったんだけど、何人かは前向きになつてたから辞めてなんて言えなかった……」

サラトガはユニオン艦船の中でも長い艦歴を誇る艦船だ。

だからこそ、他のユニオン艦の事を心配してくれている。

この見回りを辞めさせたら、躍起になる艦船達が更に落ち込み

かといつて、この見回りで散々な結果になつてしまつたらどうしようと考えて落ち込む艦船達もいる。

多種多様な考え方を持ったグループだからこそ、判断は難しいのだろう。

まるで、本当の人の集まりのようだ。

……違う、人と同じような存在だからこそこうなるんだ。

彼女達も、立派に考えを持って生きている。

普通の人と変わらない、変わらないから。

「……ユニオン艦船を要請する前にサラトガに相談しておけばよかったね。」

急な依頼だったし、エンタープライズに早く埋め合わせをしようと思つて考えなしに決めちゃったんだ。

ごめんね、次からは相談するようにするよ」

「……指揮官」

内心を隠すように頭を下げて顔を見られないようにする。

この間の演習を含めた騒ぎ、秘書艦を変える変えないという騒ぎで

どうも艦船という存在にまた疑問を持つようになってきている。
意味のない疑問。

艦船という存在にどれだけ考えても、答なんてわかるはずがないのに。

前のように、全てから逃げて接した方が気が楽になるのに。

「謝らないですよ。」

サラトガちゃんも、指揮官にこんな事言っただって困らせるだけってわかってるけど……。

でも、指揮官にはちゃんと私達の事わかってほしいの。

ユニオンの娘達は、皆指揮官の事大好きだからね。

だから、好きな人に優しくしてほしいし、甘やかしてほしいの。

サラトガちゃんも、ね」

視界に広がった甲板がサラトガの顔で埋まる。

急に出てきてびっくりして、体をあげようとしたが、首に回された

腕のせいで思うように上がらない。

そのままぎゅつと抱き寄せられて、耳元で彼女は囁く。

「サラトガちゃんは指揮官が私達の事を考えながら頑張ってくれてるってわかってるからね。」

わかってるから、指揮官の事怒る時もあるんだよ。

優しいだけじゃ、タメにならないんだから。

だけど、頑張ってくれてる子にはこうやって嬉しいイタズラしてあげるから!!

もつと頑張ったら、もつと喜ぶイタズラ考えてあげるからね!!」

そう言っただけの傍から離れると、見慣れたイタズラな笑みが映る。

辛気臭い話はお終い、そう言いたいのだろう。

頑張ってるのだろうか。

そんな言葉を頭に、苦笑する。

「そっか、楽しみにしとくよ」

「ふふふっ、イタズラっ娘なサラトガちゃんが一杯考えとくから、指揮官も私達の事を一杯考えてよね!!」

そう言っただけ手を振りながらサラトガは駆け足で離れていく。

そんな背に向かつて手を振返しながら、溜息が漏れた。

……本当に、禁止にされなくてよかった。

ふと、前方の様子が気になって目を細めて凝視する。

何も無い青い海がただただ広がる。

このまま、何も無い海が広がってましたで終わればどれだけ楽なんだろう。

このまま、全てを捨てて勝手に何処かへ行けたらどれだけ楽なんだろう。

叶わない思いを胸に、ポケットから再び飴を取り出して1つ啜える。

くどい甘さが、胸に残る不穏な影を忘れさせてくれる。

目を閉じて、自分の気持ちを口にする。

気持ち悪い

そんな弱音。

ただ、そんな呟きを聞いてる艦船が居たようだ。

心配そうに見つめる彼女が近づいてきた。

俺がこうして前線に出ない理由はいくつかある。

船酔いすることと、ここでは逃げ場がないことと……。

他にもあるけど、今の状態はこの2つだけで十分だろう。

自室に籠って休みたい、そんな気持ちを忘れるように飴を砕いて甘さを必死に感じておく。

心配そうに声をかけられた。

そんな言葉に俺はただ作りなれた苦笑をした。

「どうかしたのか？ 指揮官」

「どうかしたのか？ 指揮官」

彼女、クリーブランドの声に振り向きつつ俺は作りなれた笑顔を浮かべる。

「どうして？ 大丈夫だよ」

と、言っただけは見たものの彼女には通用しない。

俺を見るその疑いきつた視線は中々潜る事は出来ない。

とても頼りになる存在だけに、そのしつかりとした性格に怪しまれると上手く切り抜けられない。

「またそうやって無理してる」

その言葉で心臓に釘を差されたような気分になる。

無理、というのが何を指してるのかわからないまま俺の隣に立つ彼女を見守る。

何を言われたくないんだろう。

何で彼女に警戒してるんだろう。

やましい事なんてない。

そう言い切りたいけど、出来ない。

この逃げ場のない船で艦船に囲まれているのが嫌なんだろう？

なんて言われてしまったら、もう何も言えなくなるのだろう。

言われないことはわかってる。

それでも、自分の一番見透かされたくない気持ちを言われそうで辛くなる。

言ってもらったほうが、楽になるかもしれないけど。

「どうせまた船酔いするんだろ」

「はははっ、バレた」

緊張感が一気に抜けて頬が緩む。

その顔を見てクリーブランドも笑った。

「今は私暇してるし、少しだけ相手してやるよ」

「ありがとう」

「お礼なんていいって。暇だから相手してほしいって気持ちもあるし

な」

クリーブランドは俺の様子を伺うように視線を向ける。

自分から何かを話す気はないというサインなんだろうか。

少しだけ話題を考える時間をもらえた。

話を使用となると、わざわざ話題を考えておかないと、という事実
に少しだけ自分が情けなくなる。

「クリーブランドは休憩中なの？」

暇という言葉から連想しての疑問を投げてみる。

「もうすぐ報告があった地点に着くから航空隊以外の艦船達は巡視を
終え次第最後の羽休めをするようにってエンタープライズからの指
示があったんだ」

「……そっか」

当然そんな話は聞いてない。

殆どエンタープライズに指揮を一任しているから。

彼女もまた、俺は居るだけでいいとお荷物発言をくれた。

いや、それは悲観的に捉えただけだろうけど。

きつと、彼女からしたら違うんだと思う。

わざわざ全く前線に立たない俺が口を挟まないように、なんて釘を
刺すのではなく彼女自身が口にしていて俺が居るだけでいいという
気持ちを変えて口にしただけ。

そう思いたい。

ますます自分が惨めに感じる。

名ばかりの指揮官だなんて自分が一番わかっているのに。

いざその現実を目の当たりにすると落ち込むのだから救いようが
ない。

そして、俺が口を挟まない方が上手くいくという現実が変わりはな
い。

ただ、これが俺の役割だ。

艦船達だけでも部隊を回せる。

1つの小隊として活躍出来るという事実を改めて報告すればいい
だけなのだから。

それが俺の数少ない与えられたお仕事だ。

「ちやんとしろよ！」

「いたっ！」

急に背中を叩かれる。

大して痛くなかったけど反射的に声が出てしまった。

それにクリーブランドはおろおろと反応してしまう。

「あつ、ごめん。力加減強かったか？」

「いや、大丈夫だよ。急だったから思わず言っただけ」

「そっか」

心配そうな視線に平気と伝える。

艦船である彼女達とは根本的に身体の作りが違う。

この背中 of 軽い痛みも、クリーブランドはきつと全力で手加減してくれただろう。

それぐらいしないと大怪我になる。

「……本当に痛いところはないか？」

「大丈夫だよ。心配しないで」

そんな風に言っても一向に揺らんだ瞳が落ち着かない。

それを見て、少しだけ思い出したことがあった。

思い返して笑ってしまう。

「なんだよ！ 人が心配してるのに」

「いや、前もこんなやり取りあったなって思って」

クリーブランドがこの母港に着任したのはかなり初期だ。

こうして俺がまだ前線に出ていた頃にももちろんいた。

そんな時のやり取り。

「いつも暇してるって言って来られて、落ち込んでたらこうして背中を叩いて励ましてくれたよね」

「あなたの落ち込んでる所なんて見たくない。

見たくないから、私がこうやって励ましにくるだけ」

「始めは凄い痛かったけどね」

「あ、あの時はあんなに人が弱いつて思ってなかったから……」

初めて背中を叩かれた時は、それこそ今のように立つことすら出来

ない位に激痛が走っていた。

あの時も同じようにずっと心配してくれていた。

悪気なくやった事に一々口を挟むのも悪かったし、何よりも自分自身が艦船とどう向き合うか全くわからなかったから結局全て水に流したのは覚えている。

艦船とどう向き合うか。

今でもわからないこの疑問をあの時も、今の俺も答えが見える気がしない。

でも、今はそんな考えで頭が埋まらない。

「……大丈夫だよ。」

あの時みたい倒れてないから」

「……指揮官が虐めてくる」

「はははっ、ごめんごめん」

久々に楽しく笑えた気がする。

少なくとも笑い声を出したのは久々だ。

友人のように接してくれる、姉のように接してくれるクリーブランド。

沢山の妹達に囲まれ世話を焼く彼女。

そんな彼女に心配かけないように、なんて気遣いじゃない。

純粹にこんな些細なやり取りが楽しかった。

友達同士でする様なやり取りが。

久々のような気がして。

そう思うと、クリーブランドには感謝しかない。

俺の笑顔を見て、彼女は拗ねた顔をしつつもその頬は確かに緩んでいた。

「最近や」

ひとしきり笑った後、今度は彼女の方から口を開く。

緩んだ頬を緩ませたまま拗ねた顔は鳴りを潜めた。

そのまま感情を上手く掴め無い難しい顔をして海を見つめる。

俺もまたそれに合わせた。

「指揮官は忙しいって言って執務室に籠もりっぱなしだったから少し

心配してたんだ。

中々あそこに行く用事も出来ないし、用事がないのに行ったら邪魔しちゃうと思っただし」

「…………ごめんね」

「いいんだ。

私達のために頑張ってくれてるってのはわかってる。

わかってるけど…………」

彼女はそこまで言っただけで一旦止める。

そつと俺の肩にその小さな頭を乗せた。

「やっぱり寂しいんだ。

好きな人が傍に居るのに、少し行けば会えるのに会えないってとつても寂しい。

でも、妹達や他の艦船達もそう会えないのに私だけ我儘言っただけで仕事するのはいけないし。

だけど会いたい。

そう思ったら、胸が痛い苦しいんだ」

「ごめんね。

でも、今回みたいに俺ももつと皆と会うようにするから。

寂しい思いをさせないように頑張るから」

「……………」

指揮官、そうやって私達のために頑張ってくれてるのは嬉しいけど無理しちゃ駄目だからね。

少しでも1人じゃ抱えきれないと思ったら私の所に来て。

あなたが感じた楽しいこと、悩んでることがあったら全部私に聞かせてちょうだい。

私の傍にいる時だけでも、あなたに落ち着いて欲しいの。

私がこうしてあなたの隣に居ると落ち着くみたいに。幸せを感じるみたい。

あなたにも私と同じ気持ちになってほしい」

「ありがとう。頼りにしてるよ」

「うん、もつと頼っていいからね！」

ようやく海から視線が外れ。俺へと戻る。
嬉しそうな笑顔が見えた。

応える様に俺も笑う。

「ねえ指揮官」

ただ、その笑顔はすぐに寂しそうな笑みへと変わる。

俺はただ首を傾げて言葉を待った。

「私ずっとあなたの傍に居られるんだよね」

「なんで？」

思ってもいない質問に思わず言葉を返してしまう。

クリーブランドも自分で何を口走っているのかわからないのか、顔を少し赤くして慌てる。

「い、いやさ……」

深い意味はないんだけど……

ただ、少しだけ不安になる時があるの。

指揮官はロイヤルメイドとよく一緒にいるけど、他の陣営とは中々会わないし……。

それでも、色んな陣営から新しい艦船達は着任してくるから。

私の事忘れられるんじゃないかって」

「大丈夫だよ。」

クリーブランドの事を忘れる事なんて絶対にない。

他の艦船達も、増えてきたけど皆の事忘れないように頑張る。

ずっと皆一緒に居ようね」

ずっとなんて曖昧な重い言葉を使ってみる。

そんなの自分で決めていいことなんかじゃない。

権利なんてない。

上から指示があれば飛ばされるし、皆の処遇も変わるのに。

ただ、そんな事はないだろう。

俺が飛ばされることはないだろうし、何事もなく時間が経つなら皆もこの母港で過ごすことになるのだろう。

どこの国も、意志のある兵器なんて持ちたがないから。

「……そうじゃないんだけどな」

「えっ?」

何かを彼女が呟いた。

言葉までは聞き取れなかった。

波の音でかき消されたその声を聞こうとしても、再び彼女は笑顔をかべる。

「なんでもないよ。

あなたが私の傍に居てくれる。

お互いに支え合って生きてくれる。

困ったことがあつたら愚痴を言い合って、嬉しいことがあつたら一緒に笑う。

そんな風にこれからも過ごせるなら、今は幸せかな」

「……そっか」

気になるけどとても聞き出せる雰囲気ではない。

喉に刺さる思いだが口に出さないよう気をつける。

言いたがらないのならば仕方がないと思うしかない。

「お互いに支え合って頑張ろう指揮官。

辛いときも、楽しいときも。

2人で頑張って——」

「——ヒーローのサポートをするのはサポーターの仕事だからとつちや駄目ですよ!!」

クリーブランドが何かを言い切るよりも前に俺の後ろから大声が聞こえた。

それと同時に後ろから重い衝撃を受ける。

「だ、大丈夫!?!」

バランスを崩して倒れかけた俺を支えるようにクリーブランドが抱きしめてくれた。

「あ、ありがとう」

「……こんな風に支えるって意味じゃなかったけど、まあこれはこれでいっか」

呆れながら言っていたが、最後は再び笑いながら耳元で笑う彼女に俺も釣られる。

ただ、その光景に不満を覚えたのだろう。

俺を後ろから抱きしめる彼女は未だにその手を離さず、俺から離れようという意思がない。

それどころかより強さを増してくる。

温かく柔らかい感触も流石に辛くなってきた。

「……リノ、苦しいんだけど」

彼女、リノはその一言に顔を反らす。

「ヒーローの指揮官がヒロインのリノを蔑ろにした罰です!!」

ヒーローなんていうむず痒くなる役割を押し付けられつつ、更に押しつけられる彼女の身体。

どう外そうか考えるもすぐに止める。

眼の前で俺を抱きしめるように支えてくれたクリーブランドも未だに離れようとしない。

その現実が思考を変えた。

今にも泣き出しそうな声で悲しそうに後ろからくつつくりノ嬉しそうに楽しそうな顔で俺を抱き寄せるクリーブランド

……逃げられないから船は嫌いだ

そう思いつつ、ため息混じりに思考を始める。

この2人はどうやったら俺を離してくれるのだろうか。

「ヒーローのサポートはサポーターのリノがするの！！」

「ヒーローのサポートはサポーターのリノがするの！！」

彼女、リノの大声が背中から伝わる。

反動で深く息を吸い、吐き出す時に制服越しに温かな吐息を感じた。

きつと、こんな温かさとは無縁な顔をしているだろうけど。

この声を傍で聞いた相手でもあるクリーブランドもまた、リノが急いで後ろから抱きついてきて思わずバランスを崩しかけた俺を支えようと前から支えるように抱きついてきてそのまま。

怒ってる彼女とは反面に嬉しそうに頬を緩ませながら背中に回した手を強くしたり弱くしたり……。

既に一人で立つことの出来るようになった俺を今度はぬいぐるみ代わりのように感触を楽しんでいるようだ。

「クリーブランド先輩は早く離れてください！」

思わぬ気持ちの代弁に便乗するように困った視線を送る。

無意識で遊んでいたのに気づいたのか、顔を赤くし慌てて俺から離れる。

「あつー……ごめ——」

海を渡っている最中の船の上。

甲板という陸とは違う常に不安定な足場で急にあわて出すとどうなるのかなんてすぐにわかった。

今度は彼女が自分の足につまづき、後ろに転びそうになる。

早めに予想できたからそうなるよりも早くに彼女の手を取って今度は俺から支える立場に。

少しだけ前に重心が動いたけど、ずっと後ろから強く抱きしめているリノのおかげで俺まで転ぶなんて事はなかった。

ただ、その締め付けは少し強くなったけど。

「む〜」

「あ、ありがとう」

俺を境目に二人の温度差はますます反発する。

握られた手をぎゅっと強く掴みながら更に顔を赤くするクリーブランド。

普段ならば彼女がこんな風に誰かを助ける側なのだろう。

兄貴と言いたくなるような逞しさと、男の俺でも負けてしまうような颯爽とした格好良さが売りの彼女ならば。

普段行う立場だからこそ、自分がされることに慣れていないのだからか恥ずかしさを隠すように無理に作った笑顔が目を引く。

ただ、その繋がれた手は先程のように遊ばれている事の方に気は向いてしまう。

それと、一連の出来事に後ろのリノはますます不機嫌になっているようだ。

「う〜」と低い唸り声のような何かが聞こえ始めた。

構ってほしい時に構ってもらえない猫のような我儘さを感じる声

が。そして、声で伝わらないならと他の動作で注目を誘うようになる。

俺を抱きしめたその腕の力は弱まる事を知らないようだ。

クリーブランドに手を離しても、リノに腕を離しても言えないぐらいに回された手に切迫される。

サインであり抵抗としてでもあるが空いた手で何度もリノの手を叩くが反応は変わらない。

構ってほしい時に構ってるのに満足してくれない。

我儘な所も似ている気がする。

「り……リノ……苦し」

「もー！ 指揮官はヒーローなんだからこれぐらいでギブアップしたらだめ!!」

指揮官は憧れのヒーローとしてもっと輝く人にならないといけないんじゃないからね!!

それに、リノを放って他の女とフラグ立てるのもダメ!!」

「指揮官が苦しがつてるから早く離すんだ!!」

俺の様子にようやく気づいてくれたクリーブランドは、手遊びを辞めて回された腕を離そうと掴む。

ようやく動けるようになった両腕で俺も掴んで離そうとするが微動だにしない。

むしろ火に油なのかもしれない。

クリーブランドは良いのに、リノはだめなの？

クリーブランドの時は黙っていたのに、リノの時は怒るの？

クリーブランドには優しいのに、リノには厳しいの？

そんな気持ち伝えるように回された腕に入る力が増していく。

人間の俺なんかじゃ相手できないような力が。

これでもセーブしてくれてるのはわかる。

本気なんて出されたらあつという間に意識を失って倒れているだろう。

ただ、そうなるのは遠くなさそうだ。

ペシペシと俺も叩いてせめてものサインを送る。

ペシペシ、ペシ……ペシ、ペシ……ペシ……ペシ……。

と、彼女とは反比例するように俺の腕に入る力はなくなってきた。

もう限界と伝えるように、そして演技では逆上した彼女がどうなるかわからないから本当にキツイ状況だと伝わるように精一杯のサインを。

伝わってほしい相手よりも先にわかってくれたクリーブランドの顔つきが険しくなる。

思いつきり力を入れて必死に俺を少しでも楽にさせようとしてくれたおかげで少しだけ息がしやすくなった。

「……………反省してる？」

「してる、してるから！」

何に對してだとか、どういう意味だとか聞く余裕はない。

ただ言われた事に対しての同意と肯定。

指揮官になって何千と繰り返してきた作業をするだけだから、脳を通す事もなく反射的に口が動いた。

自分を楽にさせるための言葉を伝えるために。

「……………」

少ししてようやく腕の力が抜かれた。

一瞬ふらついたが、抜かれただけで依然として回されたままの腕がふらつく事さえ許さない。

逃げる事も動く事も出来ずにただ、足の力が抜けた俺は与えられた力の向きに従ってリノの身体にその身を預けた。

「いい加減その手を離せよ」

そんな姿が面白くないのか、それとも俺の身を案じてかクリーブランドは鋭い目つきで俺のすぐ横にある顔を見る。

ようやく目に入ったリノの顔はそんな状況とは不釣り合いな程に嬉しそうに喜色を表していた。

ようやく満足いくまで遊べた。

そんな風に俺は感じた。

「甲板は足元が危ないですから、リノがサポーターとして指揮官のサポートをしなきゃいけないんです。

ヒーローが戦闘前に転んでたらおかしいじゃないですか！

そんな事にならないように、リノがしっかりとヒーローの傍で見えてあげないといけませんから」

「だから離さないって？」

そんな風に抱きついてたら指揮官も邪魔になるし、さつきみたいに力入れたらまた苦しむ羽目になるんだぞ!!」

「あれはベタベタと女にくっつく指揮官への罰です!!」

ヒーローはヒロインとだけ仲良くしてればいいんですよ。

サポートであり、ヒロインであるリノとだけ仲良くしてればそれでいい……

そうですね、指揮官？」

ふふふつと嬉しそうに笑いながらの同意を求める声。

ヒーローなんていう身不相応な役職を、これまたお飾り役職な立場と共に押し付けてくる。

明らかに不機嫌になっているクリーブランドの視線が俺に向いたのをタイミングとして応えた。

「……そうかもね、気をつけるよ」

何に気をつければいいのかなんて自分にもわからないが。
ただ俺の口はそう言った。

「クリーブランド」

付け加える様に彼女の名を呼び脳を働かせる時間を稼ぐ。

本格的に俺へと視線が動いた事で鋭さは一端失われた。

ただ、その刃を受け継ぐようにすぐ横で強い視線と共に脅すように
回された手がピクリと動いたけど。

合わせるようにピクリと反射的に震えた自分の体が、他人ごとのよ
うで面白かった。

だからか、少しだけ自然な笑みが出できた気がする。

「リノももすぐ戦闘だから興奮してるんだよ。」

緊張もしてるだろうし、少しハイになってるだけ。

今ぐらいはちよつとぐらいの事は大目に見てあげよう」

「でも……」

「大丈夫だよ。俺は怒ってないし気にしてないから。」

クリーブランドも気にしなくていいから」

怒った所でせつかく落ち着いたのがぶり返されては溜まったもの
ではない。

気にした所で俺じゃどうしようもない。

結局、叶わないことは望まず触れずが一番だ。

自分自身に言い聞かせつつ、彼女に伝えた言葉。

それを彼女が受けて噛み砕くまで時間は少しかかった。

その間は戻った目つきでじつとリノを見ていたから、いつ俺にまた
苦しみがくるのか不安で身体が震えた。

そんな不安を無くすように優しい包容を受けても、それが原因だか
ら救われない。

彼女は賢い。

沢山いる妹達の世話を日頃から焼いている彼女ならば、俺の我儘な
娘に対する扱い方も少しはわかってくれるだろう。

間違ってることに間違っていると言わない事に理解は得られないだ

ろうけど。

だからこその少しの時間だ。

この気持ちを汲むまでの時間。

「……わかったよ」

そう言つて彼女は一步下がる。

その目は申し訳無きそうにしながら俺に向けられていた。

下がった事から察しがつく。

この場に自分が居たらまた同じ展開になるからと文字通り身を引いてくれるのだろう。

本当に、優しくて頼りになる艦船だ。

「ただ、リノは母港に帰ったら話があるからな!!」

「えー、リノは悪い事何もしてないのに」

「うるさい!!」

優しい指揮官に何時までも甘えちゃいけないって事をまた教えてやるからな!!」

そう言つてクリーブランドは憤然としながらこの場から足早に立ち去った。

残された俺とリノの間に言葉はない。

ただ、今の二人つきりを楽しもうとしてるのか軽快な鼻歌が聞こえていた。

そんな歌と波の音を聞きながら俺は次の言葉を探す。

何時までも抱きしめられたままでは気が重い。

何時他の艦船と出会つてああなるかなんてわかったものじゃない。

もう懲り懲りだ。

お腹周りに感じてきた鈍い痛みが早く逃げたいと脳に訴えかけてくる。

しつかりと考えながら言葉を選ぶ。

「リノ、少し苦しくなってきたかな」

「えー、でもヒーローとヒロインは仲良くするのが常識だよ?」

それに、最近会えてなかったからこうして憧れの人を抱きしめられる幸せをもつと感じてたいし。

これから鏡面水域に行くんだから、それまでにヒーローの温もりを感じてたい!

一杯感じで一杯頑張るパワーを貰いたい!」

そう言っ腕に力が入ってきた。

全然マシな力加減。

優しく、壊さないように気を使ってくれているのはわかる。

ただ、鈍い痛みが鋭さが増してくるのが我慢できない。

早く逃げろと脳に訴えかける言葉が強くなる。

「そっか、リノは今から戦場で頑張るもんね」

「うん! 正義は必ず勝つてことを教えてあげないとね!」

「……そうだね。俺もリノ達が頑張れるように今から用意しとかないと」

「用意? それなら、リノも手伝うよ!」

ヒーローのサポーターとしてリノが何でも手伝ってあげる!!」

「……いや、リノは戦いの前に少し休憩して良い戦果を上げてもらわないといけないからさ」

「大丈夫! リノはヒーローのサポートをする事が一番の幸せで、それが一番リラックス出来る時間なの!!」

だから、指揮官の仕事を手伝えるならそれが一番リノを落ち着ける時間になるの。

ほら、困ったことがあるならリノに何でも言って。

書類の片付けでも、機器の整備でも——」

ああ、やばい。間違えだ。

そう直感する。脳に強く訴えかけられる。

何間違えるんだ、と。

「——どんな些細な細かい事でもリノが全力でサポートするよ。

他にも、緊張を解すためにお茶を入れて欲しいとか、お話をしたいとか、こうやって抱きつかれて甘えたいとか!

ヒロインじゃないとやっちゃいけないような甘々な事も今ならリノが全部叶えてあげるよ。

クリーブランド先輩みたいな他の艦船達にお願いするぐらいなら、

サポーターのリノが全部やってあげる。

リノは憧れのヒーローである指揮官のサポーターだもん。

ヒーローのサポーターとしてサポートするのがリノの仕事。

そして

ヒーローのヒロインとして精一杯尽くすのがリノの役目。

他の艦船に目移りしちゃうような悪いヒーローがいるなら、優秀なヒーローに戻るように早く修正しないといけないよね。

サポーターなしじゃ満足出来ないようにヒーローの事を支えてあげないとね。

他の艦船に支えられるような弱い指揮官じゃなくて、きちんとリノ一人を求めるようなヒーローにならないといけないよね。

だって、指揮官を支えるのはサポーターのリノだから!!」

徐々に力が入ってくる。

優しさはもう消えた。

押し付けるような思いと共に、受け入れろと胸に訴えかけるように、この胸にねじ込むように増していく。

クリーブランドを行かせたのは多分失敗だった。

1人じゃ解決できそうに無い。

ヒーローだなんて呼ばれても所詮は人間。人外に勝てる道理がない。

力の増す速度が早い。

クリーブランドが離そうと掴んでくれたおかげで大分加わる力が弱まっていたのがよくわかる。

あつという間にさつき感じた限界と思える領域は超えた。

ここからは、さつき以上の痛みと苦しみが襲ってくる。

「……ッ!! ……ッ!!」

必死に腕を叩く。

けど自分の世界に入ってしまったリノには届きそうにない。

息が苦しくなってきた。

叩こうと振り上げた腕も、最後は宙をだらりと下がる。

死ぬことはない。

そう思ったたら抵抗するのが無駄に感じた。
きつと寸前で止めてくれるだろう。

少し興奮してるだけ。

そう思うことにしよう。

そう思うことにする。

そのほうが楽だから。

そんな風に考えていると霞んできた視界に素早く何か映る。

瞬間、俺を拘束していた腕は外れた。

支えを失った俺は当然のように自分のあしでは立てず、かといって重力に従って落ちることもない。

今度こそ、優しい腕にこの身を支えられたのだ。

「大丈夫ですか!?!」

聞き慣れた落ち着く声が俺の意識を繋ぎ止める。

彼女、ダイドローは珍しく両目を大きく開けながら何度も俺に声掛けをしていた。

「ゲホッ、ゲホッ」

「ああ……ダイドローが離れている間にこんな事になるなんて」

少しぶりの呼吸のせいでむせこんでしまう。

俺を落ち着かせるようにそつと座り込むとその膝に俺の頭を乗せた。

柔かく、温かい感触に包まれながら必死に息をする。

ようやく呼吸が落ち着いた所でリノの前にいるもう一体の艦船に気づいた。

秘書艦シリアス、ガリノの腕を掴んでいた。

後ろ姿でもわかる。かなり怒ってくれているようだ。

「リノ様。」

ご主人様はただでさえ慣れない海上で疲労気味です。

それなのにこのような危害を加えるのはどういった理由があるのでしょうか?」

「危害じゃないよ! リノ以外の艦船とイチヤイチャしてた指揮官にお仕置きしてただけ!!」

「あつ、無理はいけません。ゆっくりと休んでください」

そんな二人の言い合いが始まりそうになるのを見ながら立とうと体を起こす。

ダイドーはそれを止めようと手を伸ばしたが、立つ意思を見せる俺を見てそれを止めて慌てる。

シリアスはそんな姉を横目に立つ俺のサポートをするように肩を貸してくれた。

そんな姿をリノは当然心良く思わない。

彼女も俺を助けようと一歩足を出していた。

ただ、シリアスの方が近かったというだけだ。

「ヒーローのサポートはリノがするの！

なんで皆わかってくれないの!!」

自分がしたかったことを他者にされる。

それをどうしても納得できない彼女は再び激昂する。

怒りを込めた視線をシリアスに向ける。

クリーブランドの時と同じ自身の感情を隠す気など一切ない視線を。

「……リノ」

まだ脳が働いているわけではない。

それでも、心は少しだけ落ち着いている。

見慣れた存在がすぐ横に居てくれるだけで気持ちが落ち着いていた。

「リノの俺を助けてくれるって気持ちは嬉しいよ。

今度困ったことがあつたらリノにお願いするから。

だから、今は戦場の事を考えてほしいな。

リノ達が怪我なく帰ってきてくれることが今俺が一番願ってる事だから」

「……嘘」

「嘘なんてついてない」

「嘘！ いつも困ったことがあつたらシリアスにお願いしてる！」

ゴン！ と甲板を強く蹴ると共に勢いよくシリアスを指差す。

自身の持つ牙をも隠す気などないのだろう。
ただ感情のままに彼女は怒鳴る。

「リノがサポーターなのに！」

リノがヒーローのサポーターなのに!!

憧れのヒーローをサポートするのがリノの夢なのに!!

指揮官の事をサポートするためにリノはいるのに！」

「……リノ様」

そんな、彼女の言葉を受けて尚シリアスは毅然とした態度で向かう。

「誇らしきご主人様の手助けはシリアスが行います。

まだまだ未熟者だとは思いますが、シリアスなりに精一杯行いますのでどうか今後ともご指導の程をよろしくお願い致します」

……ただ、その態度の割には注いだのは油なようだ。

当然自分の役目と言い切るものを真っ向から否定されてはリノも立つ瀬がない。

更に力強く足を甲板へと叩きつける。

その目の鋭さも増していく。

「あなたなんて初めて指揮官の所にきた艦船ってだけで秘書艦のくせに!!」

そんな雑に選ばれただけなら、やりたい艦船に早く譲ってよ!!」

「シリアスはこの立場を譲る気等ございません。

ご主人様がそう命じても、シリアスはそのお傍を離れるような事は決して。

リノ様が求めるように、シリアスもまた、誇らしきご主人様の傍で尽くす事を目的としてここにいますから」

互いの主張が混ざることはないだろう。

俺の手助けをしたいという意思をぶつけ合う。

二人で仲良く、なんてしてくれないだろう。

少なくともリノは。

全ての手助けを自分一人でしたい、なんて気持ちはもう嫌になるほど詰め込まれた。

「……うん」

まだ不満そうな顔はしていたが、彼女は短くそう言い残してこの場を去っていった。

重い足取りが十分に離れていくまで生きた心地はしなかったが、そんな俺の気持ちを探るようにシリアスは俺の横で同じように手摺に身を預ける。

ダイドーもそれを見て反対側で真似をした。

「……申し訳ございません誇らしきご主人様。」

シリアスが常に傍に居ればあのような事になる前に未然に防げていましたのに」

「いいんだよ、見回りがあつたんでしょ？」

謝る必要なんてない、シリアスとダイドーがこの場に来てくれた事に感謝だ。

以前約束した通りにダイドーを護衛として選んできたけど、執行室で座りっぱなしで、殆どの雑務をこなすベルファストを眺めるだけの仕事をしているシリアスにも活躍の場をと抜擢したのが良かった。

ダイドーだけなら、多分俺も慌てて注いだ油の処理が出来なかった気がする。

注いだのはシリアスだけだ。

「……なんか疲れたかな」

まだメインとなる仕事も終わってないのにドット疲れが押し寄せる。

独り言のつもりで呟いた言葉にダイドーはいち早く反応した。

手摺から離れると俺の前で一礼をする。

「ダイドーでよければ疲れを取る効果のある紅茶をお淹れいたしますが」

「……いや、いや」

リノに言われて直ぐに誰かにお願ひ事をする気になれなかった。

ただ、それがダイドーの地雷に触れたのかもしれない。

急に涙目になるとどこから取り出した妹に似た人形に顔を押し当てる。

「ああ……やっぱりダイドーは頼りにされてないんですね……
紅茶を淹れる事すら断られるなんて……」

リノ様のような方に頼ったほうがマシ……と思われていんでしょ
うね。

ダイドーは……ダイドーはこんなにも……ご主人様をお慕いして
るのに」

「……やっぱり紅茶飲みたいな」
もう疲れた。

これ以上戦闘が始まる前に疲れたくない。

そんな気持ちをダイドーにぶつけると、人形から涙を貯めた片面を
出してくる。

「本当に……ダイドーの淹れた紅茶でもよろしいでしょうか？」

「うん、ダイドーの淹れた紅茶を飲みたいな」

「……ッ!! 畏まりました！」

ダイドー、下ごしらえは既に済ませていきますので直ぐにお持ちいた
します。ご主人様はお部屋でお待ちになってくださいね」

一転して嬉々としながらダイドーはこの場を離れていった。

嬉しそうにしつつも主の前では慌てて走るようなことはしない。

ゆっくりと優雅に歩いていく。

そんな姉の後ろ姿を共にのんびりと眺めるシリアスにも指示を出
す。

「シリアスも手伝いしてあげて」

「ですが、またあのようなトラブルが起きてしまつては」

「大丈夫。すぐに部屋に戻るから」

心配そうに何度も顔を見ては姉を見るシリアス。

そりゃ帰ってきて早々にあんな事を見せられたら心配にもなるだ
ろう。

ただ、彼女は俺の言葉を聞いてくれる。

例えばそれが多少納得出来ない事だとしても。

今回も結局数十回程繰り返し返したら一礼して姉の背へと駆けていく。
優雅な姉とはまた違うのは、慌てて走つたために転びそうになつた

からだろうか。

静かになった。

波の音を聞きながら、不快な気持ちがこみ上げてくる。

ポケットに仕舞っていた飴玉を一つ啜えて、手摺に更に身を預けていく。

人肌のような温かさも、柔らかさも無い無機質な冷たさを背中で感じる。

さつきから感じていた温かくも苦しい感触は終わったと実感できるようで心地よい。

ここには人は1人しかいないと実感できて、嫌に心地良かった。

ダイドーやシリアスも帰ってきた。

他の艦船達も次々に戻ってきているのが横目で目に入る。

鏡面水域付近の見回りを終えている艦船達。

メインとなる戦場傍の下見を終えたモノ達が戻るといふ事の意味を理解しながらも、今はまだこの心地よさを手放す気にはなれなかった。

「しゅきかん！ サンタさんはいつくるの？」

「しゅきかん！ サンタさんはいつくるの？」

艦船達とコミュニケーションを図るため、そして気分転換のため、司令室にて勤勉に仕事を手伝ってくれるベルファストとソファーに座って気まずそうに過ごすシリアスの姿を見ていたたまれなくなったために最近始めた母港の見回り。

ちよつとした気分転換となりつつも、艦船達に過度に絡まれても助けてくれるお助けキャラのシリアスのおかげで不自由なく行われていた最近の仕事？ の最中と事。

たまたま通り過ぎた学校に休憩時間だったのか他の駆逐艦達と遊んでいた彼女、睦月は俺を見かけるや否やとととと小走りで近づいてきては挨拶もなく不思議そうな顔をして尋ねてきた。

少しでも顔を近づけようとつま先立ちをしてぐらぐらと不安定になる彼女を見ていると膝を曲げて自然と目線を合わせていた。

「サンタクローズの事を知ってるの？」

小さな女の子にこんな質問をするのも傍から見たら馬鹿にしているように映るだろう。

しかし、真先に浮かんだ言葉がこの質問だった。

KAN—SEN

人を模した人ならざるモノ

眼の前の小さな女の子も知らずに見れば、身にまとった幼稚園児のような服装も相まって服装相当の年にしか見えない。

自分よりもずっと小さいこの少女ですら、海域という戦場においては自分とは比べものにならないぐらいの戦果を上げる。

人の真似をした人ならざるモノ。

輝いた瞳で俺を見つめるこの少女ですら。

ただ、人に無意味に危害を加える事はない。

人が作り、未知なる力で人の姿を得た存在。

俺の仕事は、そんな彼女達が『安全である』そして、セイレーンに對する『人類の希望である』と証明する事。

人類にとって有益な存在であると伝える発信塔だ。

「むー！ 睦月のことをばかにしたー！」

「ごめんごめん」

頬を大きく膨らまして感情を伝えるその姿は、本当に年端も行かない少女そのもの。

俺が行った彼女の頭を撫でて少しずつ頬をへこませる対応だって、同年代の普通の人を相手にするのと同じだろう。

変わらない、普通の人間と。

そう言い聞かせる。

「サンタのことぐらいみんなしってるよ！」

「そっかそっか」

彼女達の記憶の由来は。

初対面の艦船を見て恨むものもいれば恐れるものも、慕うものもある。

姉と妹とか、宿敵とか仇敵とか。

自分達のカンレキから様々な知識や記憶、関係を持って出来た彼女達が何を何処まで、どのように知っているかなんて俺にはわからない。

ただ、イベント毎があると各陣営に分かれてちよつとしたお祭りをして楽しむことはしている。

このイベントにはこういう意味がある、と何故だか皆知っているから。

各陣営に分かれるのは、同じイベントでも国によって見方が違う時があるから。

クリスマスなんて、『祝う』事を主にする国と『祈る』事に重きを置く国で分かれるだろうし。

ただでさえ陣営間で仲が悪い所もあるのに、皆で共通の楽しみをしようだなんてまだ考えられない。

イベントとしてのクリスマスは当然知っているのだろうと思ってはいた。

ただ、サンタクロースなんて中身について出てくるのは意外ではな

いが、少しだけ驚いた。

やっぱりこういうイベント事は皆知ってて楽しんでるんだ、と改めて感じた。

「むー、睦月にいじわるするわるいこなしゆきかんには、サンタさんはこないよ！」

「それは困っちゃうな」

軽く笑いながら少しだけ考える。

クリスマスに皆が色々イベントを考えていることは当然知っている。

予算とか、規模の把握なんかはしないといけなかったから。

クリスマスイベントとして楽しく終えればそれで良いと思っただ。

サンタクロース、良い機会かもしれない。

クリスマスと聞いて真先に思いつく存在を忘れていたわけじゃないけれど、改めて彼女に名前を聞いて考える。

少しだけ考え込んだのが顔に出たのだろうか、睦月は少し心配そうにしながら俺を見る。

「そうだ！」

視線が合うと同時の大声に少し驚いた。

けれど、身につけていた小さなカバンに手を入れるのを見てすぐになにがしたいのかは察しがついた。

「わるいこにはサンタさんきてくれないから、睦月サンタがかわりにアメさんあげる！」

そう言っただけで差し出された小さな手に乗った飴にはイチゴのマークの梱包がされていた。

味を選べないのも何時もの事。

どれも好きだから別にいいけど。

「ありがとう。睦月は優しいね」

「ほんと？ 睦月いいこ？」

「いい子だから、クリスマスパーティーを楽しんだら早く寝るんだよ？ そしたらサンタさんがきつと来てくれるから」

「うん！ わかった！」

もらった飴をポケットに仕舞いながら、ようやく返ってきた答に満足したらしい睦月は満面の笑みを見せてくれた。

ようやく終わったと思っただろうか、睦月と共にいた他の駆逐艦達も気がつけばそばに来ており次は私と声を上げる。

「しきかん！ あの！ み、みつからないのがあるの…いっしょにさがしてくれる??」

「しきかん…いっしょにあそんでくれる…?」

「しきかん！ イタズラしてもいい?」

「しきかん、タイヤキ半分いる?」

園児服を着た子供達に囲まれて私も私もと話しかけられる姿を傍から見ればどう映るのだろうか。

優しい人に映るのか、不審者にでも映るのか。

その子供達が人じゃないと知ったら、周りは俺にどう声をかけるだろうか。

良い機会なのだろう。

クリスマスなんてイベントを楽しみにして、サンタクロースを楽しみにしてる子供達にプレゼントを配る。

普通の子供のように喜ぶ姿を見れば、普段は人と変わらないとより思えるのだろう。

そんな気がした。

ふと気になる事が出来た。

子供達に様々な言葉のパスを一齐に投げられている時に、いつもなら共に手伝ってくれる秘書艦が静かにしている。

ちらりと横目で眺めると、少し離れた場所で難しい顔をしていた。

「シリアスも、良い子でしたら…」

そんな彼女の眩きは周りのパスに紛れて消えて俺には聞こえなかった。

「プレゼントは物じゃなくて思いが大事なんだよ！」

腰に手を当てて強く放たれた言葉は今日だけで何回目なのだろうか。

彼女、サラトガは少しムツとした顔をしたあとに呆れたようにため息をつく。

「皆と一緒にいれば、皆の欲しがるものなんて自然とわかると思うのに」

「……ごめん」

最近まで極力関わりを減らそうとしていただけに、この言葉が深く重く心に沈む。

確かに、よく関わっていれば自然と皆の趣味趣向ぐらいは把握出来るようになるのかもしれない。

「もう！ サラトガちゃんも考えてあげるから、早く決めよう」

「……はい」

バンバンと机に置かれた発注用紙を叩かれる。

可憐な少女に見える彼女だが、見た目とは裏腹にそのカンレキはとても長い。

実際、この母港でも初期から着任してエンタープライズと共にユニオン陣営を支えてくれている。

周りからは『先生』と呼ばれる事もあり、皆からの信頼も厚く、そして意外と厳しいところもある彼女。

そんな彼女は今まさに、俺のクリスマスプレゼント選びの先生をやってくれている。

ことの発端は簡単だ。

一人で艦船全員のプレゼントを決めるなんて無理だと思い、各陣営の代表達に選んで貰いそれを直接渡してもらったり、子供達には寝静まった頃に枕元に置いて貰ったりしようと思っていた。

その話を代表達にした翌日、つまりは今日。

珍しく申し訳なさそうに訪れたエンタープライズから

「すまない指揮官。私じゃ手に負えないと思い他の艦船に相談したんだが……」

という言葉と共に訪れたサラトガ。

そんな彼女の第一声は、まさに先程の一言と一言一句違わない。

こうして俺は、楽をしてプレゼントを決めようとした事を怒られ、サラトガと共にユニオンの皆のプレゼントを選ぶ事となった。

他の陣営に知られたらどう言おうか悩んでしまう。

悩む前に、きつと他も同じように一緒に考えて決める流れになるのだろうか。

……次からはもつと早く用意しよう、そう思いながら発注用紙に懸命に目をやる。

ついでに、先程怒られた理由はエンタープライズのプレゼントを考えた結果『鳥の餌』を選んだからだ。

イーグルちゃんを大切にしている彼女なら喜ぶと思ったけど、いい加減に考えてると思われたらしい。

あれやこれやと相談した結果、サラトガが選んだエンタープライズへのプレゼントは俺の手作り弁当になった。

理由は最近食生活で心配してるからだとか。

当日までにベルファストに料理を教えてもらわなければならない。

……紙にこんなのないよサラトガ先生、とうなだれる間もなく次の艦船の名前が上がる。

「次は……ボルチモアちゃん」

名前を言われて考える。

ボルチモア、最後にあったのは丁度睦月達とあった日だ。

駆逐艦の皆と遊んでいたら、今から部活に行くと言っていた学制服を着た彼女と挨拶をしたのが最後。

部活の見学に誘われたけど、クリスマスプレゼントの事を決めるために進めないと思つて断つたんだ。

確かテニス部がどうか……

「テニスラケットとかどうかかな？」

「うーん、こないだは助っ人で行ったって言つてたけど、テニスメインでやってないみたいだよ」

「……そうなんだ」

そういえば、久々に練習試合に出るとか言っていたような気がする。

断った時残念そうな顔をしていたから、また次の試合の時に教えてって言ったけど助っ人なら試合も少ないのかな？

悪い事をしたのかも。

「よし！ 色んな運動をする娘だし、運動靴にしよう」

そういつて発注用紙を捲ろうとする手より先に運動靴が書いてあるページを出して指をさす。

正直、ここに来てから選ぶよりもサラトガが決めたものが何処にあるかを教えるばかりだ。

「でも、ボルチモアちゃんにテニスラケットを勧めるなんて、すこしは皆の事をきちんと考えて選ぶようになったんじゃない？」

「たまたまだよ」

謙遜でもなく本気でたまたまなんだけど、サラトガは嬉しそうに頷いて納得していた。

これは次を外したらヤバそうだ。

「ふふっ、少し成長したみたいだし、休憩しましよ」

そう言われて時計を見ると、部屋に連れてこられて数時間が経っていたことに気がついた。

ほぼ全てをサラトガが決めてくれたおかげか、ユニオンの艦船の半分は決まった。

困った時の先生頼みなのかもしれない。

椅子に座ったまま伸びをしていると、逆にテーブルに腕を乗せて彼女は笑う。

「指揮官は本当に皆の事を知らないんだね」

「…………ごめんなさい」

「もう！ 明日からはもう少し皆の事を知る努力をすること！」

「頑張ります」

そう言いながら伸びをやめて彼女の様に腕を載せて発注用紙を眺める。

多種多様な物を依頼すれば届けてくれる。

「ないものは記入をすれば用意してくれる事もある。資料に関しては困らない所だ。」

物には困らない所だと改めて感じた。

これで人が居れば余計に助かるのかもしれない、とふと頭をよぎった考えを首を降つて振り払う。

人だつて一杯いる。

人と変わらない彼女達が。

「……ねえ、指揮官?」

「なに?」

少し真剣な眼で見つめてくるサラトガに、改めて雑念を捨てて構える。

「秘書艦のシリアスちゃんにプレゼントを送るなら、何にするの?」

「シリアスに?　メイド隊は多分ベルファストが考えてくれると思うけど」

「指揮官から送るなら、だよ。」

相手が喜ぶ様な、相手の事を思ったプレゼントをするならどれにするの?」

「俺から……」

考えるように目を伏せる。

パツと思いつくものはあつた。

でも、そんな事は言えない。

だから、目を伏せて誤魔化すように苦笑する。

「なんだろう、シリアスは欲しい物とか言わないからよくわかんないや」

「え〜!　いつもずっと傍にいるのにわかんないの?」

そんなに艦船達をちゃんと見ない悪い子には、サンタさん来てくれないよ〜!」

睦月にも同じ事を言われた。

どうやら俺は悪い子らしい。

サンタが来てくれた記憶なんて数回しかない。だから、ずっと悪い子なんだろうけど。

「でもそっか、指揮官のプレゼント選びのセンスがないから皆に変なもの贈ろうとするんだ」

「真面目に考えてるつもりなんだけどね」

「エンタープライズちゃんにクリスマスマスプレゼントで鳥の餌なんてあげたらたぶんイタズラだと思つて混乱すると思うよ？」

「……ごめん」

手作り弁当を持っていつでも困ってしまうだろうけど。

夜はパーティーだろうから、昼前の早めに持つていくことにしよう。

「ふふふっ、そっか、指揮官は人を見る目がないんだ」

「そんな指揮官には、特別問題です」

「特別問題？」

「そう！」

ゆっくりと身体を起こす彼女に自然と自分の身体の動きが合う。

背筋をピンと二人して伸ばすと、頬を赤くしながらサラトガはゆっくりと口を開く。

「サラトガちゃんの欲しい物はなーんだ？」

言い終えると同時に机の上の発注用紙を俺から少し離していく。

大抵のものは揃うそれを退かすのは、カンニングを禁止するためか、それともそこにはないというヒントなのか。

サラトガが欲しい物、と考えてみる。

「……マイク？」

「欲しいけど違うかなー」

そんな気はしていた。

そして、ヒントの意味を確信したのは発注用紙をわざとらしく手にとつて自分の背に隠したから。

確信？ いや、違う。

嫌な予感が当たりそうだから冷や汗をかいているのかもしれない。

「……あまいもの？」

「甘いつて言えば甘いかな〜甘いつて言うし

でも、食べ物じゃないよ」

わざわざシリアスの話題の後に持つてきて、彼女の求めそうなモノを言わそうとさせてから自分の欲しい物を聞く。

嫌でもシリアスが求めそうな答えが思考を埋める。とても口に出すには恥ずかしい事を。

そんな俺の気持ちも、多分隠そうとしていた事もサラトガには目に見えているのだろう。

口を尖らせながら急に終わりをつける。

「ブブー！ サラトガちゃんの欲しい物を言えない悪い子な指揮官にはお仕置きでーす」

「……なにをするの？」

おかしい事はないと思う。

サラトガはイタズラが好きだけど、嫌がることはしない艦船だ。艦船達も、無意味に人を傷つけようとはしない。

今の所は

「ふふふっくそくれくはくねく」

ただ、内心構えてた俺を馬鹿にするように、落ち着かせるように満面の笑みを近づけさせながら、彼女はそつと耳打ちする。

「罰ゲームの中身を。」

クリスマス当日

各陣営に分かれてのパーティーに顔見世程度だけ一通り周り終えた。

皆俺の顔を見るだけで喜んでくれて、すぐに他の陣営の所に行くことを伝えると寂しそうにしていた。

ゆっくりしたいとは余り思えないのは、人混みに居るのが苦手になつたからだろうか？

よくわからない。

ただ、適当に皆となるべく万遍なく話す事は出来た……と思う。

日頃からやっていけば、いつかは皆の事をきちんと知っていけるの

だろうか？

皆が楽しんでいるそれぞれの寮舎から少し離れた港。

そこに置かれてあるベンチに座ってのんびりと海を眺める。

12月の終盤。それも海の近くということもあつてか、風がやたらと冷たく感じる。

冷たさのあまり感覚を失ってきた手を少しでも温めるようとポケットに仕舞う。

溜息と共に目の前に浮かぶ白い息を眺めながら、母港での1日を振り返る。

何時も一人のようで一人じゃない。

決して静かな環境で過ごしているわけじゃない。

本当に一人で居られるのは、自室で寝るときぐらいだろうか。

常に誰かに見られている。

それが嫌で、何に見られているのかわからなくなって、怖くて執務室に籠もっていた。

それももう、当分は出来そうにない。

してはいけないのだろう。

した結果が、皆が不満を持って収集がつかないまま終わった秘書艦騒動なんだから。

もう、あんな思いはしたくない

人混みは好きじゃない。

でも、一人で狭い部屋にいるのはもつと嫌だ。

一人で外にいるのは、なんだか心地よい。

海風にあたりながら、そんなことを考える。

考えているだけで、心地よい時間は唐突に終わった。

眼の前に映っていた海が急に消え、目の前が真っ暗になる。

「うわあっ!?!」

「だーれだ?」

突然かけられたイタズラに情けない声を上げたことに恥ずかしくなりながら、急に頭に被せられた何かをどかす。

「……サラトガ、びっくりするからやめてよ」

「だって、びつくりさせるイタズラだったもん」

被せられたのはサンタ帽だったようだ。

一番上にちよこんと乗った白い丸を掴んでいたため、それを目の前でふらふらと揺らしていたら、彼女に無理矢理取り返された。

「もう！　せつかく指揮官のために着替えてきたんだから帽子じゃないくてサラトガちゃんを見なさい！」

無理矢理被せて邪魔をしてきたのに今度は見ろと怒りながらサンタ帽を被っていく彼女。

パーティーの時は何時もの服だったのに、今日の前にいる彼女はサンタクローズをイメージしたような服を着ていた。

「ほらほら！　サラトガちゃんのクリスマスバーションだよ！」

目の前に立つてくるりと一回転すると、赤いスカートを隠すように真っ白な長いリボンが目の前を過ぎていく。

白いリボンが消えてすぐに、視界一杯に彼女の笑顔が埋まった。

「かわいいね、似合ってるよ」

「えへへ〜サラトガちゃんはアイドルだから、何を着ても似合うんだよ〜」

自慢気に、そして嬉しそうに言いながら俺の隣に勢いよく座る。

「さーて、いい子にしてたサラトガちゃんは指揮官サンタに何を貰おうかな〜」

「居るだけでいいんじゃないの？」

ないとは思いつつも確認の言葉を言う。

サラトガからの罰ゲームは、こうしてクリスマスパーティーを抜け出して二人で過ごすという事。

多分、シリアスもそんな願いをすと思った。

「これは罰ゲームだから、クリスマスプレゼントじゃないも〜ん」
わざとらしく言いながら、次の言葉は決めていたのだろう。

ニヤリと笑いつつ俺の腕に自分の腕を絡ませ、柔かい片頬をそつと腕に押し当てた。

「えへへ〜せつかくだし、指揮官サンタをそのままプレゼントとしてもらっちゃおう♪」

「近いよ、サラトガ」

「いいの！　これはプレゼントだから」

蕩けた笑みを浮かべながらポケットに仕舞おうとした俺の手を取って指と指を絡めるように手を組んでいく。

服越しに感じるほんのりと暖かい頬に、直接感じる暖かな手の感触が、彼女を人だと錯覚させる。

「ねえ指揮官、手が冷たい人は心が冷たいんだよ？　指揮官の手、冷たすぎ」

「サラトガの手は温かいから心が温かいんだろうね。見ていてわかるよ」

「まあ、サラトガちゃんは結構先輩だからね！　先輩らしく、皆のお手本になるように温かくて厳しい先輩じゃないといけないんだから」

そんな風に自分の立ち位置を評せる彼女も凄いと思うし、実際皆の事をよく見ている彼女だからこそこの言葉には説得力がある。

たぶん、俺がこんなふうに返す事もわかってたのかもしれない。そう思えるぐらい、次の言葉はスムーズに出てきた。

「ねえ指揮官、もしかしてこんな風にずっと誰かといえるのきつくない？」

「……えっ？」

言葉の意味がわからず聞き返す。

「だって指揮官、ずっとシリアスちゃんと一緒にいるんだもん。」

他の娘達の事も見てほしいし、私も寂しい思いをしてるって知ってほしい。

シリアスちゃんが指揮官と離れるのが嫌っ！　て言うのもわかるけど、でも、指揮官もお仕事なんだからもう少し皆と関わってあげてほしいな。

最近是他のロイヤルメイドもお仕事のお手伝いしてくれてるから皆と関わるようになったんだなってわかるけど、ずっとシリアスちゃんは傍にいて離れないし、このままじゃ皆の気持ちは変わらないと思う。

秘書艦を変えてほしいって言うわけじゃなくて、もう少し他の艦船

達とも触れ合えるようになって欲しいな」

皆のために、とサラトガは優しく諭すように伝える。

「私だったら他の陣営の娘達とも面識があるから間に立って話してあげられるけど、ずっとサラトガちゃんが傍にいるわけじゃないでしょ？」

そりゃ、私も指揮官が心配だから見ていてあげたいけど、他の娘達の事もあるし……

私が見てない間に、変な事ばかりしてたら、小学生にも相手されなくなるんだよ?」

「心配してくれてるの?」

「心配だよ、サラトガちゃんは指揮官の事も大好きだもん」

はつきりと好意を伝えられると嫌でも体は熱くなる。

こういう時だけ、彼女達を人として見ようとしてしまっ自分がいると気づくと彼女達を人ならざるものとして見ていた自分に自己嫌悪をしてしまう。

普段は内心で怯えているくせに、調子の良い時だけ自分の欲求を満たそうとしてしまう自分の事を。

「ありがとう、心配させないように頑張るよ」

「頑張るだけじゃ疲れちゃうよ。」

たまには休憩しないとダメ」

そういつて彼女は自分の体を徐々に俺に預けてくる。

「私は指揮官の事を信じてるからこうやって支えてもらってるけど、指揮官は誰に支えて貰うのかな?」

疲れた時に、嫌になった時に、しんどくなった時に、誰に支えて貰うの?」

シリアスちゃんと一緒にまた部屋に籠もっちゃう?」

それじゃ駄目。

絶対駄目。

そういう時に頼りになるお姉ちゃんが傍にいないと駄目なんだよ。だから、そういう時になったら、なる前でもいいけど……。

いつでもサラトガちゃんに頼ってね♪

私、ユニオンでも老兵な方だから世話の仕方とか知ってるし、支えない時の辛さも知ってるから助けてあげられると思う。

サラトガちゃんは、何時でも指揮官の味方だからね」

そういつて彼女は顔を上げる。

もう少し、ほんの少しでも上にくれば彼女の鼻が俺の頬に当たりそうになる。

「悪い子な指揮官にはサンタさんがきつと来ないから、サラトガサンタからゆっくり出来る時間のプレゼントだよ」

優しく、囁くように続けていく。

「ずっと私達を避けてきた指揮官がいきなりパーティーなんていつても疲れるだけだもん。」

少しだけでも、絶対疲れて嫌になると思ったから、かわいいサラトガちゃんと2人で過ごすクリスマスのプレゼント。

また嫌になって部屋に籠もられたら、私だって寂しいし。

そこでシリアスちゃんとずっと2人で居たら、考え方だって後ろ向きになっちゃうよ？

色んな艦船達と仲良くやらないと、指揮官も辛いし私達も辛い。

でも、無理は駄目。

少しずつ、ゆっくりやってこう。

サラトガちゃんが、きちんとお手伝いをしてあげるからね」

言い終えた彼女は顔を下げると、今度は思いつきり俺の腕に抱きついてくる。

「ふふふつ、でもサラトガサンタは今日は機嫌がいいから指揮官にサラトガサンタちゃんとデート出来る権もあげようかな？

ほら、サラトガちゃんとのデートスポット決めて？」

「ここでのんびりしたいな」

「そっか、うん。ならここでデートだね」

何となく、気持ちが少し落ち着いた。

興奮する事も、落ち込む事もなく。

サラトガみたい皆のことも、俺の事も考えてくれる艦船だっている。

皆が傷つかないように考えてくれる艦船がいる。

人と人が支え合うように、助け合うように考え合うように。

真似事なんかじゃなく、真剣に。

……シリアスが悪く言われるのは、結局秘書艦を変えなかった俺のせいだとわかつている。

いつか、彼女の事も皆が――

「ご主人様ー」

口に出していないのに、彼女の事を考えだした途端に聞こえてきたいつもの声。

ただ、シチュエーション的に少し気まずさを覚えつつ、ゆっくりと声が出た後ろを向こうとしたが中々に首が動かない。

さつきまで嬉しそうにしていたサラトガは先に向いて気まずそうに笑っているのに。

「あはははっ見つかっちゃったね」

「サラトガ様、ご主人様と何を？」

「最近外でよく見るから、急な運動は体に悪いよって事を話してたんだ。ずっと部屋に籠もりつきりだったし。

パーティーで疲れちゃったのかな？」

顔色が悪かったから風の当たる場所で一緒に休んでただけだ……シリアスちゃんが来たなら、もう大丈夫だね」

嘘をすらすらと並べながら俺からゆっくりと離れていく。暖かくなっていた手が急な冷たさでかじかむ。

「2つめのプレゼントは、また今度ね」

シリアスに聞こえないように小さな声とウイंकを残してサラトガは手を振って走っていく。

そんな慌てて逃げる程には後ろは怖いだろうか。怖いんだろうな。

そう思いながら、一度息を大きく深呼吸をしてゆっくりと後ろを向く。

「申し訳ございません、誇らしきご主人様」

彼女、シリアスは捨てられた犬の様に潤ませた瞳が俺の視線と合う

とそう呟きながら頭を下げる。

「ど、どうしたの？」

「シリアスが傍にいながらご主様の運動不足と筋力低下による疲労を気づけないまま無理をさせてしまいました」

「あ、ああいいんだよ。普段は平気だったし……今日はちよつと歩きすぎたかな？」

「そう言いながら名残惜しくもベンチを離れて彼女に近づいていく。

「今日はロイヤルのパーティーの用意をしたから離れてたし、シリアスが気づかなくてもしようがないよ。俺が無理しただけ」

2人で過ごすというサラトガとの約束があったため、今日はシリアスは始めからメイド隊としてパーティーの用意をしてもらっていた。

中途半端に傍にいたら、きつと離れられないと思ったから。

「ところで、なんで俺がここにいて気付いたの？」

「たまたま外を見ていたらご主人様が御一人で歩いてましたので、手が空いていたのでシリアスが様子の確認をと思ひまして」

ようやく顔を上げると俺の顔をジツと見つめる。

真っ白な肌だからこそ映える赤い瞳にマジマジと見られると何時も何処か緊張してしまう。

「……シリアスには、ご主人様の顔を見ても体調が悪いかどうか見分けがつかないようです」

「休んだから調子が戻っただけだよ」

肩を落として再び落ち込む彼女に必死に言葉を送る。

サラトガの嘘に乗っている手前、彼女の真剣な姿に罪悪感が湧く。

「……でも、まだ疲れてはいるから部屋に帰りたいんだ。ついてきてくれない？」

「はいー」

嬉しそうな返事がよりキツくなる。

ただ、疲れているのは本当だ。

休んだから調子が戻ったのも本当だ。

そう自分勝手な言い訳を並べながら歩こうと一步踏み出した。でも、二歩目は出ない。

彼女が必死に留まって、と伝えるように俺の手を掴んできたから。

「どうしたの?」

「誇らしきご主人様に、1つお聞きしたいことがあります」

真っ赤な瞳が俺を写す。

ただ、数秒するとそれはすぐ下の足元へと反射を変えた。

それから更に数秒何かを言おうと口を開いては閉じを何度も繰り返す。

ただ俺は静かに待つことしか出来ない。

掴まれた手に徐々に力が入るのが、ただただ怖い。

サラトガの嘘がバレたのだろうか。

緊張で唾を飲み込んですぐに、意を決した様に彼女は呟く。

「シリアスは、その、いい子、でしょうか?」

「はあ?」

考えもしない間に情けない声が漏れてしまった。

それがいけなかつだろう。

一気に顔を赤くした彼女は更に俯いて黙り込んでしまった。

「……いい子なんじゃない?」

綺麗な女性という印象を持つシリアスのその姿と可愛い間にとてもじやないが否定ができない。

いや、実際いい子だとは思うけど。

「シリアスはいつも誇らしきご主人様を困らせてしまっています。

お仕事もいつもメイド長にやってもらい、シリアスはご主人様のお傍に居るだけ。

こんな私でも、プレゼントは貰えるのでしょうか?」

何かを気にしているのだろうかと思っただが、最後の言葉に少し肩透かしを受けた。

プレゼントが欲しいって、本当に姿形に見合わない事を言う。

「プレゼントは皆にあるよ。シリアスも貰ったでしょ?」

「いえ、差し出がましい願いですが……」

真っ赤な顔をしながらようやく見上げたその顔は、今度は常に俺を写す。

「誇らしきご主人様、シリアスには欲しい物があります」

大きく息をする姿は、自分の体を冷やすように、落ち着かせるように見える。

これは真面目な願いだと俺に伝えようするように見えた。

「シリアスは、誇らしきご主人様のお傍にずっと居たいと思っ
ています。」

この身が朽ち果てるまで、ずっと貴方様の傍にいたい。

誇らしきご主人様、どうかこれからもシリアスのご主人様で居て
くださると仰ってください。

その言葉だけが、シリアスが求めているものなのです」

きつと、一緒にいたいとか傍でクリスマスを過ごしたいとかそんな
願いを口にするだろう。

サラトガに聞かれたとき、そんな風に考えていた。

口にするのも恥ずかしい。

外れていたらもつと恥ずかしい、だから黙った。

外れていた。

本当に人を、艦船を見る目がないかもしれない。

……もう少し皆の事を知る努力をしないといけない。

「大丈夫だよ。俺『は』シリアスの事を捨てないから。」

絶対に、皆の指揮官でいるから」

「……はい!!」

嬉しそうな笑顔を見て、少しだけ安心した。

こんな言葉でも彼女を喜ばせてあげられることに。

俺なんかの言葉でも。

満足のいく答えを得たからだろう。

先に踏み出した俺に合わせるように一歩踏み出す彼女。

俺の手を取りながら、隣に立って共に歩くというその姿勢にただこ
の身を預けて歩いていく。

大丈夫だよ、シリアス。

俺は指揮官なんだから。

自分が辞めたいと思おうが、何を誰に言おうがこの名前は外れな

い。

だから

きつと俺は、皆とずっと一緒にいる。

最後まで……居なきやいけない。

そんな気持ちで隠すように、彼女の笑みに釣られて何時もの笑顔で浮かべて誤魔化した。

彼女は何かに気づいたのだろうか。

歩くたびに掴まれた手が痛くなる。

力が徐々に入れられていく。

離さないという意味表示か、逃さないという――

疲れた

そんな気持ちで一杯の体をそのままベッドに放り投げる。

着替えることもしないまま、掴まれた手を見るとくつきりと細い指の跡が残っていた。

部屋に着くと掴んだ手に気づいた彼女が懸命に謝っていた。ただ、途中で言わなかった俺も悪い。

本当にきつかったのは部屋に着く直前だけだったし。

……言ったほうがよかったのかな？

まあいいや。

シリアスも少しだけ離れてたし寂しかったんだろう。

そんなことより

目の前にある箱を見る。

枕元に置かれた箱と封がされた手紙。

誰が置いたかは知っている。

自分で置いた。

中身は当然俺が用意した物じゃない。

今頃寝静まった子供達の枕元にもこうやってプレゼントが置かれ

ているのだろうか、そう思うと明日の皆の顔が楽しみだ。

明日は少し早めに学校付近の散歩してみようかな？

睦月喜んでるかな？

そんなことを思いながら、俺は楽しみにしていた手紙を開ける。

明日の朝にはベルファストかシリアスが起こしに来るから、それまでに見ておかないと誰かに中身を見られてしまう。

プレゼントの配給の中にあつた俺宛のプレゼント。

こんなの送ってくれる人は1人しかいない。

封を開けて字を見ただけで思わずにやけてしまう。

ゆっくりと手紙を読んでいく

元気にしとるか？

私ですまーとふおん？ とやらを使えばもう少しこまめに連絡がとれるのだが……まあ、小難しいものを使えないのは仕方がないのだな。

さて、今日はくりすますだ。

昔は共に2人で祝っていたが、今年は難しそうだ。

というわけで、昔を少しでも思い出せるようにおはぎを作ったので入れておく。早めに食べるんだぞ？

さて……手紙と言うことで少し堅くなっちゃってしまっているが

私はいつでもお前を気にかけておる。

たまには元気な顔を見せにくるのだぞ。

疲れた時は無理せずに休むこと。少しだけだぞ？

膝枕は私がするから、他の者にやらせぬように！

研究が終わったらそちらの母港に着任する。

もう少しだけ、頑張るのだぞ。

「三笠さん」

そんな手紙を読んでクスクスと笑ってしまう。

今度あつたら教えられるように、俺も携帯電話でも持とうかな？

配給の中にあつたはず。

さて、おはぎがあるなら早い内に食べないと。

疲れた体を起こしながら引き出しを開ける。

最近減ってきた色んな艦船達からの手紙の上にそつと置き、その位置を忘れないように指で覚えるようにゆっくりと離していく。

もう少しだけ頑張ろう。

そう思いながら机の上に懐かしのおはぎを置いた。